

みんなのポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

The Distribution and Classification of the Himalayan Languages (Part II)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西, 義郎 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00004270

ヒマラヤ諸語の分布と分類 (中)

西 義 郎*

The Distribution and Classification of the Himalayan Languages (Part II)

Yoshio NISHI

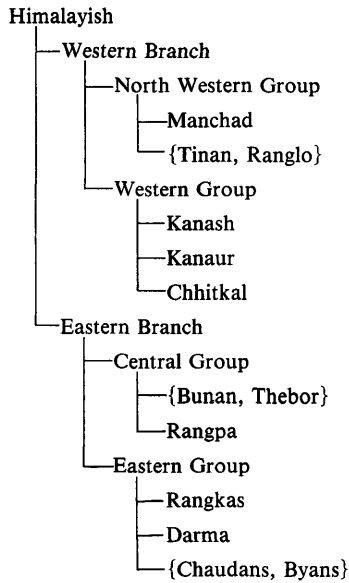
In Part II (Section 4), the author first presents a detailed examination of all the so-far proposed genetic classifications of the Himalayan languages, Tibeto-Burman languages spoken in the Himalayas to the west of Bhutan, and recapitulates that there is admittedly consensus on the classification of three subgroups: (1) the Himalayish languages, a subgroup which nearly corresponds to Shafer's West Himalayish Section and Benedict's Himalayish subnuclear group, including Manchad (Manchaṭi/Paṭṭani), Kanash (Kanashi), Kanaur (Kanauri/Kinnauri), Chhitkal (Chhitkali) ; Tinan (Tinani), Ranglo (Rangloi) ; Bunan, Thebor, Rangkas, Darma (Darmiya), Chaudans (Chaudangsi), Byans (Byangsi), (2) the Central Nepal languages, a tentative subgroup which consists of Shafer's Gurung Branch and several newly found languages, including the Tamang group (Tamang, Gurung, Manang, Thakali, Marpha, Syang, Chantel), Nar, Ghale, Kaike, and (3) the Rai-Limbu or Kiranti languages, which nearly corresponds to Shafer's East Himalayish Section and Benedict's Bahing-Vayu or Kiranti nucleus, including thirty-eight languages according to G. Hansson's recent classification [1988]. He then examines the first two subgroups and their subclassifications, proposing a slightly modified subclassification for Himalayish with an addition of a newly found language, Rangpa, to this subgroup (Fig. 1), and the interrelationships of the languages of the second (Fig. 2) with a subclassification of the Tamang group (Fig. 3). He also discusses the linguistic position of Zhangzhung in relation to Himalayish in some details.

* 神戸市外国語大学, 国立民族学博物館共同研究員

Key Words : Himalayas, language classification, Tibeto-Burman, Himalayan languages, genetic relationship

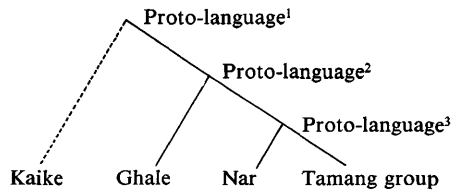
キーワード: ヒマラヤ地域, 言語分類, チベット・ビルマ系, ヒマラヤ諸語, 系統関係

(Fig. 1) *Subclassification of the Himalayish Languages*



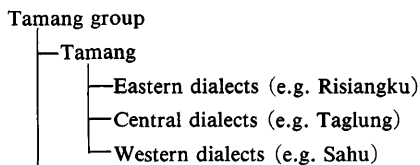
Note that Rangpa may be regarded as an intermediate language or a link between the Central and Eastern Groups.

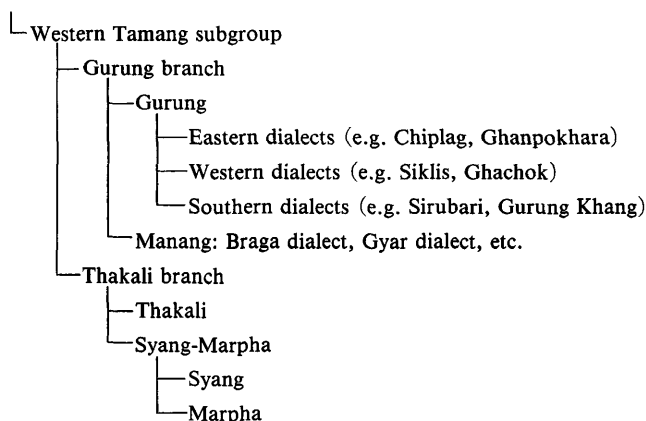
(Fig. 2) *The Interrelationships of the Central Nepal Languages (tentative)*



Note that the relationship of Kaike to other members of the Central Nepal Languages is not well established.

(Fig. 3) *Subclassification of the Tamang Group*





As for the third subgroup, Rai-Limbu or Kiranti, whose subclassification here adopted is that of Hansson, the author has compared it in detail with those of Shafer [1953, 1967] and W. Winter [1987].

0. 本稿の目的 (承前)	4.1.3. 1980年代以降
1. ヒマラヤ諸語の範囲	4.2. 従来の分類の総括
2. ヒマラヤ諸語の分布	4.3. ヒマラヤ語系
2.1. 概説	4.4. 中央ネパール語系
2.2. 詳説	4.5. ライ・リンブ語系
2.2.1. インド北西部	
2.2.2. ネパール	5. ヒマラヤ諸語の類型的特徴 (待統)
2.2.3. インド東北部	5.1. 音韻の特徴
3. ヒマラヤ諸語研究の現状と資料	5.1.1. 分節要素
3.1. 1960年代前半までの概観	5.1.2. 超分節素
3.2. 1960年代後半以降の研究概観	5.1.3. 音節
3.3. 1960年代後半以降のヒマラヤ諸語の資料	5.2. 形態・統語の特徴
4. ヒマラヤ諸語の系統的分類 (本稿)	5.2.1. 派生動詞
4.1. 従来の諸分類	5.2.2. 語順
4.1.1. Hodgson から LSI まで	5.2.3. 関係節
4.1.2. 1980年代まで (Shafer から Glover まで)	5.2.4. 格標識
	5.2.5. 能格標示
	5.2.6. 代名詞化

はじめに

本稿は、ブータン及びアッサム地方以西のチベット・ビルマ語系言語，特にいわゆるヒマラヤ諸語の分布，研究の現状，系統的分類，及び関心が寄せられている幾つかの問題等の紹介を目的としている。

『国立民族学博物館研究報告』15巻1号に，ヒマラヤ諸語の範囲・分布，研究状況を述べたが，本稿には系統的分類の一部を扱う。

前稿と連続する内容であるので，そちらをも適宜参照して読んでいただければ幸いである。

4. ヒマラヤ諸言語の系統的分類

4.1. 従来 of 諸分類

4.1.1. Hodgson から LSI まで

4.1.1.1. Hodgson と Müller の分類

ヒマラヤ諸語の系統的分類は，B. H. Hodgson [1849, 1856] とそれを引き継いだ M. Müller [1854, 1861] に始まるといえる。Müller の分類¹⁾では，インド・ヨーロッパ語族の諸言語を除く，当時知られていたアジア・太平洋地域のはとんどの言語はチュラニア語族(Turanian Family)に入る。この語族の南方語門(Southern Division)は，タイ語派(Taic)，マライ語派(Malaic)，ガンガ語派(Gangetic)，ロヒト語派(Lohitic)，ムンダ語派(Munda)とタムル語派(Tamulic)の6語派(Class)に分けられ，ガンガ語派の言語はヒマラヤ北方(Trans-Himalayan)とヒマラヤ南方(Sub-Himalayan)の2語支(Branch)に下位分類されている。いわゆるヒマラヤ諸語は，ロヒト語派に入るディマール語を除き，すべてヒマラヤ南方語支に分類されている。

4.1.1.2. Brandreth の分類

次いで E. L. Brandreth [1878] は，その後20年ほどの間に公刊された英領インドの非アーリア語系(Non-Aryan)言語の新資料を利用し，それら言語の新たな分類を試みた²⁾。Brandreth は，まずこれらの言語をドラヴィダ(Dravidian)，コラリア(Kolarian)，チベット・ビルマ(Tibeto-Burman)，カシ(Khasi)，タイ(Tai)，モン・安南(Mon-Anamese)の系統の異なる6語群(group)に分け，それぞれの語群内部における下位言語間の親近関係を論じている。中でも最大数の言語を擁するチベッ

ト・ビルマ語群の諸言語に多くの紙面を割き、この語群を19の語支 (class) に下位分類している。このうちの5つの語支がいわゆるヒマラヤ諸語に相当する。

Brandreth は、下位分類の指標として、大雑把ではあるが、共有語集のみならず、音韻、形態法、統語法上の類似を取り上げ、例えば、動詞の人称 (1/2/3 人称, 包括 exclusive, 排除 inclusive)・数 (単数, 双数, 複数) 接辞, いわゆる代名詞化や語幹の活用等にも注目している。この動詞の代名詞化と関連して、「多くの言語で、動詞は名詞の人称あるいは数の認知を示すなんらの形式も持たないが、他の言語では、複雑な形式が動詞の主語、目的語の両者との一致を表すのに使用されており、この両者は、単数, 双数, 複数のように、また、1 人称の双数と複数の場合には、話し相手を含むか除くかのように、あらゆる面で考慮されている」(p. 12) と述べ、それらは、「[チベット・ビルマ語群の] 言語がすべて共通の起源を持つという仮説では容易に説明されない」相違点であるとしている。更に、特に複雑な代名詞化言語を含む語支 (X) (キラント語, リンブ語, スンワル語, ブラム語, チェパン語, ハユ語等のネパールの代名詞化言語からなる語支) に触れた箇所では、この語群の諸言語にみられる動詞構造の複雑さの差異に注目し、「……複雑な体系がかってすべて [この語支の言語] に共通であり、ある言語はそれを留め、他の言語は痕跡も残さないほどに完全にそれをかなぐり捨ててしまったとはまず假定できない。語支 (X) の諸言語を話す未開の諸部族が、共通の群体 (commonstock) から分かれて赴いた谷間や丘陵の孤立した場所でこの体系を発達させたとする方がありそうに思われる」(p. 19) と主張している。

Brandreth の挙げているチベット・ビルマ語系言語でチベット語方言を除く、いわゆるヒマラヤ諸語に属する言語は、(Ⅲ), (Ⅳ), (Ⅷ), (Ⅸ), (Ⅹ) の語支に分類されている。各語支には次のような言語が含まれている。

({ } 内は、Brandreth が非常に近い関係にあるとする言語を示し、() 内は、方言を示す。)

語支 (Ⅲ) : { グルン語, ムルミ語【=タマン語】}, タクシャ語【=タカリ語】, { ネワル語, パハル語}, マガル語

語支 (Ⅳ) : レプチャ語【=ロン語】

語支 (Ⅷ) : ディマール語

語支 (Ⅸ) : カナウル語【=カナウル語】(ミルチャン方言, ティバールスカット方言【=テボール方言】, スムチュ方言)

語支 (Ⅹ) : { キラント語 (ロドン方言, ルンチェンブン方言, チンタンギャ (Chhingtángya) 方言【=チンタン方言】, ナッチェレン (Nácc-

hereng) 方言【=ナチェリン方言】、ヤカ方言【=ヤッカ方言】、チョーラシャ方言【=チョーラセ方言】、クルンギャ (Kulungya) 方言【=クルン方言】、トゥルンギャ (Thulungya) 方言【=トゥルン方言】、バヒンギャ (Bahingya) 方言【=バヒン方言】、ロホロン方言【=ロルン方言】、ランビチョン方言、バラリ方言、サンパン方言、ドゥミ方言、カリン方言、ドゥンマリ方言)、リンブ語)、スンワル語、ブラム語 (Brámu)、チェパン語、ヴァユ語【=ハユ語】、クスンダ語 (Kusunda)

現在ヒマラヤ諸語に数えられている言語数は、勿論これとは比較にならないが、Brandreth の下位分類は、R. Shafer 以降の下位分類と一致する点が多い。特に、言語間の関係について、ムルミ語【=タマン語】はグルン語の一方言に過ぎないと述べている点、更に、タクシャ語【=タカリ語】がグルン語やムルミ語と共に同じ語支に入れられている点やディマール語が独立した語支とされている点等は注目に値する。その一方で、タマン語等とネワル語やマガル語が同じ語支に下位分類されていること、チェパン語、ブラム語とレプチャ語の下位分類、ブナン語がテボール語と同じ言語であると注記していること等がその後の分類と異なっている。なお、クスンダ語は、Shafer [1953] にシナ・チベット語族の言語でないと指摘されるまでは、チベット・ビルマ語系言語に数えられていた³⁾。Brandreth の分類は、20年ほど後に、LSI に提示される S. Konow の分類よりも系統的分類に対する考慮が仄見される。また、現在改めてこの分野の言語学者の関心を集めている動詞の人称・数接辞体系の発達の問題についても、Konow 以上に細かい配慮が窺われる。奇妙なことに Konow は、参考文献に Brandreth のこの論文を挙げておらず、Shafer も Shafer [1953] では参照していないようである。

4.1.1.3. Konow の分類

1909年に出版された G. A. Grierson(ed.)『インドの言語調査 (*Linguistic Survey of India*)』の第Ⅲ巻の第Ⅰ部は、既に刊行されていた第Ⅱ部 [1903] と第Ⅲ部 [1904] と併せて、当時の英領インド及び周辺地域のチベット・ビルマ語族(一語派)の諸言語の最新の資料と分類を提供するものであった。この第Ⅲ巻は、第Ⅰ部、第Ⅱ部及び第Ⅲ部のカチン語の部分の編纂を Konow に負うものである。Konow は、LSI [1909] で取り上げているチベット・ビルマ語系言語をチベット語とヒマラヤ諸語からなるチベット・ヒマラヤ (Tibeto-Himalayan) 語群、カチン (Kachin) 語群、北アッサム (North Assam) 語群、ボド (Bodo) 語群、ナガ (Nāgā) 語群、クキ・チン (Kuki-Chin) 語

群, ビルマ (Burmese) 語群に下位分類する一方で, 「概して, チベット・ビルマ語諸方言を満足のできるように分類するのは不可能である」と述べ, この分類が「この調査で明るみに出た諸事実に基づく暫定的な分類の試み以上のものであると主張するものではない」(p. 10) と述べている。

ヒマラヤ諸語の分類では, 「チベット・ビルマ諸語の最も興味深い特徴である動詞の形成」のみを取り上げ, Hodgson に従い, ヒマラヤ諸語を非代名詞化 (Non-pronominalized) 言語と複代名詞化 (Complex Pronominalized) 言語に分け, 更に後者をカトマンズ盆地を境にその東側の言語 (東部下位語群 Eastern Sub-group) と西側の言語 (西部下位語群 Western Sub-group) に分けている (p. 179)。

Konow は, ヒマラヤ諸語にみられるいくつかの特徴, 例えば, 有生語と無生語の区別, 数詞の二十進法, 人称代名詞の双数形や包括形と排除形の区別, 主語との一致を示す動詞の代名詞的接辞 (pronominal affix) 等がチベット・ビルマ語的原則と相容れない特徴であると述べ, それがムンダ語 (Mundā) の影響により生じた可能性を示唆している (p. 179)。

この Konow の“暫定的”分類 (下記) は, 全体としては系統的分類を意図したものかも知れないが, ヒマラヤ諸語に関する限り, 基本的には分布地域を考慮した類型的分類であり, このことは上述の Brandreth の分類や次の Shafer の分類と比較すれば明らかである。彼の分類は, 動詞の人称・数の呼応体系 (代名詞化体系) やその接辞形式が一様でない点を無視しており, 類型的分類としても極めて不完全な分類である。また, 非代名詞化言語のタカリ語は, 代名詞化言語に誤って分類されているが, Brandreth の分類と比較すれば, この誤りを資料の不足に帰することはできない。

Konow によるヒマラヤ諸語の分類

- 1) 非代名詞化 (Non-pronominalized) 言語: グルン語, ムルミ語【=タマン語】,

スンワル語, マガル語, ネワル語, レブチャ語, トト語

- 2) 複代名詞化 (Complex Pronominalized) 言語:

- a) 東部下位語群 (Eastern Subgroup): ディマール語, タミ語, リンブ語, ヤカ語【=ヤッカ語】, カンブ語 (バヒン方言, バラリ方言, サンパン方言, ロホロン方言【=ロルン方言】, ランビチョン方言, ワリン方言, チンタン方言, ルンチェンブン方言, ドゥンマリ方言, ロドン方言【=チャムリン方言】, ナチェレン方言【=ナチェリン方言】, クルン方言, トゥルン方言, チョーラシャ方言【=チョーラセ方言】, ドゥミ方言, カリン方言, ライ方言)⁴⁾, ヴァユ語【=ハユ語】, チェパン語, クスンダ語, ブラム語, タク

シャ語【＝タカリ語】

- b) 西部下位語群 (Western Subgroup): カナウル語【＝カナウル語】, カナシュ語, マンチャト語, チャンバ・ラフル語【＝チャンバ・ラホール語】, ランロ語【＝ゴンドラ語＝ティナン語】, プナン語, ランカス語, ダルミヤ語【＝ダルマ語】, チャウダンス語, ビヤンス語, ジャンガル語【＝ラウト語】

4.1.2. 1980年代まで (Shafer から Glover まで)

現在も、おそらく最も多く依拠されるチベット・ビルマ語派の系統的分類は、Shafer [1955, 1966] と P. K. Benedict [1972a] の分類であろう。Benedict の分類に前後して、R. A. Miller [1969], 西田龍雄 [1970], S. Egerod [1973-74], W. W. Glover [1970c, 1974] 等が分類を試みるが、ネパールのチベット・ビルマ語系言語を扱った Glover の分類以外は、いずれも Shafer の分類に基礎を置くか、この2人の分類の折衷的分类に過ぎない。また、既述のように、1960年代後半以降、特に、1970年代に入ると、ネパールを始め、インド、中国でそれまで知られていなかった多くのチベット・ビルマ語系言語が発見され、多かれ少なかれ、それらの言語に関する資料や情報が提供されるようになるが、ヒマラヤ諸語に関する限り、これらの系統的分類では、ほとんど取り上げられていない。

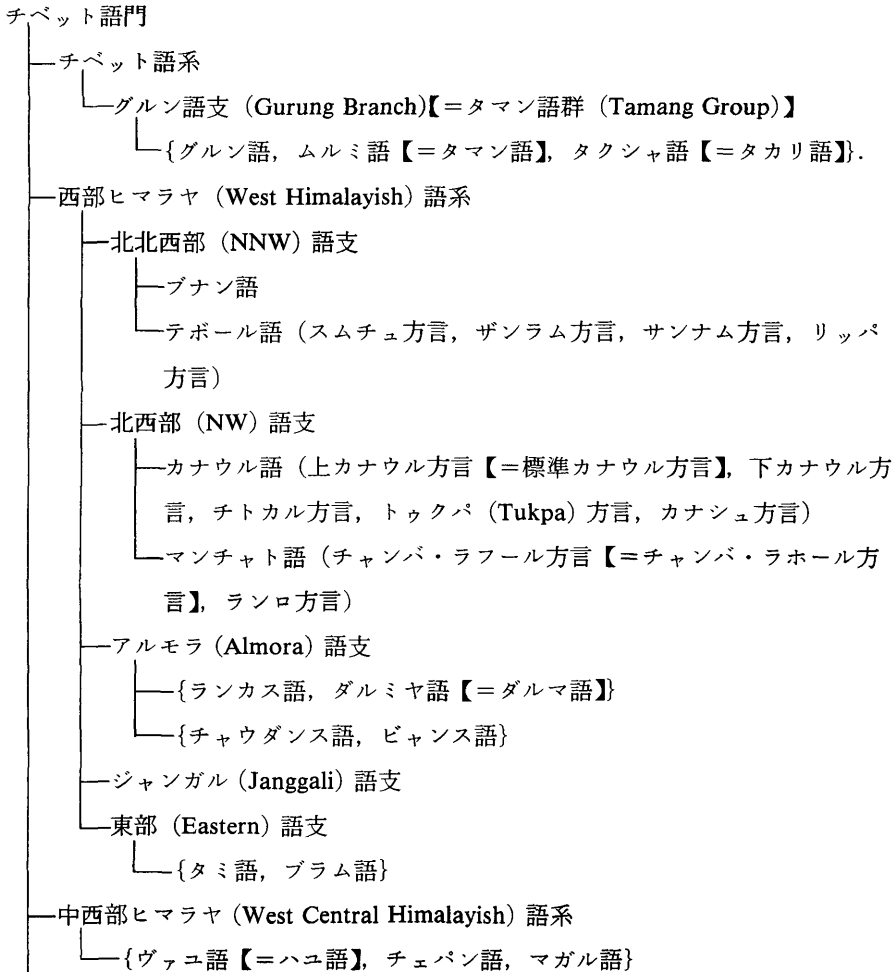
4.1.2.1. Shafer の分類

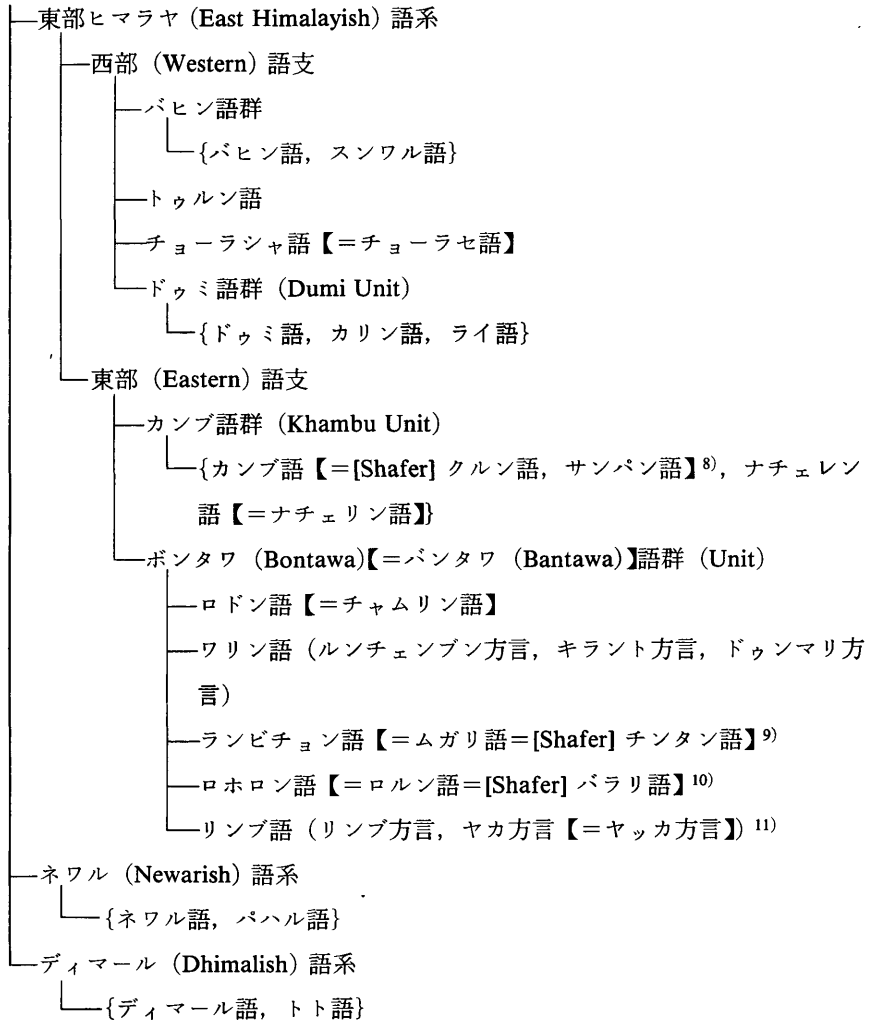
チベット・ビルマ語派を含めたシナ・チベット語族の本格的で包括的な比較研究は、Shafer に始まるといえる。Shafer は、1935年以降に当時知られていたチベット・ビルマ諸語のさまざまな下位語群の系統的分類を順次試みるが、それらを拡充・集大成して、「シナ・チベット諸語の分類 (Classification of the Sino-Tibetan Languages)」[1955] (Shafer [1966] に再掲) を発表する。ヒマラヤ諸語については、まず1950年に主にネパール中部と西部の言語の分類を、1952年にはネワル語の位置付けを、1953年にはネパール東部の言語の分類を論ずる論文を発表し、1955年の上掲論文ではインド北西部の言語の分類も含めたヒマラヤ諸語全体の分類を完了している。

Shafer の分類は、それが単に包括的な分類であるだけでなく、語彙の一致と音声対応といった分類の根拠を明確に示している点でも、当時としては画期的なものであった。彼の分類は、ヒマラヤ諸語に関する限り、より正確で豊富な資料がその後追加され、多くの新言語が発見されてはいるが、その大筋は、現在も多くの学者に受け入れられている。

Shafer [1955: 100-108, 1966: 1-8] ⁵⁾ では、シナ・チベット語族は、まずシナ

(Sinitic), タイ (Daic), チベット (Bodic 【Bod=Tibet】), ビルマ (Burmic), ボド (Baric), カレン (Karennic) の 5 つの語門に分類されているが, このうちシナ語門とタイ語門, または, シナ語門, タイ語門とカレン語門を除く, 3 ないし 4 語門⁶⁾ がい
 わゆるチベット・ビルマ語派に相当する。Shafer 自身も, “Tibeto-Burmic” の呼称は
 用いるが, これは一般に認められているシナ・チベット語族の下位語派を指す呼称と
 してでなく, チベット語門とビルマ語門を併せた呼称として使用しているに過ぎない。
 彼の分類では, ヒマラヤ諸語は, ビルマ語門のクキ (Kukish) 語系の北部ナガ (Nor-
 thern Naga) 語支のアオ (Ao) 語群に分類されているレブチャ語を除き, すべてチベ
 ット (Bodish) 語門に入る。以下に関連部分を図示すると次の通りである⁷⁾。





Shafer は、ネワル語系とディマール語系を含むこの語門の残りの小語系が「この語門に確実に分類されないが、チベット語門の語系である蓋然性があり、ビルマ語門の可能性があるが、ボド語門でないことは確かである」と述べている。

4.1.2.2. Miller と西田 [1970] の分類

この Shafer の分類が発表されて後、Benedict の『シナ・チベット諸語：概説 (Sino-Tibetan: A Conspectus)』[1972] の出版までにも Miller [1969] と西田 [1970: 164-169] がそれぞれの論著でヒマラヤ諸語を含むチベット・ビルマ語族の一部の言語の分類を示している。Miller は、チベット語門とビルマ語門に触れているだけであ

り、ヒマラヤ諸語に関する限り、呼称を多少変更 (Bodic/ish→Tibetan, Himalayish→Himalayan) するが、Shafer の分類 [1955] を踏襲している。一方、西田は、チベット語群にチベット、ジャロン【=ギャロン】(Jyarong/Jyarung, rGya-rong/Gyarong; 嘉戎)、ヒマラヤ、チアン【=チアン】(Ch'iang/Chiang/Qiang; 羌) とカチンの5語系を立て、ヒマラヤ諸語は、ネワル語、ディマール語、トト語、レプチャ語(これらの言語の分類は示されていない)を除き、すべてヒマラヤ語系の4つの語群、ヒマラヤ・チベット語【=[Shafer] グルン語支】、東部ヒマラヤ諸語【=[Shafer] 東部ヒマラヤ語系】、中央部ヒマラヤ諸語【=[Shafer] 中西部ヒマラヤ語系】及び西部ヒマラヤ諸語【=[Shafer] 西部ヒマラヤ語系】に分類しているが、グルン語支と他のヒマラヤ語系言語との相互関係に変更を加えている以外は、全体として Shafer の分類に従っている。なお、後で示すように、西田は、1987年と1989年の2度にわたって、チベット・ビルマ語派の下位分類の改訂を試みている。ヒマラヤ諸語に関しては、西田 [1987: 112] の分類は、西田 [1970] のそれと基本的に一致しているが、西田 [1989a: 800] には、チベット語と他のヒマラヤ諸語との相互関係に解釈の違いがみられる。

4.1.2.3 Benedict の分類

現在、Shafer のそれと並んで、最もよく依拠される分類は、Benedict [1972a: 3-11] の分類である。Benedict は、分類の基準に関して、「一般に、ここでは語彙の考慮 [一致] が一義的な重要性を持ち、形態法、統語法の考慮は二義的な重要性しかない」(p. 4) とする立場を取っている。

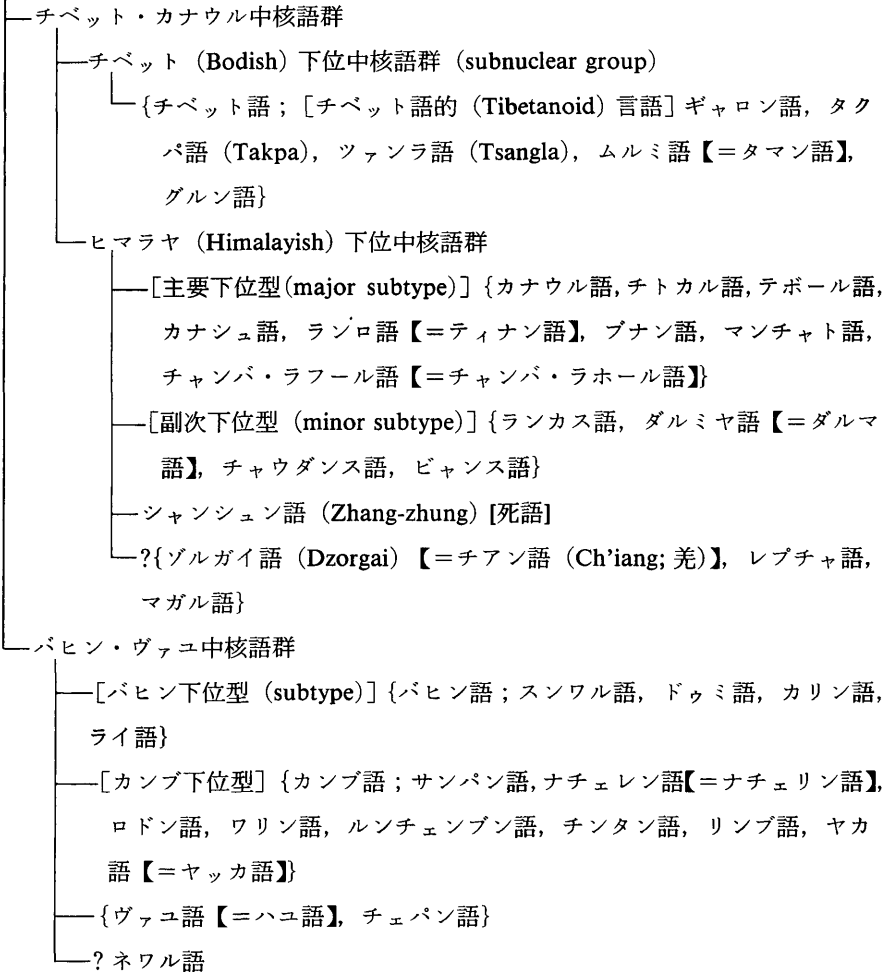
彼の分類では、シナ・チベット語族はまずシナ語派 (Chinese) とチベット・カレン語派 (Tibeto-Karen) に、次いで後者は、カレン語とチベット・ビルマ諸語に分けられる。チベット・ビルマ諸語は、次の7つの主要語門 (primary division), または、中核語群 (nucleus) に分けられている¹²⁾。

- (1) チベット・カナウル (Tibeto-Kanauri) / チベット・ヒマラヤ (Bodish-Himalayish)
- (2) バヒン・ヴァユ (Bahing-Vayu) / キラント (Kiranti)
- (3) アボール・ミリ・ダフラ (Abor-Miri-Dafla) / ミリ (Mirish)
- (4) カチン (Kachin)
- (5) ビルマ・ロロ (Burmese-Lolo)¹³⁾ / ビルマ (Burmish)
- (6) ボド・ガロ (Bodo-Garo) / ボド (Barish)
- (7) クキ・ナガ (Kuki-Naga) / クキ (Kukish)

ヒマラヤ諸語は、アボール・ミリ・ダフラ中核語群の辺縁的構成言語とされるディ

マール語（と(?)トト語)を除けば、すべてチベット・カナウル中核語群とバヒン・ヴァユ中核語群のいずれかに分類されている。

チベット・ビルマ諸語



Benedict の分類が Shafer と異なる主な点は、チベット・カナウル中核語群【=[Shafer] チベット語門西部ヒマラヤ語系】とバヒン・ヴァユ中核語群【=[Shafer] チベット語門東部ヒマラヤ語系】の相互関係とレブチャ語 ([Shafer] ビルマ語門クキ語系北部ナガ語支アオ語群), ハユ語, マガル語とチェパン語 ([Shafer] チベット語門中西部ヒマラヤ語系) 及びネワル語 ([Shafer] チベット語門ネワル語系) 等の個々の言語の位置付けである。Shafer [1955: 101, fn. 19, 1966: 3, fn.

2] 自身も、中西部ヒマラヤ語系の3言語に関しては、それが「他の語群の言語よりも相互と関係が深いとしかいえない」と記しており、既述のように、ネワル語についてもその最終的な位置付けに躊躇している。Benedict は、暫定的にチベット・カナウル中核語群に分類したレプチャ語、マガル語とゾルガイ語について、「いずれも他のどの中核語群よりもチベット・カナウル語群に近いようである。カチン語の移行的性質の多くがみられるレプチャ語は、チベット・カナウル語群とバヒン・ヴァユ語群及び南の諸語群を繋ぐ別の中核語群としてもおかしくないであろう。マガル語には、バヒン・ヴァユ語群（特に、ヴァユ語とチェパン語）と興味深い語彙の一致がみられ、チベット・バヒンのリンク (link) とみなせるであろう」(pp. 7-8) と述べ、ヴァユ語、チェパン語とネワル語についても、ヴァユ語とチェパン語は、「このキラント中核語群にかなり近いが、……ネワル語には、多くの相違点がみられ、バヒン語とヴァユ語と直接一緒に分類はできない」(pp. 5-6) としている。

この分類は、Shafer のそれと異なり、網羅的（例えば、タミ語、ブラム語には触れていない）でもなく、細分化もされていないし、上の (3), (4), (5) と (6) の中核語群が1つの上位語群にまとめられる可能性も示唆されるに留まっている。Benedict は、「現在の研究段階では、チベット・ビルマ諸語内部の上位語群は確実には指定できない」(p. 11) とし、その理由を主に資料の質と量の問題に帰している。

4.1.2.4. Egerod と Voegelin=Voegelin の分類

Benedict 以降、1970年代に更に2人の言語学者がシナ・チベット語族全体の系統的分類を試みるが、そのいずれにも Shafer と Benedict の分類の影響が認められる。

まず Egerod [1973-74: 797a-798b] は、カレン語をチベット・ビルマ語派に含めることに躊躇している点を除けば、大枠（上位語群）において Shafer の分類に従い、細部では部分的に Benedict の分類を取り入れている。ヒマラヤ諸語に関しては、レプチャ語、ディマール語 [及び (?) トト語]、ネワル語、グルン語 [及び (?) タマン語とタカリ語] の位置付けは、Shafer に従うが、残りの言語の分類では、ほぼ Benedict に従っており、Shafer の中西部ヒマラヤ語系をキラント諸語 (Kirantish) の東部と西部の2つの語支の後者に分類している。ただし、Benedict とは異なり、そのキラント諸語の西部語支には、“おそらく”と注記されているが、{ヴァユ語、チェパン語} (上図参照) にマガル語が加えられている。下位語群名も、必要に応じて改変 (Bodic→Tibetic, Mishingish→Mirish; Kiranti→Kirantish 等) されているが、基本的には Shafer のそれに従っている。

C. F. Voegelin=F. M. Voegelin [1977: 328] では、チベット・ビルマ語派は、まず

- (1) ボド・ナガ・カチン (Bodo-Naga-Kachin)
- (2) ビルマ・ロロ (Burmese-Lolo)
- (3) ギャロン・ミシュミ (Gyarung-Mishmi)
- (4) カレン (Karen)
- (5) ナガ・クキ・チン (Naga-Kuki-Chin)
- (6) チベット (Tibetan)

の6つの語系に分類されるが、Shafer の分類におけるチベット語門のチベット語系 (pp. 327-328) 以外のヒマラヤ諸語のすべての語系の言語は、ギャロン・ミシュミ語系 (pp. 153-156) にまとめられ、更に東部代名詞化語支と西部代名詞化語支と非代名詞化語支に下位分類されて、各語群内でアルファベット順に配列してある。

Voegelin=Voegelin は、Konow, Shafer 及び Benedict の分類を参照しており、系統的分類と同時に類型的分類も考慮したものになっている。しかし、リンパ語=モンパ語 (Monpa; 門巴語) とするような言語の誤った同定、最も代表的な代名詞化言語であるギャロン語を非代名詞化言語とするような代名詞化言語・非代名詞化言語の誤認等がみられ、系統的分類としては勿論、類型的分類としても信頼性に欠けるものである。また、1970年代後半に既に利用できたと思われるネパールのチベット・ビルマ語系言語に関する新情報が十分に活用されていない点も問題であろう。

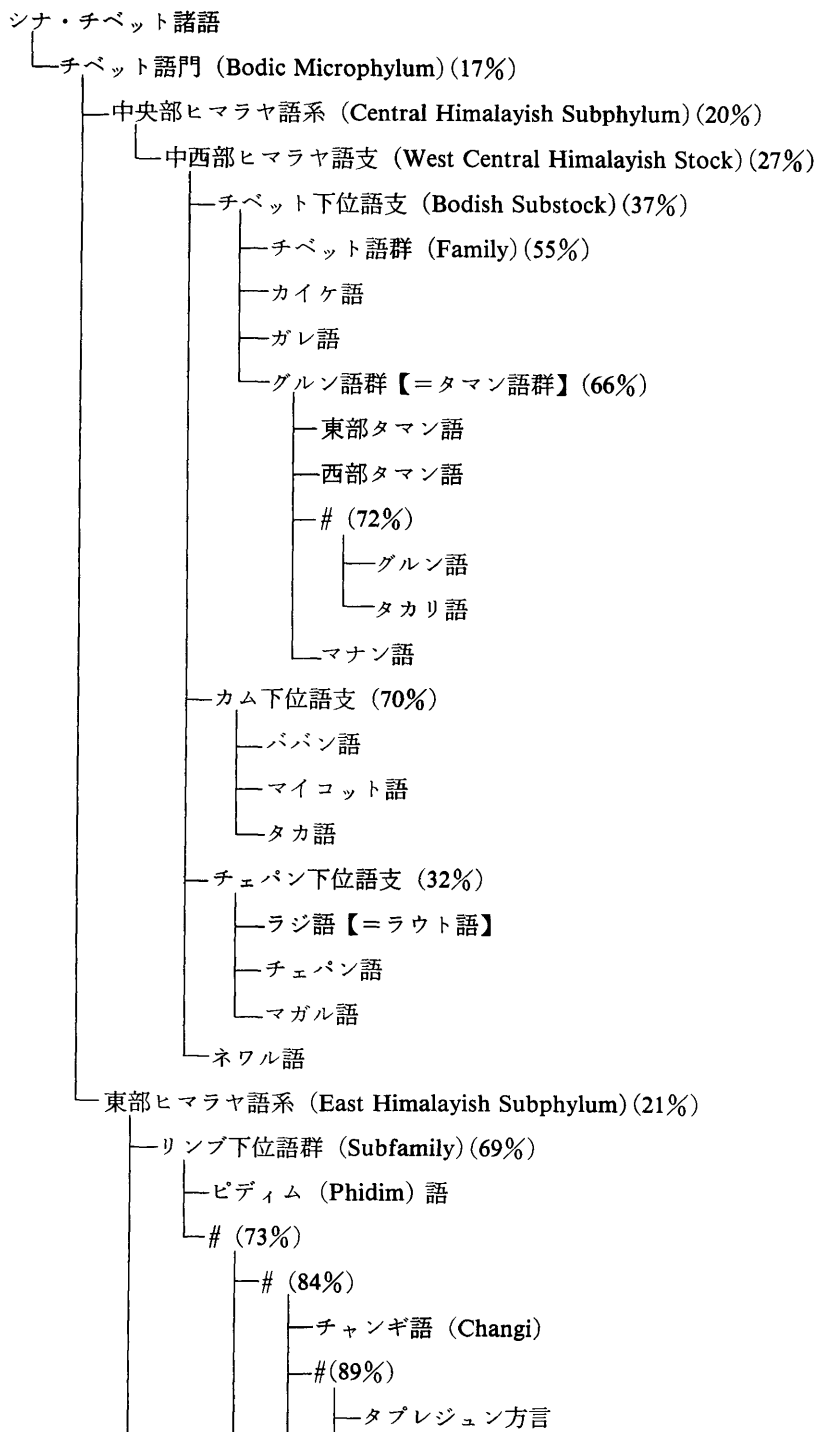
なお、E. A. Hale [1982: 10-35] には、Shafer から Voegelin=Voegelin までのチベット・ビルマ諸語の主な下位分類の比較表が掲載されている。

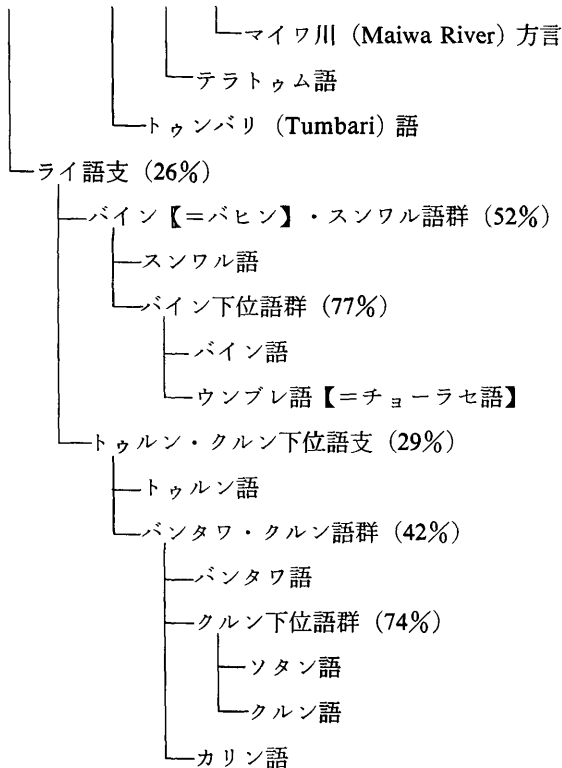
4.1.2.5. Glover のネパールのヒマラヤ諸語分類

1970年以降に新たに発見されたヒマラヤ諸語の言語が初めて分類に登場するのは、W. W. Glover [1970c: 23-26] の行った分類であった。Glover は、M. Swadesh の語彙統計学 (lexicostatistics)／言語年代学 (glottochronology) 的方法に従い、彼の基礎100語表を用い、言語間の同源形共有率を調べ、チベット語 (中央方言) を含めたネパールのヒマラヤ諸語の10言語の相互関係と分裂年代を計算し、これらの言語の下位分類を行った¹³⁾。その後、彼は、W. W. Glover [1974: 5-14] で、同じ方法をチベット語方言を含む36言語・方言に拡大してその下位分類を行うが、結果は次の通りであった。

なお、次の図では、Glover の挙げてある分裂年代は省略してある。() 内の数値は共有率を示す。

西 ヒマラヤ諸語の分布と分類 (中)





上図で、#印は、中間段階の下位語群であるが、Glover が語群名を付けていない箇所を示している。

この分類には、同系言語の下位分類が果して Swadesh の100語表の基礎語彙の共有率だけで充分なのかという問題や Shafer のチベット語門を前提とした分類であるという問題がある上、同源形の認定の仕方、従って、共有率の算定自体にも問題があると思われる。Shafer と Benedict の分類と比較すると、マガル語 ([Shafer] 中西部ヒマラヤ語系, [Benedict] ヒマラヤ下位中核語群), チェパン語 ([Shafer] 中西部ヒマラヤ語系, [Benedict] バヒン・ヴァユ中核語群) 及びネワル語 ([Shafer] ネワル語系, [Benedict] バヒン・ヴァユ中核語群) の相互関係と位置付けや東部ヒマラヤ語系【=[Shafer] 東部ヒマラヤ語系, [Benedict] バヒン・ヴァユ中核語群】の下位分類でリンブ語が、残りのすべての言語に対して、いわば独立した語支として、リンブ下位語群を形成している点が異なっている。しかし、Shafer のチベット語門を前提としたこの Glover の分類は、当然、全体的な枠組が、Shafer の分類と類似したものとなっている。その一方で、東部ヒマラヤ語系の下位分類に関しては、その後の G.

Hansson [1988] の分類と一致する点がみられる。なお、問題のがチェパン語、マガル語及びネワル語のチベット・ビルマ語派全体あるいはヒマラヤ諸語内での位置付けには、現在も最終的な結論は出ていないのである。

4.1.3. 1980年代以降

4.1.3.1. Thurgood の分類

ある語族 X の系統的または系統樹的分类で言語 A₁, 言語 A₂, … がひとつの下位語群 A を構成するとすることは、それらの言語がその語族の残りの言語 (B₁, B₂, …; C₁, C₂, … など) の祖語 (*B, *C など) と区別される音韻的, 文法的, または語彙的な言語特徴, つまり“改新的”特徴 (innovations) を持っていた共通の中間的祖語 *A から派生したと仮定することである。従って, A₁, A₂ 等を含む下位語群 A の妥当性を論証するには, A₁, A₂ 等に祖語 *A の改新的特徴を反映する言語特徴を共有することを示す必要がある (この外に, 祖語 *X から直接派生したとされるか, 同じ下位語群の他の言語が死滅した結果生じる孤立語 (language isolate) を立てるのも, 原則は同じである)。それに対して, 語族 X の共通祖語 *X からの継承された諸特徴, つまり“留保的”特徴 (retentions) の共有は, それらの言語がその語族に属すること, つまり同系言語であることの証明にはなっても, または, 下位語群を設定するための“消極的 (negative)”証拠となることがあっても, “積極的 (positive)”証拠とはなり得ない。語彙の共有率に基づく下位分類では, “改新的”特徴と“留保的”特徴の弁別を前提としていないが, そのような場合でも, 比較する語彙数が多ければ, 共有語彙には当然“改新的”特徴も多く含まれることになり, 妥当な結論が導かれる可能性も高くなることが期待される¹⁴⁾。また, その“改新的”な特徴に, 音韻変化や構造的に重要な形態的, 形態統語的特徴が加われば, 下位語群設定の妥当性も高くなるといえよう¹⁵⁾。チベット・ビルマ語派の下位分類では, 従来, 資料の乏しさから, どれが“改新的”要素であり, どれが“留保的”要素であるのか多くの場合はっきりと区別できなかったのが実情であった。1980年代になって, 資料の充実と研究の進展に伴い, 漸く“改新的”特徴に焦点を絞った下位分類が提唱されるようになる。

G. Thurgood [1985a] は, 下位分類は“改新的”特徴にのみ基づいて行われるべきであるという原則に従い, チベット・ビルマ祖語に再構し得る代名詞体系と, J. J. Bauman [1975] の主張するようにチベット・ビルマ祖語に遡ると断定できないまでも, 極めて古い年代に再構できるとされる人称代名詞と代名詞化言語の動詞の人称・数接辞に着目し, それを現代語の代名詞と動詞の人称・数接辞と比較することで明ら

かになる“改新的”特徴の幾つか（具体的には、代名詞と動詞の人称・数接辞等の形態素：“1人称単数” **ŋa*/**ŋa-*，“2人称単数” **nan*/**na-*）を分類指標として、新たに発見された諸言語を含めたチベット・ビルマ諸語（ロロ・ビルマ諸語は除く）の下位分類の再検討を行った（pp. 376-377）。Thurgood の分類で、今ひとつ注目すべき点は、それまでの分類では幾つかの異なる語系に分類されていた多くの言語をまとめ、新たな主要下位語群としてルン諸語（Rung languages）を立てたことである。

（Thurgood は、原則はともかく、実際には“留保的”特徴もルン諸語の設定の論拠として随所に取り上げている。）

Thurgood の分類は、ヒマラヤ諸語に関する限り、中西部ヒマラヤ語系のハユ語がキラント諸語に分類されている点を除けば、Shafer の西部ヒマラヤ語系【=[Thurgood] カナウル・アルモラ諸語】と東部ヒマラヤ語系【=[Thurgood] キラント諸語】については、ほぼ Shafer の分類を裏付ける結果となっている。Shafer のグルン語支【=[Thurgood] タマン・グルン語系=タマン語群】については、2人称代名詞がチベット語にみられる2人称代名詞の改新形 **khyot* と同様に初頭音 **k-*（正しくは、**g-*）¹⁶⁾をもつ上、いずれも1人称代名詞が改新形に置き換えられていないことから、両者の関係が相対的に近いことを示唆するとしている。しかし、ネワル語（[Shafer] ネワル語系）、タミ語（[Shafer] 西部ヒマラヤ語系東部語支）、ディマール語及びトト語（[Shafer] ディマール語系）については、はっきりした結論を出せずに終わっている。

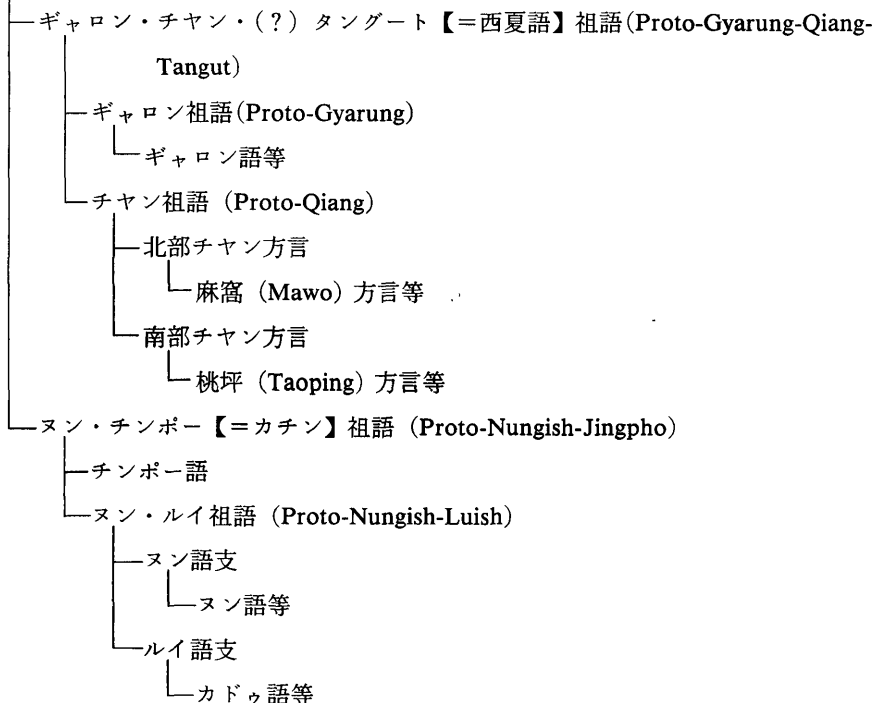
Thurgood の分類は、下位分類の原則が明確にされている点で評価され、分類指標が代名詞と動詞の人称接辞（いずれも1/2/3人称単数形のみ）に限られているが、この両種の分類指標が利用できる代名詞化言語の場合には、非常に興味深い結論が得られている。その一方で、非代名詞化言語であるチベット語とグルン語支の関係等については、これだけの分類指標で結論を出すことが妥当か否か問題であるといえよう。

Thurgood [1985a: 394-396, 1985b] がルン諸語を設定する論拠は、その下位語群間の関係では、“改新的”特徴（例. ギャロン語、チアン語などにみられる山や川といった具体的な地勢的特徴を基準として方向を示す動詞の方向辞；ギャロン語、トゥルン語₂ (Trung; 独龍語) [以下、ネパールの Thulung 語と中国、ビルマの Trung 語を区別するために、前者をトゥルン語₁、後者をトゥルン語₂とする] やカム語にみられるチベット・ビルマ祖語の否定辞 **ma* から派生した動詞の選択疑問辞；一部の言語にみられる人称接辞体系の“改新的”要素；トゥルン語₂とカチン語にみられる動詞の使役標識 **s-* の形態音韻変化の類似等）を挙げているが、このルン諸語全体は、むし

ろ“留保的”要素(古い人称接辞体系;チベット・ビルマ祖語の方向標識体系と使役標識の留保等)に基づいているようである。従って,ルン諸語の設定は,示唆に富むものの,その主要下位語群としての統一性がまだ十分に証明されたとはいえず,更に検討が必要であろう。

このルン諸語には,カチン語,トゥルン語₂等を含むヌン諸語(Nungish),カドゥ語(Kadu)等を含むルイ諸語(Luish),ギャロン語(諸方言),チアン語(諸方言),タルアン語(Taruang;達讓)【=ディガロ語(Digaro)】,カマン語(Kuman/Kaman;格曼)【=ミジュ語(Miju)】,イドゥ語(Ids;義都)等(相互関係は下表参照)のチベット・ビルマ諸語の分布域の中心部,臍の部分に分布する多くの言語が含まれている。更に,Thurgoodは,ヒマラヤ諸語中のレプチャ語([Shafer]ビルマ語門クキ語系北部ナガ語支アオ語群),カム語,チェパン語とマガル語([Shafer]中西部ヒマラヤ語系)等も,この語群に分類されるか分類される可能性があると述べているが,これらの言語のルン諸語内部での位置付けは具体的に示されていない。

ルン諸語(Rung languages)



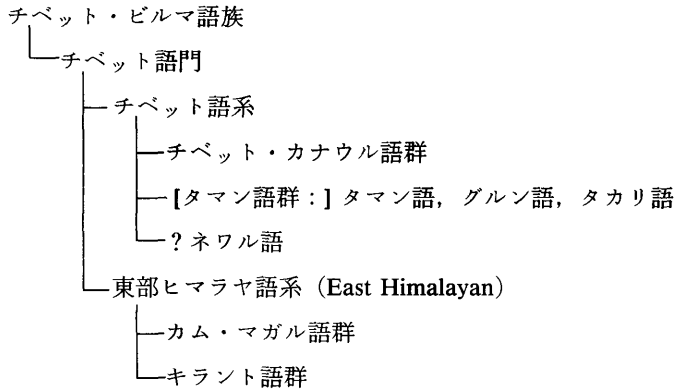
4.1.3.2. DeLancey の分類

DeLancey [1987: 799-803] は、「[チベット・ビルマ] 語族のさまざまな下位語支間の系統的関係の完全で信頼できる図式はまだない」と述べるが、「ある段階で系統的単位をなしている」と一般に合意がみられるとして、次に言語・下位語群を挙げている。ただし、ルン語群については、問題があるとしている。

- (1) チベット語群 (Bodish)
- (2) 東部ヒマラヤ語群 (East Himalayan)
- (3) ボド・ガロ語群 (Bodo-Garo)
- (4) コニャック語群 (Konyak)
- (5) ナガ語群 (Naga)
- (6) クキ・チン語群 (Kuki-Chin)
- (7) ミキル・メイタイ語群 (Mikir-Meithei)
- (8) アボル・ミリ・ダフラ語群 (Abor-Miri-Dafla)
- (9) カチン語群 (Kachinic)
- (10) ロロ・ビルマ語群 (Lolo-Burmese)
- (11) ルン語群 (Rung)
- (12) カレン語群 (Karen)

ヒマラヤ諸語に関しては、おそらくレプチャ語を除く、ほぼすべての言語が(1)と(2)に含まれるものと思われるが、所属言語名を全部挙げてはいないので、不明な点が残る。まず、(1)には、チベット語、北西インドのカナウル語、ブナン語やいわゆるアルモラ地方の諸言語 ([Shafer] 西部ヒマラヤ語系, [Thurgood] カナウル・アルモラ諸語), タマン語群 【=[Shafer] グルン語支】, それに多分ネワル語やその他のネパールの幾つかの言語が含まれ、(2)には、キラント諸語またはライ・リンブ諸語、それにおそらく東ネパールの他の幾つかの言語が含まれるとし、(2)は(1)と最も近い関係にあるとしている。

これらの下位語群が次にどのように上位語群に統括されるかは問題があるとしながらも、信頼できる作業仮説として、Benedict [1972a] と Shafer [1955, 1966] の分類や示唆に従い、チベット、ボド、ビルマ、カレンの4部門をチベット・ビルマ語派の上位語群とし、更に諸学者の分類を参照、折衷し、中間段階を設定した系統樹を示している。ヒマラヤ諸語の下位分類は、次の図の通りである。



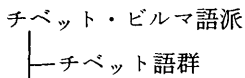
その後、DeLancey は、祖語の“動詞の一致体系”を論ずる際に、再び下位分類に触れているが、ヒマラヤ諸語に関する限り、その下位分類に改変は認められない [DeLANCEY 1989a]。

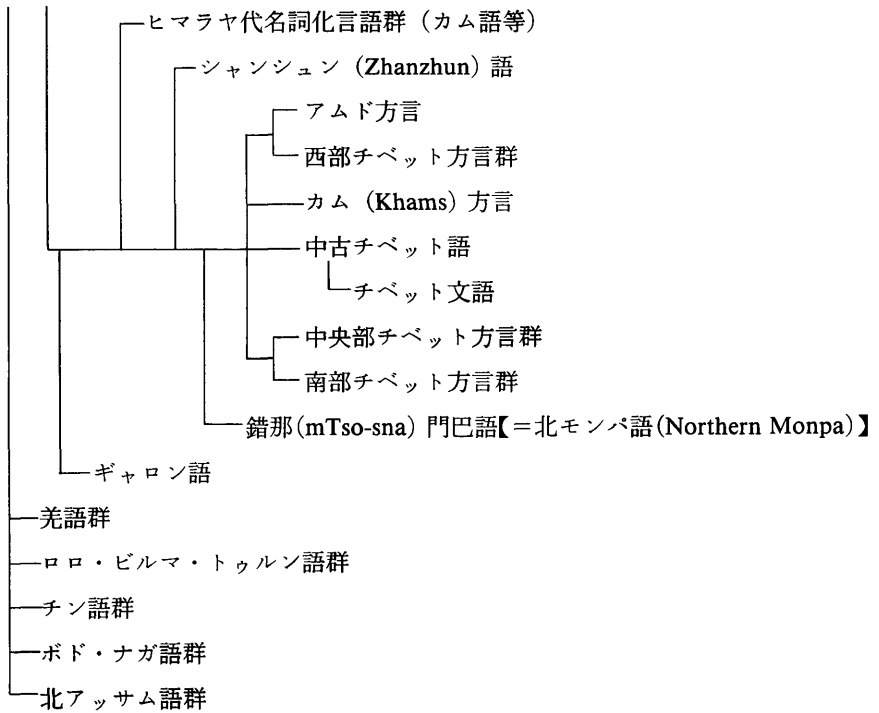
4.1.3.3. 西田 [1987, 1989] の分類

西田は、1970年代以降のチベット・ビルマ諸語の調査・研究の成果を踏まえて、まず1987年にチベット・ビルマ語派の下位分類を改め、西田 [1970] では、チベット語群の下位語群とされていたチヤン語系【＝チアン（羌）語系】をチベット語群と並ぶ上位語群とし、更に北アッサム語群を新たな上位語群として立てるが、そこではやはりチベット語群に分類されていたカチン語系【＝チンポー（景頗）語系】の位置付けは示されていない。また、ロロ・ビルマ語群にトゥルン語₂が加わり、ロロ・ビルマ・トゥルン語群と改称されている。チベット語群に分類されていたヒマラヤ語系の東部、中央部及び西部ヒマラヤ諸語は、ヒマラヤ代名詞化言語群に一括されるが、ヒマラヤ・チベット語とされていたタマン語群【＝ [Shafer] グルン語支】については触れられていない。

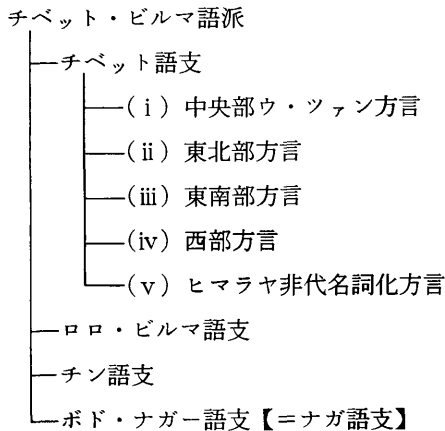
西田は、この1987年の分類を再検討し、1989年にその改訂を試みる。そこでは、「語群」を「語支」に改称するだけでなく、全体的な修正を試みている。西田 [1989a] には、多くの場合にその系統的分類の根拠が明記されているだけでなく、単に系統的分類に留まらず、チベット・ビルマ諸語の全般的な言語特徴を論述しており、優れた見解が述べられている。

(1) 西田 [1987: 112]





(2) 西田 [1989a: 792,800]



これらの系統図から窺える西田 [1987] と西田 [1989a] の分類の相違点を挙げると、後者で、ロロ・ビルマ・トゥルン語群の名称がロロ・ビルマ語支に改められたこと、羌語群と北アッサム語群が上位語群から除かれたこと、チベット語支に新たにヒマラヤ非代名詞化方言が加えられたこととギャロン語、錯那門巴語、ヒマラヤ代名詞化言

語群等をチベット語支内で具体的に位置付けることが避けられていること等である。

西田 [1989a: 792-800] は、このような修正について、まずロロ・ビルマ語支はトゥルン語₂を含む呼称であり、実質的な変更はなく、北アッサム語群は帰属に問題があり、羌語群【＝チアン語群】と、中国の四川省を中心に分布する納木依語、史興語等の多くのチベット・ビルマ語系言語を仮にまとめた西番語群については、「その帰属は未証明ながら、共通の祖形をもつものと予測し、いちおうチベット語支に入れておきたい」と説明している。また、カチン語は、「媒介言語としての資格は充分あるけれども、基本的には、ビルマ語支に近い特徴をかなり保有している」と述べているが、その帰属については、結論を保留している。

ヒマラヤ非代名詞化言語群をチベット語現代方言と同次元の方言とした点については、他のチベット語方言と同様に、「チベット文語形あるいはそれを修正した形式をもって、祖形を設定することができる」というのが、修正の理由のようである。

更に、西田 [1989a] では、ギャロン語、錯那門巴語、ヒマラヤ代名詞化言語群等に、ツァンロ語 (Tshanglo/Tsangla; 倉洛) 【＝メト (Metho; 墨脱)・モンパ語; 中央モンパ語 (Central Monpa)】を加えた諸言語や下位語群も、チベット語現代方言との相互関係はともかく、西田 [1987] に於けると同様に、いずれもチベット語支に帰属させている。

ヒマラヤ非代名詞化方言が具体的にどのような言語を指すのかは明言されていないが、おそらくタマン語群を指しているのではないと思われる。しかし、果してこの中央ネパール語系の諸言語が他のチベット語諸方言と同次元の方言群として扱うことができるか否かは問題であろう。

このように、西田 [1989a] では、ヒマラヤ諸語は代名詞化方言と非代名詞化言語群に大きく分類されており、前者は、西田 [1970] のヒマラヤ・チベット語を、後者は、東部、中央部及び西部ヒマラヤ語群を指しているものと推定されるが、実際にはカム語以外の具体的な言語名は挙げておらず、例えば、ネワル語、ディマール語、トト語等の分類について、そのすべてを代名詞化言語とするのか、ネワル語は非代名詞化言語とするのか明らかでない。

Thurgood の分類で検討され、確認されたり、新たに提唱された下位語群は、Shafer の語系レベルか Benedict の中核語群レベルあるいはそれらよりも低次の段階 (lower-level) の語群に相当するものである。Benedict や Thurgood の主要下位語群が、Shafer の「語門」のようなより高次の段階 (higher-level) の幾つかの語群に更にまとめられ得るか否かは今後の問題であるが、西田 [1987, 1989a] や中国国内のチベット

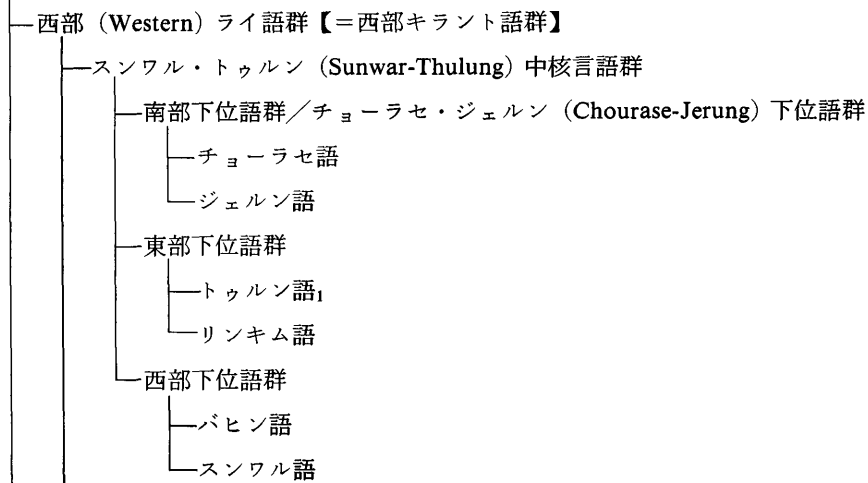
・ビルマ語系言語の分類のみ取り上げた孫宏開 [1988] 等の最近のチベット・ビルマ語派の下位分類でも、DeLancey を除けば、いずれも Shafer の“語門”に相当するほどの高次の段階は設定していない。ただ西田 [1989] のチベット語支のみには、Shafer のチベット語門にはほぼ匹敵するかそれ以上に多くの言語、下位語群が帰属されている。

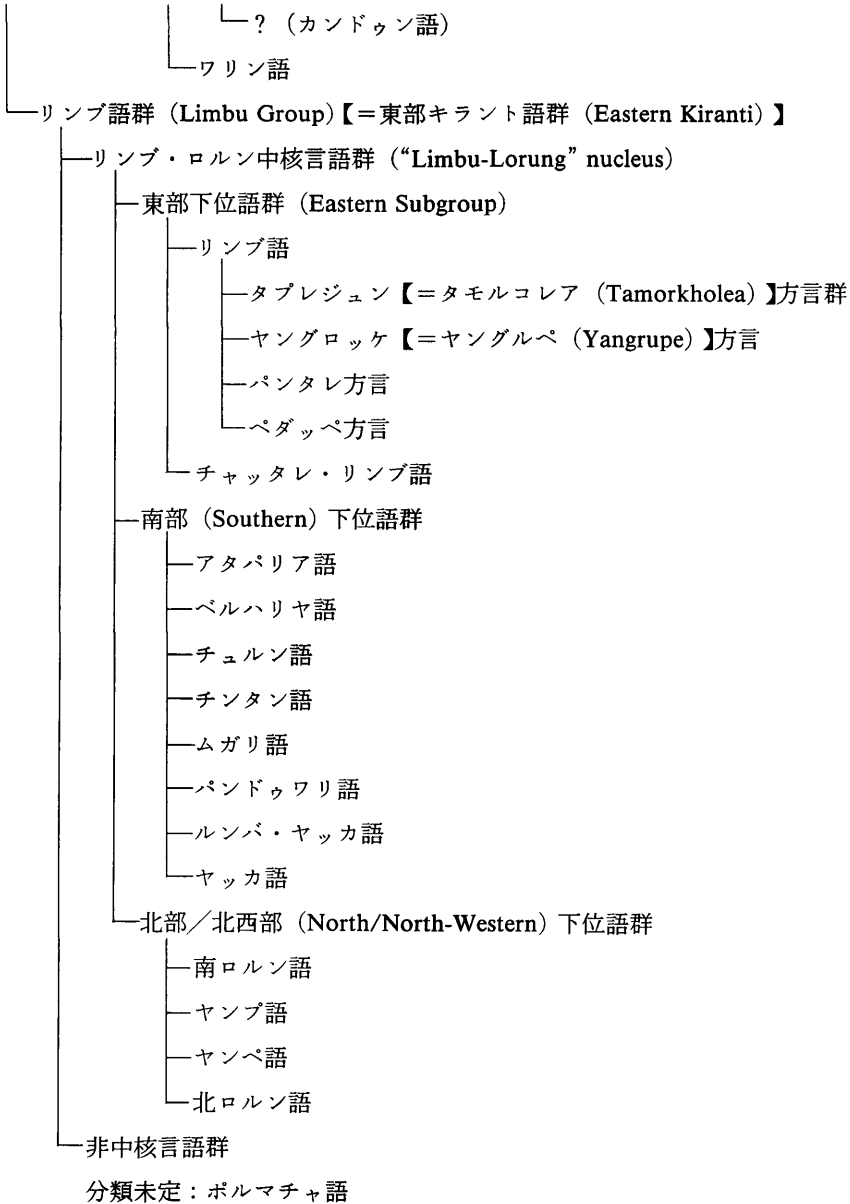
また、Thurgood や DeLancey も指摘しているように、高次の段階を設定するとすれば、共通の動詞の人称・数の一致体系がチベット・ビルマ祖語の段階に再構されるところか（西田 [1987, 1989a], DeLancey [1980, 1988, 1989a]）、それとも祖語の分裂以降に個々の語群でそれぞれ別個に発達したものとするか（D. E. Watters [1975], R. C. Caughley [1981, 1982b], 長野泰彦 [1984]）で結論が異なって来ることになるが、この点については、Thurgood を含め、チベット・ビルマ語学者の多くはまだ中立的立場を取っているようである。

4.1.3.4. Hansson の分類

東ネパールのヒマラヤ諸語については、1980年代に入り漸く、全体的な調査研究（第2次「ネパールの言語調査」）が行われるようになったが、その調査の成果はまだ十分に公刊されるに至っていない。その意味でも、調査結果の総括ともいえる G. Hansson [1988] の分類（下図）は、試案的なものであろうが、貴重な成果である。しかし、言語と方言の識別基準や分類の論拠がこの論文では具体的に示されていない点に問題が残るといえよう。

ライ・リンブ語系 (Rai-Limbu) 【=キラント諸語 (Kiranti Languages)】





なお、リンブ語群の非中核言語群は、バンタワ語、東メオハン語、サンパン語等の東部ライ語群の言語の歴史的成層 (historical stratifications) に認められる要素から推定される言語が含まれる。従って、上記の3言語は、同時にリンブ語群の非中核言語群に属するともいえる。

4.2. 従来の分類の総括

ヒマラヤ諸語のこれまでの分類を概観して明らかなように、Voegelin=Voegelin の分類を除けば、Shafer 以降のヒマラヤ諸語の分類は、その行われた時期により取り扱われる言語数に違いがあるが、幾つかの例外はあっても、大枠では相違点よりも一致点の方が多いといえる。この幾つかの例外とは、ラウト語、カム語、タミ語、ムガル語、チェパン語、ネワル語、ハユ語【ヴァユ】語、ディマール語及びレブチャ語の9言語である。また、ブラム語とトト語は、Shafer だけが、マナン語、カイケ語及びガレ語は Glover だけが取り上げている。ランバ語、マルファ語、シャン語、チャンテル語とナル語は上述のいずれの分類にも取り上げられていないが、タマン語群やガレ語を対象とした M. Mazaudon や西の諸論文では、マナン語、マルファ語、シャン語、ナル語、ガレ語とカイケ語の分類が随所に触れられている。更に、Zoller [1983] のランバ語はこれまでのところ全く取り扱われていないが、これは、Zoller 自身が序論でランバ語をチベット語のガルワル (Garhwal) 方言としていることにも一端の責任がある。後で示すように、ランバ語は、チベット・ビルマ語派の言語でヒマラヤ語系に帰属されることは明らかである。一方、東ネパールのライ・リンブ語系言語に関する最新の情報と資料を利用した分類は Hansson [1988] のそれしかない。

マルファ語とシャン語は、タマン語群【=[Shafer] グルン語支, [Glover] グルン語群】に分類されることは明らかである。ガレ語、カイケ語とナル語は、タマン語群の言語ではないが、それに近い言語であるといえる。また、資料の公刊されていないチャンテル語も、Mazaudon によれば、タマン語群の言語である可能性が高い。Shafer の分類では、タミ語とブラム語は西部ヒマラヤ語系の東部語支¹⁷⁾に、ディマール語とトト語はディマール語系に分類されている。Benedict は、ディマール語だけを取り上げ、アボール・ミリ・ダフラ中核語群に分類する。しかし、限られた資料しかなく、Shafer の分類を否定する根拠もないが、ここでは分類未確定としておくのが妥当であろう。

ラウト語【=ジャンガル／ラジ語】¹⁷⁾は、Shafer は西部ヒマラヤ語系の一語支に分類するが、Glover はチェパン語、マガル語と共に中央部ヒマラヤ語系中西部ヒマラヤ語支のチェパン下位語支に分類している。その僅かな語彙からみれば限り、いずれとも決め難い。従って、この言語も未分類としておく。

Shafer が別個の語系を立て、Glover が中西部ヒマラヤ語支の孤立語とするネワル語を Benedict はヴァユ語【=ハユ語】、チェパン語などと共にかりにバヒン・ヴァユ

中核語群の下位語群に分類するが、同語群の他の言語との相違点も多いことを指摘している。

Shafer がマガル語、チェパン語と共に中西部ヒマラヤ語系に分類し、Benedict がチェパン語と共にバヒン・ヴァユ中核語群に暫定的に帰属させているハユ語は、Thurgood と Hansson の分類では、キラント語系【＝ライ・リンブ語系】に分類されているが、この言語の研究者である Michailovsky [1981: 40] は、「暫定的に、ハユ語と最も近い関係にあるものはそれぞれ東と西の隣人である東部ヒマラヤ語系の諸言語とチェパン語であろう」と述べ、いわば Shafer と Benedict の分類の中間の立場を取っている。ここでは、Thurgood, Hansson に従い、暫定的にライ・リンブ語系の西部ライ語群に分類してある。

カム語について、この言語の唯一の研究者である D. E. Watters は、Benedict の分類体系では、チベット下位中核語群とマガル語（ヒマラヤ中核語群）のリンク（link）であろうが、語彙的にはそれよりも“マガル語支”に帰属させるのが妥当であるとしている。一方、Glover は、この言語を中西部ヒマラヤ語支のチベット下位語支やチェパン下位語支を並ぶカム下位語支に位置付けている。Watters と Glover もカム語をヒマラヤ諸語の枠内でしか考慮しなかったが、西田[NISHIDA 1987]¹⁸⁾ は、この言語が中国雲南省とビルマ北部の国境地帯に分布するトゥルン語₂などと関係付けられる可能性を示唆した。しかし、その後の分類([西田 1987, 1989a])では、ネパールの他の代名詞化言語を代表する言語としている。既述のように、Thurgood はこれをルン諸語に分類する。

チェパン語は、Shafer は、中西部ヒマラヤ語系に分類するが、彼自身この位置付けが確定的でないことを認めている。一方、Benedict [1972: 1-2, fn. 4] は、この言語をバヒン・ヴァユ中核語群の下位語群とするが、それとマガル語との「興味深い語彙上の一致」に触れ、更にそれが「チベット・ビルマ語族内部の北方語群と南方語群の間の重要なリンク」であると注記している。Glover は、チェパン語を中西部ヒマラヤ語系のチェパン下位語支に分類するが、この言語の唯一の研究者である R. C. Caughley [1982b: 8] は、Glover の分類には否定的で、チベット語及びビルマ語との語彙比較から、「北方語群と南方語群のリンク」とする Benedict の見解を支持している。これを更に一步進めた Thurgood は、前述のように、ルン諸語に帰属される可能性があるとしている。

マガル語についても、チェパン語と同様にその分類は一定しない。既に触れたが、Benedict は、語彙の一致からそれがチベット語群とバヒン・ヴァユ中核語群のリンク

としている。Thurgood は、マガル語もルン諸語に分類される可能性を示唆している。

最後に、レプチャ語の位置付けは、まさに各人各様といった状態で全く意見の一致がみられない。この言語をヒマラヤ諸語内部に位置付けた者は、Benedict のみであるが、その Benedict もレプチャ語にリンク語的な中核語群を立てる可能性を述べている。

なお、これらの言語中、現在も代名詞化言語であるものは、ランバ語、カム語、チェパン語、ハユ語とディマール語のみである。しかし、マガル語の西部方言とネワル語のドラカ方言はいずれも代名詞化言語であり、マガル語とネワル語もかつては代名詞化言語であったが、一部の方言を除き、人称接辞が失われてしまったと考えることができる。

一方、マルファ語、シャン語、ガレ語とレプチャ語は非代名詞化言語である。ラウト語、カイケ語、チャンテル語、ナル語とトト語については資料の不足から不明であるが、非代名詞化言語であるタマン語群との関係からみて、カイケ語、チャンテル語とナル語は非代名詞化言語である可能性が高い。

Shafer の語系レベルかそれ以下の段階での分類について、これまでの諸説を概観してみたが、分類に問題が残る言語は、ヒマラヤ諸語の71言語中のラウト語、カム語、マガル語、チェパン語、ブラム語、ネワル語、タミ語、ディマール語、トト語とレプチャ語の10言語である。そのうちラウト語、ブラム語、タミ語とトト語の4言語については資料の不足もその分類の曖昧さの一因であるといえよう。ここでは、いずれも未分類言語として扱っておく。以上の概観の結果から意見の一致している部分は次の通りである。

(I) ヒマラヤ語系

マンチャト・カナウル語群

{マンチャト語, カナジュ語, カナウル語, チトカル語}

{ティナン語, ランロ語}

テボール語群

{ブナン語, テボール語}

ガルワル・クマオン語群【＝アルモラ語群】

ランバ語

{ランカス語, ダルマ語}

{チャウダンス語, ビャンス語}

(II) 中央ネパール語系

カイケ語

タマン語群

{チャンテル語, タカリ語, マルファ語, シャン語, グルン語,
マナン語, タマン語}

ナル語

ガレ語

(Ⅲ) ライ・リンブ語系【＝キラント語系】(上掲 Hansson の分類を参照)

(Ⅳ) 分類未確定言語：

a) {カム語, マガル語, チェパン語}

b) {タミ語, プラム語}

c) ラウト語

d) ネワル語

e) {ディマール語, トト語}

f) レブチャ語

(語系と語群の名称は筆者によるが、既分類言語、分類未確定言語のいずれも、主に Shafer の下位分類に従ってかりにまとめておいた。)

前述のように、Shafer は、各語系をチベット・ビルマ語派に相当する高次の下位語群である4つの「語門」にまとめ、ここでは未分類言語としたレブチャ語以外のすべての言語をチベット語門に分類している(この点は、Shafer の枠組の中で分類を行った Glover や DeLancey の分類も同様である)。また、タマン語群は、チベット語方言と並列的にチベット語門のチベット語系に分類している。これに対して、Benedict は、ヒマラヤ語系と中央ネパール語系をチベット・カナウル中核語群に入れ、後者は更にチベット方言と共にチベット下位中核語群に含めているが、ライ・リンブ語系は、チベット語群とは別個の中核語群であるバヒン・ヴァユまたはキラント中核語群としており、特に他の中核語群との関係を示唆していない。Thurgood [1985a] は、タマン語群については、チベット語との近い関係を示唆するものの、ヒマラヤ語系及びライ・リンブ語系をチベット語と同じ主要語群に含める分類には否定的な結果を示唆しているのみならず、Thurgood [1985b] では、むしろライ・リンブ語系とルン諸語との関係を示す特徴が指摘されている。西田 [1989a] は、ヒマラヤ諸語に関しては、具体的な言語名も論拠を明示していないが、そのほとんどをチベット語系に帰属させており、更に、タマン語群の言語を含むと思われる非代名詞化諸言語をチベット語現代方言としている点で他のどの分類とも異なっている。

従って、ヒマラヤ諸語の下位語群の上位語群への帰属については、チベット語とタマン語群の関係についてのみ意見の一致がみられるといえる。それ故、ここでは、ヒマラヤ語系と中央ネパール語系がチベット語方言と同じ主要語群に分類される可能性があるとするだけに留めておくことにする。

次節では、一応の合意のみられるヒマラヤ語系、中央ネパール語系とライ・リンブ語系、特に最初の2つの語系について、下位分類その他の詳細な検討を行うが、その他の言語の分類の検討は、次の機会に行うつもりである。

最後に一言述べておくと、ここに示したような系統樹的分类は、祖語の再構を目標とする歴史言語学の伝統的な比較方法と特定の型の言語変化の妥当性を前提としている。確かに、系統樹的分类は、理解し易い面もあるが、言語間の相互関係の一面的な説明に過ぎず、このような説明には多くの問題が含まれていることに留意しておく必要がある。

4.3. ヒマラヤ語系

前節で述べたように、ここでいうヒマラヤ語系とは、Shafer の西部ヒマラヤ語系からジャングル語支と東部語支（ブルム語とタミ語）を除き、新たに発見されたランパ語を加えた諸言語、または、Benedict のヒマラヤ下位中核語群からゾルガイ語、レブチャ語、マガル語を除いた諸言語からなる下位語群である。

現在知られているヒマラヤ語系の言語は、インドのヒマチャル・プラデシュ州のラホール・スピティ地方のブナン語、マンチャト語、ティナン語、ランロ語、クル地方のカナシュ語及びキナウル地方のカナウル語、テボール語、チトカル語、ウツタル・プラデシュ州のチャモリ地方のランパ語、ビトラガル地方のランカス語、ダルマ語、チャウダンス語及びビャンス語の13言語である。ビャンス語は、国境を越え、ネパール側のマハーカリ県の北西部でも話されている。

この13言語中、T. G. Bailey [1915: 78-86] に簡単な記述がみられるチトカル語とZoller が1979年に博士論文(1983年出版)で記述したランパ語以外のすべての言語は、LSI [1909] に於いて、既にその名が知られていた言語である。ここでは、ランパ語をヒマラヤ語系の言語に既に分類したが、従来の分類では全く触れられていないので、その分類の論拠については後に示すことにする。

以上は、いずれも現在インド北西部で実際に話されている言語であるが、この他に、これらの言語のいずれかと直接的な系譜関係があるか否かは不明であるが、Shafer [1957] と Benedict [1972] が西部ヒマラヤ語系に分類している言語にジャンシュン語

(Zhang-zhung; Zan-zun) がある。

4.3.1. 下位語群としてのヒマラヤ語系

Shafer [1950: 193-194] は、LSI [1909] に於ける Konow のヒマラヤ諸語の分類について、「Konow が彼の分類でこれほど屢々迷ったひとつの理由は、彼が音声推移〔変化〕にはんの僅かしか注意を払わなかったことにある……」と批判し、幾つかの単純な音声的一致 (phonetic equation/correspondence) を設定することで、「各下位語群の基本的統一性と〔チベット語門の代表としての〕古期チベット語 (Old Bodish) [実質的には、チベット文語 (Written Tibetan)] と〔ビルマ語門の代表としての〕中期ビルマ語 (Middle Burmese) [実質的には、ビルマ文語 (Written Burmese)] とその下位語群との類似と相違を更に明らかにすることができよう」と述べている¹⁹⁾。これは、ヒマラヤ諸語がまずチベット語門とビルマ語門のいずれと音声的に一致するかにより、いずれの語門 (上位語群) に帰属されるかを決定し、更に、同じ方法で下位語群を指定しようとするものであろう。ヒマラヤ諸語の場合、いまひとつの上位語群であるボド語門は考慮に入れられていない。また、グルン語支【=タマン語群】の分類を論じた箇所では、音声的一致だけでは、平行的発達と考えられるので、音声的一致よりも語彙的一致 (lexcal correspondence) (同源形の共有) により大きな比重を置くべきであると述べている (p. 198)。

Shafer は、一部の母音と語を除き、シナ・チベット祖語²⁰⁾、あるいは、それよりも低次の中間的祖語の語形式を比較の対象に挙げていないので、この音声的一致の意味に曖昧さが残るが、これは、祖語からの改新的音声変化を共有していることを指しているものと思われる²¹⁾。

西部ヒマラヤ語系について、Shafer [1967: 128-141] は、その語彙に4つの言語層を認め、特にチベット語からの新旧の借用語やその識別方法を詳説し、次いで、語彙的一致と音声的一致を借用語を除いた西部ヒマラヤ語系語彙とチベット文語、ビルマ文語、クキ語系 (Kukish) (クキ祖語形) の同源形との比較語彙表の形で示し、音声的一致について更に詳細に論じている。Shafer の西部ヒマラヤ語系の設定 (統一性)、同語系のチベット語門への分類やヒマラヤ語系の5つの語支への下位分類等の根拠は、いずれもこの2つの基準に基づくものである。

結論からいえば、筆者を含めて、現在、ヒマラヤ語系の設定やチベット語門への帰属に反対する者はいない。しかしながら、次のヒマラヤ語系の比較語彙表²²⁾を参照しても明らかなように、ヒマラヤ語系全体に共通する語 (根) の例は、非常に僅かで

ある。例。「2」～「10」までの数詞（マンチャト語の「2」、カナシュ語とランバ語の「6」～「10」は、アーリア語系の借用語）、1人称及び2人称単数代名詞、“否定”辞及び“禁止”（命令形の否定）辞（カナシュ語形不明）、「人」（カナシュ語不明；アルモラ語支「男」）、「舌」（ランバ語除外）、「犬」、「鳥」、「馬」、「火」、「水」（テボール語形は多分チベット語からの借用語）、「家」、「金」（ティナン語形不明；テボール語形はチベット語からの借用語）、「銀」、「食べる」、「死ぬ」；（アルモラ語支とカナシュ語を除いた場合）「髪」（ブナン語形はアーリア語系の借用語）、「肉」、「脂肪」、「虱」、「畑」（？）、「道」、「針」、「塩」（ティナン語形不明）、「重い」（ティナン語形不明）、「見える」（ブナン語形なし）、「飲む」、「満たす」、「縫う」（ティナン語形不明）、「売る」（？）。現在利用できる資料からは、比較語彙を増やしても、全体に共通する語（根）がそれほど多く発見できるとは思われない。従って、厳密に言えば、この程度の資料から確実に祖語からの音声変化を体系的に推定できると思われない。にもかかわらず、Shaferの西部ヒマラヤ語系、ベネディクトのヒマラヤ下位中核語群の設定に異議を申し立てる者がいないのは、ひとつには、Thurgood [1985a]の指摘する1人称及び2人称単数代名詞が改新的形式であること、チベット語と圧倒的に多くの中核的語彙を共有しながら、“禁止”辞、「7」、「血」、「水」等²³⁾の他のヒマラヤ諸語や他の語門には認められるが、チベット語には認められない非チベット語的語彙の存在、例えば、「4」(cf. *STC* *b-ləy)と「満ちた」、「満たす」(cf. *STC* *bliŋ~*pliŋ)の*pl->p-（カナシュ語形はpl-）や「道」(cf. *STC* *lam)の*l->∅のような特異な変化²⁴⁾、更に、主語の人称と数とのみ一致する代名詞化言語であること等が、全体としてこれらの言語をまとまりのある下位語群（ヒマラヤ語系）として印象付けているといえよう。従って、この語系の統一性を確実に証明するのは今後の問題であり、そのためには多くの精度の高い言語資料を収集する必要がある。しかしながら、ランバ語（下述）の例にみるように、この地域の言語の固有の語彙は、絶えず周辺のアリア語系言語の語彙と置き換えられつつあり、資料の収集により、ヒマラヤ語系の設定に現在よりも明確な論拠を与えることができるようになったとしても、その祖語をどの程度まで再構できるかについては悲観的にならざるを得ないのである。

4.3.2. 下位分類

前章で示したように、マンチャト語を含むヒマラヤ語系の諸言語は、(1) Shaferは、3つの語支（Branch）に、(2) Benedict/Thurgoodは、それぞれ2つの（主要／副次）下位型（major/minor subtype）／語支（Branch）に下位分類している。この

分類を比較対照し、各下位語群に属する言語名を挙げると次の通りである。いずれの下位分類も、Bailey 以前の資料と情報に依拠しているため、ランパ語は含まれておらず、また、LSI に従って、ティナン語はランロ語の異称とされているので、ランロ語しか取り上げられていない（言語、方言の呼称は、本論文での標準的呼称に改めてある）。

ヒマラヤ語系

① 北北西部語支 ブナン語 テボール語 スムチュ方言 ジャンラム方言 サンナム方言 カナム方言 リップ方言 北西部語支 カナウル語 上カナウル方言 下カナウル方言 チトカル方言 トゥクバ方言 カナシュ方言 マンチャト語 標準マンチャト方言 チャンバ・ラホール方言 ランロ方言 アルモラ語支 ランカス語 ダルマ語 チャウダンス語 ビャンス語	② 主要下位型／カナウル語支 カナウル語 チトカル語 テボール語 カナシュ語 ランロ語【＝ティナン語】 ブナン語 マンチャト語 チャンバ・ラホール語 シャンシュン語（死語） 副次下位型／アルモラ語支 ランカス語 ダルマ語 チャウダンス語 ビャンス語
---	--

Shafer は、チトカル語とカナシュ語をカナウル語の方言とし、ランロ語をマンチャト語の方言としているが、チトカル語はかなり標準カナウル語とは異なるとされ、カナシュ語の資料は僅かであることから、ここではそれぞれ別の言語として扱っている。

Shafer の分類では、Benedict と Thurgood の主要下位型／カナウル語支がブナン語とテボール語を含む北北西部語支とカナウル語、チトカル語、カナシュ語、標準マンチャト語、ランロ語を含む北西部語支に下位区分されている。

ブナン語とテボール語について、他のヒマラヤ語系言語とは別のグループであるとか同一言語あるいは同一言語の方言であるといった言及は、既に A. Gerard [1842], J. D. Cunningham [1844], H. A. Jäschke [1865], Brandreth [1878] 等の論文にみられる。Gerard は、カナウル (Kunáwar) 地方で話されている方言 [=方言/言語] を、不定詞の接尾辞の違いに基づいて 5 種の方言に分類したが、Cunningham は、このうちミルチャン (Milchán/Milchanang) 方言【=カナウル語】、テバルスカット (Thebur-skud/Tibberkad) 方言【=テボール語】、ボテ (Bhoteea, Tartar) 方言【=チベット語ニャム (カット) 方言】を別の言語とし、残る 2 種をミルチャン語の方言とした。

Jäschke は、1865年の論文で初めてラホール地方のブナン語 (Boonan) を紹介し、この言語がカナウル地方ではティバル・スカットと呼ばれているとし、「この言語が、スピティ地方の純粹のチベット系住民とクル地方の純粹のヒンドゥー系民族により互いに隔てられた 2 つの島のように、2 つの異なる地方に存在するという事実は、かつてティバル語がもっと広い地域に拡散していたとする説を蓋然性のあるものとし、…ラホール地方の人々の主張と一致する」(p. 94) と述べている。おそらく Jäschke のこの説を受けたと思われる Brandreth は、カナウル語とブナン語を同一語支に分類し、ラホール地方の一地域で話されているブナン語が「カナウル語方言のひとつであるティバルスカットと同じ言語である」(p. 17) とした。

Jäschke は、ブナン語にみられるチベット語からの借用語に 2 つの層のあることを例を挙げて示すと同時に、両言語の文法構造が非常に異なることと、ブナン語の基本的な語彙のほとんどすべてが、チベット語やサンスクリット語 (Sanskrit) からの借用語ではなく、独自のものである点を指摘し、ブナン語本来の語彙と思われる語例を数多く挙げた。Shafer がブナン語とテボール語をひとつの語支に分類するのはこの Jäschke の説を引き継いだ形になっている。

Shafer [1967] は、西部ヒマラヤ語系【=ヒマラヤ語系】の下位分類の論拠を特に挙げていない。ただ、彼の挙げた同源形の比較語彙表等を通して推定される音声変化や語彙の一致から、ある程度推測できるに過ぎない。

一方、Thurgood [1985a: 390-392] は、ヒマラヤ語系の 1 人称単数、2 人称単数、3 人称単数代名詞の祖語形を仮にそれぞれ *gai, *gan, *du/*u と指定して、*du 対 *u, *gai > *ji の 2 つの特徴 (pp. 391-392, fn. 45) でカナウル語支とアルモラ語支を分けている。

本論文 (上) の第 3 章で述べたが、マンチャト語とカナウル語を除けば、残る言語の現在利用できる資料は、非常に限られている。特に、カナシュ語、ランカス語、ダ

ルマ語、チャウダンス語とビャンス語の資料が極めて乏しく、精度も非常に低いため現段階では暫定的な結論に留めざるを得ない。

次の比較語彙表1と接辞比較表2では、ブナン語を除き、各言語を西から東へその分布域に従って並べてある。これらの表にみられる語彙の一致、音声変化と人称接辞体系に注目すると、①マンチャト語とティナン語、②カナシュ語とカナウル語、③ブナン語とテボール語、④ランカス語、ダルマ語、チャウダンス語とビャンス語の4つの言語群に分類できよう。例えば、①のマンチャト語とティナン語には、この2言語の動詞一致体系にのみ認められる双数と複数の区別、「1」、「九」【語頭音の無声化】、「だれ」、「息子」、「顔」(?),「鼻」、「耳」、「歯」、「爪」、「腿」、「心臓」、「虫」、「草」、「太陽」、「雲」(?),「煙」、「矢」(〈弓〉, cf. WT gžu 「弓」,「家」【語頭音の破擦音化と -m>-ŋ】、「見(え)る」₂【語頭音】、「送る」、「売る」【語頭音】(?), ②のカナウル語とカナシュ語には、*sn->st-~št->t²⁵⁾ の変化、「9」【語頭音】、「1」, “1人称単数”,「だれ」、「口」、「鉄」、「与える」【異形態が置換形】、③のブナン語とテボール語には、「百」【語頭音】、「心臓」、「犬」【語頭音】²²⁾、「馬」【語頭音】、「虱」【語頭音】、「蚤」、「卵」、「煙」、「矢」、「黒い」、「白い」、「青い」、「黄色い」、「軽い」、「見(え)る」₂【語頭音】、④の4言語には、「8」, “1人称単数” 代名詞と「家」の語頭音の破擦音化, “3人称単数” *u,「息子」、「髪」、「舌」、「耳」、「足」、「月」、「金」【語頭音】、「食べる」【語頭音】のように、それぞれ他の言語群と異なる特徴が認められる。

この4つの言語群の相互関係については、④の言語群の資料があまりにも少ないので、暫定的なことしかいえないが、共通の音声変化と語彙的一致に注目して考えると、いずれの対にも共通の特徴がある程度認められるが、①と②(「10」、「100」, “2人称単数”²²⁾ 及び “3人称単数” 代名詞,「手」、「乳房」、「糞」、「虱」、「黒い」、「知る」、「泣く」と③と④(「1」(?),「5」、「10」,「なに」、「頭」、「歯」、「手」、「鼻」(?),「太陽」、「鉄」、「行く」、「来る」、「与える」)の2対に共通する特徴が特に多いようである。

一方、ブナン語の語彙には、テボール語とでなく、①の言語群と一致する例として、「顔」、「雲」、「雪」、「行く」(?),「嘗める」(cf. WT ldag-, STC *(m-)lyak~*(s-)lyak),「売る」【語頭音】等があり、更に、動詞の人称・数接辞も、テボール語とより①の言語群と一致する点が多い。これは、ラホール・スピティ地方のブナン語域とキナウル地方のテボール語域が長い間分断されていたことと、ブナン語がラホール地域の有力言語であるマンチャト語と直接接していたことを考慮すれば、この現象は、

表 1-1 ヒマラヤ語系比較語彙表

	マンチャト語	ティナン語	カナシュ語	カナウル語	ブナン語	テボール語	ランパ語
1	itsa	itsa	id	id	tiki	ti	tig
2	—	ñidži	ñiš	niš	ñiskiŋ	niši	nhiis
3	šumu	šumu	šum	sum	sumi	sum	sum
4	pi	pi	pu	pə:	pi【bi】	pi	pi
5	ŋa	ŋa	ŋa	ŋa	ŋāi	ŋai	ŋe
6	trui[-ui～-ug]	tšui	—	tug	trui	tuki	—
7	nhidži	ñitši	—	štiš	ŋiži	nəši	—
8	re	gyèdi	—	rəy	gyei	gyai	—
9	ku	kà	—	sgui	gù	gwi	—
10	sà	sà	—	səy	tšui	tšui	—
100	rà	rà	—	ra	gya	gya	gya
1 単	gye	gye	gu	gə	gyi	gi	gye
2 単	kà?	kà?	ko	kə	han	ŋan	gən
3 単	du	【do】	du	do	tal【dal】	əru	#dhe
なに	tšhi	khya	tšhuge	thəd-tšhad	kha	kha	—
だれ	əri	ari	hate	hət～həd	#su	#su	ghwə
“否定” 辞	ma	【ma-】	ma-	mə	[ma]	ma	mha
“禁止” 辞	tha	【tha-】	?	thə	[tha]	tha	thə
人	mì	mì	?	mi	mì	mi	mi
父	ba	?	ba	bowa【apa】	【awa】	apa; kya	a:pa
母	ya	?	ya	ama	ama(<i>LSI</i>)	əmma	a:ma
息子	yò	yor	—	tšhaŋ	butsa	phəsli-tšəŋ	—
娘	【myo】	?	tšime	tšimed	【tsemed】	ešri-tšəŋ	tša:ma
姉妹	【rhing】[rhin]	?	riŋz	riŋz	?	?	rhinɟza
名前	min	[min]	—	—	min	min	mhin
髪	punza	bàlog	bal	【bal(h)】	puša	piša	—
髪	#krà	bal	#kra	#kra	bal	#kra	#kha
額	phyà	phetar	?	phya	phetar	phya	—
顔	mod	mod	?	sto	mod	mami	—
頬	tšarni	#grampa	?	piŋ	#grampa	#dampa	—
鼻	ña	nya	ta	stakutš	gyumphug	nyum	nхими
耳	rhetra	retra	rhod	—	retsi	rəpəŋ	—
口	à	à	kakəŋ	khakəŋ	ag～a?	a	—
口髭	mutšha	mutšha	?	mutšha	altsham; 【mutsa】	mutša	—
舌	lhe	lè	le	le:	lè	le	—
歯	tshwà	tshà	gar	gər	suà	swa	səg
歯茎	#ñil	#ñil	?	【(s)til(h)】	#ñil	#nil	—
手	gùra	gud	guɟ	gud	lag	la	lag
指	bremza	brentsa	?	【prats】	botsi	braŋ	bəntša
爪	tin	tin	?	【tšin】	sun	#sen	nəŋ
胸	kà	kyug	?	—	kyuktoŋ	kyu	—
乳房	tšutšu	tšyutšu	?	tšutšu	mama	#pipi	apu
腰	thaka;um	#kyetpa	?	re	#kyetpa	#kedpa	—
腹, 胃	khog	khog	šon	—	dan「腹」	kho(k)	khətšo
足	konza	bàŋ	pile	baŋ	baŋ	bəŋkhət	na:r
腿	drò	drò	?	lum	laša	buləŋ	—
膝	puš	puš	?	bušbaŋ	pus	pušpəŋ	—
関節	prul	?	?	【tsig】	#tšhikspa～ tshikpa	tšikh	—
心臓	šudza	šodra	?	—;【stin(TRJ)】	šoša	šeša	—
肝臓	tiŋña	#tšhinpa	?	thap【šin】	#tšhinpa	#tšinba	#tšhinpa
肺	luŋña	#lwa	?	thrub	?#groa	#lwa	#lwa
息	səg	sà?	?	dəm	sag	dako	—
血	ši	sui	?	polatš	šui	šui	—
肉	šà	šà	?	ša	šà	ša	sya
脂肪	tshosa	tshos	?	【tshos】	tshos	tšo	tšhəs
骨	#rhuspa	#rhuspa	?	—	#ruspa	—	—
毛	【tsəm】	?	?	#spu	#pù	#pu	—
皮膚	trapri	botha	?	bəd	batsi	#pakhpa	—
唾液	krati	trul	?	?	trul～turul	krati	—
汗	【trug】	?	?	dusti	truks	dusti;rabəŋ	tšhyadpa
鼻 (汁)	ñapti	#nak	?	təmti	?#nəg	?	—
膿	【nhəg】	?	?	stək	?	?	nag
糞	khì	khì	?	khə	koko	?	a:ka
尿	tšhaŋzi	tšhaŋti	?	skli	džəg	?	tšyũku
犬	khui	khui	kui	kui	khyù～khiyu	khui	khwi
鳥	pya	pya	tsarits	pya～pyatš	pyatsi	pya	—
魚	—	nya	?	—	nyà	—	—
馬	rhaŋ	rhaŋ	rhaŋ	raŋ	saŋs	šəŋ	rhās
熊	omo	omo	?	rikha	【wampu “yellow bear”】	hom	—
鼠	【piutsa】	?	?	pyu	pyutsi【b-】	piu～pio	nibtša
虫	omɟa(=「蛇」)	om(=「蛇」)	?	həŋ“worm”	#bu	#bu	#bhu
蠅	【yənza】	?	?	yaŋ	?	boyəŋ	bhudžyaŋ
蜜蜂	【yəmayanža】	?	?	bəšyaŋ	brəŋsi bu	-byaŋ	—
虱	rig	rig	?	rig	sig	ši	rhi:g
蚤	?	?	?	【špög】	mutig【sm-】	miti	mhitig
尾	【mekutu】	?	?	【pöntsening】	#gama	mekon	—
羽	—	?	?	—	#šukpa	#šokpa	—
羊毛	【tšəm】	【tsam】	?	tšəm	【tsam】	tšam～tšəm	tšhəm
卵	【tiglhig】	?	?	liṭ	khuartum	tum	—
薪	siŋ	siŋ	?	【šiŋ】	šiŋ	šiŋ	siŋ
草	səŋ	səŋ	?	tši	tši	tši	tši
葉	lab	lab	?	—	lab	—	—
太陽	eke	ekhe	dupe	yume	niṭsi	ni	ni
月	latsaŋ	?	džəšta	goltšhəŋ	là	gəlsəŋ	—
空	—	namka	?	—	nam	nam	—
雲	dù	dù	?	žu	dù	žu	—
火	mè	mè	mi	me	mè	me	mhe
煙	tù	tù	?	duəŋ	khù	khu	khu
灰	tab	tab	?	bospa	kyuks	?	tšha:rə
水	ti	soti	ti	ti	soti	#tšu	ti
風	làn	?	?	lən	lan	lan	—
石	#ràg[rhag]	#rà?	?	#rəg	grəŋ【gram】	#ra～rak	uŋ
雪	【mug】	?	?	pom	【mu】	əŋ	aŋ
畑	rhi	?	?	rim	rig	ri;rim	rhigər
日 (昼間)	ñira	ñir	—	lae	ŋira～ñira	nir	ni:r
日 (1 昼夜)	[hrag]	[gyag]	?	—	?	#žanma	gya
夜	—	—	?	—	phiro	mundo;munya	mulyaŋ
道	【əm】	amtsh	?	əm	amtsi	om～am	amtša
橋	【tshəm】	?	?	【tshamm】	?	?	dzaŋphə
畑	ri	ri	?	rig	rig	ri～rim	rhigər
針	tšab	—	?	kyep	khyep	kep	khep
弓	gumtsha	gumtsha	?	—;【gum】	gumtsi	gum;kuman	—
矢	tšù	tšù	?	—;【möh】	srin	šim	—
家	tšun	tšun	kim	kim	kyum【gy-】	kyuŋ～kyum	kim
塩	tshà	?	?	tšha	tšhà	tša	tšha
金	za～zaŋ	?	zəŋ	zaŋ	#ser(<i>LSI</i>)	zəŋ	džās
銀	mul	mul	【mul】	mul	mul	mul	mul
鉄	ñilam【lhiləm】	?	ron	rən	#tsaks	#tsakh	#tsyag
赤い	šèi	?	?	suig	moi【maŋi】	maŋni	maŋd
黒い	roki	?	?	rək	khai	kani	tiŋd
白い	tshəŋsi【šule】	?	tšog	thog	ši	thaŋni	—
青い	【tiŋi】	?	?	rag(緑の)	ti【tiŋi】	tiŋni	—
黄色い	【lhei】	?	?	pik	【lhei】	lene	lheb
重い	lhì:	?	?	lig～li:g	li	liko	li:d
軽い	lhəŋi	?	?	【lamgids】	yāi	yanko	yaŋd
厚い	kèi	?	?	—	ŋai	?	tunɟ
薄い	tšhite	?	?	【bagits】	lai?	?	—
暑い	【trotre】	?	?	bək	phundži	kosra	tšart
寒い	sòì	sòì	?	liš	sòì	khətkyo	—
苦い	kaɽegi	?	?	kak	khaɽai	khəktəkpə	khətagt
甘い	wəši	?	?	thig	khei	nyamko	khyagt
酸い	surdži	?	?	surk	šui【šuri】	surko	—
新しい	kharkoi	?	?	ñug	nui	nyuŋni	—
古い	yüi	yüi	?	ušk	yui	#nyinpa	yu:d
熟した	min-	?	?	【šo šo】	mini	šo(bəŋ)	—
乾いた	【kar-】	?	?	【tshars】	【khyoi】	phorka	—
行く	【i-】	[i-]	bu/oŋ;-buko-	bi-	[e-]	de-	gyə-～di;-yü-
来る	【ə-】	[am-]	bo/ura-	bən-	[ra-～goaŋ-]	ra-	rha-
歩く	【zo-】	?	por-	yun-	?	de-	—
飛ぶ	pham-	?	?	yab-	pan-	?	—
見える ₁	[taŋ-]	[taŋ-]	taŋ-	taŋ-	?	təŋ-	taŋ-“find”
見(え)る ₂	khàn-	khàn-	?	khyä-	kan-	kan-	kan-
聞える	【re-】	?	tsha-	ron-	hen-	ruŋ;-go-	yən-
聞く	【tha-】	[tha-]	?	thəs-	【gyags-】	?	—
知る	ñe-	ñye-	?	ne-	tšhaɽa-	se-	səs-
言う	【ku-】	[ku-]	lon-	lo-	[lo-]	riŋ-	lwə-～lə-
尋ねる	【prə-】	[pra-]	lan-	lan-	[phyä-]	lo-～lok-	—
尋ねる	【rukh-】[-g-]	?	ritši-	i-	?	?	rhu-
泣く	kra-[-b-]	?	?	krəb-	tyo-	twe	—
笑う	wà-	[wa-]	?	wən-	sed-[-sred-]	wot;-kaŋ-	rhə-
死ぬ	si-	si-	ši-	ši-	ši-	šitš-	sis-
殺す	sa-	sa-	?	šan-	pur-	sat-	sad
する	【lha-】	[la-]	ša/oɽ/ŋ-	lan-	[lig-]	len-	lə-
食べる	za-	ze-	za-	za-	za-	za-	džə-
飲む	tun-	tun-	tugu-	tun-	tun-	tun-	tü-
嘗める	yäk-	?	?	【lem-】	lak-	lem-	—
噛み付く	tsik-	tshà-	?	【tšiŋ-】	kre-【gre-】	tši-	kad-
座る	bəŋ-	džə-	na-	to-	džod	po-	hun-(繫詞)
寝る	pheɽe šu-	duš-	?	yəg-	ip-	gutš-(if(名))	gutš-(i:b(名))
夢見る	màŋ-	?	?	【maŋ-】	manks(名)	maŋ-	məs(名)
置く	kè-	?	pi-	【ta-】	?	ta:-	ta:-
送る	【tšər-】[ts-]	[tsar-]	twat-	šen-	[srog-]	?	sa:-
握む	【tsum-】	?	?	【tsum-】	[tsum-]	?	—
打つ	【teŋ-】	[teŋ-]	to-	toŋ-	[tib-]	?	tad-
壊す	【thag-】	?	?	təg-	thak-	kyak-	phag-
煮る	šù-	?	?	pan-	kwad-	len-	pun-
焼く; 焙る	ro-	?	?	?	【ro-】	rot-	ō;-hō-
満たす	【pin-】	[piŋ-]	plen-	【pöŋ-】	[pin-]	pin-	pin-
満ちる/た	?	biŋ-	?	bəŋ-	?	?	?
洗う	tšàk-【tšh-】	?	?	tši-	kiy-	ur-	ur-
縫う	pèn-	?	?	【pon-】	phan-	pu/on-	phan-
織る	rhan-	?	?	tag-【-ŋ】	ran-	tak-	rhən-
与える	ran-	ran-	raɽ/ŋ-～ke-	kù-	da-	da-/khe-	khyə-
盗む	#ku-	?	?	khu-	kù-	khut-	—
買う	tsum-	[yog-]	khaŋ-	zoŋ-	yok-	#tšəŋ-	tšhə-
売る	lən-	šəŋ-	?	ren-	lan(ɡ)-	rəŋ-	raŋ-

表1-2 比較語彙表

	ランカス語	ダルマ語	チャウダンス語	ビャンス語
1	taka	taka	tig	tig
2	nisi	nisu	nis	nisi
3	sum	sum	sum	sum
4	pi	pi	pi	pi
5	nai	ŋaii	ŋaii	?
6	ʈuk	ʈuku	ʈuk	ʈuk
7	nhisi	nisu	nis	nis
8	džyad	džyadu	džyad	džed
9	gvi	gvi	gvi	gvi
10	tši	tši	tši	tši
100	—	ra	—	—
1 単	dži	dži	dži	dži
2 単	ga	gai	gan	gan
3 単	hve, u	vo, u	vo, u	vaii, u
なに	#kha	#kha	#khai	#khai
だれ	khami	khami	khami	khami
男／人	mi	mi	mi	mi
父	ba	ba	ba	ba
母	min	mina	mina	na
息子	šeri	siri	siri	siri
娘	tšimi	tšame	tšame	tšame
手	la	la	la	la
足	like	laki	laki	lik
頭	puse	pisya	pisya	pisya
髪	putšham	tšham	tšham	tšham
齒	šu	so	su	su
口	a	a	hume	a
舌	džibe	dživai	džabli	džable
鼻	him	nim	him	nim
耳	ratš	ratšo	ratš	ratš
腹	dan	dan	dan	dan
犬	khvi	khi	nau-khvi	nikhi
鳥	pya	si-pya	tšipatš	tšipatš
馬	rhā	raŋ	raŋ	raŋ
太陽	ni	ni	ni	ni
月	lha	lha	lha	lha
火	me	me	maĩ	me
水	ti	ti	ti	ti
家	tšyam	tšim	tšim	tšim
金	džā	džaŋ	džaŋ	džaŋ
銀	mul	mul	mul	mul
鉄	#tšyaŋ	#nidžaŋ	#nadžaŋ	#nadžag
白い	tog(?)	tšhog(?)	tshaŋsi(?)	sāsi(?)
行く	di-	di-	de-	di-
来る	ra-	ra-	ra-	ra-
食べる	dža-	dža-	dža-	dža-
座る	tšile-	syon	syō-	syon-
死ぬ	si-	hi-	si-	si-
打つ	sai-	sai-	sai-	sa-
与える	da-	da-	da-(?)	da-

- 1) (資料) マンチャト語: S. R. Sharma [1988], []: D. D. Sharma [1982], []: Franke [1917]; カナシュ語: *LSI* [1909]; カナウル語: D. D. Sharma [1988], []: Bailey [1911], [(TRJ)]: T. R. Joshi [1909]; ティナン語: S. R. Sharma [1988], []: Franke [1909], []: *LSI* (ランパ語=ゴンドラ語=ティナン語); ブナン語: S. R. Sharma [1988], []: Jäschke [1865], []: Franke [1909]; テボール語: Gerard [1842]; ランパ語: Zoller [1983]; その他: *LSI* [1909]。マンチャト語とブナン語に於ける S. R. Sharma の記録と Franke 及び Jäschke の表記との相違も注記しておいた。
- 2) 資料中の(歯茎)硬口蓋破擦音と摩擦音は、すべて tš, tšh, dž, š で表記し直してある。なお、D. D. Sharma のマンチャト語方言では、歯茎硬口蓋破擦音と硬口蓋閉鎖音が対立するが、S. R. Sharma の記述した方言にはこの対立はない。
S. R. Sharma と D. D. Sharma のマンチャト語, D. D. Sharma のカナウル語および Zoller のランパ語資料のみは音素表記であるが、その他の資料については表記の性格は明らかでない。
S. R. Sharma の資料中の (´) は降調を, (˘) は降昇調を, 無標は平調を表すとされているが、マンチャト語を始めとするこの地域のチベット・ビルマ語系の言語では声調対立が語彙の一部にのみみられ、最小対も僅かである場合が多い。つまり、声調の機能負担量は極めて小さいようである。*LSI* (1909) の資料中の母音の長短は、信頼できないので、慣用に従って、省略してある。
Gerard の資料の母音の音価は、次のように解釈した。ee=i, oo=u, u=ə, eV(母音)=yV, oV=wV, oeV=oyV, eoV=ewV。Gerard は、歯音と反舌音を区別しておらず、また、1例を除き、硬口蓋破擦音の無気音と有気音が区別されていないが、他の言語の同源形との比較で、反舌音や有気音の可能性のある語頭子音は下線で示してある。なお、欄中の(?) は該当する項目が資料中に記録されていないことを、() はこの項目の語が借用語であることを示す。一般に、借用語は、ブナン語とテボール語は、チベット語方言からの、その他の言語は、主にアーリア語系方言からの借用語である。ここでは、チベット語からの借用語、あるいは、その可能性のある語は省略せず、#で示し、アーリア語系の借用語のみ省略してある。アーリア語形の検索には、適当な辞書が手元にないので、ネパール語形と共に多くのアーリア語系の同源形も掲載してあるを R. N. Turner [1980] のネパール語辞書を利用した。
- 3) 比較語彙表 1-1 の「母」のカナウル語形、ブナン語形、テボール語形、ランパ語形については、アーリア語系の借用語かチベット・ビルマ祖語に来源する形式か判断できない。また、同表のティナン語とブナン語の「髪」は、アーリア語形の「毛」(cf. ネパール語 *bāl*) を「毛」>「髪」の意味変化を経て借用した可能性があり、カナシュ語とカナウル語の「頭」も、同じ語が「毛」>「髪」>「頭」の意味変化を経て借用した可能性がある。比較語彙表 1-2 の「舌」は、アーリア語系とチベット・ビルマ語系の語幹の複合語である可能性がある。なお、「見る」(“look at”)と「見える」(“see”), 「聞く」(“listen to”)と「聞こえる」(“hear”) の区別に相当する区別がチベット・ビルマ語系の言語に一般に認められるが、資料の不備からどの語根がどの意味なのか明確に識別できないので、表 1-1 のように示して置いた。
比較語彙表 1-2 の「舌」について、Shafer [1967] は、チベット・ビルマ祖語 [前節で述べたように、これはチベット語門とビルマ語門の祖語の意味で、現在我々がいうチベット・ビルマ祖語と同じでない] *m-ltsei>*bltsei>*tsblei (音位転換)>ビヤンス語 *dzable* のような変化を想定できようとして注記しているが、この再構形 *m-ltsei を現在も受け入れている者はいないであろう。Benedict は、「舌」の祖語形 (STC) のひとつとして、*m-lay~*s-lay を再構しており、チベット文語形の発達については、*s-lay>*s-le>*hlye>チベット文語 *lce* (-y の破擦音化) のような変化を想定している。この方が優れている。この下位語群の場合、「舌」の祖語形にチベット文語形のような形式を立てるよりも、第2要素に *le を含む2音節の複合語/合成語を指定するべきであり、ランカス語とダルマ語では *l- が脱落したと考えられる。
この下位語群の「打つ」の諸形式 (sai-, sa-) は、おそらく「殺す」(cf. WT bsad- (完了形), STC *g-sat) と同一語幹であろう。例えば、テボール語 (sat-) では、「打つ」と「殺す」は同一語幹である。
- 4) 色彩語を含めた形容詞類は、派生接尾辞が付加された形式と思われるが、特に語根を分析

- せずにあげてある。動詞は、現在語幹形を示しているが、その一部の分析には問題が残る。
- 5) “青”と“緑”は、チベット・ビルマ語系の多くの言語で同じ語根で表される。
- 6) カナウル語の動詞には、目的語が1/2人称か3人称かで語幹が区別されるものがある。例。「与える」/rən-/ (1/2人称) ~ /ke-/ (3人称)。カナシュ語の「与える」も同様である。一方、ブナン語の「来る」の語幹 [ra~goaŋ] は、それぞれ主語が単数 [ra-] か、複数 [goaŋ-] かによる交替形であるが、[goaŋ-] はラポール語 goaŋ-「跳ぶ」と同源語であろう。

表2 ヒマラヤ語系人称・数接辞比較表

	マンチャト語	ティナン語	カナウル語	ブナン語	テポール語	ランバ語	ダルマ語	チャウダンス語
1 単	-g	【-g】	-k~g	【-g】	-ni	-ŋ	∅	-∅
1 双	-si	【-si】						
1 複	-ñi	【-ni】	-tš(排)	【-g】	-ni	-ni	-n	-ne
2 単	-n	【-na】	-n	【-na】	-nula	-n	-n	-n
2 双	-si	【-tsi】						
2 複	-ñi	【-ti】	-∅	【-gni】	-no	-ni	-∅	-ne
3 単	-∅	【-g】	-t~d~∅	【-re】	-ni	-n	-∅	-∅
3 双	-ku	【-ku】						
3 複	-re	【-re】	-∅	【-g~gre】	-ni	-ni	-∅	-ne

- 1) (資料) マンチャト語: S. R. Sharma [1987, 1988]; カナウル語: D. D. Sharma [1988a]; ティナン語: Franke [1909]; ブナン語: Franke [1909]; テポール語: Gerard [1842]; ランバ語: Zoller [1983]; その他 (ダルマ語とチャウダンス語で代表させる): LSI [1909]。
- 2) 人称・数接辞は、主に (直説法) 現在形から取ったが、これらの言語では、動詞の人称・数体系はテンス・アスペクト体系と部分的に交叉しているようである。従って、この表は厳密な分析に基づくものではない。特に、テポール語の場合、動詞語幹の種類により人称・数接辞 (x テンス・アスペクト接辞) に次のような交替形がみられる。“1 人称単数” -ni~ti~di; “1 人称複数” -ni~ti~di; “2 人称単数” -nula~tula~dula~tanla~danla; “2 人称複数” -no~nu~nən~to~tu~do~du~tan~dan; “3 人称単数” -ni~nila~ti~tila~di~dila~tala~dala; “3 人称複数” -ni~ti~di。
- 3) カナウル語には、他動詞の目的語 (被動者/受益者) との一致を示す接尾辞 (/tš-/ “1/2 人称” と /tə-/ “3 人称”) がみられる。また、カナウル語の1 人称双数と複数には排除形と包括形の区別がある。ここには排除形のみ挙げているが、包括形は、/itš~e/ “1 人称双数包括” と /e/ “1 人称複数包括” である。

拡散 (diffusion) により説明できよう。

しかしながら、ティナン語の語彙にみられる③ (と④) との共通の特徴, 「8」【語頭音】, 「なに」(?) (cf. WT ga “疑問代名詞”), 「足」(cf. WT baŋ “徒競走”), 「肺」(cf. WT glo-ba), 「水」(接頭辞) 等については、拡散では説明できない。ティナン語の「なに」²⁶⁾, 「足」, 「肺」の3語は、おそらくヒマラヤ語系全体、または、一部に固有の語彙か、あるいは、チベット語からの古い借用語であり、これらに相当するマンチャト語形は、改新形である可能性があるが、「8」と「水」については、これとは異なる説明が必要であろう。

このブナン語とティナン語の例から明らかなように、単なる語彙の一致を数えるだけでは、言語の相互関係を証明することはできない。そのためには、まずどの形式がヒマラヤ語系言語に固有な形式であったかを決定しなくてはならないし、拡散によると考えられる例をまず消去しておく必要がある。前掲の比較語彙表に掲げた語（根）の一部は、例えば、②の「齒」、①と②の「手」、マンチャト語の「足」等は明らかに非チベット・ビルマ語系と思われるので、ヒマラヤ語系に固有な語彙とは考えられない。その点では、②の言語群にみられる *sn->st-~št->t- のような音声変化は下位分類の重要な決め手となるといえよう。いずれにせよ、ヒマラヤ語系の祖語から個々の下位語群の祖語、あるいは、個々の言語への音韻変化を辿って、初めて最終的な結論が出せるのである。

以上の考察からは、結局、①と②、③、④の3つの下位語群に分ける Shafer の分類と①と②と③、④の2つの下位語群に分ける Benedict/Thurgood の分類のいずれを支持する結論も出て来ない。ここに挙げた資料だけを基にすれば、①マンチャト・ティナン（＝ランロ）語群、②カナウル・カナジュ（・チトカル）語群、③テボール・ブナン語群と④ランカス・ダルマ・チャウダンス・ビャンス語群の4つの下位語群がおそらく立てられ、①と②、③と④がそれぞれ別の上位語群を構成する可能性があるとしかれないが、これまでの分類では、無視されている③と④の連続性は強調されて然るべきであろう。また、ランパ語は、その分布域が③の分布域よりも④の分布域に遙かに近いにもかかわらず、基本的には、③に属するが、④とも幾つかの特徴を共有しており、いわば、③と④の中間的言語であり、この連続性を裏付ける言語といえそうである。

また、これらの下位語群に命名するとすれば、①は北西部語群、②は西部語群、③は中央語群、④は東部語群、①と②は西部語支、③と④は東部語支とでも呼ぶことができる。Shafer は、おそらく、現在のブナン語の分布域からこの③の下位語群がかつてはこの地域からキナウル地方に広がっていたと考え、この下位語群を北北西部語支と名付けたのであろうが、ここでの考察に従えば、ブナン語は、むしろキナウル地方西部からラホール地方北部への移住者によって話されていた言語である可能性が高い。

ヒマラヤ語系の言語は、1920年代以降、外国人学者にほとんど注目されることがなかった。その理由として、既にいくつかの代表的とされる言語の資料や文法の概要がある程度利用できたこと、いずれの言語にもあまりに多くの借用語が導入された結果、チベット・ビルマ語系語彙が非常に限られていること、それに加えて、その言語域が

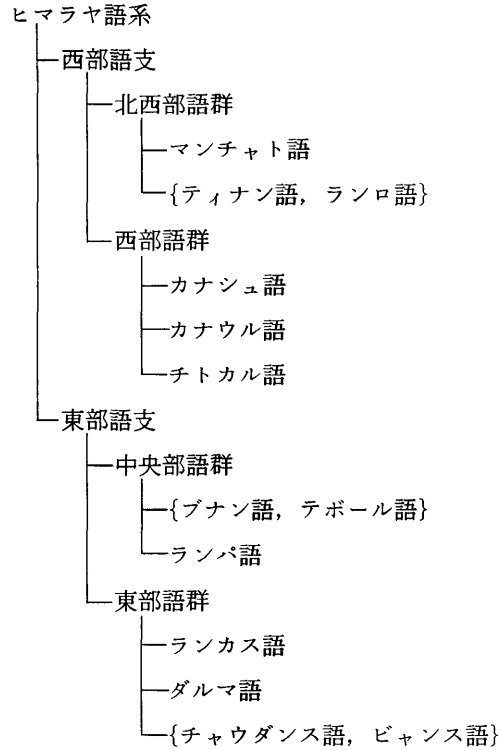
中印国境地帯に接するので外国人に対する入域許可が得られなかったことやインドの言語学者でチベット・ビルマ諸語、特にこの地域の言語に興味を持つ者が少なく、新たな資料が利用できなかったこと等を挙げることができよう。

最近になって、マンチャト語、カナウル語やランバ語の新資料が紹介されるにつれて、従来このヒマラヤ語系について常識とされて来た幾つかの点が覆えられつつあるといえる。例えば、ヒマラヤ語系の言語では、動詞はすべて主語の人称・数とのみ一致するとされていたが、標準カナウル語には、(直接／間接)目的語(被動者、受益者)の人称と一致する動詞接尾辞(任意的?) /-tʂə/ “1/2 人称”(この接尾辞については、Bailey [1909: 666] に既に触れられている)、/-tə/ “3 人称” がみられること、この語系の言語の“1 人称単数”の人称接辞は、軟口蓋閉鎖音の系列(-k/-g)であるとされ、チベット・ビルマ祖語の*軟口蓋鼻音を持つ1 人称代名詞(*ŋa)を留める例がないとされていたが、ランバ語では、“1 人称単数・主語・現在”の人称接辞として /-ŋ/ が分析されること等が挙げられよう。特に、/ŋ/ の発見は、ヒマラヤ語系の特徴とされた軟口蓋閉鎖音(-k/-g)、ひいては、ヒマラヤ語系言語の1 人称単数代名詞も、なんらかの条件で*軟口蓋閉鎖音から発達した可能性を示唆するものと考えられる。

マンチャト語とカナウル語は、その音韻体系、音韻規則、名詞と動詞の屈折体系のいずれを取っても、他のどのチベット・ビルマ語系言語と比べて、ひけを取らないほど複雑である。これらの言語の動詞の人称・数の一致体系や語彙にみられる非チベット・ビルマ語的、非アーリア語的要素については、既に G. A. Grierson や Konow によってムンダ諸語(Munda)の影響やそれからの借用が指摘されて来た。現在、人称・数接辞体系に関しては、それがチベット・ビルマ祖語の遡る文法現象、あるいは、チベット・ビルマ諸語で個々に発達した文法現象のいずれであるにせよ、チベット・ビルマ語派の固有の要素であるとする説が定説となりつつある。しかし、語彙に関しては、ムンダ諸語からの借用語が含まれている可能性やその他の既に死滅した言語からの借用語が含まれる可能性も充分にあるといえよう。この点については、これらの言語、ひいてはヒマラヤ諸語全体の資料が現在より充実した段階で詳細に検討して見る必要がある。

ヒマラヤ語系言語の下位分類

(各下位語群のより近い関係にあると思われる言語は { } 内に入れてある。)



4.3.3. ランパ語

上述のように、ランパ語は、1977年から1978年にかけてドイツ人言語学者 Zoller がそれを調査し、博士論文にまとめ、1983年に出版するまでは、その存在は全く知られていなかった。

しかしながら、その後も、この言語がこの地域の新しいヒマラヤ語系の言語であることは、ほとんど知られることがなかった。それは、ひとつには、Zoller 自身がこの言語をチベット語のガルワル方言であるとしたせいでもある。筆者は既に同書の出版当初からこの言語がチベット語方言ではなく、この地域で新たに発見されたヒマラヤ語系の言語であることを指摘して来た²⁷⁾。

4.3.2.1. ランパ語とヒマラヤ諸語

ランパ語には、周辺のインド語系 (Indic)あるいはインド・アーリア語系 (Indo-Aryan) のガルワル語 (Garhwali, Garhwali) (パハル語群 [Pahari Group] の中央パハル諸語 [Central Pahari] に分類される言語) の影響が音韻、文法、語彙のあらゆる面に深く浸透しており、特に、その語彙だけをみる限り、ランパ語は、あたかもガルワ

ル語を基盤とする混淆語 (Mischsprache) の様相を呈しているといえるほどである。Zoller [1983] は、巻末に「辞書 (Worterbuch)」を加えているが、そこに挙げた個々の語、形態素、熟語等には、その来源 (チベット語系、ガルワール語系、ヒンディー／ウルドゥー語系 (Hindi/Urdu)、来源不明) を表示している。ただし、Zoller のチベット語系の語彙とは、ランパ語固有の語彙とチベット語の借用語からなるものである。

今、そこに挙げられた語彙から派生語や熟語を除いて、残る約2700語／語幹を来源別にみると、

- (1) 固有の語彙 (=Zoller のチベット語系) : 19.8%,
- (2) ガルワール語系の語彙 : 48.3%,
- (3) ヒンディー／ウルドゥー系の語彙 : 25.4%,
- (4) 来源不明 : 6.5%

となっており、実質的にガルワール語系がほぼ半数を占めている。その結果、形態論における派生語の形成も、ガルワール語系の語彙には、チベット・ビルマ語系の語彙とは別の派生接辞、派生法²⁸⁾ がみられる場合がある。また、来源不明とされる語彙は勿論のこと、チベット語系とされる語彙には、Shafer [1967: 128] に従えば、他のヒマラヤ語系言語と同様に、基層語 (substratum) に来源する語彙が含まれている可能性があることになる²⁹⁾。

しかしながら、その基礎的な語彙中には、一見するだけでも、明らかにチベット・ビルマ語系の語、形態素がかなり含まれていることにまず気付く。(以下、/c/= /tʃ/、/j/= /dz/ で、/c j/ は Zoller の音素表記であるが、比較語彙表では、比較し易いように、音声表記に近い /tʃ dz/ を使用してある。)

- 1) 5 までの基数 : /tig/, /nhi:s/, /sum/, /pi/, /ŋe/ と「100」/gya/
- 2) 人称・指示代名詞 : “1 人称単数” /gye/, “2 人称単数” /gən/, “1 人称複数” /in/, “2 人称複数” /gẽ/, 「これ」/dhi/, 「それ」/dhe/
- 3) 親族名称 : 「父」/a:pa/, 「母」/a:ma/, 「娘」/ca:ma/, 「おじ (父の弟)」/aku/, 「(父方) おば」/a:na/, 「(母の母) 祖母」/momo/ 等
- 4) 身体名称 : 「目」/mig/, 「手」/lag/, 「歯」/sæg/, 「鼻」/nhimi/, 「肺」/lwa/, 「肝臓」/chinpa/, 「膿」/nag/, 「肉」/sya/ 等
- 5) その他の名詞類 : 「人」/mi/, 「犬」/khwi/, 「馬」/rhās/, 「虱」/rhi:g/, 「水」/ti/, 「火」/mhe/, 「木」/siŋ/, 「草」/ci/, 「石」/uŋ/, 「太陽」/ni/, 「道」/amca/, 「家」/kim/, 「塩」/cha/ 等

- 6) 形容詞, 動詞類: 「重い」/li:d/, 「軽い」/yaŋdu/, 「短い」/tunt/, 「食べる」/jə-/ , 「飲む」/tū-/ , 「死ぬ」/sis-/ , 「殺す」/sad-/ , 「病む」/nəs-/ , 「来る」/rha-/ , 「現れる」/wā-/ , 「行く」/di-/ , 「運ぶ」/bu-/ , 「持って来る」/ba-/ , 「置く」/ta-/ , 「知る」/səs-/ , 「満たす」/pin-/ 等³⁰⁾

これらを含めても, ランパ語の語彙中, チベット・ビルマ語系の語彙は, 全体の4分の1に満たない程度に過ぎず, 基礎的な語彙も含めて, むしろインド・アリア語系語彙が全体に占める割合が圧倒的に大きい。それにもかかわらず, ランパ語がチベット・ビルマ語系の言語であると断定できるのは, まず, 社会的背景からみて, ランパ語がアリア語系であるとすれば, チベット・ビルマ語系語彙が借用語となるが, 地域の有力言語であるアリア語系言語がランパ語のような少数民族言語から中核的語彙まで借用するということはまず考えられないということとランパ語の上掲の基礎的, 中核的な語彙, その文法構造やそれにかかわる文法的諸形式がチベット・ビルマ語的特徴を保存していることによるものであるといえよう。

次に, 上掲の数詞と代名詞を比較すると, “1人称単数”と“2人称単数”代名詞(ヒマラヤ語系言語では, 改新形に置き換えられている), 「7」(チベット語方言では, いずれも WT bdun に対応する改新形で置き換えられている), 「2」(WT bži から派生できるチベット語方言の諸形式と同源であるが, ヒマラヤ語系は共通の音韻変化を経ている)等のヒマラヤ諸語の特徴をランパ語はすべて共有しており, これだけからでも, この言語がチベット語方言(ガルワル方言)ではないとほぼ推定できる。更に, 上掲の比較語彙表からも, ランパ語は, ヒマラヤ語系の言語全体または一部と, チベット語形と同源形でない語(「血」, 「水」, 「草」, 「赤い」, 「黄色い」, 「古い」, 「する」, 「行く」, 「来る」)²³⁾を共有し, 音韻変化(「犬」, 「道」, 「針」)や意味(「羊毛」, 「金」)がチベット語と異なる特徴を共有している。現状では, ヒマラヤ語系言語, 特に, ランパ語周辺の言語の資料が不足しているので, 十分に例を挙げることはできないが, ここに示した例だけからでも, ランパ語はチベット語方言でないと断定できる。今ひとつの重要な点は, 他のヒマラヤ語系言語と同様に, ランパ語も代名詞化言語であり, 動詞が主語の人称・数との一致を示す屈折体系を他のヒマラヤ語系言語と共有しており, 少なくともその一部の屈折接辞(例えば, “1人称単数”, “2人称単数”)は, それらの言語と共通の形態素を含む点である。次章で述べるように, この人称・数の一致体系は, 祖語に遡るものであるとしても, チベット語にはその痕跡も認められないものである。

派生動詞については, 他動詞語幹の形成のように, 一方では, ランパ語固有の動詞

とガルワル語系の動詞が比較的明瞭に区別されているが、受動語幹形成や使役語幹形成の場合も含めて、一部の動詞語幹の派生形に固有の動詞語幹のガルワル語系の動詞語幹との交替が認められる。これは、ガルワル語系の動詞が、共時的には単なる借用語でなく、ほぼ完全にランバ語化している事実を示すものであろう。他方、有声と無声の初頭子音による自動詞と他動詞の区別は勿論、受動形の接尾辞 /-s/³¹⁾も、チベット・ビルマ祖語に遡る要素と考えられ、使役語幹形成接尾辞 /myər/ は、今のところ来源は不明であるが、これもチベット・ビルマ語系の接尾辞である可能性がある。

文法要素の標準的語順 (normale Satzstellung) については、ランバ語は、他のヒマラヤ諸語、ひいては、一般にチベット・ビルマ語派に認められる〔主語―目的語―動詞 (SOV)〕型であるが、次章に示すように、他のチベット・ビルマ語系言語に比して、語順はかなり自由であるといえる。

また、ランバ語では、関係節と一部の副詞節を除けば、次章に述べるように、他の多くのヒマラヤ諸語の言語と同様に、一般に修飾要素は被修飾要素の前に立つ。ヒマラヤ諸語では、例えば、数詞以外の代名詞、形容詞等の名詞句の修飾要素は常に主要名詞の前に、副詞句は形容詞、主要動詞の前に置かれる。数詞については、主要名詞の後に置く言語 (例. タマン語群とネワル語) と前に置く言語 (例. ヒマラヤ語系 (ランバ語を含む)、ライ・リンブ語系) に分かれる。

4.3.4. シャンシュン語

山口瑞鳳 [1988: 5] は、ボン教(bon-chos)の発祥地として知られるシャンシュン(祥雄)は、上手と下手シャンシュンに分かれるが、シャンシュン語と関係のあるム(dMu)族は、主に下手シャンシュンを拠点にしたと述べている。この下手シャンシュンはインダス河上流域であるという。山口 [1983: 225-266] では、シャンシュンを漢文史料の「女国」、(西方の)「東女国」、更には、史料により混同が認められるが、大・小羊同と同定されるとし、この羊同をチベット語史料の「下手シャンシュン」に比定する Ya-stod と対応させる。結論として、大羊同はラダック (Ladakh; Ladwags) 東部に位置し、[小] 羊同をその西方に位置する「下手シャンシュン」としている。いずれにせよ、この地域は、現在のヒマラヤ語系言語の分布域を含むか、それと隣接する地域である。

F. W. Thomas [1926, 1933a] は、敦煌で発見されたチベット文字文書の残巻 (10世紀以前と推定される) のひとつの言語をシャンシュン語と同定し、その史料からシャンシュン語を西部チベットの代名詞化言語 (Konow の分類に従う) であるとしたが、

その後 Shafer は, Shafer (ed.) [1957: 195, fn. 1] の *Žan-žun* の項にこの言語を「おそらく古アルモラ語 (Old Almora)」と注記し, Benedict [1972a: 7] は, 上述のように, チベット・カナウル中核語群のカナウル下位型に分類されようとしている。

西田は, やはり Thomas [1933b] の発見になる残巻1点を加えた3種のシャンシュン語のテキストを分析し, チベット語との同定作業を行った。西田 [1982: 24] では, その一部を例に挙げ, この言語がチベット語系言語の特徴を示している点を指摘するが, 「それにも拘らずチベット文語との対応関係を全般にわたって法的に求めるには, いまの段階ではなお問題が残っていて, 簡単に対応形を見付け難い単語も多量にある。といって対応する形は, すべて借用語であるとは言い難い」と述べるだけに留めている。従って, 具体的に彼のチベット語群のどの語系に分類されるかは明らかにしていない。また, その上に, この“シャンシュン語”が果してどの地域で使われていたか分からないとしている。その後, 西田 [1987: 111] では, この敦煌残巻の言語が羊同語と一致するのか不明であるとし, 西田 [1989a: 800] では, Thomas が「かつてシャンシュン語と呼んだ」言語といい, その比定にまだ疑問の余地のあることを示唆している。

1965年に, デーリー (Delhi) でボン教徒協会 (The Bonpo Association) 編の『チベット語—シャンシュン語辞典 (Tibetan-Žang-žung Dictionary)』が出版された。E. Haarh [1968] は, この辞書の資料を分析し, 周辺のチベット・ビルマ語系言語と語彙や助詞の比較を行い, 「シャンシュン語は, 西部チベット諸語に属する, *LSI* の用語に従えば, [ヒマラヤ諸語の] 西部 [下位] 語群の複代名詞化方言に入る蓋然性ももっとも大きい」と結論し, この結論が上述の敦煌文献に関する Thomas と Shafer の主張を裏書すると述べている。

これに対して, 現在でも, 山口 [1988: 5] のように, 「その [ム (*dMu*) 族の] 言語としてシャンシュン語というものと今に伝えられているが, 今日でもその言葉の素性と真偽は確かめられていない」と述べ, 資料そのものに疑いを挟む者がいる。

Haarh の利用した資料は, 同年代の同一方言の資料ではなく, 異なる年代の異なる方言の資料の寄せ集めであり, しかも, 綴字の正確さにも問題があるようであるが, チベット語やヒマラヤ語系の言語と比較してみると, 全く架空の言語というより, 実在した (または, 実在する) 言語の資料である可能性が高い。しかし, この“シャンシュン語”と Thomas の“シャンシュン語”とがどのような関係にあるのかは明らかでない。

D. D. Sharma [1988a: 12-13] は, ムンダ諸語がヒマラヤ諸語に影響を与えたとする

Konow 及び G. A. Grierson の説に従い、カナウル語に於けるムンダ諸語からの借用語の（その多くは誤りか疑問の余地がある）例を示し、更に、カナウル語に影響を与えた言語としてシャンシュン語を挙げ、標準カナウル語やチトカル語の語彙中に認められるシャンシュン語からの借用語例として24語ほど挙げている（彼の挙げたほとんどの例には問題があると思われる）。D. D. Sharma のシャンシュン語資料は、おそらく Haahr [1968] と同じか同系の資料を使用した可能性があるが、一致しない例も多い。（シャンシュン語形は、Haahr [1968] の語彙を参照した。X>Y は、X=シャンシュン語形、Y=カナウル語形で、D. D. Sharma の表示に従っている。）

- 1) シャンシュン語に独特と思われる語彙の例：bad>bod 「(毛) 皮」, ran>ran 「錆」(Haahr [1968] にはなし), ratse>チトカル語 rotš 「耳」
- 2) チベット・ビルマ語系の語彙の例：ni>niš 「2」(Haare[1968] では、ni~nis, duk>tuk 「6」(Haahr [1968] では、drug), sniš>štiš 「7」(Haahr [1968] では、sni~snis), ra>ra 「100」, tsa-med>tšimed 「娘」(下線の部分は、cf. WT bud-med 「女」), ĩiri>チトカル語 ni 「太陽」, a:>a: 「口」(Haahr [1968] では、ag-šo 「口」, a-šo 「語、言葉」), hritse>atše 「子供、息子」(下線部分のみ；Haahr [1968] では、hri-tsa 「赤ん坊、子供」, hri-tse 「息子、少年」), ba>boa 「父」
- 3) チベット・ビルマ語派のいくつかの下位語群に同源語が広く分布している語彙の例：hraj>ran 「馬」²³⁾
- 4) チベット語に同源語のある例：dan>dan 「接続詞」, cf. WT dan
- 5) チベット語形と同源語の可能性のある例：hrib>rib 「肋骨」, cf. WT rtsib-ma
- 6) 1), 2), 3), 4) のいずれかに該当する蓋然性は高いが対応に問題がある例：tiŋ>ti 「水」, khag>khaŋ~khakaŋ 「口」, li>lan 「風」(lən の誤植？)
- 7) 不適當であるか、誤りを含む例：kil>kilaŋ 「鉄釘」(Haahr [1968] にはなし；cf. シャンシュン語 ki-la-ya 「(儀式用) 短剣」), [mar]zi 「(金(色)の)」>zaŋ 「金」(mar を接頭辞とするが、mar も語根), gyum>am 「道」(əm の誤植？)(Haahr [1968] では、lgyu~lgyum), yose>ruza 「老人」(Haahr [1968] では、yo-se~yog-se 「老女」), dubaŋ>dukhaŋ 「厄介事」(Haahr [1968] にはなし)

また、彼の例に挙げられた語と語の関係も借用関係というより、両言語の系譜関係を示すに過ぎないと思われる上、シャンシュン語をカナウル語を含めたヒマラヤ語系の言語全体と比較すべきことが明らかである（以下シャンシュン語の例は、語彙比較

表のヒマラヤ語系の語彙と比較されたい)。

一方, Haarth は, 主に *LSI* の資料を利用して, シャンシュン語の格助詞(接尾辞)と動詞接尾辞はヒマラヤ諸語全般と, “1”から“10”までの数詞はヒマラヤ語系の一部の言語とネワル語と, 彼がおそらくヒマラヤ語系(Konowの複代名詞化言語の西部下位語群)に特徴的と考えた5つの語: 「耳」(シャンシュン語 *ra-tse*), 「鉄」(*zangs*), 「水」(*tij*), 「馬」(*hraj*)と「犬」(*ku-ra*)はヒマラヤ語系の言語と比較している。

格助詞の比較は, 最近になって, 新資料が公開されるにつれ, *LSI* を含めた多くの古い資料には問題があることが明らかとなっている。その上, Haarth の格助詞比較表から特にこの結論を支持する積極的な結論が引き出せるようには思われない。

しかしながら, シャンシュン語の数詞: *tig* 「1」, *ni* 「2」, *sum* 「3」, *biq* 「4」, *ŋa* 「5」, *drug* 「6」, *snis* 「7」, *gyad* 「8」, *gu-dug* 「9」, *tšü* 「10」(, *ra* 「100」も加えることができる)の例は, 特に「1」(*WT gcig*), 「4」(*WT bži*), 「7」(*WT bdun*)³¹⁾の比較から, シャンシュン語がチベット文語や現在のチベット語方言との直接的系譜関係を否定する証拠となるが, 同時に, 全体としてヒマラヤ語系, 特に, ここでいう東部語支の東部語群【=アルモラ語支】とよく一致する。残る5つの特徴語の例では, 「馬」はチベット文語にも今では同源語がみられるとされ, 更に, 遠く離れたカチン語やビルマ語にも同源語根がみられる。「犬」と「水」は, 対応に多少問題があるが, 多くのヒマラヤ語系を含め, チベット・ビルマ諸語に広く分布する語根のひとつである。「鉄」は, 意味の相違はあるが, 明らかに *WT zangs* 「銅」(ヒマラヤ語系「銅」>「金」と同源語である。従って, Haarth の挙げた語例中で, シャンシュン語とヒマラヤ語系を関係付ける積極的な例は, 「耳」だけであるが, Haarth の結論を裏付ける例が他にないわけではない。例えば, シャンシュン語の *tij* 「青い」, *du* 「雲」, *pad* 「(毛)皮」, *maŋ* 「赤い」, *mu* 「雪」等³²⁾はおそらくヒマラヤ語系に特徴的な語彙であるといえよう。従って, この資料の言語のヒマラヤ語系との同定は大いに可能性がある結論できる。

しかし, 名詞の修飾語が名詞の後に置かれている点や動詞の構造からみて, この言語は, ヒマラヤ語系の言語よりもむしろチベット語に比較できるもののようである。特に, この言語は, ヒマラヤ語系に特徴的な人称代名詞や動詞の人称接辞が認められない(代名詞化言語でない)点でヒマラヤ語系と異なっている。その上, 歴史的, 文化的な関係から当然であるともいえるが, 全体として, チベット語と共有語彙がかなり多いようである。もっとも, この点については, 前節のランパ語の例からも明らか

のように、現代のヒマラヤ語系の言語は、いずれも非常に多くの語がアーリア語系や来源不明の語に置き換えられている。これらの点に加えて、比較できる資料が乏しいので、Haarh のシャンシュン語の帰属について、はっきりした結論を出すことはできない。

以上の点を勘案すると、このシャンシュン語は、いわば、チベット語とヒマラヤ語系言語の中間に位置する言語として置くのが最も妥当ではないかと思われる。従って、このシャンシュン語資料が信頼できるものとした場合、この言語の研究はそれがヒマラヤ語系とチベット語を繋ぐ役割を果たす可能性があり、少なくとも、語彙面でヒマラヤ諸語全体を関係付ける可能性があることで重要な意義があるといえよう。例えば、シャンシュン語 mar-zi 「金」、PTAM *mar^B; 「道」 lgyum, PTAM *gyam^B 等を比較されたい。そのためにも、まずシャンシュン語資料の性格をはっきりさせ、更に未発掘の資料を収集することと、ヒマラヤ語系、特に資料の欠けているヒマチャル・プラデシュ州のブナン語、テボール語やウツタル・プラデシュ州のランカス語、ダルマ語、チャウダンス語、ビヤンス語などの資料をできるだけ多く収集することが必要であろう。

4.4. 中央ネパール語系

ここで、仮に中央ネパール語系と呼んだ言語のうち、Brandreth [1878] が語支(Ⅲ)に分類し、Shafer [1950] がグルン語支と呼称した3つの言語、ムルミ語(Murmi)【=タマン語(Tamang)】、グルン語(Gurung)とタクシャ語(Thaksya)【=タカリ語(Thakali)】以外は、すべて1960年代末以降に発見された言語である。これらの新発見の言語を含めた下位分類を最初に行った W. W. Glover [1974] は、このグルン語群【=グルン語支】をチベット語群(チベット語諸方言)、カイケ語、ガレ語等と共に、中央ヒマラヤ語系、中央ヒマラヤ語支のチベット下位語支に分類し、グルン語群には、新たにマナン語を加え、タマン語を東部タマン語と西部タマン語に分けている。西は、このグルン語支の中では、タマン語の母語人口が圧倒的に多いことやタマン語が最も保守的な言語であること等を理由に、この語支名をタマン語支(Tamang Branch)に改めるよう提案した[NISHI 1972]。現在もグルン語支の呼称に従う者がいるが、タマン語の保守的性格及び比較研究における重要性等を考慮すれば、タマン語で代表される言語群であるといえる。M. Mazaudon も、1970年代以降タマン語群、タマン諸語あるいはタマン下位語族と呼び、この語群の言語にマルファ語、シャン語とナル語を加え、チャンテル語もこの語群の言語である可能性を示唆している³³⁾。ただし、

Nishi [1990: 55-56] で述べたように、ナル語がタマン語群に分類できるか否かには問題がある（次節 4.4.3.1. 参照）。

しかしながら、タマン語群以外の言語はいずれも資料の量・質に問題があり、現状では、疑問の余地があり得る。そこで筆者は、Nishi [1990] で、チベット語方言は除いて、ナル語を含めたこれらの言語をひとつの系統的な語群とせず、単に T(amang)G(hale)K(aike) 言語群 (language cluster) と呼んだが、ここでは仮にひとつの上位語群にまとめて中央ネパール語系と呼んでいる。

タマン語群の言語は、東ネパールから西ネパールにかけて、ネパール中央部及び北部の丘陵地帯に分布している。この語群に含まれる言語として、カトマンズ盆地周辺、バグマティ県、ジャナクプール県及びナラヤニ県等を中心に分布しているタマン語（東部方言、中央方言、西部方言に分かれる）、西ネパールのガンダキ県マナン郡及びゴルカ郡の一部を除き、ラムジュンを中心とする7郡に主に分布するグルン語（東部方言、西部方言、南部方言に分かれる）、ガンダキ県の北西部に位置し、グルン語地域とはアンナプルナ山脈に隔てられたマナン郡のネシャン地方の6カ村で話されているマナン語、ガンダキ県の西に接するダウラギリ県ムスタン郡を北から南へ貫流するカリ・ガンダキ川沿いのタク・コラ地方の、タクサットサエ地方のトックチェ村を中心とする村落群で話されているタカリ語、その北のパンチガウン地方のマルファ語とシャン語の6言語が言語資料を通して知られている。この外にも、ダウラギリ県中央部のミャグディ郡の4カ村で話されているといわれるチャンテル語やカリ・ガンダキ川の更に上流域で、チベット語地域に入るバラガウン地方の5カ村で話されている言語（マナン語？）もこの語群に属すると報告されている。

ガレ語は、タマン語域とグルン語域の歴史的境界と思われるブリ・ガンダキ川の西岸に沿った、マナスル・ヒマールの東側のバルバック村を中心とする小地域で、ナル語はマナン郡のナル・プー地方の2カ村で話されている。

カイケ語は、これらの言語の分布域から西へ遠く離れたダウラギリ県ドルパ郡のタラコット村だけで話されている言語である。

既に述べたように、この言語分布状況は、歴史的なものであり、現在では、この語系の幾つかの言語の分布域は、全体的に本来の分布域からネパールの東と南へ、更に、国境を越えてインド東北部にまで広がっている。

1981年の人口調査によれば、タマン語、グルン語、タカリ語を母語とする者の人口は、それぞれ448,746人、174,464人、5289人となっている。また、N. J. Gurung [1977] によれば、ナル・プー地方の人口は、850人（1971）となっている。1971年の

人口調査でマナン郡の全人口7,436人中ネシャン地方の住民数は4,802人であるが、その大部分がマナン語を母語とする者と考えられる。シャン語、マルファ語、チャンテル語、カイケ語を母語とする者の人口は不明であるが、全体でおそらく数千人を越えない程度ではないかと思われる。ガレ語の母語話者数も、正確な数字は不明であるが、Seaward の推定に従って、『エスノログ (*Ethnologue*)』[1984] は、10,000人としている。以上を総計すると、中央ネパール語系の言語を母語とする者の総数は、国外の居住者数や1981年から現在までの人口増または人口減（ほとんどの少数民族は増加よりも減少傾向にある）を考慮に入れると、65万人前後であろう。

以下、比較的資料の豊富なタマン語群を中心に、その分類の論拠とその他の言語との関係、タマン語群の下位分類、タマン祖語の再構等について簡単に説明する。

4.4.1. タマン語群の統一性

Shafer [1950: 202–203, 1967: 126–127] は、他のシナ・チベット語系の言語にみられないタマン語群に特有な語として35語を挙げ、これらは同時にこの語群の統一性を示すものとしているが、その中には適当でない例が含まれている³⁴⁾。現在は、Shafer の挙げた例以外に幾つかの例（★印）を追加できる³⁵⁾。また、これらの語根の多くは他の中央ネパール語系の言語（特に、ガレ語）と共有されている（以下、タマン語群の例は、できる限り祖語形で示してある³⁶⁾）。

例. PTAM *kaa^B「血」(<*kak), *kin^A「取る」, ★*kɿŋ^A「遊ぶ」, ★*glin^B「雪」, ★*khan^B「寒い」, ★*khar^{A/B}「乾いた」, *piŋ^A「青い、緑の」, *bra^B「歩く」, ★*phum^B「卵（を生む）」, ★*nye^A「乳（を搾る）、乳房」, *hmlaŋ^{B/A}「黒い」, *mar^B「金」, *sim^A「冷たい」, ★*hla^A「する」, *hwal^B「赤い」³⁷⁾

また、次の複合語 (compound word) または合成語 (complex word) は、個々の構成要素は必ずしもタマン語群に独特な要素ではないが、全体として、タマン語群に特徴的なものであると考えられる。

例. PTAM ★*tar-Na^{A/B}「魚」(cf. STC *ŋya), *di-Ni^A「太陽」(cf. STC *nəy), ★*ba-hley^A「足」, *hnya-Mya^{A/B}「鳥」(cf. STC *bya~*bra), *hnam-sa^B「村」, ★*hna-kaa^B(<*kak)「鶏」, ★*hna-k(h)ru/o^{A/B}「蟻」(cf. STC *g-rwak), *hna-k(h)yu^A「犬」(cf. STC *(s-)kwəy), ★*hna-Pran^A「蠅」(cf. STC *(s-)braŋ)³⁸⁾

語彙の一致と並んでタマン語群に特有な音声変化もみられる³⁹⁾。

- ① *[j]k-> PTAM *d-, 例. PTAM *dim^B「家」(cf. STC *kyim~*kyum), *dap^B

「針」(cf. *STC* *kəp), *dwat^B「荷」(cf. *WB* wan)⁴⁰⁾

② *[j]-> *PTAM* *gy-, 例. *PTAM* *gyam^B「道」(cf. *STC* *lam), *gyuu^B
<*gyuk「羊」(cf. *WT* lug), *PTAM* *gyat^B「仕事」(cf. *WT* las)⁴¹⁾

③ *[j]-> *PTAM* *hy-, 例. *PTAM* *hyuŋ^B「石」(cf. *STC* *r-luŋ), *hyaa^A
<*hyak「手」(cf. *STC* *g-lək), *hyoo^B-<*hyok-「充分な」(cf. *WB* lok-)⁴²⁾

また、2例のみであるが、カナウル語、(?) カナシュ語にみられる *sn->st->t-
と同様な変化が仮定される例が認められる。

④ *sn-> *PTAM* *t-, 例. *PTAM* *tiŋ^A「心臓」(cf. *STC* *s-niŋ), *-Tiŋ「年」
(cf. *STC* *s-niŋ)⁴³⁾

なお、次の語根は、おそらく同義のチベット文語形と比較できる形式から派生した
と思われるが、変化様式が特異な例である。

⑤ *Ck-> *PTAM* *C-, 例. *PTAM* *sar^A「星」(cf. *WT* skar-), *tar^A「白い」
(cf. *WT* dkar-)⁴⁴⁾

また、次頁の接辞比較表に挙げたそれぞれの文法的接辞や否定辞等の接辞は、不規則な対応を示すものもあるが、いずれも同源形であろう⁴⁵⁾。

4.4.2. タマン語群の下位分類

タマン語群の資料は、チャンテル語のように、全く資料が公開されていない言語から、グルン語のように、ガツチョク方言に限られているとはいえ、一応文法、語彙の揃っている言語まであり、言語によってその資料の量と質共に大きな差があるが、全体的にみて、大部分の言語の資料が不十分であるといわざるを得ない。また、タマン語やグルン語のように比較的広い地域で話されており、数多くの方言がありながら、そのうちの僅かひとつか2つの方言について以外は、ほとんど資料が公開されていない場合、下位分類のためにある特徴を選んでも、それがその言語全体の特徴であるとは確言できない。その上、比較的狭い地域で絶えず接触を保っている言語の場合、分裂後にも、常に拡散現象が考えられるところから“共通の特徴”相互間の相対的年代も考えなくてはならない。例えば、タマン語とグルン語に共通する改新的特徴として、ネパール語動詞の借用の際に動词语根に付加される語幹形成接尾辞 (stem formative suffix) (タマン語 /-ti/, グルン語 /-di/) があるが、この特徴は周辺言語との比較から、比較的最近の拡散現象によるものと考えられるので、分類指標とすることはできない⁴⁵⁾。更に、取り上げる特徴によって、異なる結果が出て来る可能性もある。従って、タマン語群のそれぞれの言語の全体的な分析を踏まえて、分類指標の取捨選択が

表3 タマン語群の接辞比較対照表¹⁾

	タマン語(R)	タマン語(S)	グルン語	マナン語	タカリ語
“否定”	a ³ -	a ¹	a ³ -	a ⁴	a ¹ -
“禁止”(否定命令)	ta ⁴ -	tha ¹ -	…	…	tho ¹ -
能格／具格／奪格	-se/-i	-tse	—	-tse	-tse
属格 ₁	…	-ki/-i	-e	…	-e
属格 ₂	-la～-na ²⁾	-la	-la/-l	-a;-la ³⁾	…
与格／於格／向格 ⁴⁾	-ri/r-～-ti ⁵⁾	-ri/-ti	-ri/-r	-ri/-r	-ri/-r
共格 ₁	pre ²	…	-ne pri ²	…	-pre ²
共格 ₂ ; 等位接続辞 ₁	-then	-teŋ	…	ten ³	…
共格 ₃ ; 等位接続辞 ₂	…	…	-ne	ne ³	…
“主題(対照, 総記等)”	-mi/-m	-mi/-m	-m	…	-mi
“強調(断定, 逆接等)”	-ka	-ka	-ga	…	-ko
動名詞; “未完了”	-pa	-pa	-ba	-pə	-pə～-wə ⁶⁾
“完了”, “定過去”	-tsi	-tsi	-di/-i～-i;-dzi ⁷⁾	-tsi	-tsi
不定詞; “不定未来”	-la	-la	-la/-l	-lə	-lə
“継起”(従属接続辞)	-si～-tshi ⁸⁾	-si	-i;-si ⁹⁾	(-tse) ¹⁰⁾	-si
“条件”(従属接続辞)	…	…	…	nə ²	-na
“2人称”命令形	-ko～o～-u ¹¹⁾	-ko～-o～	-du/-d～nu	-ko/-to～-no～	-ko～-o/-to/
		-u～-ø ¹²⁾	/-n ¹³⁾	-lo～-ro～-ø ¹⁴⁾	-w ¹⁵⁾
“伝聞”	-ro	-ro	-ro	roo ⁴	-ro

- 1) (R)=リシャンク方言, (S)=サフ方言; X₁/X₂ は, X₁ と X₂ の交替の条件が音韻的条件で明確に規定できないか, 形態論的条件で交替する同一形態素の異形態を示す。
- 2) -na (鼻音の後) ～-la (その他の位置)。
- 3) {代名詞+la} は, 「…のもの」のように所有物を表す。音韻対応からいえば, この /-la/ が他の言語の属格接辞と規則的に対応しており, マナン語でも, 本来の属格接辞は, /-la/ であったかもしれない。
- 4) タマン語とマナン語では, これは於格接辞で, 与格接辞は, それぞれ /-ta/ と /-lai/ である。
- 5) -pə (鼻音, /p/, /k/ の後) ～-wə (その他の位置)。
- 6) -ti (歯音の後) ～-ri/-r (その他の位置)。
- 7) -i (鼻音の後) ～-i (その他の位置); /-dzi/ は年長者にしか使用されない。
- 8) -tshi (歯音の後) /tsi (稀) ～-si (その他の位置)。
- 9) /-si/ は年長者により使用される傾向がある。
- 10) マナン語の /-tse/ は, 能格／具格／奪格と同じ接尾辞であり, 他の言語の /-si/ と同源か否かは不明である。
- 11) -ko (長母音の後), -o～-u (その他の位置); -o～-u の交替については, 明記されていないが, -o (子音の後) ～-u (短母音の後) のようである。
- 12) -o (閉音節の後) ～u (/i/, /e/, /a/, /o/ の後) ～ø (/u/ の後) ～-ko (その他の位置)。
- 13) -nu/-n (鼻音の後) ～-du/-d (その他の位置)。
- 14) -no (/n/, /ŋ/ の後) ～-ro (/r/ の後) ～-o (/ə/, /u/ の後) ～-to (その他の位置); /-to/ と /-ko/ は自由交替形のようである。
- 15) -ko (母音, /y/ の後) ～-o (/y/ 以外の子音の後); /-to/ は, /-ko/ と同じ条件で現れるが, 特定の動詞語幹のみに, /-w/ は /-a/ に終わる特定の動詞語幹のみに使用される。

行われるべきであるが、現状ではそれも不可能であるので、ここに示す下位分類は、まだ暫定的な分類に過ぎないとしておく。

タマン語群下位分類の指標としては、次の特徴を挙げることができよう⁴⁶⁾。

(略号: K={k-, kh-, g-}, T={t, th, d}, L={l-, hl-}, R={r-, hr-})

- ① *Kl->Ky-/K-(/__i) (グルン語₁, マナン語, タカリ語)
- ② *Kl->Ly-/L-(/__i) (グルン語₂, シャン語, マルフア語)
- ③ *g-(B)>kh-, *khr->hr-, *gr-(B)>*khr->hr- (マナン語)
- ④ *Kr->Ky-/K-(__i), *Kr->K-(/__ {u, o}) (シャン語, マルフア語)
- ⑤ *Kr->T- (タカリ語)
- ⑥ *sr->*str->t-⁴⁷⁾ (タマン語, マナン語)
- ⑦ *sr->hr->r- (グルン語, タカリ語, シャン語)
- ⑧ 2個の低母音がある [*-ak> PTAM *-aa に来源する長(低)母音または前寄りの低母音と PTAM *-a に来源する短(低)母音, または, 中寄りあるいは後ろ寄りの低母音] (タマン語, マナン語, タカリ語, シャン語とマルファ語)⁴⁸⁾
- ⑨ 起動(能)格/具格接尾辞と奪(起点)格接尾辞が異なる (グルン語)
- ⑩ 色彩を表す形容詞に特定の接尾辞がある (グルン語 {-gya}, マナン語 {-kya})
- ⑪ 動詞の命令形に別個の否定辞がない (グルン語, マナン語)

①と②は、共に *Kly- の段階を経て、Ky-/K-, Ly-/L- に変化したものと考えられる。グルン語の場合、ガチョック方言とおそらく他の幾つかの方言 (グルン語₂) は、②の変化を経ているが、残る方言 (グルン語₁) については、①の段階に留まっているものと思われる。タマン語は、*Kl- を留保している。

⑥と⑦は、系統的分類にしばしばみられる矛盾を指摘するために故意に加えたものである。⑥は、マナン語とタマン語に共通の特徴であり、⑩と⑪は、マナン語とグルン語に共通の特徴である。つまり、下位分類にどちらがより重要な指標となるか問題であるが、タマン祖語に *sr- が推定される例は、2語しかなく、その上、この再構形は必ずしも確実なものとはいえないので、ここでは⑩と⑪を分類指標に選んである。

語彙については、Glover に従い、Swadesh の基礎100語に限ってみると、そのうちの50%程は、マルファ語を除く5言語全部で同源形式である。また、各言語に特有な語彙は、大体4語～5語であるのに、タマン語は8語である。このことは、スワデシュの基礎100語以外の語についてもいえるようである。そのような場合、グルン語は主にネパール語からの借用語で、マナン語、シャン語、タカリ語はチベット語からの借用語でそれぞれ置き換えられている例が多い。タカリ語には、チベット語からの借

用語ではないが、チベット・ビルマ語系と思われる特有な語 (例. pri^3 「根」(シャン語と共有), rɔl^3 「横になる」, ŋaŋ^0 「立つ」, ŋona^3 「夜」, pholtoŋ^1 「丸い」) がある。

全体的にみて、この基礎100語からは、タマン語が比較的他の言語と離れている点とタカリ語とシャン語 (と多分マルファ語) が比較的近い点等が裏付けられるに留まる。Glover [1974] は、(マルファ語とシャン語を除く) 各言語間の基礎100語の共有率を下位分類に適用しているが、タマン語東部方言、タマン語西部方言、{グルン語・タカリ語}、マナン語全体には、66%、グルン語とタカリ語間には、72%の数値を挙げている。使用した語彙表や同源形の認定法の違いにもよるが、筆者の算定では、共有率は、タマン語東部方言【=リシャンク方言】と西部方言【=サフ方言】の間⁴⁹⁾で92%、タマン語 (リシャンク方言とサフ方言) とグルン語 (ガチョック方言) の間で81%、タマン語 (両方言) とタカリ語の間で75%、タマン語 (両方言) とマナン語 (ブラガ方言とギャル方言) の間で72%、グルン語 (ガチョック方言) とタカリ語の間で78%、グルン語 (ガチョック方言) とマナン語 (両方言) の間で71%、マナン語 (両方言) とタカリ語の間で74%で、Glover の挙げている数値よりも全体的にかなり高く、66%と72%でまとめることはできない。従って、この数値に基づいた下位分類は、Glover [1974] のそれとはかなり異なったものになる。

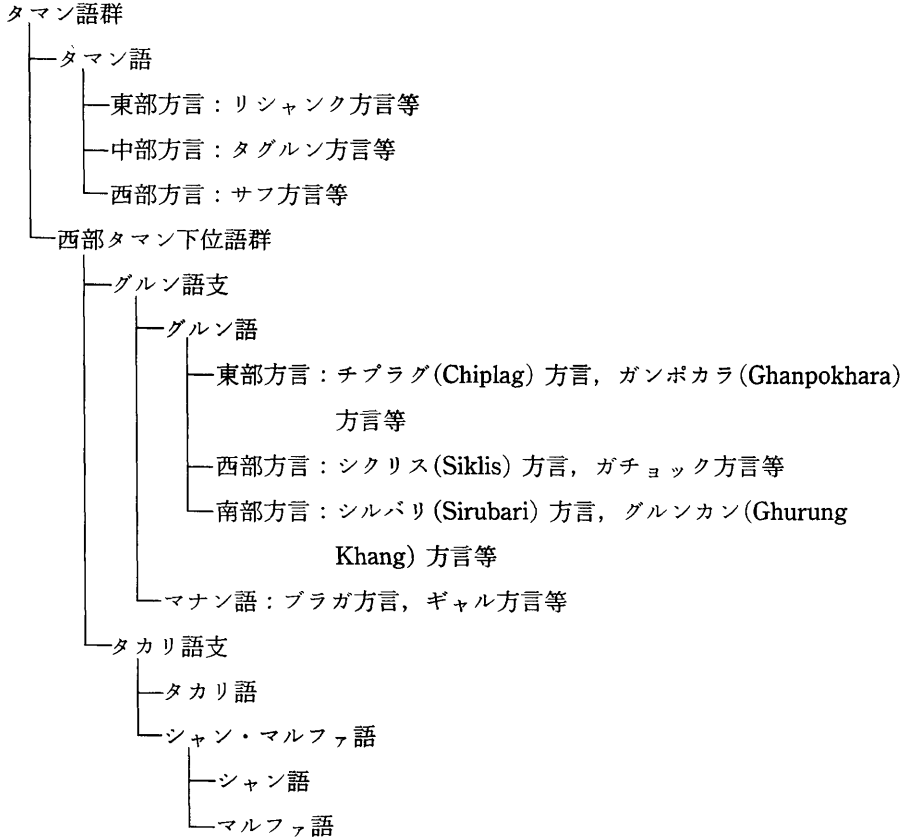
上に挙げた下位分類指標により、それぞれの特徴の有 (+)・無 (-) を各言語別に図示すると次の通りである。

	タマン語	グルン語	マナン語	タカリ語	シャン語	マルファ語
①	—	(+)	+	+	—	—
②	—	+	—	—	+	+
③	—	—	+	—	—	—
④	—	—	—	—	+	+
⑤	—	—	—	+	—	—
⑥	+	—	+	—	—	?
⑦	—	+	—	+	+	?
⑧	+	—	+	+	+	+
⑨	—	+	—	—	?	?
⑩	—	+	+	—	—	—
⑪	—	+	+	—	?	?

これらの指標から、タマン語が他の言語と比較的遠い関係にあり、グルン語とマナン語、タカリ語とシャン語、シャン語とマルファ語がそれぞれ比較的近い関係にある

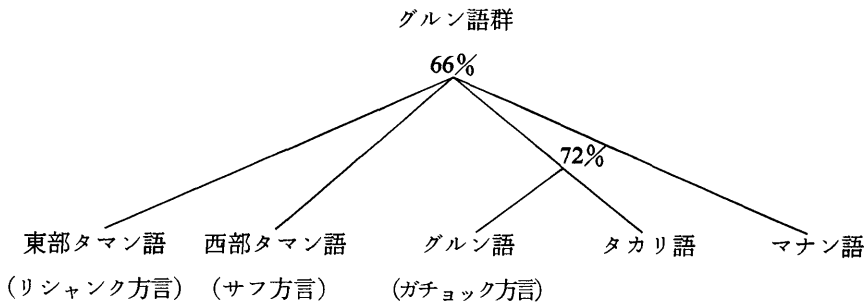
と結論できよう。そこで、次のようなタマン語群の下位分類が考えられる。

タマン語系言語の分類



この下位分類は、次の Glover の下位分類と大きく異なっている。また、筆者の算定した共有率を基礎にしても、グルン語とタカリ語の関係（78%）やマナン語とタカリ語の関係（74%）等の方がグルン語とマナン語の関係（71%）より近いことになるが、タマン語とグルン語の関係（81%）は更に近いことになり、いずれにせよ、Glover の下位分類とは一致しない。

Glover のグルン語群【=タマン語群】の下位分類



なお、マルファ語は、既述の通り、Mazaudon が採録した75語の例しか資料がないが、その全部に同源形式のある言語がシャン語のみであることや上述の分類指標に照らしても、また、相互の地理的位置関係からみても、両者の差は僅かであろうと思われる。Mazaudon は、この2言語をタカリ語の方言としているが、長野の述べているように、シャン語とマルファ語が分類指標①、②、④、⑤で、タカリ語とは異なっている点は無視できない重要な相違点であるといえよう [NAGANO 1990: 101-102]⁵⁰⁾。また、シャン語とマルファ語とタカリ語との相互理解度 (mutual intelligibility)、特に、前者の後者に対する理解度は、相当に高いとしても、タカリ語がかつて、この地域の威信語であったことを考えると、当然であろうし、マルファ語やシャン語を母語とする話者の多くが自分の母語とタカリ語の2言語使用者 (bilingual) である可能性もある。従って、客観的な相互理解度テストを行っても、それで得られる数値の有意性が問題となるであろう。

4.4.3. タマン語群と他の中央ネパール語系言語との系統的な関係

上に示したように、タマン語群をひとつの下位語群として立てることには問題はないとしても、タマン語群とナル語、ガレ語、カイケ語との関係はどうであろうか。この3言語は、いずれも資料が限られているので⁵¹⁾、タマン語群との関係について最終的な結論は出せないとしても、一応全部の言語について、タマン語群との関係を検討する必要がある。

4.4.3.1. タマン語群とナル語

ナル語の場合は、その分布域がマナン語域に接しており、現在利用できる資料だけからも、この言語がタマン語群に特有な幾つかの語と変化を共有していることが窺わ

れる。次の例を参照されたい。なお、ナル語の声調表記は、暫定的な表記と思われるので、下表では省略してある。

(1) 共有語彙

	タマン祖語	ナル語
「血」	*kaa	ka
「雪」	*glin	klin
「歩く」	*bra-	pra
「卵」	*phum	phum
「する」	*hla-	la
「犬」	*hnakhyu ^A	nokyu
「足」	*bahley ^A	bale

(2) 共通の変化

「針」	*dap	doo(<*dap)
「羊」	*gyuu(<*gyuk)	gyuu
「手」	*hyaa(<*hyak)	yaa
「石」	*hyuŋ	yuŋ
「星」	*sar	sar

しかし、同時に、ナル語には gyim「家」、gualam「道」、kyin「心臓」のように、同源形と思われるが、タマン語群に特徴的な変化を蒙っていないか、異なる変化を蒙ったと思われる形式も散見される。例えば、gyim「家」とgualam「道」(複合語?)は、それぞれタマン祖語以前の段階を示す形式のように思われる。一方、kyin「心臓」は、タマン祖語形と同源形式⁵²⁾と思われるが、「年」に平行例がみられる⑤ *sn->PTAM *t- のような変化を仮定すれば、*t->ky- のような変化を仮定しなくてはならなくなる。*gyim>PTAM *dim と仮定すれば、⑤のような変化の代わりに、これと平行した *kyin>PTAM *tin と仮定すべきかも知れない⁵³⁾。その場合は、「心臓」のタマン祖語形は、WT sñin と同源形式とみなせなくなり、PTAM *-Tin「年」も、*sn->*T- を仮定できず、WT na-nin「去年」や (g)že-nin「一昨年」の -nin と比較できないことになる。

ナル語がタマン語群に非常に近い言語であることは確かであるが、gyim と gualam の例は、Mazaudon の主張するように、ナル語がタマン語群の言語であるというよりも、比較的最近にタマン語群と共通の祖語から分岐した言語である可能性を示唆しているように思われる。

4.4.3.2. タマン語群とガレ語

4.1.2.5.で示したように、Glover [1974: 12-13] では、チベット語、カイケ語、ガレ語とタマン語群を含むチベット下位語支の (Swadesh の100語表に基づく) 語彙の共有率を37%としているが、タマン祖語形とガレ語 (ケウラ [Keura] 方言) のみを比較すると51%もの高い共有率が得られる⁵⁴⁾。Glover の分類基準に従えば、この数値は下位語群 (subfamily) を立てることのできる数値であり、タマン語群の言語とできなくても、それと上位語群にまとめられる並列的 (collateral) な関係にある言語といえよう。しかしながら、中核的語彙 (core vocabulary) 全体には、タマン語群に同源形のみられない語形式が非常に多い。次に幾つかの身体名称を示しておく。(以下、ガレ語形は、特に断らない限り、ケウラ方言形を挙げてあるが、ガレ語形の声調は表示していない。また、ここに示していないタマン祖語形は、4.4.1.に挙げた例を参照されたい。)

例. *kun* 「背 中」 (cf. PTAM **go*^A) , *kyuma* 「腸」 (cf. PTAM **grun*^A) ,
khwasay 「腹」 (cf. PTAM **pho*^B) , *gur* 「口」 (cf. PTAM **sun*^A) , *top* 「足」
 (cf. PTAM **bahley*^A) , *twa* 「顔」 (cf. PTAM **hlii*^B) , *panay* 「肩」 (cf.
 PTAM **bam*^A) , *tsyu* 「乳房」 (cf. PTAM **nye*^A) , *sim* 「骨髓」 (cf. PTAM
 **tran*^A) 。

また、タマン語群に特有の、複合語または合成語に由来すると思われる2音節語と同義のガレ語形は、全く異なっている (*mya*? [ウイヤ方言] 「太陽」, *top* 「足」, *ta* 「村」, *tsyaphe* 「蠅」) か、第1要素か第2要素の片方だけが同源形である (*ŋa* 「魚」, *ya* 「鳥」 (<**mya*) , *ka*? [ウイヤ方言] 「鶏」, *kyo* 「犬」, *natse* 「蟻」) かのいずれかである。

格接辞も、*pre* 「共格 (comitative)」以外は、タマン語群に同源形がみられない⁵⁵⁾。

また、タマン語群に特有なものとして挙げた語例中 (4.4.1.) で、ガレ語に同源形があるのは、例中、*ka* 「血」, *kin-* 「取る」, *lyan* 「雪」, *khan-* 「寒い」, *khar* 「乾いた」, *pra* 「歩く」, *phum* 「卵」, *mar* 「金」, *lan* 「黒い」, *sim* 「冷たい」のみである⁵⁶⁾。

タマン語群に特徴的な変化として、①から④まで挙げたが、ガレ語は、あまり確実でない④の変化を共有するだけである。ガレ語の同源形だけを示すと次の通りである。

① *kim* 「家」, *kap* 「針」, *kwi* 「荷」, ② *lam* 「道」, ③ *la* 「手」, *lon* 「石」, ④ *tyan* 「心臓」。

一方、タマン語群とガレ語の間には、次のような対応が認められる。

① **gl-:l-*, 例. *lyan* 「雪」 (cf. PTAM **gliŋ*^B) , *lap* [バルパック方言] 「牡牛」

(cf. PTAM *glap^B)

- ② *dr-, *br- : r-, 例. ra「(荷担ぎ用の) 細帯」(cf. PTAM *draa^B)⁵⁷⁾, rwa「六」
(cf. PTAM *druu^B), rop-「縫う」(cf. PTAM *drup^B), ra「崖」(cf. PTAM *braa^B), ren-「待つ」(cf. PTAM *bran^B~*pran^B); ただし, *Kr-:T-,
例. ʈa「頭」(cf. PTAM *kra^A), ʈu-(cf. PTAM *khru^B-)
- ③ *My- : y-, 例. yap-「研ぐ」(cf. PTAM *hmyap^B-), ya「鳥」(cf. PTAM
(hnya-) Mya^{A/B}), yo「鼠」(cf. サフ方言 nyamnyu¹<(hnya-)Myu^A, STC
b-yəw), ywa「猿」(cf. サフ方言 timnyu¹<(ti-)Myu^A[<*-Myuk], STC
*mruk)
- ④ *-uk : -wa, *-ik : -ya, *-iŋ : -yaŋ⁵⁸⁾, 例. 「六」, 「猿」(上掲), tsya「噛み付く」
(cf. PTAM *dzii^A[<*dzik]), 「雪」(上掲), syaŋ「薪」(cf. PTAM *siŋ^B).

ガレ語は、確かにタマン語群と多くの語彙の特徴を共有しており、少なくとも分節要素に関しては、明確な音韻対応が立てられることから、資料さえ十分に揃えば、すぐにも、タマン・ガレ祖語が再構できると思われるほどである。従って、ガレ語は、タマン語群の言語でないことは確かであるが、タマン語群と共にひとつ上位語群を形成すると仮に結論できよう。しかし、それほどにタマン語群と近い関係(その分布域もタマン語とグルン語域に挟まれた地域である)にありそうなガレ語で、何故辞書的語彙の一致に比べて、“共格”以外の格接辞がタマン語群と一致しないのか一考を要するように思われる。ガレ族は、歴史的にグルン族と密接な関係にあり、現在も、ガレ語話者の大半はグルン族である。それ故、辞書の形態素 (lexical morpheme) には、古くからグルン語を通して数多く借用されて来た可能性も考えられる。従って、相互の系譜関係の親近度をより正確に測るには、やはり文法的形態素 (grammatical morpheme) を含めたガレ語の形態的、統語的特徴まで検討する必要がある。

4.4.3.3. タマン語群とカイク語

Glover は, Swadesh の100語 (カイク語資料は, “root”, “blood”, “foot”の3項目が抜けている) に基づくカイク語とグルン語及びカイク語とガレ語との同源形共有率をそれぞれ39%と35%としている。筆者の算定したタマン祖語とカイク語の共有率は、かなり問題のあるものを含めても⁵⁹⁾, 37%程度にしかならず、これは、タマン祖語とガレ語の共有率に比較しても相当低い数値である。タマン語群中で最も西寄りの言語 (チャンテル語は考慮しない) であるタカリ語とガレ語の共有率は、少し上がって、41%ほどになるが、これも、ガレ語の場合と比較すると、それほど高い数値とはいえない。一方、カイク語とガレ語の共有率は44%ほどになり、これもタマン祖語とガレ

語の場合と比較するとかなり小さいが、この数値だけからみれば、カイケ語とガレ語の関係は、それぞれの言語とタマン祖語との関係よりも近いことになる。なお、全体として、チベット語方言からの借用語と思われる語が多いのもカイケ語の特徴であるが、これはカイケ族の居住地がチベット語域であることやチベット族との密接な関係から当然予想されることでもある⁶⁰⁾。

この100語その他にみられるタマン語群との共有語彙には、タマン語群に特有な語、語幹あるいはタマン語群に特徴的な音韻変化を経た語が含まれている。

例. *ḍiŋ* 「心臓」, *piŋma* 「緑の；青い」, *kharpa* 「乾いた」, (?)*mhyāmma* 「黒い」, *mar* 「金」, *le* 「脚」, *nam* 「村」, *rhup* 「縄」 (cf. PTAM **srup*^B 「糸」), *raŋbo* 「見(え)る」 (cf. PTAM **hmraŋ*^{A-}, STC **mraŋ*)⁶¹⁾

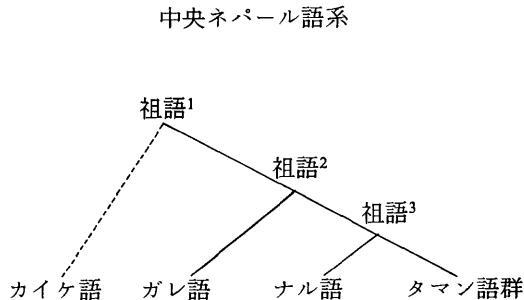
カイケ語の資料は、少ないだけでなく、表記にも誤記や矛盾が数多く認められるので、はっきりした結論を出すことはできないが、ここに挙げた語彙だけからみる限り、やはりタマン語群に比較的近い言語であるといえよう。

4.4.4. 中央ネパール語系言語相互の関係

筆者は Nishi [1990] で、タマン語群、ガレ語、カイケ語を TGK 言語群と呼んだが、その根拠として、ここで述べた事実に加えて、ナル語も含めたこれらの言語及び語群に非常に分布の限定された2つの語根 **kak* 「鶏」と **phum* 「卵；卵を生む」が見い出される点を指摘した。**kak* は、中央ネパール語系【=TGK 言語群】以外には、ブータン東部の北モンパ語とビルマ北部及びそれと接する中国雲南省西北部に分布するトゥルン語群 (Trung; 独龍) にのみ認められる語根である。ただし、北モンパ語は、後者から借用した可能性がある。一方、**phum* は、「腫れる；膨れた」>「卵(膨れたもの)」>「卵を生む、孵化する」といった意味的な繋りを仮定すれば、カチン語 (恩昆方言) *pum*⁵⁵ 「腫れる」, *phum*⁵⁵ 「卵を生む」；トゥルン語 *bum*⁵³；リャンマイ語 (Liangmai) 【=クォイレン語 (Kwoireng)】／ゼメ語 (Zeme, Jeme) ([Shafer] ビルマ語門クキ語系 (Kukish) 西部語支) *-bum* 「孵化する」；WT *sbom* 「厚い、太った」；WB *phwam'* 「太った」 (cf. STC *(s-)bwam, PTB **s-bwam* ~ **s-bum* [MATISOFF 1978]) と同源形か、同じ単語族 (word family) の語根 (Matisoff [1978: 16-18] の用語では, *allofam*) である可能性がある。Nishi [1990] では、この事実が TGK 言語群の言語の原住地がかつてトゥルン語や北モンパ語の話されている地域に近い地域であったことを示すものかもしれないと述べた。この2つの語根を共有している事実は、同時にこの TGK 言語群 (中央ネパール語系) の言語の関係を多少とも

支持するものであるといえよう（なお、*kak, *phum の再構の詳細や *kak の語源に関する Benedict の見解等については、Nishi [1990] を参照されたい）。

以上の論議を踏まえて、仮に中央ネパール語系と呼んだ諸言語がひとつの上位語群を形成すると仮定すれば、その系統的關係は次のように図示することができよう。なお、祖語¹とカイケ語を破線で結んだのは、上に述べた根拠だけでは、カイケ語とこの語系の他の言語の関係を明確に規定できないことを示すためである。



上述のように、タマン語群は、Shafer [1950] がチベット語系（Bodic Section）の一語支として以来、Benedict [1972a], Glover [1974], Thurgood [1985a], 西田 [1987, 1989a] はいずれもチベット語と極めて近い関係にある言語であるとして来た。特に、西田 [1989a] では、タマン語群の言語（非代名詞化方言）と現代チベット語方言のひとつの方言区分とされているようである。勿論、これは、チベット語方言の定義の仕方によるが、西田のチベット語方言は、筆者の考えるチベット語方言とは異なる範囲のものようである。

筆者も、17年ほど前に、タマン語群とチベット文語を直接比較して、その共通祖語の再構を試みたが、多くの問題に逢着した結果、その試みを放棄せざるを得なかった。ガレ語に着目したのも、実はそれがタマン語群とチベット語の中間的言語であれば、共通祖語の再構に役立つのではないかと考えたからであった。ガレ語の調査自体も、未だに完了しないまま今日に至っているが、現在利用できるガレ語資料だけからでも、ガレ語は、結局中間的言語とはいえないようである。

その後、タマン語群の資料が次第に増えるに従って、辞書的語彙では、タマン語群はチベット語と共有する特徴も増えて来たのは確かであるが、その一方で、文法的接辞類や形態的、統語的特徴では、チベット語と異なる点が多いことも分かって来た。その結果、タマン語群とチベット語の共有要素には、両者の密接な長期的接触による

拡散 (diffusion) 現象による点も多いと考えるようになった。しかしながら、現在のチベット・ビルマ語族の下位分類体系は、筆者の見解をうまく適合させることのできない図式になっている。本論文の趣旨がこれまでのヒマラヤ諸語やそれに関する諸研究の概説にあるので、今回は、これ以上の論議は割愛するが、いずれまた稿を改めて、この問題を考察してみたい。

4.5. ライ・リンブ語系

他の多くのヒマラヤ諸語の言語と同様に、ヒマラヤ研究の先駆者 Hodgson [1857a, 1858b] によりキラント族 (Kiranti; Kirānti, Kirāṭi) の言語として初めて紹介された、ライ・リンブ語系またはキラント語系の言語⁶²⁾ の固有の分布域は、スン・コシ川以東の東ネパールの丘陵地帯であった。現在、このライ・リンブ語系言語の話者、特に、リンブ語の話者は国境を越え、インドの北東部のシッキム、西ベンガル州の両州や更にその以東の地域にも相当数いるといわれる。

第1章で触れたが、いわゆる“キラント”族が本来ライ族、すなわち、カンブ族とリンブ族のいずれか片方を指した呼称なのか、それとも両部族全体を指した呼称なのか、更に、現在では、キラント族に包括されるヤッカ族は、D. B. Bista [1972: 32] の述べるように、キラント族の第3の部族として、後にライ族に含められるようになったのかといった問題には今でも明確な答えはないようである。ちなみに、現在のライ・リンブ語系言語の下位分類では、ヤッカの名を持つ諸言語はむしろリンブ語群に分類されている。また、この地域のカトマンズ盆地寄りに住むスンワル族は、決してライ族に含められることはないが、その言語はライ・リンブ語系の言語とされており、最近では、ハユ語【=ヴァユ語】も同じ語系に分類されるが、ハユ族も、決してライ族に数えられることはなかった。

1981年のネパールの国勢調査では、この語系の言語の話者数として、ライ語とリンブ語には、それぞれ221,353人と129,234人、スンワル語には、10,650人の数字が挙げられている。ハユ語話者数は、233人 (1953～1954) と1,551人 (1974) ともいわれる。また、1961年のインドの国勢調査では、ライ・リンブ語系言語の話者は、シッキム州と西ベンガル州で8,756人となっている。

ネパールのリンブ語話者数については、G. van Driem [1987a] は、B. B. Subba の挙げる約180,000人という数字を引いており、年代の違いを考慮しても、この数字は、国勢調査の挙げる数字とかなり隔たっているが、信頼性はむしろ高いのではないかと思われる。

これらの資料に挙げられた数字には、国勢調査の際のライ語系とリンブ語系の識別方法（一般に言語学者以外のネパール人は、その人の所属部族と彼の言語が必ずしも一致しないことを充分認識しているとは限らない。現在はライ語であっても、その言語は、リンブ語群に属する場合がある）、調査年代の相違や調査の精度といった問題が含まれるが、一応の目安として、37万人から43万人の間を取り、約40万人といった数字を挙げておくことができよう。

上述のように、リンブ語は含まれていないが、キラント族の言語として、最初にライ・リンブ語系の17言語の語彙を公刊したのは Hodgson [1857a] である。その後、Brandreth [1878] が、当時の英領インドの非アーリア語系言語の諸資料を利用して、それらの言語の系統的分類を試みるが、そこでチベット・ビルマ語群【＝チベット・ビルマ語派】の1下位語群として、ライ・リンブ語系【＝キラント語系】にはほぼ相当する下位語群を措定している。

Brandreth [1878: 31] の立てたチベット・ビルマ語群 (Tibeto-Burman)【＝チベット・ビルマ語派】の19の語支 (class) 中の (Ⅲ), (Ⅳ), (Ⅷ), (Ⅸ) 及び (Ⅹ) の5つの語支が「ヒマラヤ諸語 (Himalayan languages)」に相当するが、ここでいうライ・リンブ語系、あるいは、キラント語系は、彼の語支 (Ⅹ) にはほぼ相当し、そこには7言語、17方言が挙げられている。Brandreth の分類は、言語数や言語と方言の認定の不一致はさて置いて、最新の調査資料を利用してある Hansson [1988] の下位分類と比較しても、かなり正確なものであり、彼が語支 (Ⅹ) に挙げた言語中で、この語系に分類されていない言語は、ブラム語、チェパン語とクスンダ語の3言語に過ぎない。既に死語となったとされているクスンダ語は、Shafer が Shafer [1953: 356] で既に指摘しているように、チベット・ビルマ語系言語ではなく、その系統についても、まだ明らかにされていない。

Brandreth の分類以降、語系の名称 (【 】内の名称は、各学者による呼称) は、一致しないが、Shafer [1953, 1955, 1966]【東部ヒマラヤ語系 (East Himalayish Section)】、Miller [1969]【同 (East Himalayan Section)】、西田 [1970]【東部ヒマラヤ諸語 (Eastern Himalayan)】、Benedict [1972a]【バヒン・ヴァユ (Bahing-Vayu)/キラント (Kiranti) 中核語群 (nucleus)】、Egerod [1973-74]【キラント (Kirantish)/バヒン・ヴァユ (Bahing-Vayu) 語系】等がライ・リンブ語系に相当する語系や語群を立てているが、そこに含まれる言語、方言は、特に、Shafer と Benedict の分類で、多少の違いがあるものの、ハユ語を除けば、ほぼ Brandreth の分類と一致する。

1960年代後半以降、特に、国際的な言語学研究の組織である夏期言語研究所 (Sum-

mer Institute of Linguistics=SIL), 西ドイツなどとネパールの研究機関との共同研究や R. K. Sprigg, B. Michailovsky 等の努力により, ネパールのチベット・ビルマ語系言語の調査は急速な進展をみることになるが, その結果, 幾つかのライ・リンブ語系言語が新たに追加されて今日に至っている。また, この成果を利用したヒマラヤ諸語の下位分類やライ・リンブ語系言語に限った下位分類が, Glover [1974]【東部ヒマラヤ語系(East Himalayish Subphylum)】, Thurgood [1985a]【キラント諸語(Kiranti)】, Delancey [1987]【キラント語支(Kiranti)】, Hansson [1988]【キラント諸語(Kiranti languages)】等によって次々と試みられたことは既に触れたところである。西田 [1987] の最近の分類のように, ライ・リンブ語系を特に立てず, ヒマラヤ諸語の代名詞化言語をすべて「ヒマラヤ代名詞化言語群」[1987]に統括するのは極めて例外的分類といえよう。

Hansson [1988] は, 「ネパールの言語調査」の調査結果を踏まえ, 言語学的基準に基づいて, キラント語系, つまりライ・リンブ語系の言語を一応38言語にまとめ, その下位分類を試みると共に, 各言語の分布, 方言, 方言分類に触れている。Hansson の分類は, この語系に関する最も網羅的で, 詳細なもののなので, ここではライ・リンブ語系言語の分類も言語名も, ほぼ彼の見解に従った (Hansson の挙げているライ・リンブ語系の言語名とその下位分類は, ここに再度掲載しないが, 本論文(上)の第1章と第2章(2.2.2.2.)及び本章の第1節(4.1.3.4.)を参照されたい)。しかし, 既述のように, 今後の調査で, この語系の言語数は更に増える可能性があるが, 同時に Hansson の挙げた言語中には, 既に消滅したとすべきか, 消滅寸前の言語が幾つか含まれている。従って, この38言語という数字についても, その下位分類についても, まだ多くの問題が残っているとせざるを得ない。

ライ・リンブ語系言語の認定で最も問題となるのは, ハユ語の位置付けである。Shafer [1950] がこの言語を, チェパン語, マガル語と共に, 中西部ヒマラヤ語系(West Central Himalayish)に帰属させて以来, この言語をライ・リンブ語系に分類しない学者が多かったが, Shafer 自身も, この中西部ヒマラヤ語系の規定が不充分であると認めており, Shafer [1955: 101, fn. 20, 1966: 3, fn. 2] に示されたヒマラヤ諸語の相互関係図では, ハユ語はヒマラヤ諸語の中央ネパール語系を除いたすべての下位語群, 個別言語と交叉する位置に置かれている。

一方, 前述のように, ハユ語の本格的な現地調査を行った B. Michailovsky [1981] は, Shafer と Benedict の中間的見解を述べている(第2節4.2.参照)。

これに対して, チェパン語の唯一の研究者である Caughley [1982b: 8-9] は, チェパ

ン語をマガル語、ラジ語と共に、別個の下位語群（中央部ヒマラヤ語系、チェパン下位語支）を構成するとする Glover [1974] の分類を批判し、「チェパン語のビルマ文語との比較は、これらの2言語が少なくともチェパン語とチベット語と同じほどの同源語を共有しているようであり、従って、チェパン語がチベット・ビルマ諸語の北（チベット語）と南（ビルマ語）の区分間のリンク（link）であろうという Benedict の所見を支持していることを示している。この結果は、語彙統計学的知見は慎重に利用しなくてはならないことも示すもののようである」と主張するが、ハユ語との関係については、「ハユ語は、おそらくどの言語よりもチェパン語と最も近い代名詞化体系を持っている」とだけ述べるに留まっている。

Thurgood [1985a] は、改新的要素であるハユ語の1人称単数及び2人称単数代名詞がバヒン語、トゥルン語¹、スンワル語のそれと一致する点を指摘し、ハユ語が問題なく、キラント語群に属するとしている。Hansson も、「ワユ語【＝ハユ語】は明らかに他のどのキラント語系言語とも別である。しかし、この言語は、“スンワル・トゥルン”中核語群（“Sunwar-Thulung” nucleus）の構成言語（member）のほとんどと約25%かそれ以上の同源語を、中でもチョーラセ・ジェルン（Chourase-Jerung）（西部キラント語群、南部下位語群）とは約30%の同源語を共有しているが、キラント言語群（Kiranti cluster）外の他のチベット・ビルマ語系言語は、キラント言語群の個々のどの言語とも約20%かそれ以下の同源語を共有する程度の類似しか示していない。従って、ワユ語はここでは西部キラント語群の辺縁的構成言語とみなされている。このような分類を支持する文法上の証拠もある」と主張している。Hodgson や LSI 以外の資料、特に語彙が公表されていない現状では、Michailovsky や Hansson の主張を細かく検証する方法もないが、Thurgood の指摘する改新的要素、格助詞や動詞の人称・数接辞体系にみられる共通要素等を考慮し、ハユ語と周辺のライ・リンブ語系言語との共有要素が将来拡散により説明される可能性を認めつつ、ここでは一応 Hansson の分類に従っておく。

現在、ライ・リンブ語系がチベット・ビルマ祖語から直接分岐した上位語群と主張する者はなく、これをチベット・ビルマ語派の7つの中核語群のひとつとしている Benedict も、彼の分類が全体として暫定的なものに過ぎないことを認めており、幾つかの彼の中核語群が更に上位の語群でひとつにまとめられる可能性も示唆している。従って、低位の（lower-level）下位語群、あるいは、中位の（middle-level）下位語群としてのライ・リンブ語系がどのように上位の語群に分類されるかといった問題が生じるが、証拠はともかく、Shafer と同様に、チベット語と同じ上位語群（[Shafer] チ

ベット語門, [西田 1970] チベット語群, [Egerod] チベット語門, [Glover] チベット語門 (Bodic Microphylum), [Delancey] チベット語門) に分類する学者が多数を占めている。なお, 西田 [1987] でもヒマラヤ代名詞化言語をチベット語群に分類するが, [1989a]⁶³⁾ ではこの言語群の分類については触れていない。これに対して, Thurgood は, 結論を保留し, K. H. Ebert [1988b] は, ライ・リンブ語系と Thurgood [1985b] の提唱するルン諸語 (Rung languages) との関係を主張している。

一方, 第3章で述べたように, R. K. Sprigg [1966a] によるリンブ語の動詞形態論の内的再構 (internal reconstruction) に始まるライ・リンブ語系言語の歴史的研究は, それと平行して, 漸く本格的な比較研究の段階に移行しつつあるようである。Michailovsky [1988b] によるライ・リンブ祖語 (Proto-Rai-Limbu)【=キラント祖語 (Proto-Kiranti)】の *-l の再構の試みは, 資料が非常に限られているが, その第1歩であるといえよう⁶⁴⁾。しかしながら, ライ・リンブ祖語の全体的な再構は, 資料の現状を考えると極めて困難な仕事であろう。

また, Driem [1990] は, 部分的にであれ, 資料の利用できるライ・リンブ語系の7言語 (ハコ語, バヒン語, トゥルン語¹⁾, ドゥミ語, クルン語, ロルン語, リンブ語) の動詞接辞や構造を比較し, 現在のライ・リンブ語系言語の屈折体系が祖語の迂言的動詞構造から派生したとして, ライ・リンブ祖語の動詞の構造の再構を試みているが⁶⁵⁾, 個々の接辞類の再構形の可否を含め, まだ検討されるべき点は多いように思う。

4.5.1. ライ・リンブ語系の統一性

上述のように, Hodgson や LSI の分類を整理し, 代名詞化といった漠然とした規準でなく, 音声的一致と語彙的一致に基づいて, ほぼ現在のライ・リンブ語系【=[Shafer] 東部ヒマラヤ語系; [Hansson] キラント語群】に相当する下位語群を確立したのは Shafer [1953] である。ここでも, ヒマラヤ語系【=[Shafer] 西部ヒマラヤ語系】の言語の場合と同様に, 祖語形に代わるものとして, 古期チベット語 (チベット文語) 形と中期ビルマ語 (ビルマ文語) 形をライ・リンブ語系の同源形と比較し, 音声対応を示しているが, この語系についても, ヒマラヤ語系の場合と同様に, その統一性は, 音声的一致 (対応) よりも語彙的一致, 特にチベット文語とビルマ文語に欠けている, 幾つかの語 (根) の存在⁶⁶⁾ に依存しており, 音声対応は, むしろ下位分類の有効な指標となっている⁶⁷⁾。しかし, 語彙に関しては, ライ・リンブ語系はむしろその多様性で知られている言語群である。

Thurgood [1985a] は, ライ・リンブ語系は, 1人称代名詞 (#go, *uŋ, #kaŋ(-a),

#i/aŋ-ka, *ka, *kaŋ-a)/2人称代名詞(*gana, *in, *an(-a), #kana, #kV-)が改新形であるが、動詞(自動詞)の1人称接辞(*-ŋa, #-ŋaa, #-a?, #-ŋ)と2人称接辞(*-na, *-φ, #-a?)は、PTB *ŋa “1人称”とPTB *naŋ “2人称”を留保しているとする。1人称代名詞形は、以前の *ka+*ŋa を、2人称代名詞形は、*ka+*naŋ を反映しているようであり、この *ka は“主題／能格”接辞に来源するようであると、これらの特徴の独特な組み合わせ(configuration)がキラント諸語をまとめていると述べている。しかし、個々の代名詞や人称接辞は、その再構形(*)や近似的再構形(#)が多様であることから明らかなように、人称代名詞や人称接辞は、この語系のまとまりを示すというよりも、むしろ下位分類の規準として有効であるように思われる。

一方、Hansson [1988] は、論文の冒頭で、キラント諸語【＝ライ・リンブ語系】について次のように述べている。

言語学的意味で、“キラント (Kiranti)” は、多かれ少なかれ、それらの隣人と近い関係にある複数の言語連鎖 (chains of languages) に配置できるチベット・ビルマ語系のひとつの言語群に使用されよう。しかしながら、この[言語]群は、全体として、共通チベット・ビルマ語系でない少量の同源語しか共有していない(共有された同源語は、全部で約20%～25%)。その[分布]地域の比較的小さな広がりには比して、類似の程度が低いことは、この“Kiranti”言語群の異質的(heterogeneous)な起源を指していると思われる。これらの言語は、長期間互いに影響し合った、チベット・ビルマ語系[民族／部族]集団(Tibeto-Burman groups)の数次の移住の波により生じたと想定できる[HANSSON 1988]。

ライ・リンブ語系言語の地理的分布の現状からみて、この“言語連鎖”の意味は、いわゆる方言連続体(dialect continuum)や近い関係にある言語の連続体とは理解できないが、多分かつては、または部分的には現在も、このような隣接／近接言語同士は互いに近い関係にあり、多くの共通点を持ち、ある種の連続体を形成していた、または、現在も部分的に形成している方言群／言語群が移動を繰り返し、現在のような錯綜した分布を示すようになってきているが、地理的分布とは別に、隣接／近接言語同士が近い関係にある言語連続体に整理できるという意味ではないと思われる。従って、この同じ言語連鎖の両端に位置する言語同士には、類似点は少ないが、隣接／近接言語同士には多くの類似点が認められ、この連鎖(連続体)であることにより、類似の平均値は小さくても、まとまりのあるひとつの語群を形成しているというのであろう。

この語系の言語を母語とする民族集団は、少なくともライ族、ヤッカ族、リンブ族、スンワル族、ハユ族等の諸民族からなっており、更に、東ネパールの丘陵地帯のその他の先住民族で、これらの民族集団に同化吸収されたものもあったであろう⁶⁸⁾。これらの先住民族は、必ずしもチベット・ビルマ語系の民族であったとは限らなかったであろうし、上掲のハユ族やライ・リンブ語系民族でないタミ族等もその一部であった可能性がある。

筆者は、先に(第1章)「歴史的には、おそらく19世紀の初頭頃までは、ライ族も今より少ない下位部族に分かれ、その居住地域もほぼ下位部族毎にほぼ一定の範囲内に収まっていたという状態が想定されるが、云々」と述べたが、Hansson のいう「数次の移住の波」によりこの狭い地域を埋めていった様々な民族がライ族やリンブ族としてそれぞれ同一民族意識 (ethnic identity) (このような民族意識は、通常同一言語意識、同一文化意識を背景とする) を持つようになるには、やはり相当の年数が必要であると思われるので、初期の「移住の波」が押し寄せたのは、再度の移住の動きが始まる18, 19世紀よりも更に何世紀も遡った時代であったであろう。

4.5.2. ライ・リンブ語系の下位分類

Hansson [1988] は、利用した資料に問題があるとはいえ、ライ・リンブ語系言語(変種)に関して、言語と方言の識別から始まり、その分布状況の最新の情報と同語系の言語及び方言の最も詳細な下位分類を与えてくれるものである。本論文の目的は、ヒマラヤ諸語の分布(第1章と第2章)、研究状況(第3章)[以上、(上)], 分類(第4章)[(中)] 及び類型的言語特徴(第5章)[(下)] に関する最新の情報を提供し、同時にそれが可能な部分については、筆者自身の分析、評価、見解等を述べることにある。そこで、これまでも度々指摘したように、Hansson は、彼の方法論や分析・分類の根拠をほとんど具体的に示していないにもかかわらず、ここでは、彼の言語変種の同定や下位分類をほぼそのまま採用して来た。しかしながら、Shafer [1953, 1967] は、ライ・リンブ語系言語の分類に関して、その根拠をかなり明確に示しており、Shafer と Hansson の分類を比較することで、ある程度後者の結論を検証することができる。さらに、第2次「ネパールの言語調査」を監督する立場にあった W. Winter は、Hansson [1988] 以前に、ライ・リンブ語系の10言語変種を取り上げ、言語と方言の識別及び下位分類に関する予備的な研究⁶⁹⁾を行っており [WINTER 1987], 彼の方法論や分類指標から Hansson のそれもある程度推定できるとと思われる。そこで、本節では、Shafer と Winter の分類や分類方法を取り上げ、Hansson の分類

と比較してみることにする。

なお、本章(4.1.3.4.)では、Hansson [1988] の分類を伝統的な系統的分類の図式に従って表示したが、Hanssonはこの論文で個々の言語や方言に認められる複数の歴史的成層の識別や言語特徴の拡散に随所に言及しており、彼が言語の相互関係を単純な系統樹的な関係以上のものと考えていることが察せられる。従って、この表示様式が、彼の意図を忠実に反映していない可能性もあることを述べておくべきであろう。

次頁の子音対応表は、Shafer が挙げている対応系列の一部を表にまとめたものである。対応系列 A, B, C, D は、閉鎖／破擦音の対応であるが、無声無気音、無声有気音と有気音をそれぞれ k, kh, g で表している。なお、Shafer のヒマラヤ諸語の全体的分類については、本章の第1節(4.1.2.1.)を参照されたい。勿論、Shafer は初頭子音のみならず、母音の対応も提示しているが、問題が複雑になるというだけでなく、Shafer の使用した Hodgson の資料は、反舌音を区別していない点を除けば、子音の表記に関しては信頼性が高いという理由からここでは子音の対応を主に取り上げた。

Hansson によれば、Shafer の利用した Hodgson の資料中のルンチェンブン語、ランビチョン語、ロホロン語、バラリ語は、それぞれパンタワ語(北部方言?)、ムガリ語、北ロルン語、西メオハン語に相当するようであり、また、N. K. Rai によれば、LSI のライ語資料は、コイ語と一致するという(第2章参照)。Shafer のカンブ語とキラント方言が Hansson のどの言語に相当するのか不明であるが、カンブ語については、表4とその註1を参照されたい。なお、Hansson の資料と Hodgson [1847, 1857a, 1857b, 1857d, 1858a] の資料との間で両者の言語名が一致しないのは、ほぼ1世紀半前後の年月が経っていることと、もともと言語名が多様であったことに加えて、その間の部族(言語)の移動による同一部族(言語)の分岐の結果、言語名が同じでも、Hansson の資料の言語が Hodgson の資料の言語の直系の言語であるという保証がない点に留意されたい(例、Hodgson のヤカ語と Hansson のヤッカ語)。

ここで、Shafer の取り上げている言語は、Hansson [1988] では、次のように分類されている。

西部キラント語群

スンワル・トゥルン中核言語群

南部下位語群：チャーラセ語【＝チャーラジャ語】

東部下位語群：トゥルン語₁

西部下位語群：バヒン語、スンワル語

表 4 ライ・リンブ語系言語の子音対応 [SHAHER 1953, 1967]

対応系列 ¹⁾	A	B	C	D	*r-	*-r-	*-l-	*-y- ²⁾	*-p	*-t	*-r	*-l
STC (PTB)	*k	*k	*k	*g	*r-	*r-	?	*ø	*-p	*-t	*-r	*-l
古期チベット語	kh	...	kh	g	r	r	...	y	b	d	...	...
中期ビルマ語	...	k	kh	k	r	r	...	?	p	t	...	...
西部語支												
バヒン語群												
バヒン語	k	kh	kh	g	r	r	l	l	p	t	r	l
スンワル語	k	kh	...	g	r	r	l	...	p	t	ø ⁴⁾	...
トゥルン語 ₁	g	g	kh	g	r?	r	l	l	p	? ³⁾	r	l
チャーラシャ語	k	kh	kh	g	r?	r	...	l	p	t	r	l
ドゥミ語群												
ドゥミ語	k	k	kh	g	r	r	l	l	p	?	r	l
カリン語	k	k	kh	g	r	r	l	l	p	? ³⁾	r	l
ライ語 ¹⁾	k	...	kh	g	r	r	r	ø	p	?	...	l
東部語支												
カンブ語群												
カンブ語	g	...	kh	k	r	ø	...	ø	p	t	...	l
(=クルン語) ¹⁾	g	g	kh	k	r, g	ø	...	ø	p	t	r	l
(=サンバン語) ¹⁾	g	g	kh	k	r, g	ø	...	...	p	t	r	?
ナチェレン語	g	g	kh	k	r	ø	...	...	p	t	r	l
ボントワ語群												
ロドン語	g	g	kh	k	r	ø	ø	l?	p	t	r	ŋ
(=チャムリン語) ¹⁾												
ワリン語 ¹⁾	g	g	kh	k	r, y	ø	...	...	w	r	n	ŋ
[ルンチェンブン方言]	g	g	kh	k	y?	ø	ø	...	w	r	n	ŋ
[キラント方言]	g	g	kh	k	y	ø	ø	...	w, v	r	?	ŋ
[ドゥンマリ方言]	k	?	kh	k	r	ø	...	...	b	q?	n	n
ランピチョン語 ²⁾	kh	kh	kh	k	r, y	ø	...	...	b	q?	?	n
(=チンタン語) ¹⁾	kh	kh	kh	k	r, y	ø	...	...	b	q?	n	n
ロホロン語	g	g	kh	k	y	ø	ø	...	b	q?	n	n?
(=バラリ語) ¹⁾	g	g	?	k	r, y	ø	ø	...	b	d	?	n
リンブ語 ¹⁾	kh	kh	kh	k	y	ø	ø	...	b	r	... ⁴⁾	...
[ヤカ方言]	kh	kh	?	k	y	ø	ø	...	b	ø	?	n

1) 上表中で、X(=Y) の Y は、X の異なる地域で採録された同じ言語であると注記して、Shafer が分類表には挙げていない言語であるが、チャムリン語以外は、Shafer [1953, 1967] の同源形比較表には挙げてある。また、X[Y] の Y は、Shafer が分類表で X の方言とみなしていると思われる言語である。

介音 *-r- の例は、「泣く」(WT khrap-; STC *krap) と「6」(WT drug, WB khrok; STC

*d-ruk) で, *-l- の例は, 「手; 足₂」, 「呼ぶ」と「熱い」であるが, WT, WB にも, STC にも同源形がなく, *-y- の例は, 「犬」(WT khyi; WB khwe; ; STC *kway) だけである。末尾子音の *-p の例は, 「泣く」(上掲), 「立つ」(WB rap-; STC *g-ryap) と「来る」(WT, WB, STC に同源形なし) で, *t の例は, 「殺す」(WT bsad-[完了形], WB sat-; STC *g-sát) と「行く₂」(WT, WB, STC に同源形なし) である。*-r の例は, 「酸い」(STC *s-kywar/*s-wa・r) のみで, Shafer は, WT の同源形を挙げているが, Benedict は, WT skyur-<*s-kywar とし, キラント語系のバヒン語からナチェレン語までの語根は, *sgyur<*s-kywar に来源し, それ以外の言語の語根は, *s-wa・r に来源するとしている。最後の *-l- の例は, 「村」(STC *dzyal~*tyal) と「平らな」(WT, WB, STC に同源形なし) である。

- 2) *-y- の例である「犬」は, ライ・リンブ語系の一部の言語 (Shafer の東部ヒマラヤ語系の西部語支の言語) にのみ, 介音 -l- が現れる。Shafer は, *y>l の変化を考えているようであり, Benedict も, この -l- を含む形式を WT 形, WB 形と同源形としているが, -l- について説明していない。東部語支では, ロドン語形 khli 「犬」だけに -l- の反映形が認められるが, Shafer は, これを借用語とみなすべきだとしている。いずれにせよ, *y>l の変化は, チベット・ビルマ諸語でも, 他に例のない変化であると思われるが, WT 形や WB 形と厳密な意味での同源形が単に同じ単語族に属する “allofam” (Matisoff の用語) か明らかでない。
- 3) 現代トゥルン語₁ 形 [ALLEN 1975a] とカリン語形 [CSDPSLN-4] で, 「殺す」は, /set-/ , /sén-/ で, カリン語の「行く」は, /khwán-/ である。
- 4) 現代スンワル語 [CSDPSLN-4] とリンブ語 [WEIDERT=SUBBA 1985 (パンタレ方言); DRIEM 1987a (ベダッペ方言)] で, 「酸い」は, /gyur-syo/, su・pma (<*su・t-); syutma? で, 「平らな」は, /blem-syo/ 「平地」, tembe? 「平地; 平面」, tembho・ 「低地」; tembho 「低地; 平野」である。

非中核言語群

北西部中間語群: カリン語, ドゥミ語, コイ語【=ライ語】

中央キラント語群

バンタワ・クルン中核言語群

南部位語群: バンタワ語【=ルンチェンブン語】, チャムリン語【=ロドン語】, バラリ語【=西メオハン語】

北西部下位語群: サンパン語, クルン語, ナチェリン語【=ナチェレン語】
([Shafer] カンプ語=サンパン語=クルン語)

非中核言語群

ドンマリ語群: ドンマリ語, ワリン語

東部キラント語群

リンブ・ロルン中核言語群

東部位語群: リンブ語

南部位語群: チンタン語, ムガリ語【=ランビチョン語】, ヤッカ語【=ヤカ語】

北部/北西部下位語群: 北ロルン語【=ロホロン語】

Shafer と Hansson の分類を比較すると, 最も大きな相違点は, Shafer はライ・リ

ンブ語系を西部と東部の2つの語支に分けているのに対して、Hanssonは西部、中央、東部の3つの語群にまず分類している点であろう。Shaferの対応表は、*有声(閉鎖/破擦)音の留保(西部語支)と無声化(東部語支)と*介音(*-r-, *-l-, *-y-)の留保(西部語支)と喪失(東部語支)で、両語支が明確に区別されている。更に、西部語支の下位分類も、下位語群の名称は異なっても、完全に一致している。更に、Bによって、バヒン語群及びチョーラシャ語とドゥミ語群に分けられるが、この対応表からは、トゥルン語₁の位置付けははっきりしない。母音の対応を考慮すると、バヒン語群、チョーラシャ語、トゥルン語₁では、*u>u である。ドゥミ語群では、*-ŋの前では、*u>u であるが、*-kの前では、変化している。しかし、母音の対応は、全体的に、はっきりしておらず、分類指標としてはあまり有効に思われない。Shaferが、対応系列として挙げていない対応例(例えば、「8」(WT brgyad, WB hrac; STC *(b)gryat)の初頭音は、バヒン語群とトゥルン語₁では、y- であるが、ドゥミ語群では、r- である)や語彙の一致(例えば、「泣く」(STC *krap)は、西部語支では、トゥルン語₁とチョーラシャ語だけに残っている)を考慮にいれて、このような分類に到達したのであろう。

一方、この対応表に基づいて、Shaferの東部語支を更に2つに下位語群に分けるとすれば、多分カンブ語群とボンタワ語群のロドン語までとワリン語からヤカ方言までに区分するか、カンブ語群からキラント方言までとドゥンマリ語からヤカ方言までに区分するかのいずれかが考えられる。しかし、Hanssonの分類では、バラリ語を除き、ランビチョン語からヤカ方言までが東部キラント語群に、バラリ語を含めた残る東部語支の言語が中央キラント語群にまとめられている。その一方で、Shaferのカンブ語群の諸言語は、Hanssonの分類でも、同一下位語群(北西部下位語群)に分類されており、全体としては両者の分類には一致している点の方が多いといえる。ShaferとHanssonの分類の不一致には、2人の挙げた言語の言語名が同じでも、実際は別の言語である可能性、Shaferの利用した資料の量と表記の正確さやほぼ1世紀半の間に於ける他言語の影響等の理由が考えられる。

Winter [1987] は、第2次「ネパールの言語調査」で収集された資料から、ライ族の10の「言語変種」(Winterは、言語か方言か未識別の言語を“idiom”と呼んでいるが、適当な訳語がないので、ここでは「言語変種」と訳しておく)の分類を試みるが、まず分類指標とする言語特徴の選択に当たって次のような点を考慮している。

「ネパールの言語調査」に用いられた調査表の語彙項目数は、500項目に上るが、動詞の範疇以外では、中核的語彙にも、借用語(主にネパール語からの借用語)の割

合が大きく、借用語は言語の相互関係を知るためには、有効でないとして、分類指標には、辞書の語彙を除き、(1) 音声対応と (2) 格標識 (文法的語彙) を選んでいる。また、音声対応を立てるに当たり、その基準となる言語に最も分布域が広く、しかも、音韻面で保守的な傾向を示すバンタワ語が選ばれ、いわば、暫定的祖語とされている。

選ばれた分類指標が、バンタワ語の改新的特徴である場合には、前バンタワ語形式 (*X) を再構し、更に、問題の指標の資料が不完全な場合には、パターンの均整性 (pattern symmetry) に基づいてその空白を埋め、確信できない場合は空白のままにしている。

Winter の選んだ言語変種のすべてを第2章 (2.2.2.2.) に解説した Hansson のライ・リン語系言語と確実に比定することはできない。Winter のデワン・ヤッカ変種とヤッカ変種については、両様の比定が可能である。([] 内は、変種の略称を、【 】内は、Hansson の言語との比定を示す。)

[A]: ベルハラ行政村のアタバリヤ変種 (ダンクタ郡) 【=ベルハリヤ語】

[Bh]: バヒン変種 (オカルドゥンガ郡) 【=バヒン語】

[Bd]: バンダレ変種 (Bangdale) (イラム郡) 【=ナチェリン語】

[B]: バンタワ変種 【=バンタワ語】

[C]: チャムリン変種 (コタン郡ディクテル行政村) 【=チャムリン語】

[D]: デワサリ変種 (Deosali) (イラム郡) 【=トゥルン語】

[DY]: デワン・ヤッカ (Dewan-Yakkha) (イラム郡) 【=ヤッカ語／南ロルン語】

(DY の属格形は -mi で、音節末軟口蓋鼻音に終わる尾部に -on が含まれるが、南ロルン語でも、属格形は -mi であるが、対応する尾部が -un である。)

[T]: トゥルン変種 (ボジュプール郡) 【=トゥルン語₁】

[S]: サンバン変種 (コタン郡ディクテル村) 【=サンバン語】

[Y]: ヤッカバ変種 (Yakkhaba) (サンクワサバ郡) 【=ヤンペ語／ヤンブ語】

この比定に従って、まず Winter の選んだ言語変種が Hansson の分類ではどのように位置付けられているかを示すと次の通りである。

西部キラント語群

 スンワル・トゥルン中核言語群

 東部下位語群: トゥルン語₁ (Winter のデオサリ変種を含む)

 西部下位語群: バヒン語

中央部キラント語群

 バンタワ・クルン中核言語群

南部下位語群：バンタワ語, チャムリン語

北西部下位語群：サンバン語, ナチェリン語 【=[Winter] バンダレ変種】

東部キラント語群

リンブ・ロルン中核言語群

南部下位語群：ベルハリヤ語 【=[Winter] (ベルハリヤの) アタパリヤ変種】,

ヤッカ語 【?=[Winter] デワン・ヤッカ変種】

北部/北西部下位語群：ヤンペ語/ヤンブ語 【=[Winter] ヤッカバ変種】,

南ロルン語 【?=[Winter] デワン・ヤッカ変種】

分類指標は、それぞれ次のような型に細分されている。

(1) 音韻指標

① バンタワ変種 (p t c k) との対応

(a) p t c k (A, Bd, C, DY, S)

(b) b d j g (Bh) /b d j (D)

(c) b d c g (T) /b d c (Y)

② バンタワ変種 Bantawa (b d g)

(a) b d (Bd, C, D, S, T)

(b) p t (Bh)

(c) p^h ʔ (A, DY)

(d) p^h t^h (Y)

③ バンタワ変種 (p^h t^h c^h k^h)

(a) p^h t^h c^h k^h (S)

t^h c^h k^h (A, C)

c^h k^h (Bd)

k^h (DY)

(b) s/c k^h/k (Bh)

c (D)

(c) c^h k^h/k (T)

(d) b s k^h/g (Y)

④ バンタワ変種 (b^h d^h g^h)

(a) b^h (Bd, C)

d^h g^h (S)

(b) p^h (A, T)

- (c) p (Bh)
- (d) b (Y)
- ⑤ 母音間に於ける閉鎖音の軟音化 (lenition)
 - (a) [p, t] > [w, r] (B)
 - (b) 無軟音化 (S, C)
 - (c) p-~-b-, t-~-r-; ?-~-d- (A)
 - (d) p-/p^h-~-b-; t-~-d- (DY)
 - t-~-d- (Bh)
 - (e) p^h-~-b^h-, t^h-~-r- (Y)
- ⑥ 末尾軟口蓋音の留保
 - (a) 末尾軟口蓋音の留保 (B, A, DY, Y)
 - B: -ak, -uk (<*-ik), -uŋ, -aŋ, -uŋ (<*-iŋ), -uŋ
 - A: -ek, -aŋ, ik, -iŋ, -ok, -uŋ
 - DY: -ək, -aŋ, -ik, -iŋ, -ok, -uŋ
 - Y: -ek/-ak, -aŋ, -ik, -iŋ, -uk, -oŋ
 - (b) 末尾軟口蓋音 (特に閉鎖音の全体的, 鼻音の部分的) 喪失と先行母音の円唇化の傾向 (例. -ak > -o) (Bh, Bd, C, S)
- ⑦ 母音の前に於ける *r の留保
 - (a) *r(/__V) の留保 (A, Bh, Bd, C, D, S, T)
 - (b) *r > y(/__V) (B, DY, Y)
- ⑧ 子音の前に於ける *r の留保
 - (a) *r > r(/__C) (Bh, C, S)
 - (b) *r > ϕ(/__C) (A, Y)
 - (c) *r > n(/__C) (B, Bd)
- ⑨ 母音の前に於ける *l の留保
 - (a) *l > l(/__V) (B, Bh, C, S)
 - (b) *l > r(/__V) (Y)
- ⑩ 子音の前または末尾に於ける *l の留保
 - (a) *l > n(/__C, __#) (B)
 - (b) *l > l(/__C) (A, Bh, Bd, C, D, DY, S, T, Y)
- ⑪ 末尾 *t, *-n の留保
 - (a) *-t > -t, *-n > -n (東部 B, A)

- (b) *-t, *-n の口蓋化 (と軟音化) (西部 B, Bd, C, S)
- ⑫ 1 人称単数代名詞
- (a) uŋka (B, A)
- (b) kaŋ (Bd, C, S); ga~gaŋ (Y); go (D, T); gu (Bh)
- ⑬ 2 人称単数
- (a) k^hana (B, C)
- (b) gana (D, T)
- (c) an (Bd); ana (S)
- (d) han (A); hen (Y)
- (e) gyo (Bh)
- ⑭ 能格／具格接尾辞
- (a) -ʔa (B); -wa (C); -wa~-a (S); -a (Bd)
- (b) -ka (D, T)
- (c) -ŋa (A, DY)
- (d) -de~-e (Y)
- (e) -mi (Bh)
- ⑮ 於格接尾辞
- (a) -da (B, C, T); -ra (D) (?)
- (b) -pi (Bd, S); -be (DY); -bi (Y)
- (c) -e (A, Bh)
- ⑯ 属格接尾辞
- (a) -wo (B); -ka~-ga (DY)
- (b) -ha (A)
- (c) -mi (S, Y); -mo (C); -ma (D, T)
- (d) -ke (Bh)
- ⑰ 従属接尾辞
- (a) -wo (B); -ko (Bd, C, S)

なお、バンタワ、チャムリンとサンパンの3つの言語変種を除いた、残る7つの言語変種は、17種の分類指標中の2種から7種の指標について、どの型に属するのか不明である。この不明分類指標数は次の通りである。

[A] (2 種 : ⑨, ⑰)

[Bh] (3 種 : ⑪, ⑯, ⑰)

[Bd] (2種: ⑤, ⑨)

[D] (7種: ④, ⑤, ⑥, ⑧, ⑨, ⑪, ⑰)

[DY] (7種: ④, ⑧, ⑨, ⑪, ⑫, ⑬, ⑰)

[T] (6種: ⑤, ⑥, ⑧, ⑨, ⑪, ⑰)

[Y] (2種: ⑪, ⑰)

次に, Winter は, この10言語変種の各対毎に共有される特徴を数え, それを有効な指標の数 (17~10) で割り, 百分率 (%) を出せば, 2言語間の関係が量的に表示できるとする。つまり, 共有率が高ければ, 高いほど両言語の関係が近いことになる。結果は, 表5に示す通りである。

(表5では, これらの言語変種は, 比較の便宜上, 上掲の Hansson の分類表に於ける位置を考慮して配置しており, Winter の論文に於ける表示方式とは異なっている)。

表5 分類指標中の共有特徴数
(各列の2つの数値の上の数値は, 共有特徴数を, 下の数値は, 共有率を示す。)

	T	D	Bh	B	C	S	Bd	A	DY	Y
T		8	3	2	6	5	5	3	1	4
%		<u>80</u>	<u>33</u>	18	55	46	45	27	13	36
D			5	2	6	5	5	2	1	3
%			<u>56</u>	20	60	50	50	20	13	33
Bh				1	6	6	4	3	2	2
%				07	43	43	33	23	22	14
B					10	8	8	5	5	2
%					<u>59</u>	<u>47</u>	<u>53</u>	33	50	13
C						15	12	4	3	3
%						<u>88</u>	<u>80</u>	27	33	20
S							14	3	4	4
%							<u>93</u>	20	40	27
Bd								4	4	4
%								29	44	31
A									6	4
%									<u>60</u>	<u>23</u>
DY										4
%										<u>40</u>
Y										

もし言語変種間の関係が Hansson の分類を支持するものであれば, 表5中の下線

で示した共有率以外の数値は相対的に小さい数値となる筈であるが、同一言語とされる (1) トゥルン変種とデオサリ変種 (80%), 同一下位語群の (2) バンタワ変種とチャムリン変種 (59%), (3) サンパン変種とバンドレ変種 (93%), (4) デワン・ヤッカ変種とアタパリヤ変種 (60%) 等は、確かに比較的高い数値であるが、(1) の数値が最大であるという予想に反して、実際には (3) の数値が最大であり、(2) の 59% と (3) の 60% は、(4) チャムリン変種とサンパン変種 (88%) より遙かに低く、(5) チャムリン変種とデオサリ変種 (60%) と同程度の関係を示していることになる。

Winter は表 5 に示された結果に基づいて、「多少恣意的なことは確かだが、もし 2 つの言語変種間の 80% の一致の水準を、それより上で 2 つの言語変種がひとつの言語の方言であるとレッテルを張ることを望む閾値と定めれば、デオサリ変種とトゥルン変種、チャムリン変種と‘サンパン’変種とバンドレ変種は、それぞれひとつの言語の方言にまとめられねばならない。他の言語変種に関しては、いずれも他のどの言語変種とも方言関係に加わることはないであろう」と結論している。

この言語・方言間の関係を量的に示す方法は確かに興味深いが、問題は Winter 自身も指摘しているように、バンタワ変種、サンパン変種とチャムリン変種を除く他の言語変種のいずれかには適用できない分類指標が 10 種含まれている点であろう。例えば、(3) トゥルン変種とデオサリ変種に有効な指標数は、10 種に過ぎず、そのうち 8 種が一致しているので 80% となるが、もし資料が充実し、残る 7 種の指標も適用できるようになり、その 7 種の指標全部で一致したとすれば、両言語変種の共有率は 88% になる。逆に、最高値を示す (3) サンパン変種とバンドレ変種の場合、15 種の指標が比較できるが、残る 2 種が一致しなければ、両言語変種の共有率は 82% まで下がり、ある程度 Hansson の結論を支持する結果が得られる。また、全部の言語変種に適用できる 7 種の指標だけを取り、同様な方法で百分比を出してみても、Hansson の分類とは一致する結果は得られない。この不一致の原因は、ひとつには、Winter の音韻指標の対応系列の型の同定の仕方に問題があるようである。

Winter の方法は、百分比に換算し、量的に言語・方言の相互関係を表そうとする点は別にしても、極めて正統的な方法である。ライ・リンブ語系言語の下位分類に際して、Hansson も基本的にはこのような方法に従ったと考えることができる。Winter と Hansson の結果の相違は、結局分類指標の種類と数や処理した言語変種数の差にあるのではないかと考えている。

当初、この章では、従来の系統的分類法を概観した結果に基づいて、問題点を指摘し、更に、シナ・チベット語族の比較研究でしばしば取り上げられている単語族

(word family)⁷⁰⁾の問題、拡散の問題や橋本萬太郎[1978]の提唱した“農耕民型の言語”と“遊牧民型の言語”の問題⁷¹⁾等についても、多少考察するつもりであったが、時間の関係上、今はここでこの章を結ばざるを得ない。確かに、系統樹的な分類は、歴史言語学で長い伝統に裏付けされた比較方法と表裏一体をなすものであるが、チベット・ビルマ語族の歴史には、このような系統的分類だけでは、うまく説明できない現象が数多く認められるように思われる。事実、伝統的な比較方法を順守した Shafer も、ヒマラヤ諸語の分類では、系統樹的分类では説明しきれない言語の相互関係について注記し、元来文化人類学者であり、文化・言語の拡散現象に関心の深い Benedict は、系統的分類に触れる一方で、カチン語を中核に置き、チベット・ビルマ諸語の錯綜した関係の図式化を試みたりしている⁷²⁾。また、社会言語学に対する関心が高まる中で、チベット・ビルマ語系言語の発達にピジン・クレオール現象をみる学者⁷³⁾もいる。筆者は、伝統的な比較方法を否定するものではないが、このような様々な観点からヒマラヤ諸語、更にはチベット・ビルマ諸語の歴史的発展を考察してみることが必要であると考えている。

- 1) LSI 全体の編者である G. A. Grierson は、LSI [1909] の序文に、Müller が *Letters to Chevalier Bunsen, on the classification of the Turanian languages* (1854) で最初にチベット・ビルマ語派の分類を試みたこと述べているが、この本は参照できないので、ここでは、Müller [1861] の分類を示した。両者に違いはないようである。Grierson は、この語派の統一性 (unity) を最初に認めたのは Hodgson であるとし、その後の研究者として、A. Rémusat, J. Logan, C. J. F. S. Forbes, W. Grube, D. Kuhn と A. Conrady 等の名前と関連する彼らの論著を挙げているが、これらの論著の一部は入手できなかったことや、入手できたものもヒマラヤ諸語の分類に特に言及していないことから本文の解説から割愛した。いずれにせよ、本章の目的は、総合的なチベット・ビルマ語派研究史ではなく、ヒマラヤ諸語の分類に関する Shafer, Benedict 及びそれ以降の諸説の解説と検討にある。なお、トゥーラニア語族の名称を最初に使用したのは Müller でなく、むしろ Hodgson のようであるが、彼のチベット・ビルマ語族全体の分類やトゥーラニア語族に関しては J. J. Bauman [1975] に優れた解説がある。
- 2) Brandreth のこの論文は、1874年の第2回国際東方学者会議における講演で、Müller が、「私が20年ほど前に Bunsen 宛の書簡『トゥーラニア諸語について (On the Turanian Languages [sic?])』で、非アーリア語派のインド諸方言 (Non-Aryan Indian dialects) に関して当時知られていたことの要約を試みた頃からこれらの諸方言の分類になんらの進歩といえるような進歩はなされていない」と述べたのに答える形で書かれたものである。なお、当時の大英帝国のインドには現在のインドの外にパキスタン、バングラデッシュ、スリランカ [旧セイロン] 及びビルマ [現ミャンマ (Myanmar)] も含まれていた。
- 3) クスンダ語の資料としては、Hodgson [1857a] 以外に、J. G. Reinhard and S. Toba [鳥羽季義] (1970) *A Preliminary Analysis and Vocabulary of the Kusunda Language* (Kathmandu: SIL) があり、音素分析と語彙が収録されている。鳥羽氏の話では、当時2人のクスンダ族のインフォーマントがいたが、1人は病死し、その後、残る1人も行方不明となったとのことである。現在、この言語は、既に死語となっている可能性が高いが、Caughley [1982b: 4] は、ナラヤニ (Narayani) 川とトリリスリ (Trisuli) 川を隔てて、チェパン語域の西と北に、クスンダ族の僅かな残存者が今も住んでいると記している。しかし、彼らがクスンダ語を現在も話しているか否かは不明である。
- 4) 第2章の概説 (2.1.) で述べたように、“ライ (Rai)”は、カンブ族 (Khambu) の敬称に由来する部族の総称であり、従って、ライ語 (方言) は、通俗的には、その部族の話す諸言語、

諸方言の総称である。この *LSI* にライ語 (方言) として記録されている言語は、N. K. Rai (2.2.2.2.11.) によれば、現在のコイ語と一致するとのことである。

- 5) Shafer [1955: 99, 1966: 1] は、系統的分類における各段階の語群を表す用語とそれに対応する語群名の派生接尾辞を次のように定め、用語法を統一している (上位語群から下位語群へ)。“Family”「語族」(-an), “Division”「語門、語派」(-ic), “Section”「語系」(-ish), “Branch”「語支」(不定), “Unit”「語群」(不定)。しかし、その後この用語法は一般に採用されるところとはなっていない。このような用語法が確立されることが望ましいが、系統樹的な下位分類が詳細になればなるほど、中間段階が増えることになり、Shafer の用語では、数が追いつかなくなって来る。後述する W. W. Glover の分類では、おそらくこの点を考慮してか、より柔軟性のある M. Swadesh/S. A. Wurm の用語法 (註65参照) に従っているが、彼らの用語法の場合、逆にその用語を日本語で訳し分けるのは、英語の場合と同様、生物学の分類法の用語でも利用しない限り不可能である。(実際、「語門」は生物学の訳語「門、部門」に倣ったものである。) 問題は、日本語では、伝統的に専門分野別に用語が区別される慣行があるので、生物学での訳語が必ずしも言語学に馴染まない点であろう。

用語に関する今ひとつの問題点は、例えば英語ではただ“Kiranti”となっていて、日本語訳では、キラント“語系”、キラント“諸語”、キラント“語群”のように、常に分類上の位置を表す用語を付けて訳さなくてはならず、著者の用語法全体から判断して訳語を決めなくてはならない場合がしばしばあることである。日本語でも、“Tibeto-Burman”, “Bodish”等を“チベット・ビルマ”、“ボーディシュ”等とただローマ字化するだけでよいといった慣行が一般化すれば、このような問題はなくなるが、現状では無理なようである。

従って、この論文中では場合によっては、Shafer の用語の日本語訳にみられる段階別用語法に従っているが、それに対応する英語名は必ずしも一様ではない。

なお、Shafer は、言語名でも、Hodgson や *LSI* 等の古い資料に記録された語彙の表記でも、“ch, chh, j, sh, zh”と表記されている硬口蓋子音を“tʃ, tʃh, dʒ, ʃ, ʒ”と表記し直しているが、ここでは、地名、言語名等の固有名詞の表記には前者を、語彙の表記には後者 (ただし、s→ʃ, z→ʒ) を採用している。しかし、チベット文語形やビルマ文語形の転写では、伝統的な転写法 (c, ch, j, ʃ, ʒ) に従っている。

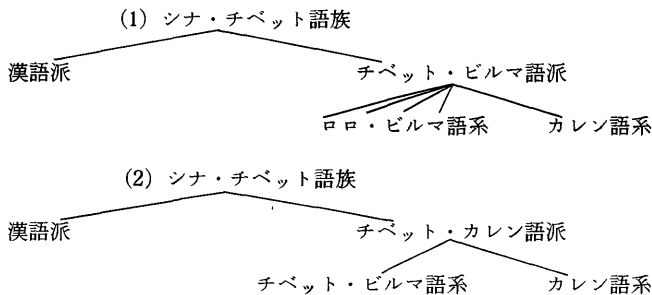
- 6) Shafer のシナ・チベット諸語研究の集大成である『シナ・チベット語族概論 (*Introduction to Sino-Tibetan*)』は、5 分冊からなるが、第4部 (1970) と第5部 (1974) はいずれも著者の没後 (1969) に刊行されたものである。全体の目次は、第1部にでなく、第5部に付けられている。(なお、この本は、1974年に1巻に合本されて刊行された。)

シナ・チベット語族に於けるカレン語門と他の語門との関係について、Shafer は、「カレン語門は、シナ・チベット諸語群の最も南の語群のひとつであり、語彙的にはビルマ語門的であるが、顕著にチベット語門的でもある幾つかの音声的、語彙的な特異点のせいで、現在のところ、別の語門とするのが好ましいということを除けば、それは、チベット語門とビルマ語門の中間の間と呼べるほどであろう」と述べている [SHAfer 1966: 8, fn. 1] 【= [SHAfer 1955: 107-108, fn. 72]】。カレン語門は、5 語門の最後に挙げてあるが、第5部 [1974] では、この註に述べられた見解に従ってか、ボド語門の前に入れられている。なお、註12も参照されたい。

- 7) Shafer [1955] と [1966] は実質的には同じ分類であると思われるが、語支以下の段階は、提示様式に相違がみられる上、いずれにも曖昧な部分がある。次図には、Shafer [1966] を中心に他の諸論文も参考にして解釈した点もある。
- 8) Shafer [1955: 102, fn. 25, 1966: 3, fn. 7] に、「クルン語とサンパン語は、異なる地方で記録された同一言語である」と注記されている。Hansson [1988] は、同一下位語群に分類するが、別の言語としている。なお、Hodgson [1857b] や *LSI* [1909] のライ・リンプ語系言語の資料は、それだけから言語の同定を行うには充分とは思われない。また、これらの文献中の言語名が必ずしも現在の言語名と一致しない場合 (次註参照) もある。
- 9) Shafer [1955: 102, fn. 26, 1966: 3, fn. 8] では、「チンタン語は、別の地方の同一言語である」とされている。しかし、Hansson [1988] は、Hodgson (と *LSI*) のランビチョン語を現在のムガリ語と同定し、ムガリ語は、チンタン語と同一下位語群に属する別の言語としている。
- 10) Shafer [1955: 102, fn. 27, 1966: 3, fn. 9] に、「バラリ語は、異なる地方の同一言語である」と記されている。Hansson [1988] は、ロルン語【=ロホロン語】を北ロルン語と南ロルン語に分けるが、Hodgson (と *LSI*) のロホロン語を北ロルン語と同定し、Hodgson (と *LSI*) のバ

ラリ語には、西メオハン語との同定を示唆している。

- 11) Shafer [1955: 102, fn. 28, 1966: 3, fn. 10] で、「リンプ語とヤカ語は、他の東部ヒマラヤ語系の言語からやや離れている」と述べている。ここの系統樹では、他の東部ヒマラヤ語系の東部語支の言語と並列させているが、Shafer の表示では、実際には、東部語支の他の言語の次に少し引っ込めて、リンプ語を挙げてある。Shafer [1953: 357] でも、東部語支のボンタワ語群のロホロン語の下にバリ語、リンプ語の順に挙げ、あたかもロホロン語の方言であるかのように表示してある。この註に従えば、リンプ語を東部語支の言語とするより、東部ヒマラヤ語系のひとつの語支のように図示する方がより彼の意図に近いものとなるのかもしれない。いずれにせよ、Shafer の表示様式とこの註の陳述は多少矛盾しているようである。
- 12) カレン語（門）の位置付けに関する Shafer の見解は註 6 で示したが、そこでは、Shafer は、カレン語と他のチベット・ビルマ諸語の関係を論ずる際に、現在最も問題とされるカレン語の統語構造を考慮に入れていない。周知の事実であるが、カレン語は、語彙的にはビルマ語門のビルマ語系（Shafer）あるいはロロ・ビルマ中核語群（Benedict）と多くの同源形式を共有するとされるが、語順は、全体的にチベット・ビルマ諸語に一般的な SOV 型と逆の SVO 型に典型的な型を示している。最近では、この基本的語順やそれと関連した他の構造型に於ける語順の違いは、かつてほど重要視されないとはいえ、それをどの程度重要視するかで、チベット・ビルマ語派の分類が基本的に異なってくる。この違いは、系統樹で次のように図示できる。（主に、中国の学者の間では、タイ語派（Daic, Thai, Tai; 泰, 壯泰, 壮侗）、ミャオ・ヤオ語派（Miao-Yao; 苗瑶）をシナ・チベット語族に分類する意見があるが、ここでは考慮していない。なお、シナ・チベット語族の分類の詳細については、西田 [1989b] を参照されたい。）



なお、註 8 で述べたように、下位語群の名称は便宜的なものに過ぎない。

Benedict [1972a: 4] は、(2) の立場を取り、その論拠を次のように述べている。

「統語法に関しては、漢語とカレン語は、動詞の後に目的語を置くが、すべてのチベット・ビルマ諸語は、例外なく [例外がないわけではない (筆者)], 動詞の前に目的語を置く。チベット・ビルマ諸語の形態法の一般的に古風な性質からみて、チベット・ビルマ語的配置が原初的なものであり、漢語とカレン語の語順は、そのすべてが {目的語+動詞} 型である隣接する言語群 (タイ諸語, ミャオ・ヤオ諸語, モン・クメール諸語) のそれ [語順] に影響されたことが示唆される。従って、統語法に於ける漢語とカレン語の一致は、2 次的な起源によるものであり、いずれにせよ、カレン語とチベット・ビルマ諸語の間の圧倒的な語彙の一致によって影が薄められている。」

なお、漢語の文法関係の基本的語順に関して、実情はそれほど単純でないことはしばしば指摘される点であるが、このことについては、例えば橋本萬太郎 [1977], J. A. Matisoff [1978] を参照されたい。カレン語についても、過日、中国訪問中、戴慶厦教授にお会いした際に、同教授が最近中国国内で調査したカレン人の方言では、OV, VO の両語順が認められたとのことであった (カレン族は、勿論、中国に土着の民族ではなく、馬学良・戴慶厦 [1986: 191b-192a] の漢蔵語系の分類は、中国国内の土着の民族の諸言語に限定されているので、カレン語はそこに挙げられていない)。

これに対して、Matisoff [1978: 72-90] は、(1) のような図式を仮に提案している。Matisoff [1978] は、「(1) 統語法上の類似は系統的親近性 (closeness) をなんら保証するものでない、

(2) 統語法上の相違は系統的遠隔性 (remoteness) をなんら保証するものでない」という 2 つの否定的定理を立て、名詞句内の語順、関係節と主要名詞 (head) の語順、主語、目的語、動詞 (述語) 等の文法関係の語順 (一般的に, “Clause $\rightarrow$ NPⁿ+VP, where $n>0$ ” [Matisoff]) を取り上げ、それらが系統的分類の基準として妥当でないと主張している。特に, Benedict [1972a] (上記) が、カレン語とロロ・ビルマ諸語の声調体系間の類似の拡散 (diffusion) による説明を否定する一方で、カレン語の目的語が動詞の後に置かれるのは拡散によるとしている点を指摘し、Benedict の立場が実際にはいささかはっきりしないと述べている。つまり、系統的分類では、音韻面と語彙面に於ける系統の類似が当然拡散により生じたとされる統語面の相違よりも優先されるべきである。それにもかかわらず、Benedict が (2) の図式を提案するのは理解できないということになる。

Matisoff は、ラフ語 (Lahu) では、NP 群が自由に相互入れ換えができる点を挙げ、更に、「口語ラフ語では、追加表現 (afterthought) として、名詞句が節末に添えられることがよくある」と述べ、目的語が述語の後に現れる例を挙げ、「この構造が一般化されて“標準的 (normal)”文になるほど好まれるようなことがあれば、ラフ語さえもいつの日か SVO 言語になるかもしれない!」(p. 90) と結んでいる。

なお、カレン語に対する西田の立場は、西田 [1989a, 1989b] では明らかでないが、西田 [1989a] ではチベット・ビルマ語派には分類されていない。しかし、西田は、Benedict と異なり、SOV 型かた SVO 型への変化を“拡散”によるものとはせず、各語派に於ける内的変化と考えているようである。

SOV と SVO のような基本的語順を含めた統語構造が系統的分類の基準としては、有効でないとする Matisoff の主張は、特に珍しいものではないが、このような主張には、しばしばその論拠として、Matisoff のラフ語のような例が挙げられるのは納得がいかない。

一方、このような構造的変化が内的変化としてより、むしろ 2 言語使用状況 (bilingualism)、多言語使用状況 (multilingualism) で起こることは周知の事実である (例えば、T. Bynon [1986] の第 6 章参照)。従って、OV>VO の変化が“拡散”によるとする Benedict の見解も、いちがいに否定できない。当然のことながら、これには、タイ諸語、ミャオ・ヤオ諸語の系統的位置付けの問題も係わって来る。

Matisoff の主張は、確かに納得のいくものであるが、実際問題として、各語派によって、基本的語順が一般にひとつの型に定まっていることも否定できない事実である。同時に、チベット・ビルマ語系言語の基本的語順 (どのようなスタイルのサンプルにするかにもよるが、これは必ずしも統計的頻度により決定できるとは思われない) については、更に精度の高い調査・研究が必要であることも指摘しておきたい。

- 13) ロロ・ビルマ (Lolo-Burmese) は、ビルマ・ロロ (Burmese-Lolo) とも呼ばれる。1982 年に北京で開催された第 15 回国際漢蔵学会の席上で、故傅懋勳教授がロロ (保羅) は、蔑称であるので、ロロの呼称は当時から中国で一般に使用されていた彝 (Yi) を使用するようにと提案された。中国国外では、今でもロロ語 (Lolo)、ロロ語系 (Loloish)、ロロ・ビルマ諸語/語系/語群等の用語がかなり広く使用されている。確かに、ロロボ語 (Lolopho) のように、言語名自体にロロが付された例もあるが、中国の学者 (現在では、彝族出身の言語学者や民族学者も相当いるようである) の意見を尊重し、中国の慣用に従い、イ語、イ・ビルマ諸語 (Yi-Burmese; 彝緬) と呼ぶべきであろうが、彝語支【=ロロ語支】の場合、英語で “Loloish” は馴染むが、“Yiish” は馴染まないという理由で、J. K. Wheatley のように、この場合には “Loloish” を使用する者がいる。なお、イ・ビルマ/ロロ・ビルマ諸語の研究は、チベット・ビルマ語派の下位語群の中でも最も研究が進んでいる分野であり、研究者の数も、チベット語のそれに次いで多い。また、国際漢蔵学会とは別に、国際緬語学会も米国、スウェーデン等で数度にわたって開催されている。次回は、本年 (1991 年) の 8 月に中国四川省西昌市で開催される予定である。

彝語は、古くから独自の文字を持ち、現在も四川省の凉山彝族自治州では、『凉山彝文報』という彝文による新聞が発行されているほどである。1990 年 10 月末に成都の四川省社会科学院民族研究所を訪れた際、民族学者李紹明教授の御好意で、座談会を開いて頂いたが、その席で、彝族出身の民族学者伍精忠氏が中国の彝族・彝語研究の現状に関して、簡単に筆者に解説して下さい。その中で、彝文の歴史が 1,000 年以上あり、最古の碑文は貴州で発見されたものであるといわれた。この最古の碑文は、1989 年刊の貴州省華寧地区委編『彝文金石図録』(第一輯)(成都:四川民族出版社)所載、同省大方県青山彝族郷発見の石碑残片(妥

阿哲紀功碑 [t'u³³ a²¹ ndzə²¹ vu³³ k'ə³³ p'i²¹] を指すものであろう。同書によれば、この残文中に建立年代は記されていないが、内容は、彝族の君長妥阿哲が孔明の南征を支援した功績を記したものである。この碑文は、彝文で彫刻された最古のものとされている。西田 [1980: 23] では、1533年の作とされる雲南省祿勸の鵠字崖碑文が最古の碑文であるとされているが、その後、1980年以降に訳されたり発見された彝文金石文があり、それには1500年以前の金石文も含まれている。

- 14) 語彙統計学と言語年代学は、厳密に言えば、全く同じものであるとはいえない。Swadesh の創始した言語年代学は、言語に於ける変化率（この場合は、語彙の置換率）が一定であるとする仮定に基づいて、個々の言語の変化率からそれらの言語の分裂年代を算定し、その年代から個々の語族、語群内の言語の相互関係を決定する方法であるが、語彙統計学は、歴史言語学に於いて、同系言語の下位分類を含め、さまざまな推定に語彙の統計的数値を利用する研究である。従って、言語年代学は、語彙統計学のひとつの適用法に過ぎない。Glover の下位分類に関する研究は、語彙統計学的分析に基づくとしているが、実際は、言語年代学的方法に従っている。

Glover は、共有率の度合、分裂年代、語群の呼称等を、M. Swadesh のそれを修正した S. A. Wurm に従い、5%以下（10,000年以上）を macrophylum、5%～10%（～10,000年）を mesophylum、11%～21%（～7,500年）を microphylum、22%～39%（～5,000年）を stock、40%～85%（～3,000年）を family、86%以上（～500年）を language と呼び、更に、これに subphylum（16%～21%；～6,000年）、substock（30%～39%；～4,000年）と subfamily（64%～85%；～1,500年）の3つの中間段階を設定している。これに従えば、共有率が86%以上である複数の言語は、同一言語の方言ということになる。

筆者は、この下位分類、特に分裂年代の推定については、それ程信頼を置くべきでないと考えている。ここでは、microphylum から language までが問題となるが、この用語の訳は、Shafer の用語に準じて訳しておいた。

なお、この同一語族の諸言語の下位分類を M. Swadesh の100語表の語彙の共有率により行った場合、果してどの程度信頼性のある結果が得られるか疑問に思っている。Nishi [1983] は、ガレ語とタマン語群の関係について、この点に疑問を呈した論文でもある。筆者は、かつて（1982年）にこの分野の権威でもある I. Dyen 教授（イエール大学）にこの点を質したところ、同教授の意見では、Swadesh の100語表は、言語が同系であるか否かを調べるためのもので、下位分類には、200語表を使用すべきであると答えられた。

一方、Matisoff [1978: 90ff.] は、チベット・ビルマ諸語の下位分類に言語年代学、語彙統計学的方法を適用する際のさまざまな問題を詳細にかつ網羅的に論議し、否定的な結論を出している。

中国のチベット・ビルマ語学者は、通常2,000～3,000語ほどの語彙を比較して、共有率を算定しているが、これは、欧米のチベット・ビルマ語学者が Swadesh の100語／200語表に相当する語彙で、共有率を算定するのとは極めて対照的ともいえよう。単純に考えれば、それほど数の語彙を利用した共有率の方が信頼度も遙かに高いと思われるかもしれないが、問題はそれほど単純ではない。理論的な裏付けのない数値の単純な比較に果して統計的な意味があり得るのか否か一考の余地があると思われる。

- 15) 4.1.2.1. で、Shafer は、“語彙の一致” (lexical correspondence) と“音声対応（または、音声的一致）(phonetic correspondence/equation)”を下位分類の基準としていると述べたが、この“音声的一致”とは、音声変化の一致を指している。

極めて大雑把な類型としてではあるが、Hodgson, Konow のヒマラヤ諸語の代名詞化言語と非代名詞化言語の2分法は、形態統語的特徴に基づく系統的分類といえる。本文で述べたように、その後には、Shafer や Benedict の分類のように、主に資料的制約を理由に共有語彙や音声的一致に基づく分類が主流となった。1970年代以降、次第に詳細な文法記述を含むチベット・ビルマ語系言語のより精度の高い資料が集積されるにつれ、Thurgood, DeLancey, 西田等により、再び形態／形態統語的特徴、特に動詞のそれが分類指標として利用されるようになって来た。

- 16) 厳密に言えば、タマン語群の2人称代名詞には、次の4つの形式が再構される。タマン祖語 (Proto-Tamang) 再構の概要は、西 [1989] を参照されたい。

(1) タマン語の東部及び西部方言形 <*(?)ay^h

(2) グルン語の東部及び南部方言形とタカリ語形 < *gyan^h

(3) グルン語の西部方言形 < *gi^A

(4) マナン語 < *gya^B

(2), (3), (4) には、共通語根 *gi (*gi-aŋ, *gi-a) が含まれている可能性があり、(1)を無視すれば、確かに Thurgood の指摘するように、チベット語の2人称代名詞 (文語形 khyod) と同様に初頭音が*軟口蓋閉鎖音であるといえるが、比較できるのは、その点と介音 (音節副次音) までである。タマン語群の、ある語がタマン祖語の語彙に属とするための最低条件は、その語の同源形式がタマン語と残りの言語のうちのひとつに認められることであるが、この2人称代名詞の場合、タマン語形は、他の言語の形式とは全く異なっている。また、仮に、(2)と(4)が(3)の派生形であるとし、(1)と(3)のいずれかがタマン祖語形であったとした場合、少なくとも語彙に関する限り、タマン語の保守性からみて、むしろタマン語形が祖語形を表している可能性がある。従って、タマン語群の2人称代名詞に関しては、Thurgood の同定には問題があるといえる。

17) 第2章 (2.2.1.2.2.5.) で、LSI [1909] のジャンガル語がラウト語またはラジ語の別名であると述べたが、この部族の研究者であるオーストリアの人類学者 J. G. Reinhard [1974: 237-238] は、「Raute」の名称は、過去にこの部族 (tribe) に当てられて多くの名称のひとつあり、例えば、彼らは Ban (「森」) Rawat, (いずれも「森の人」を意味する) Jangali 及び Banmanus, Ban Raja (「森の王」), Raji, それに Rautiya と呼ばれている。Raji, Raute, Rawat と Rautiya の用語は、すべて「領主 (lord)」か、「王子」の意味に基づいており、この場合は、農耕地の領主または王に対して、Raute 族を「森の領主」として区別するのに使用されているようである。Rawat あるいは Raut は、殊に、高位のカーストの間で一般的な氏族の名称で、クマオン地方の昔の幾人かの王の名でもある。「森の王 (または領主)」の称号は、インドとネパールの狩猟民と採集民、例えば、ビルホル (Birhor) 族とクスンダ族の間でかなり一般的であると記し、更にその言語について、「ラウト族は、クマオン地方とネパール南西部のラジ族は除いて、ヒマラヤ地域の他のチベット・ビルマ語系言語を話す諸部族のいずれとも近い関係にないチベット・ビルマ語系言語 [sic] を話している。彼ら自身の言語を話す点で、ラウト族は言語的にも独特である。というのは、ガードナー (P. Gardner) が指摘しているように、アジアで、彼ら自身の言語を失わずに、彼らのもっと優勢な隣人達の言語を借用していない狩猟採集部族はほんの僅かしかないからである」と述べている。現在は、文化人類学者の間では、現存する狩猟採集民が太古の昔からその生活形態を維持して来た人々であるとは限らないというのが常識であろうが、このラウト族も、チベット・ビルマ語系言語を話す人々の太古の姿を現在に残しているとは思われない。むしろ、現住地域への移住の過程で、なんらかの経緯で、その一部の人々が現在の生活形態を取るようになったと考えべきであろう。また、現在ラウト族と呼ばれる人々がすべて同一言語の話者であったとする必要もない。以下のラウト語の分類に関する考察の結果も、あるいは、このことを反映しているとも考えられる。

表6 LSI (ジャンガル語) と Bista (ラウト語) の語彙対照表

	LSI	Bista		LSI	Bista
「1」	ɖa	da	「目」	mikai	mikō
「2」	ni	nfi	「歯」	sva	tšhwa
「私」	*na	na	「頭」	juɾa	gəɾfia
「あなた」	nāg	nfiŋ	「腹」	gudaŋ	gudoŋ
「我々」	na khani	na	「水」	ti	ti
「なに」	haii	haŋ	「犬」	kui	k*ui
「手」	hakai	akha	「鳥」	bba	bua?
「足」	bha	bfi	「食べる」	jair	dzaka
「鼻」	sina	siŋa	「立つ」	phyau	phuyū
「耳」	tuna	guna, cf. guna「聞く」	「死ぬ」	vo-si-yo	ši

LSI [1909] にジャンガル語の名で収録された資料は、その表記の精度に疑問がある。一方、Swadesh の100語に基づいて、Bista が、1972年の現地調査の際に西ネパールのベリ (Bheri) 県、ダイレイク (Dailekh) 郡の丘陵地帯でテープに採録し、E. A. Hale がそのテープから音声表記したラウト語の資料 (93語) は、Bista [1976] に掲載されているが、おそらくそれほど明瞭に録音されていたとは思わず、また、インフォーマントの誤解から調査者が意図した語とは異なる語が記録されている可能性もある。その上、未知の言語をテープの録音だけから音声表記するのがいかに困難であるかは、言語学者なら誰しも一度は経験していることである。また、この両資料には、半世紀以上の時間差と地域差があり、しかも、同じバンド (band) 集団の言語とは考えられない。にもかかわらず、両資料、特に、LSI の資料にかなりの誤りが含まれるという前提で比較してみると、両資料に共通するものとして、表6のような基礎語を挙げることができる (LSI の資料の長母音記号 (ː) は省略してある)。

LSI [1909: 530] で、Konow は、ジャンガル語の1人称及び2人称代名詞がおそらくマガル語の *ga* と *naŋ* にそれぞれ比較されようとして論じ、ジャンガル語は、「アルモラ地方で話されているそれら [チベット・ビルマ語系の言語] よりも、ネパールのチベット・ビルマ語系の方言 [言語] ともっと密接な繋りがあり得る。しかしながら、我々の [ジャンガル語] 資料の損なわれた状態を考慮して、他のアルモラ [諸言語] の [語句の] リストの後にジャンガル語のリストを印刷するのが最も無難であると考えた」と記している。

一方、Shafer [1967: 128, fn. 3] は、「我々の西部ヒマラヤ語系の分類は、Konow のアルモラ [諸言語] とジャンガル語の分類を受け入れている。Konow の分類に、私は、西部ヒマラヤ語系の東部語支を形成するものとして、タミ語とブラム語を加えた」と註記し、ブラム語とタミ語の9語 (下表の#を付した項) を挙げ、両言語の親近性と西部ヒマラヤ語系への帰属の妥当性の論証を試みているが、彼がアルモラ語群とジャンガル語の関係に関する Konow の見解を誤解しているのは明らかである。

(表7では、? は不明の項目を、— はネパール語からの借用語で置き換えられた項目を示す。カイケ語の欄の幾つかの語は、チベット語方言からの借用語と思われるが、そのまま挙げてある。)

(ブラム語、タミ語は、Shafer [1966], Hodgson [1857a] と LSI [1909] を、ラウト語は、Bista [1976] と LSI [1909] を、カイケ語、チェパン語 [マイセラン方言] とマガル語 [ヤンチョック方言] は、[CSDPSLN IV] の語彙表を参照した。)

Shafer [1967: 128, fn. 2] は、ブラム語とタミ語をひとつの下位語群にまとめる根拠として、(1) 特異な接頭辞 *u-* を持つ「太陽」と (ブラム語の「接尾辞」を除いた)「月」が両言語で正確に一致すること、(2) (北方チベット・ビルマ語系言語には特異な) **k-* 接頭辞が保存されていること、(3)「頭」と「家」の両語が独特であることの3点を指摘している。更に、この下位語群の西部ヒマラヤ語系に分類する論拠としては、(i) (いずれも *-l-* を欠く) ブラム語の *bi*「4」、西部ヒマラヤ語系 *pi*, (ii) (チベット語門の言語に稀な「5」の接頭辞 **p-* を保存する) ブラム語 *ba-ŋa*「5」、ジャンガル語 *pa-ŋa*, (iii) ブラム語、タミ語及び西部ヒマラヤ語系の「歯」の語形式の3点を挙げ、ブラム語とタミ語からなる東部語支は、系統的にアルモラ語支とジャンガル語支に多分最も近いであろうと述べている。なお、ブラム語とタミ語の「頭」は、ネパール語の *kapāl*「頭、頭髮」の借用語である可能性が高く、「家」を意味するブラム語 *nam*, タミ語 *nem*, ジャンガル語 *n* 等は、おそらく「村」を意味するランバ語 *nam*, カイケ語 *nam*, タマン祖語 **hnam* (-sa)⁸ と同源語である。

チェパン語、マガル語、ランバ語、カイケ語、タマン語群等の、Shafer が当時 Hodgson と LSI の資料以外に利用できなかったか、全く知られていなかった諸言語の資料を利用して、ジャンガル語【＝ラウト語】、ブラム語、タミ語の語彙を、それらの言語の語彙やヒマラヤ語系言語の語彙 (次節 (4.3.) の比較語彙表参照) 等の周辺のチベット・ビルマ語系の諸言語の語彙と比較してみると、彼の論拠の多くが妥当性に欠けているものであることは明らかである。

まずジャンガル語は、西部ヒマラヤ語系とよりも、Konow の示唆しているように、人称代名詞は、カイケ語、マガル語、またはチェパン語に、数詞の「4」、「5」や「犬」、「鳥」は、むしろマガル語とチェパン語に、「足」と「歩く」は、それぞれタマン祖語 **ba-hle*⁹ の第1要素と **kha*⁹「来る」に比較されよう。従って、この僅かな語彙の比較からでも、Shafer のような結論は出て来ない。むしろ、ラジ語【＝ジャンガル語】をマガル語、チェパン語と共にチェパン下位語支に帰属させる Glover の分類の方が妥当であると思われるし、この分類は、

表7 ブラム語, タミ語, ラウト語, チェパン語, マガル語の語彙比較表

	ブラム	タミ	ラウト	カイケ	チェパン	マガル
「私」	ŋa	gai	na	ŋa	ŋə	ŋa
「あなた」	naŋ	na	nfiəŋ	na, ŋen	naŋ	naŋ
「我々」	ni	ni	na	nhyo/a	ŋi, ni	kan
#「1」	de	diware	da	ɬi	yat	kət
#「2」	ni	nis	nfi	ŋhyi	nis	nis
「3」	swom	—	sug (<i>LSI</i>)	sum	sum	som
「4」	bi	—	pa-ri (<i>LSI</i>)	li	pləy	buli
「5」	ba-ŋa	—	pa-ŋa (<i>LSI</i>)	ŋa	poŋa	bā (<baŋa)
「血」	chi-wi	?	suī	?	huy?	hyu
#「頭」	ka-pa	kapu	gaŋfia	thoppa	talaŋ	mi-ɬalu
#「耳」	ka-na	kulna	guna	namjhaw	no	me-nekep
「鼻」	?	chiŋa	šiŋa	nha	neh	mi-nha
「口」	a-nam	ugo	mu	khapra	hmotoŋ	me-ŋer
「歯」	swa	suwa	tšhwa	swa	səyk	mi-syak
「舌」	?	chile	mfiwəm	lai	le	me-leɬ
「手」	bhi-t	lak	akha	laa	krut	mi-huɬ
「足」	un-zik	konte	bfi	?	dom	mi-hil
「犬」	a-kyā	kuchu	k*ui	khyu	kuy?	cyu
「鳥」	jya-liŋ	raŋale	bua?	hyuju	wa?	gwa
#「太陽」	uni	uni	beɬ	nhima	nyam	nankhan
#「月」	chala-wani	chala	beɬ	da	lah	gyohot
「水」	a-wa	paŋku	ti	ɬyu	ti?	di
「火」	ma-i	meh	muhēi	myē	hme?	mhe
「道」	um-ma	?	yung	—	lyam	lam
#「家」	nam	nem	n (<i>LSI</i>)	yim	kim	im
#「食べる」	cha-	chiya	dzaka	ja-	je?	je-
「飲む」	syā-ŋa	?	tī	thuŋ-	tuŋ-	ga-
「歩く」	syo	?cha-	khwa	len-	wah-	hwa-
否定辞	ma-	ma-	—	mhyā	-ma/-la	ma-

Konow の見解とも一致するものでもあるが、このように僅かな基礎的語彙の比較だけでは、タマン語群やタミ語 (下記) との関係の親近性も否定できないであろう。

タミ語とブラム語をひとつの下位語群とする論拠も、(2) の「頭」が借用語である可能性があること (上記) と ka-na の ka- はともかく、kul-na の第1要素が果して接頭辞か否か疑問であることから、結局、(1) 以外に積極的な論拠はないといえる。Thurgood [1985a] の分類指標に従えば、タミ語の「私」(1人称代名詞) は、問題があっても、ヒマラヤ語系と比較され、ブラム語のそれはマガル語、チェパン語や中央ネパール語系の諸言語と比較される点、ラウト語とタミ語の「鼻」と「耳」の語形式がよく一致している点等がむしろ注目に値しよう。「歯」にしても、アルモラ語群のみならず、中央ネパール語系の言語にも同源形式が認められる上に、「4」のタミ語形がブラム語形 bi と同じような語形式であったと推論する根拠はないのである。従って、タミ語とブラム語をひとつの下位語群にまとめたり、その下位語群とラウト語を西部ヒマラヤ語系に分類する Shafer の論拠は極めて薄弱であるだけでなく、

このように僅かな、それも正確さに疑問のある語彙に基づく分類には、慎重であるに越したことはない。系統的分類は、本来、祖語の再構に決定的な重要性を持つだけでなく、特に、一旦分類が行われると、上述の(ii)のような議論が展開されることになることに留意すべきであろう。

また、ブルム語 *nam*, タミ語 *nem*「家」(?>「村」)カイク語 *nam*, ランバ語 *nam* のような幾つかの語彙は、一部のヒマラヤ諸語に共通の基層語に属した語彙であるとする 것도可能であると筆者は考えている。

- 18) Nishida [1987] は、1982年の北京に於ける第15回国際漢蔵学会で発表された論文である。従って、西田 [1987] より以前の見解を表している。
- 19) なお、ヒマラヤ地域南部の言語群、つまりヒマラヤ諸語は、ビルマ文語よりもクキ語系(Kukish)(ビルマ語門)と比較の方が好ましいが、ビルマ文語と比較するのは、クキ諸語の資料が限られていることや音声対応の設定が困難であること、更に、クキ諸語の代用には、古期ビルマ語が望ましいが、これも利用できる語彙が充分でないとしている。しかしながら、Shafer [1966] では、多くのクキ祖語の同源形も比較に挙げている。
- 20) 本文でも述べたように、Shafer は、カレン語門をそこに含めるか否かはともかく、現在 Benedict, 西田, Matisoff 等と異なり、シナ・チベット語族の中間段階の語群としてチベット・ビルマ語派を認めていない。しかし、“チベット語門とビルマ語門”の意味で“Tibeto-Burmic”の言葉を時折使用していることから、この両語門があたかもシナ・チベット語族のひとつの下位語群を構成すると考えていたかに思われる。

Shafer は、それまでに幾つかの論文に分けて部分的に発表したシナ・チベット祖語の音韻体系の再構を Shafer [1966] にまとめている。彼は、この祖語の音韻を基本的にチベット文語形、ビルマ文語形、ルシャイ語(Lushei)/クキ祖語、上古漢語形(B. Karlgren の再構形に Shafer が修正を加えた形式)、タイ語形の比較に基づいて再構しているが、その同源形の比較表には、空白が多く(つまり、同源形がない場合が多く)、特に、再構された祖語の子音体系はともかく、母音体系は全く整合性を欠いている。その上、Shafer は、個々の語(根)の再構形は示していない。現在、シナ・チベット祖語/チベット・ビルマ祖語の再構形として最もよく引用されるものは、Benedict [1972a] の再構形(その後、Benedict [1976] 等で多少修正される)である。この両者の再構方式の大きな相違点として、閉鎖音/破擦音に、Shafer は*無気音対*有気音の対立を認めるが、Benedict は認めない点が指摘される。この解釈の相違は、チベット語、実質的にはチベット文語に反映されるチベット語の音韻体系で閉鎖音/破擦音の有気音系列が祖語からチベット語に引き継がれたものか、それとも、チベット語に於いて2次的に発達したとするかによるものである。Benedict は、チベット文語では、語頭音が無声無気(閉鎖)音である少数の例を除くと、一般に、無声閉鎖[／破擦]音は、接頭辞、*g-, d-, b-, r-, l-, s-* の後で無気音で、接頭辞、*m-, '[-(=h-/h-)]* の後で有気音である、つまり、無気音と有気音はほぼ相補的に分布している事実に着目し、例外は、*kun*「すべて」<STC*(m-)kul, pad-ma「姪」<STC*r-pat, pus「膝」<STC*put 等のチベット・ビルマ祖語からの派生形がチベット語に固有の語(根)とされる僅かな例を除けば、(a)語頭の *kl-(khl-* はない)を持つ語、(b)重複語、(c)接頭辞を持つ語または重複語と交替する語、(d)借用語のいずれかとして説明できることから、チベット語では、気音性が音素レベル以下の特徴であるとし、チベット語、更に、チベット・ビルマ祖語にも、シナ・チベット祖語(漢語の有気音系列の発達も、接頭辞の影響によるとする)にも閉鎖音系列に気音性の対立を認めていない。その後、1970年代に於けるイ(彝)・ビルマ【=ロロ・ビルマ】諸語の比較研究の進展と共に、Matisoff, Thurgood, D. Bradley 等がいずれもイ・ビルマ諸語の閉鎖/破擦音の有気音系列も、やはり、*接頭辞により説明できるとしており、この点に関しては、Benedict の再構方式を受け入れる学者が多い。しかし、その一方で、西田や Kung Chang (張昆) のように、今でも、閉鎖/破擦音に無気音と有気音の2系列を認める学者もいる。筆者は、少なくともチベット・ビルマ祖語に関しては、Benedict 説が妥当であろうと考えているが、まだ多くの下位語群の祖語の音韻体制が再構されておらず、チベット・ビルマ祖語のそれとの関係が明らかにされていない現状から結論を保留している。

祖語の声調に関しては、Shafer [1966] は、シナ・チベット祖語の声調の比較研究が、チベット・ビルマ諸語の声調に関する資料の不足している状況から、新資料が公刊されるに従って改訂が繰り返され、今後何年にもわたり継続されることになると予測するだけに止めている。一方、Benedict [1972b] は、シナ・チベット祖語とチベット・ビルマ祖語に *A, *B の2

種の声調を立てているが、それらとチベット・ビルマ諸語の声調の間に規則的対応を立てることができないことから、現在では、彼の説を支持する学者はいないようである。

チベット・ビルマ語系言語の資料が充実するにつれ、Benedictの再構形では、説明できない例も多くなり、現在は、今一度彼の再構したチベット・ビルマ祖語の音韻体系全体及び再構形について再考する時期に来ていると思われる。従って、ここでは、チベット・ビルマ祖語形として示すことはしないが、それに代わるものとして、特に同源形を一々挙げる代わりに、Benedict [1972a]の該当項目を参照できるように、Benedictの再構形(STCと表示)を示してある。

本論文では、略語はできるだけ避けているが、以下の章でSTC以外の略語として、PST(Proto-Sino-Tibetan)=シナ・チベット祖語、PTB(Proto-Tibeto-Burman)=チベット・ビルマ祖語、WT(Written Tibetan)=チベット文語(形)、WB(Written Burmese)=ビルマ文語(形)、PTAM(Proto-Tamang)=タマン祖語(形)は多用している。その他の略語については、使用する箇所にその都度説明して置いた。ビルマ文語形の(:)と(')は、それぞれ現代標準ビルマ語の第1声(高平調 / \)と第3声(喉頭化を伴う高降調 / \)に対応する。

- 21) 例えば、 $X^1, X^2, X^3, \dots, X^{n-1}, X^n$ の同系言語中、 X^1, X^2, X^3 が下位語群Aを形成するには、全体の祖語Xの音韻体系から派生され、それとは異なる祖語Aの音韻体系が指定できなくてはならない。その際、祖語Xの音韻体系から祖語Aの音韻体系への音韻変化が共通の改新的特徴である。勿論、そのような特徴が音韻面に限られるものではないことは既に述べたところである。

音韻変化の場合、例えば語頭で、*有聲(閉鎖)音>無聲(閉鎖)音のような変化は、多くの場合下位分類の役には立たない。より有効な分類指標は、一般に特定の条件下で起こる分裂や融合の例である。

- 22) ランロ語の資料は、実質的にLSI [1909]の資料しかなく、この資料もランロ語の資料がティナン語の資料が不明である。S. R. Sharmaは、両言語にほとんど差異がないといい、D. D. Sharmaもティナン語の方言的変種(a dialectal variation)であると述べているので、以下の下位分類でもティナン語とランロ語は同じ下位語群に入れてある。また、語彙表1-1では、2項目をティナン語形として、LSI [1909]のランロ語形で埋めてある。Bailey [1915]に僅かな資料が記載されているチトカル語は、標準カナウル語と同じ下位語群に分類されるが、標準カナウル語とは、次のような相違点も認められる。

「3」homo(<s-)、「7」tiss(<st-<*sn-)、「9」zgui(<sg-)、「2人称単数」kan、「3人称単数」yo、「だれ」#su; sig、「父」au(?<awa<aba<apa)、「娘」dyu(a)t šaŋ、「顔」(借用語)、「犬」khui、「行く」ro-、「来る」to/u~dya(命令形)、「打つ」tha-、「与える」da-。

ここで、特に注目されるのは、s->h-の変化と「犬」の語頭音が無声有気音である点であり、「2人称単数」代名詞、「犬」、「与える」がテボール語、ブナン語と一致する点である。しかし、*sn->st->t-の音声変化を標準カナウル語、カナシュ語と共有していることや「1」id、「8」rai、「10」sai、「1人称単数」ga等が標準カナウル語と一致すること等からチトカル語がカナウル語と同じ下位語群に分類されることは確かであろう。

- 23) W. S. Coblin [1974]は、F. W. Thomasの訳読した敦煌文献中に現れるrmaŋ「馬」(rmaŋ-rogs “horse attendant”, rmaŋ “steed”)に注目し、この語が*mr->rm-の音位転換(metathesis)により*mrəŋから派生したもので、初期チベット文語に於いて、rtaと並んで、*mrəŋの存在した可能性を指摘している。Coblinは更に、この*mrəŋがビルマ文語形mrəŋ、カチン語kumraŋに比較できる形式であり、BenedictのPTB形(STC)*m-raŋ「馬」から直接派生した形式かもしれないと述べている。初期チベット文語に於けるrtaと*mrəŋの関係は明らかではないが、*m-raŋの同源形の分布からみて、チベット語でも、「馬」が元来*mrəŋであったのが、なんらかの経緯で改新形rtaに置き換えられた可能性は大いに考えられる。
- 24) Benedict [1972a]は、比較語彙表1-1の「道」のヒマラヤ語系の諸形式をSTC *lam(>WT lam, WB lam)の同源形としていない。一方、Shafer [1967: 141]は、第11章(西部ヒマラヤ語系言語)の最後の「西部ヒマラヤ語系の幾つかの問題」に触れた部分で、「lamは、チベット語門とビルマ語門に於ける『道』の極めて普通の語根であるので、決してWH[西部ヒマラヤ語系]amを別の語根とみなすことはできなかった。それでも、10年以上にわたり、このlの消失は困った問題でしかなかった。しかし、ボド語門の研究に於いて、2つの言語の、1組の語では*lがyになっているが、別の1組の語では保たれているのを発見した。西部ヒ

マラヤ語系は、この2つの単語群と、y 群の『舌』と l 群の『道』及び『4』の3語しか共有していない。そして、西部ヒマラヤ語系では、『舌』を表す語は l を保ち、『道』と『4』を表す語は l を落としている」と述べてはいるが、結局、この *am* を WT と WB の *lam* と比較するのを避けている。

Shafer の指摘するように、ヒマラヤ語系の「道」の諸形式（と西ネパールのカム語 *em*）が WT や WB の *lam* と比定できることは確かであろうが、「道」、「舌」、「4」をただ語頭音 *l- が含まれるというだけで、一括して論じることとはできないことは、Benedict の再構形 (STC) **lam* 「道」、**m-lay* ~ **s-lay* 「舌」、**b-lay* 「4」をみても明らかである。STC では、少なくとも、「舌」と「4」はそれぞれ異なる接頭辞を伴っており、*l- の現れる音韻的環境が異なっていたと考えられるが、STC **lam* も一部の言語で接頭辞を伴っていた可能性が全くないとはいえない（次節の40参照）。なお、やはり *l を失ったと推定される語例として、タマン語群及びガレ語の「雪」(PTAM **gliŋ*^b; ガレ語 *lyan*) と「石」(PTAM **hyuŋ*^b; ガレ語 *lon*) に比較されるテボール語 *əŋ*、ランパ語 *aŋ* 「雪」とランパ語 *uŋ* 「石」を挙げることができる。この比定の根拠は、「雪」の場合は、「道」の例とは逆に、この語根の分布が極めて限られていることに、「石」の場合は、アルモラ語群【＝東部語支東部語群】については不明であるが、その同源語根がネパールのヒマラヤ諸語に広く分布していることによるものである。

- 25) 比較語彙表 1-1 中の次の例がこの変化を示している。WT, WB 以外の同源形 (“allofam”を含む) の例は、Benedict [1972a] を参照されたい。STC 形の後には参照番号を示してある。略語：(TGB)=[Bailey 1910, 1911], (TRJ)=[T. R. Joshi 1909], (AFCR)=[A. F. C. Read 1934]

	カナウル語	STC	WT	WB
「7」	štiš tiš~štiš (TGB) štiš (TRJ)	*s-nis (5)	—	-hnac
「鼻」	sta- ta-(TGB) cf. カナシュ語 ta	*s-na (101)	sna	hna
「歯茎」	(s)til(h) (TGB)	*s/r-nil (3)	s/rñil	—
「心臓」	stiŋ (TRJ)	*s-niŋ (367)	sñiŋ	hnac
「鼻(汁)」	?stəm (ti)	*s-nap (102)	snabs	hnapp
「膿」	stak stag (TGB) stakk (TRJ)		(rnag)	—

cf. チベット語バルティ方言 (Balti) snag (AFCR)

- 26) Shafer [1967: 133-134] が示しているように、一般にチベット文語の有声閉鎖音は、西部ヒマラヤ語系の有声閉鎖音か無声無気閉鎖音に対応しているので、kha 「なに」は、WT ga (～gaŋ) 「どの、だれ」と、音韻、意味のいずれの面でも規則的対応をしているとはいえないが、両語根が同源形である可能性がないわけではない。以前、筆者はチベット語の9世紀前半のチベット語文献中の khyi ~ kyi 「犬」の語頭音にみられる無気音 ~ 有気音の交替に触れ、「こういった変異が一種の方言差として古くから存在し、たまたま辺縁地域の方言に残ったと解釈できなくもないであろう」と述べた [西 1986: 850, fn. 23]。チベット語の敦煌文献等の古文獻には、この例にみられるような閉鎖音／破擦音の①無気音 ~ 有気音の交替だけでなく、②無声無気音 ~ 有声音の交替も数多く認められる。更に興味深いことは、例は少ないが、③無声無気音 ~ 無声有気音 ~ 有声音／無声有気音 ~ 有声音の交替も認められることである。羅秉芬、安世興 [1981] には、③の例が10例ほど挙げられている（勿論、この場合、羅=安の同定がすべて正しいとは限らないであろう）。チベット文語の成立過程で、標準化が行われた結果、このような（方言的？）差異はほとんどの場合その後の文献からは消えてしまっているが、このヒマラヤ語系の kha が、チベット語またはチベット祖語に於ける *ga ~ *ka ~ *kha の変異

を反映している可能性も否定できないのである。

今ひとつそのような変異の可能性を示す形式として、「家」(WT khyim) が挙げられる。Shafer [1966: 42] と Benedict [1972] は、この初頭音として、それぞれ *ɣ-(cf. クキ祖語形 *ɣim) と *ky-(cf. STC *kyim ~ *kyum) を立てている。

Shafer も, Benedict も, チベット (文) 語の有声性 (voice) の対立が, 「9」(STC *d-kəw) のように接頭辞により有声化されたとする幾つかの例外はあっても, 一般に PTB/PST の対立を保っていると考えているが, 上述のように, 古文献中に無声音 ~ 有声音の交替がみられることから, 語頭音が無声音であるチベット文語形の一部には, *有声音の方言的変異形があったか, *有声音 > 無声音の変化を経たかのいずれかの可能性を持つものがあるかもしれない。例えば, 「家」は, Jäschke のブナン語形では gyum であり, 次節で触れる中央ネパール語系のナル語では gym である。また, タマン祖語では, *dzaŋ^A「巢」(WT tshan) と *dzii^A(< *ik)「関節」(WT tshig) があり, 「家」*dim^B(WT khyim) と *dap^A「針」(WT khap) も, 語頭音が有声音であり, これらに対応するチベット語形も*有声音頭音を持っていた可能性が考えられるのである。なお, ヒマラヤ語系で「家」の同源形にみられる -(y)im ~ -yum は, Benedict の PTB/PST の交替形をそれぞれ反映したものではなく, 語末子音 -m により, -i- の後舌化 (と円唇化) (-yim > -yum) と考えるべきであろう。

Shafer は, チベット, ボド, ビルマの諸語門の言語で, *語頭音の反映形 (reflex) が, 軟口蓋閉鎖音 (k/kh/g) だけでなく, k/kh/g/h/φ 等で現れる対応系列に *ɣ を立てており, 「家」と平行的な対応が認められる語根には, PST *ɣ (cf. クキ祖語形 *ɣui「犬」, *ɣār「星」, *tVɣai「蟹」, *m-ɣ²-ru「盗む」) を立てている。一方, Benedict は, 「家」と同様に多様な反映形のみられる「星」, 「蟹」, 「針」, 「顎 (臼歯)」等に, それぞれ STC *s-kər, *d-ka·y, *kəp, *gəm を立て, 語頭の閉鎖音の脱落は, 一次的 (「家」) または 2 次的 (「蟹」, 「針」, 「顎」) な口蓋化 (palatalization) を条件とするものであると考え, φ- 以外の反映形は, 下位語群に於ける接頭辞の影響による変化としているが, STC *kwəy「犬」[>ルジャイ語 ui, ティディム・チン語 (Tiddim Chin) ?wi] の *k- の脱落は, これを“動物”接頭辞とする異分析 (metanalysis) によるものと解釈している。

この場合, Shafer の *ɣ- は, *硬音の軟音化 (lenition) という一般的なチベット・ビルマ諸語に於ける音韻変化の傾向と反する*軟音の硬音化 (fortition) (*ɣ- > k-/kh-/g-) のような変化を仮定しなくてはならず, Benedict の *ky-/ *gy- > φ の説明は, STC *d-kəy「吼え鹿」が WB khye ~ gyi (cf. WB im「家」, ap「針」, am:「臼歯」) ではなぜ語頭閉鎖音を保っているのかという疑問を生ずる。

- 27) 筆者がランバ語の分類について最初に言及したのは, 1985年 (昭和60年) 度の西田龍雄教授 (京都大学) 主宰のチベット・ビルマ (TB) 研究会に於いてであったと記憶している。その後, 1987年の第20回国際漢蔵学会 (於ブリティッシュ・コロンビア大学) で発表した Nishi [1990] にランバ語形を引用したりしており, 当然この言語の存在はチベット・ビルマ諸語の研究者は誰でも気付いていると思っていたところ, 1988年に当時来日中の J. A. Matisoff 教授と再会した際に, ランバ語文法がどこでの発行されているのか尋ねられて驚いたが, 更に, 昨年 (1990年) になって, S. DeLancey 教授から同様の問い合わせがあり, またまたびっくりした次第である。

結局, このことはヒマラヤ語系言語がチベット・ビルマ語学者の間でも, あまり関心が持たれていなかったという事実を反映しているに過ぎないのであろう。DeLancey 教授は, ちょうど DeLancey [1989a] を発表した後であり, ランバ語の動詞の“1人称単数 (・現在)”接尾辞が /-ŋ/ であるという事実はいささかショックを与えたようである。

- 28) Zoller [1983: 50-51] には, 例えば, 自動詞語幹からの他動詞語幹の派生法には, ランバ語固有の動詞語根か, ガルワール語系の動詞語根かで次のような相違がみられる。(/c/ = /tʃ/[tʃ], /j/ = /dz/))

1. 他動詞語幹形成法

1) ランバ語固有の動詞の場合:

1. 動詞語幹の初頭子音が無声 (有気) 音となる。

例. byē-「(液体) こぼれる」→ phyē-「こぼす」, d3-「草を食べる」→ th3「(家畜を) 放牧地へやる」。

2. 一部の自動詞語幹の末尾子音は義務的に, あるいは, 任意的に /-c/ に終わるが義務的に /-c/ に終わる動詞語幹は自動詞的であり, 他動詞形成の際に /-c/ を失う。

例. phwəlc-「開く；緩む」→ phwəl-「開ける；緩める」, phoc-「枯れる」→ pho-「乾かす」。

3. 動詞語幹がガルワール語系の語幹に置き換えられる例が1例ある。

guc-「床につく」→ kusa:w-「(誰か) 床につかせる」

- 2) ガルワール語系の動詞の場合：

1. 動詞語幹に /-a:/ を付加するが、先行する（音韻的／音声的）長母音は弱化して /ə/ となる。

例. bən-「成る」→ bən-a:-「作る」, ghot-「小さくなる」→ ghə-ta:-「小さくなる」。

2. 規則化できず、個々の動詞に限定される、次のような派生法がみられる。

例. uməw-「沸き立つ」→ uma:w-「(なにか) 煮る」, ghu(:)l-「溶ける」→ ghol-「溶かす」。

その一方で、動詞の受動形の派生法は、ランバ語固有の語彙とガルワール語系の語彙で区別はない (pp. 49-50)。

2. 受動語幹形成法

- 1) 他動詞語幹に /s/ が付加され、活用は、自動詞に準ずる。

例. chyag-「濾す」→ chyag-s-「濾される」, ta:-「置く」→ ta:-s-「置かれる」；(ガルワール語系) kasa:-「固定する」→ kasa:-s-「固定される」, uma:w-「煮る」→ uma:w-s-「煮られる」。

- 2) 稀であるが、ランバ語固有の動詞語幹がガルワール語系の動詞語幹に置き換えられる。

例. səs-「知る」→ ja:n-s-「(知られる)」。

なお、動詞語幹の末尾子音 /r/, /d/, /b/ の任意的削除 (例. nhar-「(下へ) 投げる」→ nha-s-「落とす」, thud-「教える」→ thu-s-「学ぶ」, khab-「覆う」→ khab-s-「覆われる」) や (一部の動詞で) /n/ に終わる動詞語幹の母音の任意的鼻音化と /n/ の脱落 (例えば, pin-「満たす」→ pin-s-~pī-s-「満たされる」, chin-「奪う」→ chin-s-~chī-s-「奪われる」) などの形態音韻変化がみられる。

更に、動詞 (他動詞／自動詞) の使役語幹形成でも、両種の語幹に共通した派生法 (動詞語幹 + /-myər/) が認められる (pp. 51-53)。

- 29) Shafer [1967] が基層語と呼ぶ言語の性質やその語彙についても、ヒマラヤ諸語全体の調査が進むまでは早急な結論は保留すべきであろうが、例えば、註24で挙げた PTAM *glin⁸「雪」(cf. テポール語 an, ランバ語 əŋ, ガレ語 lyaŋ), PTAM *hnam-sa⁸「村」の *hnam-「[家](?)」(cf. ランバ語 nam「村」, ブラム語 nam「家」, タミ語 nem「家」, カイケ語 nam「村」), PTAM *hla⁸-「する」(cf. マンチャト語 lha-, ティナン語 la-, ランバ語 lə-) 等は、さしあたりその候補とみなせよう (註38参照)。

- 30) 次の例は、Zoller [1983] の語彙 (1) に含まれるチベット語からの借用語と思われる例である。そのほとんどが名詞であるが、同じヒマラヤ語系の言語であるマンチャト語、ブナン語等と同様に、この借用語にも更に幾つかの年代層があり得るであろう。

例. kaŋ「骨髓」(WT rkaŋ), chinpa「肝臓」(WT mchin-pa), nag「膿」(WT rnag), nad「病氣」(WT nad), mhan「薬」(WT sman), thanga「平野」(WT thaŋ; cf. カル [sgar] 方言／ツァンダ [rtsa-mda] 方言／ブラン [spu-hreŋ] 方言 t'a:ŋ⁵⁵ka⁵³), la「峠」(WT la), cyag「鉄」(WT lcags), tab「手綱」(WT srab), ta:r「斧」(WT sta-re), dan「絨毯」(WT stan), bhuta「轡」(WT sbud-pa), lham「(チベット風) 長靴」(WT lham), mar「ギー (ghee)」(WT mar), momo「モモ (チベット風) ギョウザ」(WT mog-mog), magp(h)a「婿」(WT mag-pa), phi:ya「マーモット」(WT phyi-ba), bhalan「(雌) 牛」(WT ba-glan), tag「標識」(WT rtag), lha「月 (month)」(WT zla-ba); khwar-「回る」(WT hkhor-), ca:s-「始める」(?WT chas-), ch3-「買う (<売る)」(WT htshon-「売る」), so-「(子供の) 守りをする」(WT gso-「育てる」, cf. so~bso「監視」)。

上に挙げた語は、チベット語から借用された可能性の高い語と考えられる。しかし、チベット語系かランバ語固有の語彙かは、両者の相互関係をどのように措定するかにも懸っており、実際には、チベット語系とランバ語固有の語彙の識別は困難な場合がある。

- 31) この受動動詞語幹を形成する接尾辞 /-s/ は、多くのヒマラヤ諸語の言語 (現在知る限りでは、代名詞化言語に限られる) にみられる動詞の「再帰」接辞 (reflexive affix) に由来するものと思われる。この再帰接辞は、チベット・ビルマ諸語に広く認められる動詞接尾辞である。

Bauman [1975] は、これを仮に #si と再構しているが、Driem [1990] は、これに PTB *-n̥si を措定する。また、Zoller [1983: 50] は、一部の自動詞に任意的に (fakultativ) または義務的 (obligatorisch) に付加されている /-c/ が“自動詞的 (intransitivfähig)”[実際は “transitivfähig” とあるが、これは明らかに誤植である] としており、事実幾つかの動詞に /-c/ の有無による自動詞と他動詞の区別が認められる。

例. 他動詞	自動詞
pho-「乾かす」	phoc-「乾く、枯れる」
phwəl-「開ける、ほどく」	phwəlc-「開く、ほどける」
lya:-「(子供を) 生む」	lya:c-「(子供が) 生まれる」

これは、有声と無声の語頭音の交替と並んで、/-c/ がかつては生産的な他動詞から自動詞を派生する動詞接尾辞であったことを示すものと思われる。この /-c/ も、チベット・ビルマ祖語の再帰接辞 #si に派生したものであろう。

- 32) mu「雪」は、WT rmu-ba「霧」、WB mui「空、雲、雨」、PTAM *hmu^h「空」(cf. STC *(r-)məw「空、雲、霧」) 等と同源形であろうが、「雪」の意味は、おそらくヒマラヤ語系の言語に限られるものであろう。

- 33) 語群の名称としてタマン語群を使用した場合、その祖語名であるタマン祖語は“タマン語”の祖語と同じ名称となる。この点は、Shafer [1953 等] の“グルン語支”を語群名に採用しても、グルン祖語には2つの意味があることになる。タマン語 (サフ方言)、グルン語 (ガチョック方言) とタカリ語を比較して、最初にこの語群の祖語の再構を試みた R. S. Pittman = J. R. Glover [1970] は、祖語名を Proto-Tamang-Gurung-Thakali (略称 TGT) と呼んでいる。

Mazaudon は、Mazaudon [1973, 1988] では、語群名にそれぞれ Tamang Subfamily, Tamang Group を、祖語に *TGTM (= Tamang-Gurung-Thakali-Manang), Proto-TGTM を用いたが、Manzaudon [1985] では、語群名を Tamang Group, 祖語を Proto-Tamang と呼んでいる。勿論、Mazaudon が、祖語名にタマン祖語以外の名称を選択しようとするのは、タマン語群とタマン語の祖語の混同を避けようとするものであろうが、この小語群に関しては、実質的に、タマン語群の祖語とは別個にタマン語の祖語を再構する試みが行われそうもない現状からみて、タマン語群の祖語の意味でタマン祖語を使用するとしておけば、大きな問題は生じないであろう。その上、タマン語は、最も保守的言語であり、タマン語の祖語を再構したとすると、少なくともその音韻体系は、タマン語群のそれとはほぼ一致する。いずれにせよ、本論文ではタマン祖語は、タマン語群の祖語の意味で使用してある。

- 34) Shafer [1953, 1967] の挙げている、グルン語支にみられるが、「他のシナ・チベット語系言語に平行列が発見されていない語幹」は、次の通りである。ここでは、タマン祖語形が再構できる語 (根) は、その意味と祖語形を示し、() 内にそれに来源する語 (根) がある言語名を示してある。祖語形が再構できない場合は、個々の言語形を示すが、問題のない限り、現代タマン諸語の資料からの引用形で置き換え、同源形に不規則な対応が含まれる言語には (#) を付した。なお、タマン祖語形が認められる最低条件は、タマン語と西部タマン下位語群のひとつの言語に同源形が認められることである。

(略語: TAM=タマン語, R=リジャンク方言, S=サフ方言, GUR=グルン語 [ガッチョク方言], THA=タカリ語, MAN=マナン語 [ブラガ方言], SYA=ジャン語, MAR=マルファ語, NEP=ネパール語 [TURNER 1980], SKT=サンスクリット語 [TURNER 1980]; Hodgson からの引用形は、どの方言形か不明である。また、資料の不十分な RTAM, MAN, SYA 及び MAR の言語名が () 内に挙げられていないのは、同源形がない場合だけでなく、該当項目が資料に含まれていない場合も含まれている。)

1. 「彼」 PTAM (以下省略) *the^h (RTAM, STAM, THA)
2. 「彼₃; それ」 *tsa^h (RTAM otsa², GUR, THA)
3. 「鉄」 *phay^h (STAM, #GUR, MAN, THA, SYA)
4. 「金」 *mar^h (RTAM, STAM, GUR, MAN, THA, SYA, MAR)
5. 「妹」 *a-ŋa^h (STAM, GUR)¹⁾
6. 「妻」 *hmriŋ^h (RTAM, STAM, GUR, MAN, THA, cf. SYA muŋ² 「女性」)
7. 「皮」 *dri^h (RTAM, STAM, GUR, MAR, SYA, MAR)

8. 「羊」 *gyuu^B (RTAM, STAM, GUR, MAN, THA, #SYA)
9. 「矢」 *hmya^{A/B} (RTAM, STAM, GUR, MAN, THA, SYA)
10. 「奴隸」 *gya-pa^B (RTAM, #GUR, THA)
11. 「鳥」 *hnya-Mya^{A/B} (RTAM, STAM, GUR, MAN, #THA)
12. 「牛」 *me^B (RTAM, STAM, GUR, MAN, THA, SYA, MAR)
13. 「猫」 [Hodgson: TAM tawar, GUR nawar, THA nobar] GUR nōbāā¹, MAN nokor², THA nokor²
14. 「豚」 *tili^A (STAM, GUR)
15. 「水牛」 [Hodgson: TAM mahi, GUR mai, THA mai] RTAM mahi², STAM maki², GUR magi² (「雌」)
16. 「家鴨」 [Hodgson: TAM hansa, GUR hansa] RTAM haŋsa², STAM haŋsa¹, GUR hāŋsa¹
17. 「上 (に)」 [Hodgson: TAM tor, GUR, te-tar] RTAM tor¹, STAM tor¹, GUR ta¹~taai¹ <PTAM *twa^A- (RTAM と STAM の -r は、於格接尾辞 /-ri/ の縮約形)
18. 「座る」 *tri/u^{A/B}- (STAM, GUR, MAN, THA, SYA)
19. 「来る」 *kha^{A/B}- (RTAM, STAM, GUR, MAN, THA, SYA)
20. 「取る」 *kin^A- (RTAM, STAM, GUR, THA)
21. 「歩く」 *bra^B- (RTAM, STAM, GUR, THA, SYA)
22. 「水」 *kyu^B (RTAM, STAM, GUR, MAN, THA, SYA, MAR)²⁾
23. 「夜」 *mun^B (RTAM, #STAM, GUR, MAN, #SYA, cf. THA. ŋona⁰)
24. 「血」 *kaa^B (<*ak) (RTAM, STAM, GUR, MAN, #SYA)
25. 「油」 *tshyu-Ku^B (STAM, #GUR, MAN, THA)
26. 「笑う」 *hn(y)et^{B/A}- (STAM, MAN, THA, cf. GUR ni¹, ŋri¹ 「笑い」)³⁾
27. 「大きい」 [Hodgson: GUR the-, THA the-] GUR thee², MAN thye², THA tho²
28. 「良い」 [Hodgson: TAM dza-, GUR sa- THA as-] RTAM tsya³-, STAM tsya³-, GUR swaa²- MAN sɔ³- THA sɔ³-, SYA sa¹-
29. 「冷たい」 *sim^A- (RTAM, STAM, GUR, THA)
30. 「熱い」 *hle/ap^A- (RTAM, STAM, GUR, THA)⁴⁾
31. 「苦い；胆汁」 *kam^{A/B}- (RTAM, STAM, GUR, MAN, THA, SYA)
32. 「黒い」 *hmlaŋ^B (RTAM, STAM, GUR, MAN, THA, #SYA)
33. 「赤い」 *wal^B- (STAM, GUR, MAN, THA, #SYA)
34. 「緑の；青い」 *piŋ (RTAM, STAM, GUR, MAN, THA, SYA)
35. 「太陽」 *di-Ni^A (RTAM, STAM, GUR, MAN, THA, SYA)

註：¹⁾ タマン語群の親族名称に多くみられる *a- は、Benedict [1972a: 121-123] が3人称代名詞と関係付ける PTB *a- に来源とする接頭辞であろう。タマン語群では、タマン語サフ方言とタカリ語の反映形は、それぞれ *a>STAM a: THA ɔ, *ak>PTAM *aa>STAM aa: THA a であるが、親族名称の *a- は、STAM a-: THA a- の不規則な対応を示している。Nishi [1972] で、筆者は、これを *A₁ と再構し、他の2音節形態素の接頭辞的要素にも同じような不規則な対応が認められることから、*A₁~*a- (条件不明) の可能性を指摘しておいた。この論文では、低母音は区別せずに、いずれも *a- と再構してある。

²⁾ この祖語形の尾部 (=韻母) は、RTAM kywi² (=kiui²) に基づいて、以前は *-uy と再構した。この尾部の唯一の平行例は、PTAM *tsyuy² 「10」 > RTAM tsywi² (=tsui²)、(cf. WT bcu; STC *tsyay) であり、タマン祖語では、*kyu^B, *tsyuy^B と再構し、PTAM *yu > RTAM -ywi > STAM -i の変化を想定する方がよいと思われる。なお、PTAM *-uy の反映形は、RTAM -wi = -ui : STAM -uy : GUR -wi : MAN -uy : THA -uy : SYA -uy である。

³⁾ PTAM *at, *et の尾部がそのまま保持されているリシヤンク方言形は不明であるが、この対立は、グルン語で (*-at>)-e, (*-et>)-i の対立にも反映されている。従って、グルン語の名詞形が動詞に派生するものと考えて、上記のように再構した。

⁴⁾ この例は、果してすべての語根が同源形とできるか否か疑問がある。

なお、このタマン祖語形の語頭音については、註36を参照されたい。
この35語根には、まず、アリア語系言語からの借用語と思われる例が次の3例含まれている。

- (3) 「鉄」, cf. NEP. phalām (*-al>PTAM *-ay)。
 (15) 「水牛」, cf. SKT mahiṣa-, NEP mahiṣ (学識語) ; WT ma-he. この STAM 形と GUR 形の語中の軟口蓋閉鎖音は, *h>*ɣ>GUR/g/>STAM/k/ の変化で説明できよう。しかしながら, このような変化 (軟音の硬音化) は, チベット・ビルマ諸語では例外的な変化であろう。
 (16) 「家鴨」, cf. SKT hamsāh 「雁」, NEP hās 「家鴨」。

また, (12) 「牛」 (PTAM *me^B) は, 北ナガ語 [群] (Northern Naga) 【=[Shafer] ボド語門ナガ語系 (Nagish Section); [Benedict](?) ボド・ガロ中核語群コニャック (Konyak) 諸語】(祖語) *me・y 「肉 (meat/flesh)」 [W. T. FRENCH 1983: 521-522] と比較できる語根と思われる。French は, この語根の本来の意味を「肉」としてあるが, 言語によって, 「動物, 獲物, 肉, 鹿」等を意味し, 更にこの語根を含む合成語, 複合語の意味は, 「牛, 猿, 猪, 羚羊, 犀, 象」等の動物から「胡瓜, サゴ椰子, 豆」等の植物まで含んでおり, French は, この語根が STC *m[e, aly 「稲, 米」と比較される可能性を示唆している。この語根は, French の北ナガ語群だけでなく, 広くナガ語系の言語の「牛」を意味する語に認められる。北ナガ語群ワンチョ語 (Wancho) で, この語根は, mai (例. mai 「鹿」, mai i 「動物, 肉」, mai hu 「牛」, mai ki 「羚羊」) である。筆者は, French の再構形や彼の示唆するボド・ガロ祖語形 *m[e, aly との比較の可能性を否定できるだけの根拠を示すことはできないが, タマン祖語の比較検討を始めた当初 (1972) から, この語根が SKT mahiṣa- と関係があるのではないかと考えていた。この語根が植物名にも使用されるのは, 意味の拡張というよりも, この語根とは別に, 本来ナガ語系言語に *may 「稲, 米」のような語根があり, 後に音声形式の類似により同音意義語となった可能性が考えられる。

次に, チベット・ビルマ祖語, さもなければ, 他のチベット・ビルマ語系言語に同源形 (か “allofam”) と思われる語根の認められる例は, 次の通りである。

- (1) 「彼」は, WT hde 「その／あの, それ／あれ」 (cf. STC *day 「この, その／あの」 ; 註25も参照) と比較できよう。
 (4) 「金」は, シャンシュン語 mar [-zi] (4.3.4.参照) と比較できるが, WT dmar- 「赤い」 (d-mar) と WT mar (PTAM *mar^A) 「バター, ギー」も同根である可能性がある。
 (6) 「妻」は, Shafer も注記しているように, 多分 WT sriŋ- 「女」やヒマラヤ語系言語に於けるその同源形と比較できる形式であろう。
 (7) 「皮」, cf. イ (彝)・ビルマ祖語 *N(g)riy^l [西 1977]。
 (8) 「矢」, cf. STC *bla~*mla; WB mrā<古期ビルマ語 mlā。
 (10) 「奴隷」*gya-pa^B は, チベット語からの借用語 (WT gla-pa 「日雇い, 雇用人 (“a day-labourer, hired workman”)」で, チベットと社会的, 文化的関係の深かったタカリ族 (PTAM *gl->THA ky- [低調]) により借用された後にタマン語群全体に広がったものと推定される。
 (18) 「座る」は, PTAM 形の母音に疑問が残るが, 同時に「留まる, 住む」も意味し, おそらく WT srid- 「いる, ある」, WB hri'- 「同左」 (cf. STC *s-ri) と同源語根であり, *sri->*stri>PTAM *tri^{A/B} のような変化が想定される。
 (19) 「来る」, cf. PTB *ga [DELANCEY 1980]。ここに引用する Delancey [1980] の PTB 形は, 近似的再構形に過ぎない。
 (21) 「歩く」 (PTAM *bra-<*b-ra-), cf. PTB *ra 「来る」 [DELANCEY 1980]。*b- は, ガレ語の同源形にもみられるが, WT b-/STC *b- (意味は明らかでない) との関係も立証すべくもなく, PTB *pa(i)~*ba(i) 「行く ; 来る」 [DELANCEY 1980] との関係も考慮に値しよう。
 (22) 「水」も, WT chu (?<*khyu) と同源語であろうが, この語頭音の対応には平行例がない。なお, Hodgson/LSI では, TAM kui, GUR kui, THA kya となっており, もしこの誤記がなければ, Shafer も, 多分タマン語群の「水」を WT 形と比較したことであろう。
 (26) 「笑う」, cf. WT bžad-/gšad-, ブナン語 sed- (<*sred-), WB ray- (STC *rya-t)。ただし, タマン祖語形は, 鼻音接頭辞 (*N-) を持った同源語幹から派生した語幹と思われる。特に, グルン語の2重語 (doublet) /ŋri/ は, この接頭辞を反映したものであろう。この語幹と同じ語頭子音結合が推定される例は, PTAM *nyu^B- 「溶ける ; 溶かす」

(RTAM, STAM, MAN, THA, SYA) (cf. WT bzu- (完了形) /zu「溶ける」) しか今のところ見い出せない。この両語根の Pre-TAM 形は、それぞれ *C-N-ryat-, *N-ryu- と再構しておく。

- (31) 「苦い; 胆汁」は, Matisoff [1978: 207] に従えば, PTB/PST 単語族 *ka-{m, n, ŋ} (= *ka < *kam < *kan < *kaŋ) (A < B は, 「A は B と同一単語族に属す」, または, 「A は B の “allofam” である」を意味する) 「肝臓/胆汁/苦い」の “allofam” ということになるが, *kam, *kan, *kaŋ の例は, それぞれグルン語形とタカリ語形(タマン語群), 漢語形 (*kân/kân 「肝」), カリン語形 (khaŋ 「胆汁」) を挙げているだけである。STC *ka 「苦い」(WT kha- 「苦い」, WB kha:-) を中核とするこのような単語族を設定することはおそらく可能であろうが, 他のチベット・ビルマ語系言語に同源語根が発見されるか, この末尾子音 (*-m ~ *-n ~ *-ŋ) についてなんらかの説明が与えられるまでは, 結論を保留せざるを得ないのである。いずれにせよ, 現段階では, この語根がタマン語群に特有な語根である事実には変りはないといえる。

- (32) 「黒い」は, おそらくビス語 (Bisu) /plán-/ 「黒い」 (?aŋ-plán 「黒」) [西田 1966] と同源語根か “allofam” である可能性があるが, 語頭音の相違 (ビス語では, *m->b- の変化が認められるので, b- であれば, 同源語根の可能性が大きい) は説明できない。いずれにせよ, この語根は, 今のところ他のチベット・ビルマ諸語には認められない。

その他, (8) 「羊」については, 註41を, (24) 「血」については, 註37を, (11) 「鳥」と

- (35) 「太陽」については, 註38を参照されたい。これらは, いずれも, チベット・ビルマ語系か, チベット語系の語根を含むと思われる。

- (17) 「上(に)」のタマン祖語形は, 確実ではない。これは, カリン語 -tü, バンタワ語 -du, リンパ語 (バンタレ方言) tho, (ベダッベ方言) tho 等と比較できる形式かもしれないが, 対応は明らかでない。

- (27) 「大きい」(タマン祖語形なし) について, Shafer は, WT che- との比較から, これが WT c-, ch-, j-< *t-, *th-, *d- (前舌母音の前) の変化の可能性を示唆すると注記しているが, この例では, 母音の対応が不規則な上, その祖語形(西部タマン下位語群)が再構できるとしても, 祖語形の母音が前舌母音であった可能性は小さい。

- (28) 「良い」のタマン語形は, 他の言語形と同源形とは思われない。また, タマン語形以外の言語形も対応が不規則である。MAN sa³- と THA sa³- < *za^h- となるが, タマン祖語の音素目録には, */z/ はない。いずれにせよ, TAM tsya³- (< *dzya^h-), MAN-THA *za^h- 等の同源語根は今のところ他のチベット・ビルマ語系言語には見当たらない。

- (13) 「猫」のタマン語形は, 他の言語形と同源形が明かにならず, この点は, 一応タマン祖語形を再構しておいた (30) 「熱い」についても同様である。

以上の考察の結果, Shafer の挙げている35語根のうち, 現時点で全く来源の不明な語根は, (2), (5), (12), (14), (17), (20), (23), (25), (27), (28), (29), (30), (33), (34) の14語根に過ぎないが, (24) もこれに加えられるかもしれない。(4), (6), (8), (22), (24) の5語根はチベット語系の語根といえ, (10) はチベット語からの借用語である。

- 35) 厳密に言えば, 「血」と「寒い」(註37参照) は, 同源形 (“allofam” を含む) があるとすると分析も可能である。「雪」(註29参照) は, ナル語とガレ語及びヒマラヤ語系のテボール語とランパ語にのみ, 「する」(註30参照) は, ヒマラヤ語系のマンチャト語, ティナン語, ランパ語にのみ, 「金」(4.3.4.参照) も, この意味では, シャンシェン語にのみ, 同源形が認められる。「歩く」は, PTB *ra- と同源語根であるとしても, *b- を持つ形式は, ガレ語にしかみられない。また, 「黒い」と「卵(を生む)」(4.4.3.3.参照) は, 同源形 (“allofam” を含む) が認められるが, 同一語系以外の周辺言語には全く認められない。ここに挙げた「特有な語」には, 他の言語に同源形が認められても, さまざまな事情を勘案して, タマン語群を特徴付けるといえる語(根)も含めてある。

- 36) タマン祖語の再構については, 西 [1989] を参照されたい。本論文では, 西 [1989] の再構形に多少の簡略化と修正を加え, 更に, 祖語の声調の表示も混同を避けるために, *A(=*1) と *B(=*2) に変更してある。西 [1989] にも述べたように, 声調対応は, タマン語の声調を基本にして立ててあるが, グルン語とタカリ語との声調対応にははっきりしない点が残っている。

西 [1989] では, タマン祖語に, *hl₁-, *hl₂-, *hl₃- の3種の *hl- を再構したが, *hl₂- と *hl₃- の場合と異なり, *hl₁- の反映形は, すべて /l/ (高調) であり, 無声側面音 /hl/ の反映形を示す言語はない。この語根の例では, タカリ語の反映形が /hl-/ であり, 従って *hl₂- と再構して

おくべきであるが、さまざまな理由から、タマン祖語の再構はまだ完全なものといえないので、本論文では、頭部 (initial) と尾部 (final) 共に、再構形は簡略化してある。なお、PTAM *hl₂- と *hl₁- を持つ形式は古い借用語である可能性も否定できない (*hr- 類についても、同様に簡略化してある)。

なお、一般に、タマン語群の言語は、語中の音節頭閉鎖/破擦音及び響鳴音の有声性の対立が失われるので、*hna-kaa^A「鶏」や *ba-hley^A「足」(註38参照) のように、合成語/複合語の第2要素が他の合成語/複合語の語頭音として現れるような場合を除き、その語中音節頭子音が祖語に於いて*無声音と*有声音のいずれであったか不明である。そこで、再構形では、このような語中音節頭音を大文字 (capital) で表してある。しかし、祖語に於いても同じように、これらの対立が語中で中和されていたかは不明であり、従って、この大文字には原音素 (Archiphoneme) の意味はない (タマン語群のすべての言語の資料がある程度充たされるまでは、その祖語には不確定要素が残る)。

- 37) 筆者は、西 [1972] タマン祖語の音韻体系には、*kr-; *gr-; *khr- (例. *kra^A「頭; 髪」, cf. WT skra「髪」, STC *(s-)kra「髪」; *gri(k)^B「1」; *khru^B「洗う」, cf. WT hkhru-, WB khyui; STC *krəw) が再構されるので問題はあがあるが、PTAM *hna-kaa^B「鶏」の第2要素 *kaa<*kak が WB krak^B「鶏」(イ・ビルマ祖語 *k-rak(高調) [MATISOFF 1972]; STC *rak) と比較される可能性を指摘し、同じように *-r- の脱落が推定できる例として、PTAM *kaa^A「血」(cf. WT khrag) と *khaŋ-「寒い」(cf. WT graŋ; WB krak- [古語], STC *graŋ) を挙げた。その後、本文 (4.4.4.) に述べた経緯を経て、現在では PTAM *kaa^B「鶏」は、*kak (高調) に来源することが明らかになり、「鶏」に関しては、当初の推定が誤りであったと判明したが、「血」と「寒い」に関しては、当初の推定を完全には否定できない。
- 38) ここに挙げた複合語/合成語起源と思われる語には、第2要素 (「魚」、「太陽」、「足」、「鶏」、「蟻」、「犬」、「蠅」) のみに他のチベット・ビルマ語系言語に同源形が認められるものと、第1要素、第2要素のいずれ (「鳥」、「村」) にも同源形が認められるものがある。現代タマン諸語では、「魚」の第2要素 *-ŋa(N/) は、/ŋ/ の大文字は、WT ña, WB ŋa:, STC *hŋya と同源形であるが、第一要素 *tar- は、*tar^A「白 (い)」と関係があるとしても、意味的な関係がはっきりしない。

「太陽、昼間」の第2要素 *Ni は、WT ñi-「太陽、日 (昼間)」, WB ne<古期ビルマ語 niy「太陽」, ne'<niy'「日 (昼間)」, STC *nəy「太陽、日」と同源形であるが、第1要素 *di- の来源は不明である。Benedict は、STC でこの同源語根セット (cognate set) にディマサ語 (Dimasa) di-ni「今日」(勿論、-ni が同源形) を挙げている。「今日」は、タマン祖語形では、*ti-Ni^A であるが、この *ti- がディマサ語 di- 等 (cf. STC *day「この、その/あの」) と初頭音が対応するか否か不明である (註34の (1)「彼」を参照)。

タマン諸語では、「1日」、「2日」のような日数の計算では、{数詞+PTAM *-raa} のようにいうが、この *-raa<*rak は、WT žag「日 (24時間)」, WB rak<ryak, STC *s-ryak と同源形であろう。STAM 形は、/-raa/ が予想されるが、実際は、/-ret/ であり、尾部の対応が不規則である。これは、前タマン語に於ける *-rak~*-ryak(>STAM -ret) の交替形の存在を反映するものかもしれない。*-yak>*yet>PTAM -yet と *ryak>PTAM -ret の変化が推定される例には、PTAM *syat^B「風」(RTAM syat²: STAM syet² 等) <?*syak<?*sik (cf. WT šig, ヒマラヤ語系 #srig [ヒマラヤ語系言語の比較語彙表 (4.3.2.) 参照], レブチャ語 šak; STC *šrik) と PTAM *hnyet^{B/A}<*C-N-ryak-「笑う」(註34の (26) を参照) が挙げられる。

「足; 脚」の第2要素の尾部 *-ey は、STC -e: GUR -i: MAN -e: THA -e: SYA -e のグルン語の反映形に於ける (PTAM *-e>)-e と -i の対立を考慮したものであるが、平行例は、PTAM *hme^A「火」(cf. WT me, WB mi:, STC *mey) と西部タマン語群 *hrey「指」しかない。また、タマン語では、「足; 脚」(RTAM/STAM kaŋ¹) は、チベット語からの借用語 (cf. WT rkaŋ-) で置き換えられているが、サフ方言の /lephum²/「腓 (こむら)」が {le-「足」+phum「卵」} (cf. THA pələ² phum⁰) と分析できることで、タマン語にもかつて *ba-hley^A に来源する語が存在していたと推定でき、更に、祖語形の第2音節の初頭音も *l- でなく、*hl- と再構すべきことが明らかとなった。この2音節語の第1要素は、タマン語の例からも明らかのように、タマン祖語に於いて既に接頭辞か非中核的要素と受け取られていたと思われる。この第1要素は、ラウト語形 bña「足」(註17) と音声形式が最もよく一致するが、この両者共に、ヒマラヤ語系 #baŋ「足」(ティナン語、カナウル語、ブナン語、テボール語) と広義の同源形 (=「allofam」) かもしれない。その他にも、「足」の初頭音が両唇閉鎖音で

ある語(根)がインド東北部のチベット・ビルマ語系言語に散見されるが、これらも、PTAM *ba- の同源形の候補といえよう。例、ツァンロ語 bi [孫他 1980]、ナガ語群/諸語【=[Shafer] ボド語門ナガ語系及びビルマ語門クキ語系ルフバ (Luhupa)、西部、北部ナガ、東部、メイテイ (Meithlei)、ミキル (Mikir) の諸語支; [Benedict] (?) ボド・ガロ中核語群コニャック諸語及びクキ・ナガ中核語群の一部】phizhe, phe, phai, uphi, uphezi 等 [LSJ 1928; G. E. MARRISON 1967]。第2要素 *-hley と広義の同源形の候補としては、カイク語 le, ハユ語 le, スンワル語 (khoy-) li, バヒン語 (kho-) li (以上, [LSJ])、錯那門巴語 (麻瑪方言) le³⁵-(me²⁵³)、(文浪方言) li³⁵-(min⁵⁵)、Konow の北アッサム語群【=[Shafer] チベット語門/ビルマ語門ミシン語系 (Mishingish); [Benedict] アボル・ミリ・ダフラ中核語群】(a-)le [LSJ] 等が挙げられよう。勿論、これらの諸形式の間の対応関係が明らかにされるまでは、いずれも単なる類似形に過ぎない上、全体としてこの複合語/合成語と関係付けられる語は、ナル語 (bale) を除き、他のチベット・ビルマ語系言語には見当たらず、この語はタマン語群に特有な語といえる。その一方で、この語の各要素の同源形候補が広義のヒマラヤ地域に限定されている点も注目値する。

「鳥」については、第2要素は、Shafer [1953: 202, fn. 3, 1967: 126, fn. 4] が注記しているように、ディガロ語 (Digaro) (=タイン語 [Taying]) ([Shafer] チベット語門/ビルマ語門ディガロ語系; [Benedict] (?) アボル・ミリ・ダフラ中核語群) mpia「鳥」を媒介として、WT bya(;*STC* *bya~*bra) 等と関係付けられる語根であろう。問題は、この語の第1要素 *hny- である。この語根は、開音節としてしか再構できないが、イ・ビルマ祖語 *k-ŋak [THURGOOD 1977] (=イ祖語【コロ祖語】[BRADLEY 1979]) と “allofam” の関係 (*s-ŋyak & *s-ŋya) にあると想定できなくともない。なお、Matisoff [1972] で、イ・ビルマ祖語形の頭部 (initial) は、*s-ŋ- と再構されていたが、Thurgood は、リス語 (Lisu) nyá² [J. O. FRASER 1922] 等の声調の反映形を基に、*k-ŋ- と再構し、更に Bradley は、リス語、ビス語 hiá とブノイ語 (Phunoi) hajà のそれに基づき、イ祖語形の頭部を *s-ŋy- と再構しており、Bradley のイ祖語形は、イ・ビルマ祖語形とすることができる。

「村」の註29に挙げた同源語根セットには、ダフラ語 (Dafra) nam「家」が加えられる。Shafer は、「Murmi nam-sa(=“house-place?”)」のように、第2要素 *-sa が PTAM *sa^A「土(壤)、地面」、WT sa「土、場所; 場所」と分析できる可能性を示唆しているが、これは妥当な分析といえよう。

「犬」と「鶏」の第2要素、*k(h)yu と *k(h)ru/o の初頭音は、それぞれ RTAM 形のみと STAM 形のみが有気音であり、祖語形が*有気音であったか、*無気音あったかはっきりしない。この「犬」、「鶏」と「鶏」の4語は、いずれも第1要素が *hna- であり、イ・ビルマ諸語の *k- のような“動物名”接頭辞 (animal prefix) の類と解釈できなくともない。しかし、「犬」の *hna- は、Shafer が指摘するように、リス語 (a¹) na⁵ [FRASER 1922], (a³⁵) na¹¹ [芮 1948], (a¹¹) na³¹ [徐琳他 (編) 1986]「犬」と同源である可能性がある一方で、語全体としては、ヒマラヤ語系のチャウダンス語とビヤンス語の「犬」(nau-khvi, nikhi [LSJ]) に比較できよう。また、「鶏」の *hna- は、タイチョン語 (Gui³³tch⁵³) 【=貴琮語】na³³「鶏」[孫 1987] と同源語である可能性も否定できない。なお、「鶏」の第2要素については、本文の説明を参照されたい。

これまでの祖語の複合語/合成語に来源すると思われる2音節語の考察に従えば、「足」を除けば、少なくともひとつの要素には、確実に同源と思われる語根が他のチベット・ビルマ語系言語に認められる。残る要素については、勿論、類義語根である必要はないわけであるが、“類義語根”と思われる語根が見い出される点が興味深い。しかし、これが本当に“類義語根”か否かはチベット・ビルマ諸語全体の語彙の研究の進展を待つしかないといえる。なお、明らかに2つの類義語根に分析できる例としてグルン語 tūbi¹「(動物の) 皮(革)」(<*dri^A「皮」(註34参照) + *phii^A「(木の) 皮; (皮を) 剥ぐ」(<*ik; cf. *STC* カチン語 [ジリ [Jili] 方言) maphik, カレン語 phi⁹<*phik「(動植物の) 皮 (skin, bark)」) を挙げることができる。

Shafer は、タマン語群の語彙中の、ヒマラヤ地域とその周辺にしか関連のないと思われる語として、PTAM *nam(-sa)^B「村」、PTAM *hna(-k(h)yu)^A「犬」、西部タマン語群 *pho^A「鹿」(cf. チャウダンス語/ビヤンス語 pho, フルソ語 (Hruso)【=アカ語 (Aka)】phu), PTAM *maŋ^A「悪魔; 夢」(, *maŋ^B「夢をみる」)(cf. レブチャ語 muŋ「悪魔」) を挙げ、これらの語根の平行例が「地理的に非常に分散しているので、それらが基層語 (substratum) の影響

を表しているかもしれない」と述べているが、「犬」と「悪魔」(cf. *STC* *r-məŋ「夢」)を除いた、残る2語は、分布がほぼヒマラヤ地域に限られている。註29に挙げた「雪」(PTAM *glin^B)や「する」(PTAM *hla^A-), タマン語群の「足」(PTAM *ba-hley^A)の2つの語根に代表される語根等と共に、これらの語根が「基層語」(そのような言語の存在が仮定できるとして)の影響を表している可能性はないとはいきれないであろう。タマン祖語の語彙には、まだ同源語根の発見できない語根が数多く含まれており、これらの語根の比定は、今後もチベット・ビルマ祖語や「基層語」の語彙について多くの知見を与えてくれることと思う。

- 39) *[] は、*k->*d-, *l->*gy-, *l->*hy- 等の変化の条件となった要素を表すものであるが、実際は、①, ②, ③の [] は、[], [ʔ], [] のように、それぞれ区別して表示されるべきものである。

- 40) Benedict [1973] は、①の「家」の変化を *kyim>*tyim>dim (2次的有声化) としている。筆者は、ここに挙げた3語にのみ2次的有声化を認める根拠がないことから、Benedictの説明を受け入れることができなかったが、その後、少なくとも「家」に関しては、ヒマラヤ語系、#gyim, ナル語 gyim であることや「針」も、カイケ語 gap, カム語 ʔap, チェパン語 gyap のように、周辺の言語(特に、カイケ語)に有声初頭音を持つ形式が多くみられることから、Pre-TAM *gyap を仮定することができれば、「家」と平行的な変化が考えられるので、Benedict 説も大いに可能性があると考えられるようになった。(「針」は、イ・ビルマ祖語 *k-rap (高調) ~*rap (低調) [MATISOFF 1972], *kə-rap [THURGOOD 1977] と再構されていたが、Bradley [1978] は、これにイ祖語 *g-rap (低調) を再構しており、これも、イ・ビルマ祖語形と取ることができる。また、有声性に関しては、標準化されたチベット文語形がチベット祖語の初頭音を忠実に反映していない可能性のあることは、註26で述べた通りである。従って、*STC* 形のように、この語根の頭部を *k- で再構することには問題がある。)問題は、PTAM *dwat^B「荷」であるが、これに①の変化を推定したのは、ガレ語 kwi「荷」(?<*wat; cf. ガレ語 hwe「驚」, PTAM *grwat^B; ガレ語 he(t)「8」, PTAM *brat^B)と PTAM *dwat≠WB wan「荷」に基づくものである。その後、このタマン祖語形の同源語根の探索は、「荷」やそれと関連のある動詞形が語彙集にあまり採録されていないことも手伝って、全く成果が上がっていないが、カチン語 kun³³「背負う」; mā³³kun⁵⁵ (数量詞)「ひと背負い」はおそらくその同源語根の候補とみなせよう。また、「針」の前タマン語形については、*gyap を仮定する根拠(チェパン語の gyap の -y- は2次的に発達したものである)が薄弱であり、ここでは、結論を保留しておくが、註44も参照されたい。

- 41) ②の3語は、いずれも推定上の同源形の初頭音が l- であるが、すべての言語で、その頭部(initial)が *l- であったと限らないことは、ヒマラヤ語系言語やカム語で「道」の初頭音が、*l->l- (例。「葉」, cf. *STC* *lap) と対照的に、*l->ϕ- であることから推定できる。タマン祖語の場合、この *[] は、少なくとも、*g- を含む要素であると考えられるが、ナル語 gualam が2語根からなるとすれば、この *[] も接頭辞的要素でなく、辞書的形態素 (lexeme) であった可能性もある(例えば、イ祖語 *ʔ-ga(ŋ)¹「道」[BRADLEY 1979] も比較の対象とできよう)(次註も参照)。同時に、母音の対応に問題があるが、本文(4.3.4.)に指摘したジャンシュン語 lgyum「道」<glyum との関係も考慮に値しよう。現段階では、他の2語には、チベット文語以外に同源形は認められないが、この2語の *[] も、「道」と同じか、少なくとも、音声的に類似した形式であったと思われる。しかし、どのような形式であったか現段階では具体的に提示できない。なお、WT las「仕事」<*lads(cf. Benedict [1972a: 102])と推定されるが、もし *lads が、動詞 *la- の派生名詞と分析できるなら、PTAM *hla^A-「する」と同源形(“allofam”)がチベット語に発見されることになり、*hla^A- はヒマラヤ諸語の特徴語ではなく、チベット語系の語彙に含まれることになる。

- 42) タマン祖語の *hy- と *y- の対立は、現代タマン諸語でそれぞれ y- (高調) と y- (低調) のように、声調の対立に反映されている。この声調の対立は、基本的には、チベット語の場合と同様に、前タマン語に於ける(無声/有声>無声)接頭辞の有無に条件付けられたと推定される。また、③の例では、②と異なり、*STC* 形にも、接頭辞が再構されている。更に、PTAM *hy- 再構される例のみが他のチベット・ビルマ語系言語の l- と対応しており、PTAM *y- が l- と対応する例のない点にも留意すべきであろう(註36参照)。勿論、PTAM *hy- には、例えば、PTAM hyan^B「軽い」(cf. WT yan-; *STC* *r-ya·ŋ) のように、*[] y->PTAM *hy- の例も含まれている。いずれにせよ、①, ②の *[] と同様に、③の *[] も、現段階では説明できない。なお、PTAM *hyun^B「石」は、イ・ロロ祖語 *k-lok (高調) ~*k-loŋ (高調)

[MATISOFF 1972], *kə-lok [THURGOOD 1977] (イ祖語 *k-lok (低調) [BRADLEY 1979]) と同源形 (“allofam”) である。PTAM *hyoo⁸-「充分な」<*hyok に対応するイ・ロ祖語形は、*lok (低調) [MATISOFF 1972] (=イ祖語 [BRADLEY 1979]) である。なお、この語根は、Benedict [1972a: 88] でもビルマ・ロロ【=イ・ロロ】語形 (*luk) として挙げられているが、分布域が限定されている (註61の「雑草」も参照)。

Matisoff [1985b: 422ff.] は、“腕，手，翼”の意味領域 (semantic area) を包含するシナ・チベット語族のひとつの単語族に、下のような “pan-allofamic formula” (*lak⁸≡*yak⁸≡*d-lak⁸≡*d-yak⁸≡*d-l[]ak⁸≡g-lak⁸≡*g-yak⁸≡g-ya 等) を立て、タマン語 (yaa), グルン語 (yo), タカリ語 (ya) を “proto-allofam” *yak に派生するとしている。

Pan-Allofamic Formula “腕，手，翼”

$$\begin{pmatrix} d- \\ g- \\ p- \end{pmatrix} \begin{matrix} l \\ y \end{matrix} ak / \begin{pmatrix} d- \\ g- \\ p- \end{pmatrix} l'ak$$

しかしながら、PTAM *hya⁸「手」の初頭音に関しては、*[]l->PTAM *hy- を示す十分な平行例がある上、タマン祖語形の*初頭音からも明らかなように、タマン語群に於ける同源語根はいずれも高調であり、初頭音が有声響鳴音である *yak と直接関係付けることはできない (次註も参照)。

- 43) Matisoff [1978: 205] は、カナウル語の stin「同左」、タマン語 tin⁹「同左」、カイケ語 diŋ「同左」、ハユ語 diŋ「肝臓」、スンワル語 au-di「同左」、パヒン語 diŋ「同左」に、* (s-)diŋ「心臓／肝臓」を立て、従来の *sn->カナウル語 st- ([SHAFFER 1967: 134 (カナウル祖語 *sn->st-)], [BENEDICT 1972: 35, fn. 117]) の変化を否定しているが、カナウル語の場合には、註25に挙げた、この変化が推定される数多くの平行例があり、Matisoff の主張は、奇を衒ったものとしかわれない。タマン祖語 *tin⁹「心臓」は、*sn->*st->*t- の変化によっても、Matisoff の再構形に基づく、*sd->*st->*t- の変化によっても説明できる。特に、カイケ語の有声初頭音はうまく説明できる。しかし、*s- は、カナウル語を取り去ると、それを具体的に裏付ける証拠はなくなり、単にタマン語系言語の無声初頭音を説明するために、証拠もなしに、指定された要素と化してしまう。カナウル語形とタマン語形を除くと、Matisoff がこの再構形に「心臓」の意味を付加することを正当化するものは、カイケ語形だけになる。カイケ語形の有声初頭音 d- は、確かに、*d->d- (ただし、反舌音性は説明できない) の変化ではうまく説明できるが、周辺地域の言語、特に、中央ネパール語系の言語との関係からみて、なんらかの理由で有声 (反舌音) 化したとするか資料の性質 (註59参照) によるものと考えるべきであろう。「心臓」のタマン祖語形については、更に註53を参照されたい。Matisoff [1978] は、歴史的比較研究の分野に興味深い方法論 (“organic semantic method”) を提唱したものであり、そこに例として挙げられた再構形や同源語根のセットは、暫定的なものに過ぎないと思うが、個々のケースを詳細に検討すると、チベット・ビルマ祖語／シナ・チベット祖語の再構を行うに当たって、まず、個々の語群の祖語をできる限り厳密な音韻対応を立てた上で再構しておくことの重要性が逆に浮き彫りにされて来る。

- 44) 音韻変化で、*接頭辞が語根の*初頭子音に変わり、派生語根の初頭子音となる現象は、チベット・ビルマ諸語でしばしばみられる現象であるが、言語名の類型から始まり、様々な言語現象に新造用語を考案する才能を発揮している Matisoff は、この現象を“接頭辞優先 (prefix preemption)”と名付けた。Shafer [1953] は、タマン語群のこの2語根とそれぞれ WT skar(-ma)「星」と dkar(-ba)「白い」、更にタマン語群の「舌」(PTAM *hle⁹) と WT lce「舌」を関係付け、接頭辞がおそらく次の初頭音が破擦音か摩擦音である場合に、それに代わり保たれた例としている。Shafer は、既に「星」の初頭音に祖語形 *ɣ- (註26参照) を指定したが、これが WT skra「髪」、PTAM *kra⁸も説明するとし、平行的に、「白い」の初頭音にも *ɣ- を仮定し、PTB *t-ɣar であったかもしれないと述べている。しかし、*s-kr->PTAM *kr- と *s-k->PTAM *s- の相違は、前者の頭部が *kr であることで説明できるので、決して Shafer の *ɣ- を正当化する例とはいえず、「舌」の例では、チベット文語形の -c- は、口蓋化を通してチベット語で2次的に発達したとする Benedict [1972: 33, fn. 104] の説明の方が妥当である。また、*sk->PTAM *s-, *dk->*tk->PTAM *t- の変化の過程で、*k-, *ɣ- を仮定することはできないし、その必要もない。

- 45) S. Subba [1972: 96-97] のマガル語には、ネパール語からの借用動詞語根をマガル語動詞語

幹に変える語幹形成接尾辞 /di~diš/~/i~iš/(r__) がある。Subba は、/di~/~/diš/ 及び /i~/~/iš/ の交替形の選択は個人のスタイルの問題であるとするが、/diš~/~/iš/ の /š/ は、ヤンチョック方言の /-s/ に対応する形式で、G. Shepherd (CSDPSLN II; Hale=D. E. Watters, eds. [1973: 223] に引用される) が指摘しているように、本来再帰 (reflexive) 接辞に由来する自動詞化接尾辞である。ヤンチョック方言では、ネパール語からの借用語の動詞語幹形成接尾辞は、/di~/~/ri/ で、/diš~/~/ris/ の /-s/ は、現在も生産的な自動詞化接辞としての機能を維持している。

このマガル語の接尾辞は、タマン語群のグルン語 /-di/ とタマン語 /-ti/ 及びガレ語 (ケウラ方言) /-ti/ にもみられる、ネパール語からの借用動詞語根に付加される語根形成接尾辞と明らかに同源形である。マガル語とネパール語及び周辺のチベット・ビルマ語系言語との接触の歴史などを考えるならば、地理的位置関係からみて、おそらくマガル語→グルン語→ガレ語→タマン語の順序で借用されたものと考えられる。

- 46) 西 [1989] では、タマン語群の下位分類の指標として、“8) 於格接尾辞と異なる与格接尾辞がある”を挙げ、タマン語 ({-ta}) とグルン語 ({-lai}) の与格接尾辞を示したが、この指標は、明らかに2つに分け、8) (a) タマン語、(b) グルン語とすべきものである。また、指標3) と4) は、共通点があることと、いずれもマナン語に特有な変化なので、ここでは指標③としてまとめてある。実際には、タマン祖語の音韻体系から個別言語のそれへの変化を全体的に取り上げ、指標として示すべきであろうが、その場合には、説明に多くのスペースを割かなくてはならず、指標として無意味な変化までも挙げることになるので、ここでは特に有効と思われる指標の一部に限定して示した。

タマン祖語では、音節初頭子音として、阻害音 (閉鎖音と破擦音) に *無声無気音、*無声有気音と *有声音の3系列が再構できる。声調は、*A (規則的反映形は /¹/ と /³/) と *B (規則的反映形は /²/ と /⁴/) の2声調が再構される。阻害音のうちで、*有聲阻害音の系列は、タマン語、タカリ語などでは、*無声無気阻害音と融合 (merger) し、(音韻的に) 無声無気音となっているが、*有聲阻害音に由来する子音を初頭音とする音節の声調は低調類 (/³/ と /⁴/) を取り、*無声無気阻害音に由来する子音のそれは高調類 (/¹/ と /²/) を取っている (ただし、マナン語のブラガ方言とンガワル方言では、声調の逆転現象が起こり、/¹/ は低調に、/⁴/ は高調に変化している)。マナン語の特徴のひとつは、*有聲阻害音が、*A では“規則的に”無声無気音 (*A > /³/) に変化しているが、*B では“規則的に”無声有気音 (*B > /⁴/) に変化したと考えられる点である。しかし、Hoshi [1984] の資料では、いずれの変化にも例外が認められ、特に /⁴/ の場合には多い。その大部分は、誤記やチベット語からの借用語 (低調) として説明できる。例。/tshyaŋ³/「北」(cf. WT byaŋ), /keken⁴/「先生」(cf. WT dge-rgan)。従って、音韻変化の真の例外は、/thintse³/「昼」、/kya⁴/“2人称単数”(< *gya^B) など比較的少数の例に限られるものと思われる。いずれにせよ、これらの借用語の導入や例外の存在のせいで、マナン語には /³/ 及び /⁴/ でも無気音対有気音の対立が生じている。なお、Mazaudon [1988] は、マナン語の低調語に於ける無気音と有気音の対立が声調に条件付けられたものとして音韻的対立と認めていない。これは、勿論借用語を除けば、多少の例外はあっても妥当な主張といえるが、マナン語のみならず、タマン語系の言語では、チベット語からの借用語は、音韻的にその言語に同化している。また、古いチベット語からの借用語は、実質的に、固有語と区別することができないのである。

- 47) この変化の推定される例は、次の2例である。

	R/STAM	GUR	MAN	SYA	THA	PTAM
	t- :	r- :	t- :	hr- :	hr-	< *sr-
「腫れる, 膨れる」	taŋ ² -	rō ² -	taŋ ² -	?	hraŋ ⁰ -	< *sraŋ ^B -
「糸」	tup ²	ru ²	tū ²	hruu ¹	hrup ⁰	< *srup ^B

PTAM *sraŋ^B が、WT skraŋ-「腫れる」と比較できることは確かである。一方、PTAM *srup^B の「糸」の意味での同源形は、ガレ語 (ケウラ方言) syop 以外に発見できないが、この語根は、おそらく *drup^B-「縫う」(cf. ガレ語 rop-, WT ḥdrup-, イ・ロロ祖語 *grup(低調)

～*[?]grup (低調) ～*[?]drup (低調) [MATISOFF 1972], イ祖語 *gyup (低調) /*dap (低調) [BRADLEY 1978]; STC *drup)と比較すべきもの(同一単語族)であろう。タマン祖語形で、この両語根の頭部が *sr- であったと仮定するのが最も単純な再構法であるが、PTAM *sran^B- と WT skran- を比較すれば、*skr->PTAM *str- もひとつの可能性である。ただこの場合には、*skra>PTAM *kra^A の変化との関係が問題となる。一方、「糸」にも、祖語形の頭部が同じであったと仮定する必要はなく、「縫う」と同源語根であるとすれば、(*sgr->)*sdr->PTAM *str- の変化を想定できよう(註57も参照)。この両語根の頭部の変化の平行性から考えて、上に指摘したような問題はあがあるが、いずれもその頭部がPTAM *str- であったと仮定できなくもない。もしそうすれば、⑦の変化は、*str->*sr- (“接頭辞優先”) >hr- (タカリ語, シャン語) >r- (グルン語) としなくてはならない。

48) タマン語サフ方言は、規則的に *-ak>-aa; *-a>-a と変化しており、*-ak と *-a の対立を忠実に反映しているが、リジャンク方言とタグルン方言では、一部の語根で、*ak>-aa～-a, *-a>-a～-aa の変異がみられ、短母音と長母音の区別がはっきりしなくなっている。マナン語とタカリ語では、*-ak>THA-a, MAN -a(a); *-a>THA -ə[ə～ɔ], MAN -ə のように、*-ak と *-a の対立が母音の音質の違いに反映されている。マナン語の場合には、少なくとも、音声的に(または、痕跡的に)母音の長さによる対立が残っているようである。一方、シャン語とマルファ語では、Mazaudon の資料では、この対立は、母音の音質の対立 (-a 対 -ə) となっているが、長野のシャン語資料では、この対立は母音の長さの対立に反映されている [NAGANO 1990]。なお、タマン語サフ方言では、次註で示すように、一般に、*-V_ik>-V_iV_i, *-V_i>-V_i が成り立つが、-V_iV_i の来源は、*-V_ik だけではない。

49) 現在までに多少とも資料のあるタマン語の地域変種 (regional variety) は、東からバグマティ県シンドゥ・パルチョク郡のリジャンク村の変種 [MAZAUDON 1973a, 1973b, 1975, 1976, 1978], 同県カブレ・バランチョク郡のタグルン (Taglung) 村の変種 [MAZAUDON 1973a, 1978] (49語のみ) と同県ヌワコット郡のサフ (ガオン) (Sahu[gaon]) 村の変種 [F. EVERITT 1973; A. M. Hari 1970a; TSTBLN I (HARI=D. M. TAYLOR=K. L. PIKE) 1970; TAYLOR 1969, 1970a, 1970b, 1973, 1978; CSDSPN IV (TAYLOR=EVERITT=K. B. TAMANG) 1973] の3つの地域変種であるが、変種間の差異はかなり大きい。Mazaudon は、これらの変種をそれぞれ東部方言、中部方言及び西部方言と呼び、タマン語の3つの方言区分を代表させている。タマン語は、分布域も母語人口も非常に大きく、詳細な方言調査を行えば、方言区分についても異なる結果が得られる可能性がある。なお、本文 (4.1.2.5.) の Glover の分類に於ける東部タマン語は、リジャンク方言を、西部タマン語はサフ方言を指している。現状では、タグルン方言の資料が極端に限られているため、この3方言間の差異は、音声的差異以外は不明である。3方言間の主な音声的差異は次の通りである(以下、主に Mazaudon [1978] による)。

① 声調の調値:

	リジャンク方言	サフ方言	タグルン方言
/ 1 /	54	44	55～44
/ 2 /	44	54	43
/ 3 /	33～22	11	33～22
/ 4 /	211	32	51

② 初頭子音結合:

PTAM	リジャンク方言	サフ方言	タグルン方言
*kr- >	/kr-/	/kr-/	h(w)-
*kl- >	/kl-/	/kl-/	khl-
*kw- >	/kw-/	/w-/	hw-
*khw- >	/khw-/	/hw-/	?
*gw- >	/kw-/	/w-/	hw
*grw- >	/kw-/	/w-/	?

③ 音節尾部 (final/rhyme) : (短母音 = V, 長母音 = VV)

PTAM	リシャンク方言	サフ方言	タグルン方言
*-V >	-V~-VV	-V	-V~-VV
*-Vk >	-VV~-V	-VV	-VV(〜V)
*-at >	/-at/	/-et/	-ee
*-wat >	/-ot/	/-ot/	-oi
*-yu >	/-ywi/ (= /-iui/)	/-i/	-yu

全体的にみて、祖語の音韻体系を最もよく保っている方言は、リシャンク方言であるといえよう。しかし、祖語の *-V_ik(>-V_iV_i) 対 *-V_i(>-V_i) を母音の長短の対立に忠実に反映している方言はサフ方言である。

リシャンク方言とサフ方言の音韻体系全体を比較してみても、響鳴音類 (sonorant) (リシャンク方言: /l/, /hl/, /r/, /hr/, /w/, /y/; サフ方言: /l/, /r/, /hr/, /w/, /hw/, /y/) を除けば、大きな差異はない。ただし、Mazaudon [1973b] は、対立を重視する立場から原音素 (Archiphonemes) /I E A O U/ を立てたり、/-w-/ と /-y-/ をそれぞれ /-u-/ と /-i-/ としているが、これは解釈の問題に過ぎず、Mazaudon 自身もその後の論文ではこの解釈に拘泥していない。

文法に関しては、サフ方言 [EVERITT 1973; TAYLOR 1973] について、節レベル (clause level) 以下を除いて、かなり詳細な記述があるが、リシャンク方言についての Mazaudon [1976] の記述は概略的なものに過ぎず、それほど体系的でない。いずれにせよ、この両方言の文法体系には、大きな差異は認められないようである。ただひとつ際立った相違点は、サフ方言に /-ki~-i/ と /-la/ の 2 種類の属格接尾辞があるのに、リシャンク方言にはチベット・ビルマ祖語に遡る属格接尾辞 (STC *-ki/*-gi) である前者が失われている点である。その結果、サフ方言にみられるこの属格形と関連があると思われる {動詞+ke~-i} 型の動詞句を含むさまざまな構造がリシャンク方言には記録されていない (もともと、これは Mazaudon [1976] が触れなかっただけのこともかもしれない)。なお、関係節化も、サフ方言では、主要名詞の前で「動名詞」化接尾辞 /-pa/ の属格形 /-pai~-pi/ を取るが、リシャンク方言では単に /-pa/ が付せられるのみである。

語彙の面では、それぞれ借用による置き換え項目にかなりの食い違いが認められる外に、基礎的な語彙中でサフ方言の /taa²/ 「なに」と /hutsu⁴/ 「それ」がリシャンク方言で /tik¹/ と /otsa²/ である点が注目される。この 2 語のうち、STAM /taa²/ (<PTAM *taa⁸) と RTAM /otsa²/ (<PTAM *-tsa⁸) がタマン祖語形に来源するものである。

- 50) この指標は、西 [1977] で既に触れている。また、タカリ語とマルファ語の社会的関係については、第 2 章 (前稿) の註 26 も参照されたい。なお、セルチャン氏が色をなして否定された理由には、遠因はおそらく経済的な債権者対債務者の関係に由来するのではないかと想像されるが、タカリ族とマルファ族は、長い間一種の主従関係にあり、マルファ族の多くの人々がタカリ族に使用人として仕えて来たという歴史的背景がある。興味深いのは、劣小部族には、しばしば周辺の有力部族の文化、言語を模倣する傾向がみられるが、このマルファ族もタカリ族の 4 氏族に倣って、自分達を 4 つの氏族に分けていることである。

Thurgood [1982] は、PTB(>THA) *kr-/*gr-, *khr->THA t-, th- をインド言語圏 (Indian linguistic area) と関連した現象として説明しているが、これはこのタカリ族の居住地域がかつてチベット文化の強い影響下にあったという歴史的背景を軽視した説明である。第 2 章 (2.2.2.1.5.) に述べたように、確かに、タカリ族は、近年ヒンドゥー化 (Hinduization/Sanskritization) を意識的に推し進めているが、現在もチベット言語・文化の影響は至る所に垣間みることができる。タカリ語の *kr- 等の反舌音化は、チベット語からの借用語の流入により、固有語にも、チベット語の変化規則が適用されるに至った結果であると考えられるが、これは、ある意味で、社会言語学的現象と解釈できなくもない。つまり、より高い文化であるチベット文化の表象であるチベット語に倣うことでマルファ族に対するタカリ族の社会的優位を主張したと考えられなくもないのである。なお、アーリア語系の言語とこの反舌音化を関連させて、インド言語圏を論じている以外は、イ・ビルマ【=ロロ・ビルマ】諸語の例も含め、Thurgood のこの論文の内容は、筆者の 1973 年度日本西蔵学会での発表論文 (“Some remarks on Tibeto-Burman */l-”) の内容と大差のないものである。

筆者が西 [1977] に、Mazaudon が「タカリ語をチベット語方言である」と書いたといっているが、彼女が大変な剣幕で苦情を申し立てられたことがあるが、この論文には、Mazaudon はマルファ語とシャン語をタカリ語の方言としていると述べてあるだけであり、苦情をいわれる理由はなかった。ついでながら、Thurgood 教授も「ガレ語は、Nishi (1981) [(1982) の誤り] はタマン・グルン語群に含めているが、どれか他の語群に入れるのが最善である」と述べているが [Thurgood 1985a: 380, fn. 9]、これも誤解であり、筆者はそのような趣旨のことは、Nishi [1982] にも他の論文にも一切書いていない旨、Thurgood 教授に書き送ったところ、彼が手紙で謝罪して来たこともここに記しておきたい。

- 51) ナル語の資料は、長野泰彦がマナン語（ギャル方言）調査の際に、ついでに収集したと思われる320項目程の未公開の語彙資料（ブー村の変種）しかない。この資料は音素化されていない。また、ナル村の変種とブー村の変種との間にどの程度の差異があるかは当然不明である。Mazaudon は、おそらく彼女自身で収集した資料に基づいてナル語をタマン語群に帰属させたのであろうが、具体的にナル語の例を引用していないので、根拠は不明である。カイケ語資料については、註59を参照されたい。

- 52) 長野のナル語資料では、PTAM *-iq に、-iq (例. mriŋ 「女」、PTAM *hmriŋ^h; syiŋ 「薪」、PTAM *siŋ^h) と -in (?=i) (例. klin 「雪」、PTAM *gliŋ^h; pin 「青い」、PTAM *piŋ^h) の2種類の対応形がみられる。タカリ語、シャン語及びマルファ語にも、*-iq, *-in > -in/ の融合 (merger) がみられる。マナン語も、同様であるが、MAN /-n/ は、母音の鼻音化 (/ -in/ = [-iŋ]) を表している。

一方、PTAM *-in は、-in (例. tšhin 「爪」、PTAM *tšhin^h [THA, SYA] ~ *sin^h 「爪」 [TAM, GUR, MAN]; min 「名前」、PTAM *min^h) に対応している。

この -iq ~ -in の交替は、(1) 自由交替の可能性、(2) *-iq > ナル語 -in, PTAM *-iq と *-iŋs > -ins > ナル語 -in, *-iŋs > PTAM *-iq のようなナル語とタマン語群の共通祖語の2つの異なる尾部 (rhyme) を反映している可能性と (3) いずれかが誤記である可能性の3つの可能性があるが、(2) の可能性は少ない。*kyiŋ > kyin が正しく、(*sniŋ >) PTAM *tiŋ^h と同源語であれば、*sniŋ > *tiŋ > ナル語 kyin のような不自然な変化を推定しなくてはならない。

- 53) この可能性は、Benedict [1973] がタマン語群の「家」の場合に推定した *ky- > *ty- > *d- (註40参照; *gy- > PTAM *t-) の変化と平行した変化 (*ky > PTAM *t-) である。「家」の場合、ナル語形が前タマン語形を表しているとするれば、「心臓」の場合も、平行的にナル語形が前タマン語形を表しているとしてもおかしくなく、しかも、タマン祖語形の語頭音の有声（「家」）、無声（「心臓」）の相違もうまく説明できる。カナウル語の場合と異なり、タマン語群の場合、*sn- > *t- の変化が推定される例は、「心臓」と「年」(PTAM *Tiŋ) のみであり、他の例（「7」 PTAM *hniŋ^h, 「鼻」、PTAM *hna^h）では、いずれも *sn- > PTAM *hn- の変化が推定される。（カナウル語の「膿」*snag > stək は、WT rnag と異なる接頭辞を仮定するか、*t- > *s- の変化を推定しなくてはならないが、タマン語群では、「膿」PTAM *na^h である。これはチベット語形の接頭辞の無声音 (s-) と有声音 (r-) の対立を忠実に反映しているが、逆にこのことは、タマン語群の「膿」が借用語である可能性も示唆しているといえよう。）

問題は、*kyiŋ/(?) *kyiŋs の同源形を他のチベット・ビルマ語系言語に発見できないことである。

今ひとつの可能性は、*kyin > ナル語 kyin で、この語根がタマン祖語形と同源語根でないとするものである。この場合は逆に、*k-sin のような祖語形を仮定することで、STC *m-sin 「肝臓」(Matisoff [1978: 206-207] では、「肝臓/胆汁/苦い」であるが、これに更に「心臓」が加わることになる) と関係付けことが可能となる。なお、ナル語の「肝臓」は、チベット語からの借用語 tšhinba 「肝臓」(cf. WT mchin-; STC *m-sin) であり、上の解釈が成り立てば、ナル語の「心臓」と「肝臓」は、2重語 (doublets) ということになる。

- 54) この共有語根の詳細は、Nishi [1983] を参照されたい。

ガレ語の話されている領域、言語変種（方言）、音韻体系等については、西 [1981]、Nishi [1982, 1983] 等を参照されたい。

1981年に、ガレ語地域の予備的調査を強行したのは、本文 (4.4.4) に述べたような理由によるものであった。その後、収集資料のチェックと詳細な調査を行うべきであったが、ついにその機会を得ないままに終わってしまった。この論文を書くに当たり、改めてガレ語資料を見直してみた結果、この言語がタマン語群だけでなく、この地域の他のチベット・ビルマ語系言語の位置付けとも関連して興味深い資料を提供する可能性があると思うようになった。

筆者には、おそらく2度とガレ語を調査する機会はないと思うが、誰か若い言語学者により、できるだけ早い機会にこの言語の詳細な調査・研究の行われることを期待している。

- 55) ガレ語のケウラ方言の格助詞には、(1) /-lay/ “奪格”, (2) /tay/ “具格 (手段, 道具)”, (3) /-nay/ “於格/向格”, (4) /pre/ “共格”, (5) /tso/ “属格” 等がある。このうちで、(2), (4), (5)は、いずれも高調 (/’/) をとり、音韻的には、接尾辞というより、小詞 (particle) と解釈されるが、(1), (3)は、おそらく無声調接尾辞で、{形態素+接尾辞} 全体でひとつの声調を取るものと思われる。つまり、タマン語群の言語と同様に、ガレ語の声調領域は、“音韻語 (phonological word)” ではないかと考えている。なお、これらの格助詞を本文 (4.4.1.) の接辞比較表のタマン語系言語のそれと比較されたい。
- 56) Nishi [1983: 29] にも記したように、ケウラ方言の音素分析、特に声調の分析と各語/形態素に付した声調表示は仮のものであり、誤りを含んでいる可能性があること、一部を除いて、タマン語群とガレ語の声調対応が明確に設定できないこと等の理由から、以下のガレ語形では声調表記を省いた。

ガレ語ケウラ方言の音素目録は、次の通りである。

- (1) 子音音素: /p t t̥ k ph th ʈ kh; ts tsh s h; m n ŋ; r hr l; w hw y hy/
 (2) 母音音素: /i e a o u/
 (3) 声調: /’/ “高平調”, /ˊ/ “中昇調”, /ˊ/ (無標) “中平調”, /ˊ/ “低降調”

音節頭子音結合は、/Cy- Cr- Cl- Cw- Cry- Cly- Cyw-/ の7種であるが、音節末子音は、借用語のそれを除くと、/-p -t -k; -m -n ŋ; -l -r -y/ の9子音である。タカリ語と同様に、*kr-, *gr-, *khr->t-, th- に変化したので、/kr- khr-/ はない (pp. 29-33)。この現象も、変化の契機として、タカリ語の場合と同じ解釈が可能である。この場合は、グルン族に対するガレ族 (歴史的には、グルン族をかつて支配した部族との伝承がある) の優位を表象しようとするものであろう (西 [1981] 参照)。

- 57) Shafer は、Shafer [1966: 113] のタクバ語 (Takpa; Dag-pa; [Shafer] Dwags [この綴字は誤りで、彼がタクバ語域の間違って同定した結果である]) の項で、「タクバ語は、音声的には一般に古期チベット語出自の平均的方言と同じくらいにそれとよく一致するが、ビルマ語の音声的特色を持つ2個のタクバ語の単語がある」と述べ、タクバ語 kro 「6」(<*krok, cf. WT drug, WB khrok) と mrui 「蛇」(cf. WT sbrul, WB mrwe<古期ビルマ語 mrui) を挙げて、前者について、「ビルマ語には、歯閉鎖音+r がないので、ビルマ語では、歯音が r の前で軟口蓋音になったと仮定される」と主張している。つまり、チベット・ビルマ諸語 *dr-~*gr-(STC) の交替をチベット語門とビルマ語門の言語を区別する1種の指標と解釈している。これがチベット系言語とビルマ語系言語の分類指標、あるいは等語線 (isogloss) とすれば、タマン語群のみならず、一般に中央ネパール語系の言語は、チベット語門に分類されることになる。(Matisoff [1972] では、「縫う」のイ・ロロ祖語の交替形のひとつに *drup (低調) を立てているが、これはアカ語 (taw) とラフ語 (/tʰ) の同源形に基づくもので、イ祖語形とすべきであり、Bradley [1979] がアカ語、ラフ語とムビ語 (Mpi /toʔ/) の同源形に基づいて、これにイ祖語 *dap (低調) を指定したのは妥当である。)

例. PTAM *draa<*-ak 「勝つ」, ガレ語 ta<*-ak (cf. WB krak “名誉, 栄光”)
 PTAM *druu^B 「6」, ガレ語 rwa (cf. WT drug, WB khrok; STC *d-ruk)
 PTAM *drup^B 「縫う」, ガレ語 rop (註47参照)
 PTAM *dri^B 「皮」(註34参照)

なお、一例であるが、PTAM *gr- : WB kr- の可能性のある例として、西部タマン下位語群 *gri^A 「垢」(GUR, MAN, THA, #SYA) (cf. WT dri-, WB kre; STC *kray) がある。Benedict は、WB kre<STC *kray を WT dri<STC *ri(y) のように、ビルマ語形とチベット語形が別個の祖形に由来したとするが、Benedict の再構方式に従えば、この両者の祖形 *dray を立てるべきであろう。なお、Benedict は、*dr- と *d-r- を区別するが、ここに挙げたタマン語群、ガレ語、チベット語とビルマ語には、その区別が反映されていない。

一方、チベット語西部古方言のバルティ方言、ブリック方言の (C)dr- がチベット文語の (C)gr- に対応する例がみられることは、既に西田 [1970] が指摘しているところである。

この場合、両者の関係を Shafer や Benedict のように、*dr->*gr- と仮定するよりも、むしろ音韻変化の方向としては、*gr->*dr- の方が自然である。筆者は全体的にみて、祖語ではむしろ *gr- (~*g-r-) であったのが、チベット語のいずれかの方言で *gr- に始まる一部の語 (条件は不明) に *gr->*dr- の変化が始まり、この変化が周辺の言語に語彙的に拡散 (lexical

diffusion) して行ったが、言語によって、この変化規則の適用程度が異なったために、チベット語域辺縁部の言語に西部タマン下位語群(「垢」)やタクバ語(「6」)のような例外が残ったと解釈できるのではないかと考えている。

- 58) ④の PTAM *-ii<*-ik: ガレ語 -ya, PTAM *-iq: ガレ語 -yaŋ がみられる母音の対応は、Benedict [1972a] の STC [PTB] *mik (cf. WT mik) ~ *myak (cf. WB myak) 「目」にみられる *-i ~ *-ya- の母音交替と平行している(この交替について、[MATISOFF 1978: 40-41] 参照)。この語根の場合は、カレン語形(*myak>*me)と漢語形(上古 *miōk/中古 *miuk)との比較から *myak がより古い形式とみなさなくてはならないと Benedict は述べている。しかし、タマン祖語とガレ語の間のこの対応関係には、ガレ語にみられる閉音節母音の調音点の全体的低下(lowering)からみて、*-ik>*-ek>*-yak>*-ya (ケウラ方言) /-ya? (ウイヤ方言); *-iq>*-eq>*-yaŋ のような一連の音韻変化が推定できる。この母音の調音点的低下は、*-uk>*-ok>*-wak>*-wa/-wa? に平行的に認められるだけでなく、(a) *-uŋ>*-oŋ (例. PTAM *thuŋ^B 「飲む」: ガレ語 thoŋ; PTAM *hyuŋ (-pa)^B 「石」: ガレ語 loŋ), (b) *-up>*-op (例. 註47の「糸」と「縫う」参照)の変化もこの傾向を反映したものであり、特に (a) は、上に推定した変化の過程を支持するものとみなせよう。

興味深いのは、例えば、PTAM *nyan^A 「聞く、従う」、ガレ語 nin- 「聞く」のように、逆に PTAM *-ya- がガレ語 -i- に対応している例があることである。タマン語群の「肝臓」は、グルン語に同源語根がないので、PTAM *nyet^B なのか PTAM *nyat^B 「肝臓」(RTAM, STAM, THA, #SYA) なのか不明であるが、もし *nyet^B<*nyak (註38参照)であれば、ガレ語 nik 「肝臓」に対応する可能性がある。この例では、*-ik>*-ya の例外とみなすか、*-yak>*-ik の変化を想定しなくてはならない。

Matisoff [1978: 211-212, 212-213] では、タマン語群の「肝臓」RTAM net^A<PTB *byet^B<*m-yet 「心臓/肝臓/心」と THA nye^A<PTB *(s-, k-) ni- [ŋ, k] 「心臓/脳/心」のそれぞれに別の来源を挙げている。これは、タマン語群では、一般に n- と ŋ- が -y-/i-/ (多分) -e の前に対立しないので、タマン諸語の n(y)e と ŋ(y)e は、タマン祖語で *n(y)e と *ŋ(y)e のいずれにも再構できることを知らなかったせいであろう。いずれにせよ、単語族を設定するために、やはり個々の下位語群の祖語形を再構しておく必要があることは、この例からも明らかである。

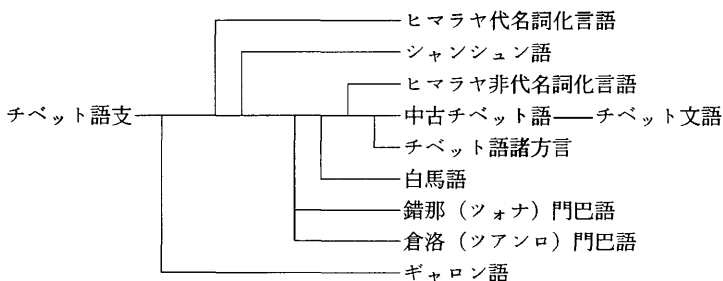
- 59) 1973年になって、この言語の僅かな資料が、当時ネパールの言語調査を行っていた Summer Institute of Linguistics (SIL) により編集された語彙集(Hale 1973, Part 4)に発表された(約760項目あり、主に名詞類と形容詞類で、動詞は基礎100語中以外のものは記録されていない)。残念ながら、この僅かな資料も、言語学者の手により記録されたものではなく、カイケ語話者がデーヴァナーガリー文字(Devanagari)とローマ字で筆記したもので、表記も一貫していない。この言語は、声調言語である可能性が大きい、それもこの資料からは全く窺い知ることができない。
- 60) Fürer-Haimendorf [1975: 205-298] に、タラリ(Tarali)と呼ばれるカイケ族とドルバ地方のチベット族との関係についての興味深い記述がみられる。両者は、カイケ族が中部丘陵地帯から運んで来た穀物とドルバのチベット族がチベットから運んで来た塩との交換を通じた依存関係にある一方で、冬季(通常、11月の初めから5月初旬)にカイケ族のほとんどの者が家を空け、中部丘陵地帯やタライ地方の都市、更には、ネパール周辺のインドの諸都市(ダージリン [Darjeeling], カリンポン [Kalimpong] やカンプール [Kanpur] を含む)へ交易のために出払うが、その間、ドルバ地方のチベット族は、老人や家畜の世話をするために僅かな男女を残し、家族ぐるみでそれぞれ伝統的な繁りのあるカイケ族の家に移り住み、その家の牛の世話、多少の農事を行い、残された老人達や子供のために家事を行うという。
- 61) 筆者は、Nishi [1972, 1973] でタマン語群にみられる PTAM *hmraŋ^A 「見(え)る」と *hmraa^B (<*-ak) 「雑草」に関して、Benedict による後者の WT ḥdžag(-ma) 「表面の粗くて厚い草の種類」(草の)葉; 茎、カナウル語 myag^A/myak 「草の種類」との比定と再構形 STC *m-lyak 「草」を否定し、この2語根にそれぞれ PTB *mraŋ と *mr(w)ak を指定しておくことを主張した。その後、西 [1989], Nishi [1990] では、この2語根に加えて本文(4.4.4.)で言及した「鶏」と「卵」の語根についても、ヒマラヤ地域の他のチベット・ビルマ語系言語には発見できないこと、動詞の初頭音の交替に基づく自動詞対他動詞の区別の痕跡のないこと、動詞の否定辞に「否定」と「禁止」(否定命令形)の2種類があること、動詞にデンス・アスペクトの活用のないこと等を理由に、タマン語群のチベット語系への分類を素直に受け入れ

ることができないと主張し、それと関連して、上掲の語根の分布からみる限り、タマン語系部族が比較的最近にアッサム以東の地域から移動して来た可能性を論じた。

この論文を書くに当たって、改めてタマン祖語の幾つかの語根の再構形とその同源語根との比定を試みたが、上の4語根に「皮」、「黒い」(註34参照)、「鳥」の第1要素(註38参照)、「荷」(註40参照)等も加えることができるのではないかと考えるに至った。その一方で、タマン語群の語彙には、インド東北部を含む広義のヒマラヤ地域に特有な語彙、例えば「雪」、「村<家」、「する」(註29参照)、「牛」(註34参照)、「鹿」、「足」(註38参照)も含まれている。今後、広義のヒマラヤ地域の言語の語彙の来源の検討が進むにつれ、チベット語系でない語根が更に発見されて行く可能性がある。その一方で、タマン語の数詞にはヒマラヤ地域的な20進法がみられるのに対して、マナン語やタカリ語には上位の数詞形成法にチベット語のそれとの類似がみられること等、同一語群内に於ける特異な差異にどのような説明を与え得るかといった問題も考察してみる必要がある。

- 62) Hodgson が Hodgson [1857a] の冒頭でキラント族 (the Kíránti people) として、17の部族を挙げているが、そのうちの3部族は、言語等に関して共通のボンタワ族の名称で統一できようとして述べている。このキラント族の中にはヤカ族も含まれているが、リンブ族は含まれていない。リンブ語の語彙は、Hodgson [1847] に付された比較語彙表 (Comparative Vocabulary of the Several Languages or Dialects of the Eastern Sub-Himálayas, from the Káli or Ghógra, to the Dhansri, with written and spoken Tibetan for comparison) にレブチャ語、キラント語、ネワル語、グルン語、ムルミ語【=タマン語】、マガル語、スンワル語の語彙と並んで載せられている。なお、ライ族の移住伝承や歴史については、C. McDougal [1979] の第1章に概説がある。リンブ族の伝承については、I. S. Chemjong [1966] に詳しい。

- 63) 西田氏は、西田・孫 [1990: 277-278] で、西田 [1989a] のチベット語支の分類は、西田 [1987] の門巴語の部分で修正し、簡略化したものであると述べ、更に、それに白馬語とヒマラヤ非代名詞化言語「代名詞化言語の誤り」を加えた系統図として次のような図を掲げているが、これは同氏の感違いであろう。実際には、第1節(4.1.3.3.)に示した系統図(2)と比較すれば分かるように、[1989a] のチベット語支の分類は下図のそれと全く異なっている。西田 [1989a] の系統図(2)に従えば、ヒマラヤ非代名詞化言語は、この図のチベット語諸方言の中に含まれるか、その隣りに並ぶ位置に置かれることになる。なお、この図のチベット文語は、「唐代チベット語を反映する中古チベット語と九世紀以降普及した書寫語」の総称であるとしており、ジャンシュン語については、その実態はまだよく把握されていないとしている。従って、この系統図に於けるその位置付けは仮のものに過ぎない。



- 64) この論文は、第21回国際漢蔵学会発表論文である。彼がこの論文で取り上げた *-l は、次節に付した Shafer の東部ヒマラヤ語系【=ライ・リンブ語系】言語の子音対応表の最後の *-l の系列に係る問題である。全体として、資料が非常に限られているため、西部キラント諸語 (Western Kiranti) 【=[Shafer] 東部ヒマラヤ語系西部語支】の *-l, *-n に対するリンブ語の動詞語幹の末尾音にみられる多様な反映形が、内的に再構される接尾辞 *-s/*-t で説明できる等、興味深い指摘もあるが、題名から期待される程の内容ではない。しかし、Michailovsky のすべての論文についていえることだが、手堅い論文である。いずれにせよ、Michailovsky は、ライ・リンブ祖語の再構を試みるに最も相応しい数名の学者の中のひとりであり、彼のライ・リンブ祖語の再構の成果ができるだけ早く発表されることが望まれる。

- 65) 第5章の「代名詞化」(5.2.5.)の項を参照されたい。

66) Shafer [1967] が東部ヒマラヤ語系の項で比較している語根は、69語根ほどに過ぎない。それと対比されるチベット文語形もビルマ文語形も挙げられていない語根は、「口」、「来る」、「聞く」(マガル語形と比較)、「穀粒」(ロロ語支形と比較)、「酸い」、「村」、「塩」、「身体」、「手/足₁」、「呼ぶ」、「熱い」、「足₂」(カナウル語「跳ぶ」と比較)、「行く」(アルモラ語支形と比較)、「舌」(西部ヒマラヤ語系形と比較)の12語根が含まれているが、このうちこの語群に固有な語根と思われるものは、「口 (mouth)」、「来る (come)」、「聞く (hear)」、「村 (village)」、「身体 (body)」、「呼ぶ (call)」、「熱い (hot)」、「足₂(foot)」だけである。

Shafer が「手/足₁(hand, foot)」として、Hodgson の語彙から引用している形式は、実際には、「掌；足裏 (<平たいもの)」の意味で、このことは Hodgson の語彙集や LSI の語彙表にも明記されている。Matisoff [1985b: 446-447] は、これに祖語形 *plem < *pleŋ 「掌」を立て、それから派生する語根の例として、ハム語 pleŋ(-teŋ)「掌」；カリン語 phlem(-khar)「掌」、トルン語, phlem(-lā)「掌」、(ba-) phlem 「翼」(plem, plem(te), phlem 「平たい」)等を挙げ、これが STC *pleŋ 「平面；板」に挙げられている諸形式と同源であると述べている。この比定は妥当であると思うが、もし Hodgson の表記が正確であるとすれば、この「手/足₁」, おそらく正しくは、「掌；足裏；平たい (もの)」には、ライ・リンブ祖語 *phlek-ma を立てるべきであり、語根 *phlek は、PTAM *pl(y)ak^{A/B} 「平たくする；平たい」(STAM, #GUR, MAN, THA)と同源であり、ライ・リンブ祖語の *-ma は派生接尾辞(名詞、形容詞)と解釈できよう。カリン語形とトルン語形は、{語幹+接尾辞}の縮約形であり、勿論、Matisoff の指摘するように、STC *pleŋ (cf. PTAM *pleŋ/*plyaŋ 「平たい石」と“allofam”の関係にある。従って、Matisoff は *plem < *pleŋ に代わり、*plyak < *plyaŋ を立てるべきであろう。なお、Matisoff は、GUR(yo)-plaa を祖語形 *pGa 「掌」[G=-w-, -y-, -l-]と関係付けているが、plaa の対応は不規則であっても、*plyak に来源するとすべきであろう。なお、yo-plaa は [CSDPSLN IV] に記載されたグルン語形であるが、Glover=Glover=Gurung [1977] では、plo 「掌；足裏」(<*plak)となっている。

67) 結局のところ、せめて仮のライ・リンブ祖語の音韻体系を再構し、それと Shafer がチベット語系の祖語に代用したチベット文語形(古期チベット語)やその不備を補うビルマ文語形(中期ビルマ語)と比較する形を取らないと、ライ・リンブ語群の音声体系の改新的特徴がはっきりしない。これは、循環論みたいなものであるが、祖語を再構するためには下位分類が必要であるが、厳密な下位分類を行うには、祖語が再構されていなくてはならないのである。Winter が仮にパンタワ語を祖語に見立てて下位分類の指標を立てているのはこの点を考慮したためであろう。

68) 現在のヒマラヤ語語の領域には、かなり古くからチベット・ビルマ語系諸部族が定着していたことは、ネワル族の伝承や歴史からみて間違いないと思うが、たとえ伝承に過ぎないにせよ、ライ族、リンブ族はもとより、ネワル族やタマン語系の諸部族にも移住伝説が残っており、彼らが最古の先住民とはいえないであろう。これらの諸部族は、そのすべてがほぼ同時期にネパールやインド北西部に移住して来たとは思われず、また、移住の経路も北東からチベット高原経由で入って来た部族、東または東南からアッサム地方、ブータン、シッキム経由で入って来た部族等さまざまなものであったであろう。これと関連して、チベット・ビルマ語系民族がそもそもアジアのどの地域にいたのかといった問題は、現在はチベット・ビルマ語研究者の間で取り上げられることはほとんどなくなったが、ここ20年ほどに於ける研究成果を踏まえて、このような問題も改めて考察してみる必要があろう。

69) 一般に記念論文集は、出版までに相当な時間がかかるのが普通なので、Winter [1987] も、実際には1987年以前に書かれた論文であろう。Winter 教授と Hansson 博士は、師弟関係にあるのではないと思われる。Hansson 博士は、一度もネパールを訪れることなく、第2次「ネパールの言語調査」の資料だけを基に、Hansson [1988] を書いたもののようである。

70) チベット・ビルマ諸語の単語族について、ここで多くを述べることはできないが、その内容、問題点、研究法の新たな展開については、Matisoff [1978] を参照されたい。また、B. Karlgen, W. Simon に始まる漢語とチベット語の単語族の研究については、西田 [1989b] (『シナ・チベット語族』の項)に簡単な解説が含まれている。しかしながら、音韻対応に基づく確実な同源語根の比較により祖語を再構する歴史的言語研究に、その前提として、まず単語族を設定する必要性は必ずしもないと思われる。シナ・チベット語族で、単語族が云々されたのは、漢語とチベット・ビルマ諸語で事情は異なると思うが、後者の場合、乏しい資料(その状態はある意味で現在も変わらない)を利用して、なんとかチベット・ビルマ諸語と漢

語を関係付け、祖語を再構しようとする努力が一時期に単語族を重視する傾向を生んだといえなくもない。

- 71) 橋本萬太郎氏の言語類型地理論については、特に、橋本 [1978] を参照されたい。同氏の言語類型地理論は、アジアに於ける諸言語の歴史的展開、特に、漢語の発達について示唆に富む仮説を提供している。しかしながら、橋本氏は、チベット・ビルマ諸語に関しては、ほとんど触れることはなく、同氏がチベット・ビルマ諸語を農耕民型の言語と考えていたのか、遊牧民型の言語と考えていたのか不明である。橋本氏の言語類型地理論は、農耕民型の言語(漢語)について、いわゆる基礎語彙の不一致を強調した結果、言語学以外の分野の人々に、音韻対応に基づく比較方法に対する信頼を失わせたきらいがなくもないが、彼の基本的な考えは、今尚アジアの言語を研究する多くの学者に影響を与え続けているといえる。

同氏が我国のシナ・チベット語研究者、特に、閉鎖的な傾向のある中国語研究者の国際的交流の発展に大きく貢献されたことは誰しも認めるところである。橋本氏の逝去は、特に、若手の中国語学者にとって大きな損失であったといえよう。もし橋本氏が存命なら、チベット・ビルマ諸語研究者のひとりとして、筆者は多くの疑問に答えて頂けたのではないかと思ひ、いまさらながら同氏の早過ぎた死を惜しんでいる次第である。

- 72) Shafer [1966: 3, fn. 2, 5, fn. 6] のチベット語門のチベット語、ヒマラヤ諸語の語系／言語間の相互関係図並びに、ビルマ語門のビルマ語、チベット語、クキ語系の語支／言語間の相互関係図と Benedict [1972: 6] のシナ・チベット語族の諸言語群、特に、チベット・ビルマ語系のカチン語を媒介とする下位語群間の相互関係図を参照されたい。問題は、これらの相互関係図が下位語群／言語間のどのような具体的関係に基づいているのかいづれも説明がなく、その意味では、説得力に欠けている点であろう。

- 73) J. K. Wheatley の "The Decline of Verb-final Syntax in the Yi(Lolo) Languages of Southwestern China" (*LSTA* [1985], pp. 401-420) を参照。

文 献

前稿に掲げた文献と多く重複しているが、追加・訂正もあるので、あえて再録した。

略称:

- BSOAS: *Bulletin of the School of Oriental and African Studies*. London.
 BDC: *Bulletin of the Deccan College Research Institute*. Poona [=Pune], India.
 CSDPSLN: Hale, E. A. (ed.), *Clause, Sentence and Discourse Patterns in Selected Languages of Nepal* (4 parts) (*SILP* 40). Kathmandu: SIL and Tribhuvan Univ.; Norman: Univ. of Oklahoma. 【Part II は D. E. Watters と共編】
 CNS: *Contribution to Nepalese Studies*. Journal of the Institute of Nepal and Asian Studies 【(改称) Research Centre for Nepal and Asian Studies】. TU, Kirtipur, Kathmandu.
 GTN: *Guide to Tone in Nepal*.
 CLSN: Conference of the Linguistic Society of Nepal 発表論文.
 CVLN: *Comparative Vocabularies of Languages of Nepal*.
 INAS: Institute of Nepal and Asian Studies. Kirtipur, TU.
 JAOS: *Journal of the American Oriental Society*. New Haven.
 JASB: *Journal of the Asiatic Society of Bengal*. Calcutta.
 JRAS: *Journal of the Royal Asiatic Society*. London.
 Kailash: *Kailash, A Journal of Himalayan Studies*. Kathmandu.
 LSTA: Thurgood, G., J. A. Matisoff and D. Bradley (eds.), *Linguistics of the Sino-Tibetan Area: The State of the Art* (Papers presented to Paul K. Benedict for his 71st birthday). PL ser. C 87, 1985.
 LTBA: *Linguistics of the Tibeto Burman Area*. Univ. of California, Berkeley.
 LN: *Nepalese Linguistics*. Linguistic Society of Nepal, TU, Kirtipur, Kathmandu.
 NSL: Hale, E. A. (ed.), *Nepal Studies in Linguistics*. Kirtipur: SIL and INAS, I (1973) and

- II(1975).
- PAAL:** Bradley, D., E. J. A. Henderson and M. Mazaudon(eds.), *Prosodic Analysis and Asian Linguistics: To honour R. K. Sprigg*. PL ser. C 104, 1989.
- PBLS:** *Proceedings of the Berkeley Linguistic Society*. Univ. of California, Berkeley.
- PL:** *Pacific Linguistics*. Canberra, The Australian National Univ.【Ser. A: 論文, Ser. B: 単刊, Ser. C: 著書(含論文集, 辞書), Ser. D: 特別刊行物(地図, 資料)】
- PLIN:** Trail, R. L.(ed.), *Patterns in Clause, Sentence, and Discourse in Selected Languages of India and Nepal(4 parts)*. Kathmandu: SIL and TU; Norman: Univ. of Oklahoma, 1973.
- POD:** Grimes, J. E.(ed.), *Papers on Discourse (SILP 51)*. Arlington: SIL, 1978.
- SILP:** *SIL Publications in Linguistics and Related Fields*.
- SIL:** Summer Institute of Linguistics.
- STC:** Sino-Tibetan Conference: International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics (国際漢蔵学会) 発表論文。(現在, この学会の略称は ICSTLL を一般に使用する。)
- TBPS:** *Tibeto-Burman Phonemic Summaries*.
- TSTBLIN:** Hale, E. A. and K. L. Pike(eds.), *Tonal Systems of Tibeto-Burman Languages of Nepal (Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics 3) (4 parts)*. Urbana: Univ. of Illinois, 1970.
- TU:** Tribhuvan University.
- ZDMG:** *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft*. Wiesbaden.
- ALLEN, N. J.**
- 1975a *Sketch of Thulung Grammar, with Three Texts and a Glossary(East Asia Papers 6)*. Ithaca, New York: Cornell Univ. China-Japan Program.
- 1975b Byanishi Kinship Terminology: A Study in Symmetry. *Man* (n.s.) 10: 80-94.
- 1978 Sewala Puja Bintila Puja: Notes on Thulung Ritual Language. *Kailash* 6(4): 237-256.
- ATKINSON, E. T.**
- 1981 *The Himalayan Gazetteer* (3 vols.). New Delhi: Cosmo Publication.【復刻版; 原本: *The Himalayan Districts of the North Western Provinces*, Vol. XI of the *Gazetteer N.W.P.* Allahabad: Government Publications, 1882】
- BAILEY, T. G.**
- 1908 *The Languages of the Northern Himalayas(RAS monograph 12)*. London: RAS.
- 1909 A Brief Grammar of the Kanauri Language. *ZDMG* 63: 661-687.
- 1910 Kanauri Vocabulary in Two Parts: English-Kanauri and Kanauri-English. *JRAS*: 695-705.
- 1911 Kanauri Vocabulary in Two Parts: English-Kanauri and Kanauri-English. *JRAS*: 315-364.【1911年に同名のタイトルで(RAS monograph 13)として再刊(London: RAS)】
- 1915 *Linguistic Studies from the Himalayas(RAS monograph 18)*. London: RAS【復刻版: New Delhi, Asian Publication Services, 1975】.
- BAJPAL, S. C.**
- 1987 *Lahaul-Spiti, a Forbidden Land in the Himalayas*. New Delhi: Indus Publishing Co.
- BAUMAN, J. J.**
- 1974 Pronominal Verb Morphology in Tibeto-Burman. *LTBA* 1(1): 108-155.
- 1975 Pronouns and Pronominal Morphology in Tibeto-Burman. Ph. D. dissertation, University of California, Berkeley.
- 1976 An Issue in the Subgrouping of the Tibeto-Burman Languages: Lepcha and Mkir. 9th STC.
- 1979 A Historical Perspective on Ergativity in Tibeto-Burman. In F. Plank(ed.), *Ergativity: towards a Theory of Grammatical Relations*, New York: Academic Press, pp. 419-433.
- BENEDICT, P. K.**
- 1972a *Sino-Tibetan: A Conspectus(Princeton-Cambridge studies in Chinese linguistics 2)*.

- New York: Cambridge Univ. Press. 【編集協力者: J. A. Matisoff】
- 1972b The Sino-Tibetan Tonal System. In J. Barrau, *et al.* (eds.), *Langues et techniques, nature et société* (2 vols.), Paris: Klincksieck, Vol. I, pp. 25–34.
- 1973 Tibeto-Burman Tones with a Note on Teleo-Reconstruction. *Acta Orientalia* (Copenhagen) 35: 127–138.
- 1976 Sino-Tibetan: Another Look, *JAOS* 96(2): 167–197.
- BIERI, D.
- 1975 Is Sunwar a Pronominalized Language?. Kathmandu: SIL. (油印)
- 1978 Covariance Relations in Sunwar. *POD*, pp. 369–379.
- BIERI, D. and Marlene SCHULZE
- 1970a Sunwar Tone and Higher Levels. *TSTBLIN* I: 70–85.
- 1970b Sunwar Segmental Synopsis. *TSTBLIN* I: 328–344.
- 1970c Sunwar Texts. *TSTBLIN* IV: 283–292.
- 1971a *Sunwar Phonemic Summary, Revised Edition* (TBPS 9). Kirtipur: SIL and TU. (油印)
- 1971b *A Guide to Sunwar Tone* (GTN 4). Kirtipur: SIL and TU. (油印)
- 1971c Independent Declarative Clause Types in Sunwar. Kirtipur: SIL. (油印)
- 1971d *A Vocabulary of the Sunwar Language* (CVLN). Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
- BIERI, D., M. SCHULZE and E. A. HALE
- 1973 An Approach to Discourse in Sunwar. *CSDPSLN* I: 401–462.
- BISTA, D. B.
- 1972 *People of Nepal*. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- 1976 Encounter with the Raute: The Last Hunting Nomads of Nepal. *Kailash* 4(4): 317–328.
- BODMAN, N. C.
- 1987 On the Place of Lepcha in Sino-Tibetan. 20th STC.
- BRADLEY, D.
- 1979 *Proto-Loloish* (Scandinavian Institute of Asian Studies Monograph Series 39). London and Malmö: Curzon Press.
- BRANDRETH, E. L.
- 1878 On the Non-Aryan Languages of India. *JRAS* (n.s.) 10: 1–32.
- BUHDA, H. R., D. E. WATTERS and N. WATTERS
- 1973 Kham Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- BUHDA, T. T. and J. F. FISHER
- 1973 Kaike Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- BYNON, T.
- 1986 *Historical Linguistics* (Cambridge textbooks in linguistics). Cambridge/London/New York/New Rochelle/Melbourne/Sydney: Cambridge Univ. Press. (改訂版)
- CAMPBELL, G.
- 1874 *Specimens of Languages of India, Including those of the Aboriginal Tribes of Bengal, the Central Provinces and the Eastern Frontier*. Calcutta: Bengal Secretariat Press. 【復刻版: New Delhi, Asian Educational Services, 1986】
- CAUGHLEY, R. C.
- 1969 *Chepeng Phonemic Summary* (TBPS IV). Kirtipur: SIL and TU. (油印)
- 1970a Pitch, Intensity, and Higher Level in Chepeng. *TSTBLIN* I: 143–157.
- 1970b Chepeng Segmental Synopsis. *TSTBLIN* I: 279–299.
- 1972 *A Vocabulary of the Chepeng Language* (CVLN). Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
- 1978 Participant Rank and Verbal Cross-Reference in Chepeng. *POD*, pp. 163–178.
- 1981 The Syntax and Morphology of the Verb in Chepeng. Ph. D. dissertation, The Australian National Univ.
- 1982a Information Flow and the Development of Pronominal Affixation in Tibeto-Burman. In T. Kansakar (ed.), *Occasional Papers in Nepalese Linguistics*, Kirtipur, Kathmandu: TU, Linguistic Society of Nepal, pp. 63–73.

- 1982b *The Syntax and Morphology of the Verb in Chepang*. PL ser. B 84.
 1983 Patterns of Pronominalization in the Tibeto-Burman Area. *NL* 2: 23-30.
 1989 Chepang: a Sino-Tibetan Language with a Duodecimal Numeral Base? *PAAL*, pp. 189-190.
- CAUGHLEY, R. C. and K. CAUGHLEY
 1970 Chepang Texts. *TSTBLIN* IV: 1-130.
- CHEMJONG, I. S.
 1962 *Yakthun-pene-mikphu?lā Pochekwā* [*Limbu-Nepali-English Dictionary*]. Kathmandu: Royal Nepal Academy.
 1966 *History and Culture of the Kirat People* (2 parts). Phidim (Nepal)
 1970 *Lepcha-Nepali-English Dictionary*. Kathmandu: Royal Nepal Academy.
- CHEPANG, B., R. C. CAUGHLEY and K. CAUGHLEY
 1973 Chepang wordlist. *CSDPSLN* IV.
- COBLIN, W. S.
 1974 An Early Tibetan Word for "horse". *JAOS* 94(1): 124-125.
- COMRIE, B.
 1981 *Language Universals and Linguistic Typology*. Oxford: Basil Blackwell.
- CUNNINGHAM, J. D.
 1844 Notes on Moorcroft's Travels in Ladakh, and on Gerard's Account of Kunawar. *JASB* 13: 172-153.
- DELANCEY, S.
 1980 Deictic Categories in the Tibeto-Burman Verb. Ph. D. dissertation, Indiana Univ.
 1981a The Category of Direction in Tibeto-Burman. *LTBA* 6(1): 83-101.
 1981b An Interpretation of Split Ergativity and Related Patterns. *Language* 57: 626-657.
 1981c Parameters of Empathy. *Journal of Linguistic Research* (Indiana Univ. Linguistic Circle) 1(3): 40-49.
 1984a Etymological Notes on Tibeto-Burman Case Particles. *LTBA* 8(1): 59-77.
 1984b Notes on Agentivity and Causation. *Studies in Language* 8: 181-214.
 1985 The Analysis-Synthesis-Lexis Cycle in Tibeto-Burman: A Case Study in Motivated Change. In J. Haiman(ed.), *Iconicity in Syntax (Proceedings of a Symposium on Iconicity in Syntax, Stanford, 1983)* (*Typological Studies in Language* 6). Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins Publishing Co., pp. 367-389.
 1987 Sino-Tibetan Languages. In B. Comrie(ed.), *The World's Major Languages*, London and Sydney: Groom Helm, pp. 798-810.
 1988 On the Evolution of the Kham Agreement Paradigm. *LTBA* 11(2): 51-61.
 1989a Verb Agreement in Proto-Tibeto-Burman. *BSOAS* 52(2): 315-333
 1989b The Historical Status of the Conjunct/Disjunct Pattern. 22nd STC.
 1990 Ergativity and the Cognitive Model of Event Structure in Lhasa Tibetan. *Cognitive Linguistics* 1(3): 289-321.
- DRIEM, G. L. van
 1987a *A Grammar of Limbu* (*Mouton Grammar Library* 4). Berlin/New York/Amsterdam: Mouton de Gruyter.
 1987b The Verbal Morphology of Dumi Rai Simplicia. 20th STC.
 1989 Reflexives of the Tibeto-Burman *-t Directive Suffix in Dumi Rai. *PAAL*, pp. 151-162.
 1990 Bahing and the Proto-Tibeto-Burman Verbal Agreement System. (草稿)
- EBERT, K. H.
 1986 Reported Speech in Some Languages of Nepal. In F. Coulmas(ed.), *Direct and Indirect Speech*, Berlin/New York/Amsterdam: Mouton de Gruyter, pp. 145-189.
 1988a Verb Agreement in Chamling. 21st STC.
 1988b Further Evidence for the Relationship Kiranti-Rung. 21st STC.
- EGEROD, S.
 1973-74¹⁵ Sino-Tibetan Languages. *Encyclopedia Britannica*, Vol. 16, pp. 796-806.
- EVERITT, F.

- 1973 Sentence Patterns in Tamang. *PLIN* 1: 197-234.
- FERGUSON, C. A.
1959 Diglossia. *Word* 15: 325-340.
- FISHER, J. F.
1971 A Vocabulary of the Kaike Language. Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
1987 *Trans-Himalayan Traders, Economy, Society, and Culture in Northwest Nepal*. Delhi/Varanasi/Patna/Madras: Motilal Banarsidass.
- FISHMAN, J. A.
1972 *The Sociology of Language: An Interdisciplinary Social Science Approach to Language in Society*. Rowley (Mass.): Newbury House. 【日本語訳 (抄訳): 湯川恭敏訳『言語社会学入門』東京: 大修館書店, 1974】
- FRANCKE, A. H.
1909 Tabellen der Pronomina und Verba in den drei Sprachen Lahouls: Bunan, Manchad und Tinan. *ZDMG* 63: 65-97.
1917 Vokabular der Manchadsprache. *ZDMG* 71: 137-176.
- FRASER, J. O.
1922 *Handbook of the Lisu (Yawyin) Language*. Rangoon: Superintendent Government Printing.
- FRENCH, W. T.
1983 Northern Naga: A Tibeto-Burman Mesolanguage (2 Volumes). Ph. D. dissertation, The City University of New York.
- FÜRER-HAIMENDORF, Ch. von
1956 Ethnographic Notes on the Tamangs of Nepal. *Eastern Anthropologists* 9: 166-177.
1975 *Himalayan Traders, Life in Highland Nepal*. London: John Murray.
1983 Bhotia Highlanders of Nar and Phu. *Kailash* 10(1/2): 63-117.
- GAUCHAN, NARENDRA, NILA GAUCHAN, and A. M. HARI
1973 Thakali Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- GAUCHAN, S. and M. VINDING
1977 The History of the Thakaali According to the Thakaali Tradition. *Kailash* 5: 97-184.
- GENETTI, C. E.
1986a The Grammaticalization of the Newari Verb *tol-*. *LTBA* 9(2): 53-70.
1986b The Grammatical Development of Postpositions to Subordinators in Bodic Languages. *PBLS* pp. 387-400.
1986c Scope of Negation in Newari Clause Chains. 19th STC.
1986d Juncture, Nexus, Operators and the Newari Non-Final Construction. *Proceedings of the Second Annual Meeting of the Pacific Linguistic Conference*, Eugene, Univ. of Oregon.
1986e The Syntax of the Newari Non-Final Construction. MA thesis, Univ. of Oregon.
1987a A Contrastive Study of the Dolakhali and Kathmandu Newari Dialects. 20th STC.
1987b Newari Verb Classes. 20th STC.
1988a Notes on the Structure of the Sunwari Transitive Verb. *LTBA* 11(2): 62-92.
1988b A Syntactic Correlate of Topicality in Newari Narrative. In Thompson, S. A. and J. Haiman (eds.), *Clause Combining in Grammar and Discourse* (Philadelphia: John Benjamins), pp. 29-48.
1989 Imperatives, Prohibitives and Optatives in Newari. 22nd STC.
1990 A Descriptive and Historical Account of the Dolakha Newari Dialect. Ph. D. dissertation, University of Oregon.
- GERARD, A.
1842 A Vocabulary of the Kunawar Languages. *JASB* 11: 485-551.
- GIVÓN, T.
1983 Ergative Morphology and Transitivity Gradients in Newari. 16th STC.
- GLOVER, J. R. and D. B. GURUNG
1979 *Conversational Gurung*. PL ser. D 13.

- GLOVER, W. W.
 1969 *Gurung Phonemic Summary*(*TBPS I*). Kirtipur: SIL. (油印)
 1970a Gurung Tone and Higher Levels. *TSTBLN I*: 52-73.
 1970b Gurung Segmental Synopsis. *TSTBLN I*: 211-236.
 1970c Cognate Counts via the Swadesh List in Some Tibeto-Burman Languages. *TSTBLN II*: 23-26.
 1970d Gurung Texts. *TSTBLN III*: 1-131.
 1971a Register in Tibeto-Burman Languages of Nepal: A Comparison with Mon-Khmer. *PL ser. A* 29: 1-22.
 1971b Swadesh List Calculations on Thirty Tibeto-Burman Languages. Kirtipur: SIL. (油印)
 1972 *A Vocabulary of the Gurung Language*(*CVLN*). Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
 1974 *Sememic and Grammatical Structures in Gurung*(*Nepal*) (*SILP 49*). Norman: Univ. of Oklahoma.
- GLOVER, W. W. and J. R. GLOVER
 1972 *A Guide to Gurung Tone*(*GTN 6*). Kathmandu: SIL and TU. (油印)
- GLOVER, W. W., J. R. GLOVER and D. B. GURUNG
 1977 *Gurung-Nepali-English Dictionary with English-Gurung and Nepali-Gurung Indices*. *PL ser. C* 51.
- GLOVER, W. W. and J. K. LANDON
 1980 Gurung Dialects. *PL ser. A* 53: 29-77.
- GORER, G.
 1967 *Himalayan Village, an Account of the Lepchas of Sikkim*. London/Melbourne/Johannesburg/Ontario: Thomas Nelson and Sons. 【改訂版, 初版: 1938】
- GOVERNMENT OF HIMACHAL PRADESH DIRECTORATE OF LAND RECORDS
 n.d. *Village Directory of District Lahaul-Spiti*. 【1981年国勢調査に基づく村別人口】
- GREENBERG, J. H.
 1957 *Essays in Linguistics*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
 1987 *Language in the Americas*. Stanford: Stanford Univ. Press.
- GRIERSON, G. A. (ed.)
 1903 *Linguistic Survey of India* Vol. III, part II. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing 【復刻版: Delhi/Varanasi/Patna, Motilal Banarsidass, 1967】.
 1904 *Linguistic Survey of India* Vol. III, part III. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing 【復刻版: Delhi/Varanasi/Patna, Motilal Banarsidass, 1967】.
 1909 *Linguistic Survey of India* Vol. III, part I. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing 【復刻版: Delhi/Varanasi/Patna, Motilal Banarsidass, 1967】.
 1928 *Linguistic Survey of India* Vol. I, part II. Calcutta: Office of the Superintendent of Government Printing 【復刻版: Delhi/Varanasi/Patna, Motilal Banarsidass, 1967】.
- GRIMES, B. F. (ed.)
 1984¹⁰ *Languages of the World: Ethnologue*. Huntington Beach: Wycliffe Bible Translators.
- GUMPERZ, J. J.
 1971 *Language in Social Groups*(*Language Science and Development Series*). Stanford: Stanford Univ. Press.
- GURUNG, D. B., W. W. GLOVER and J. R. GLOVER
 1973 Gurung Wordlist. *CSDPSLN IV*.
 1976 *Gurung-Nepali-English Glossary*. Kathmandu: SIL and INAS, TU.
- GURUNG, H. B.
 1980 *Vignettes of Nepal*. Kathmandu: Sajha Prakashan.
- GURUNG, N. J.
 1976 An Introduction to the Socio-Economic Structure of Manang District. *Kailash* 4(3): 295-308.
 1977 An Ethnographic Note on Nar-Phu Valley. *Kailash* 5(3): 229-244.
- GVOZDANOVIC, J.
 1984 Numerical Change and Decay in Bantawa Rai. *NL* 3: 1-10.

HAARH, E.

- 1959 The Lepcha Script. *Acta Orientalia* (Copenhagen) 24: 107-122.
- 1960 *A Limbu-English Glossary*. Copenhagen: Danish Asiatic Research.
- 1968 *The Zhang Zhung Language: A Grammar and Dictionary of the Unexplored Language of the Tibetan Bonpos* (Humanistisk Series 47). København: Universitetsforlaget I Aarhus Einar Mundsgaard.

HAAS, M.

- 1969 *The Prehistory of languages*. The Hague/Paris: Mouton.
- 1978 *Language, Culture, and History* (Language Science and Development Series). Stanford: Stanford Univ. Press.

HAGEN, Toni

- 1971³ *Nepal, the Kingdom in the Himalayas*. New Delhi/Bombay/Calcutta: Oxford and IBH Publishing Co.

HALE, E. A.

- 1970a A Phonological Survey of Seven Bodic Languages of Nepal. *TSTBLN* I:1-33.
- 1970b Newari Higher Levels. *TSTBLN* I: 158-169.
- 1970c Newari Segmental Synopsis. *TSTBLN* I: 300-337.
- 1970d Notes on Newari Texts. *TSTBLN* IV: 131-151.
- 1971a *Person Markers: Conjunct and Disjunct Forms* (Topics in Newari grammar I). Kirtipur: SIL and TU. (油印)
- 1971b *Newari Nouns: A Guide to Vocabulary Entries* (Topics in Newari grammar II). Kirtipur: SIL and TU. (油印)
- 1971c *Newari Verbs: A Guide to Vocabulary Entries* (Topics in Newari grammar III). Kirtipur: SIL and TU. (油印)
- 1973a On Classification. *CSDPSLN* IV: 2-11.
- 1973b On the Forms of Verbal Bases in Newari. In B. B. Kachru, et al. (eds.), *Issues in Linguistics: Papers in Honor of Henry and Renée Kahane*, Urbana: Univ. of Illinois Press, pp. 279-299.
- 1973c On the Systematization of Box 4. In M. B. Ruth (ed.), *Advances in Tagmemics* (North Holland linguistic studies 9), Amsterdam: North Holland, pp. 55-74.
- 1973d Toward the Systematization of Display Grammar. *CSDPSLN* I: 1-38.
- 1974 Syntactic Matrices: an Approach to Syntactic Comparability. In L. Heilmann (ed.), *Proceedings of the 11th International Congress of Linguistics, Bologna-Florence, 1972*, Bologna: Società editrice il Mulino (2 vols.), Vol. I, pp. 259-271.
- 1976 Grammar for the Lay Reader. In P. R. Sharma and L. C. Friedman (eds.), *Seminar Papers in Linguistics, Problems and Perspectives*, Kirtipur: INAS, pp. 53-82.
- 1980 Person Markers: Finite Conjunct and Disjunct Verb Forms in Newari. *PL* ser. A 53: 95-106.
- 1982 *Research on Tibeto-Burman Languages* (Trend in linguistics, State-of-the Art Report 14). Berlin/New York/Amsterdam: Mouton Publishers.

HALE, E. A. and W. W. GLOVER

- 1970 A Note on Glides, Syllabicity and Tone in Gurung. *TSTBLN* I: 49-51.

HALE, E. A. and M. HALE

- 1970 Newar Texts and Notes on Newari Texts. *TSTBLN* IV: 131-281.
- 1975 *A Systematization of Newari Orthography: A Sketch of Newari Phonology*. Kathmandu: SIL. (油印)

HALE, E. A., A. M. HARI and B. SCHÖTTELNDREYER (eds.)

- 1972 Comparative Vocabularies of Languages of Nepal (Swadesh 100-word list). (1st installment) Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)

HALE, E. A. and T. MANANDHAR

- 1973 Case and Role in Newari. *NSL* I: 39-54. 【*PL* ser. A (1980) 53: 79-93 に再掲載】

HALE, E. A. and I. SRESTHACHARYA

- 1973 Is Newari a Classifier Language? *CNS* 1(1): 1-21.

- HALE, E. A. and D. E. WATTERS
1973 A Survey of Clause Patterns. *CSDPSLN* II: 175-249.
- HALE, M. and E. A. HALE
1969 *Newari Phonemic Summary (TBPS 5)*. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
1971 *A Vocabulary of the Newari Language (CVLN)*. Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
- HANNEMAN, C. B.
1971 Predicate Metaphors in Limbu. Kathmandu: SIL. (油印)
1972 On the Form of Verbal Bases in Limbu. Kathmandu: SIL. (油印)
1983 *Limbu Phonemic Summary*. Kathmandu: SIL. (油印)
- HANSSON, G.
1988 On the Grouping of the Indigenous Tibeto-Burman Languages and Dialects in the Eastern Hills of Nepal: A brief classification, based on field research of the 'Linguistic Survey of Nepal'. (草稿)
- HANSSON, G. and W. WINTER
1985 Some Rai Numerals of Indo-Aryan Origin. *Indian Linguistics* 46(1/2): 33-35.
- HARGREAVES, D.
1983 Evidentiality in Newari. M. A. thesis, Univ. of Oregon.
1984 Case Marking and Nominalization in Classical Newari. 17th STC.
1986a Independent Verbs and Auxiliary Functions in Newari. *PBLS* 12: 401-412.
1986b Overlapping Coding Systems in a Newari oral narrative. In *Processings of the 2nd Annual Meeting of Pacific Linguistics Conference*, Eugene: Univ. of Oregon.
- HARGEAVES, D. and K. TAMOT
1985 On the Prehistory of Some Newari Verbs. 18th STC.
- HARI, A. M.
1969 *Thakali Phonemic Summary (TBPS III)*. Kirtipur: SIL. (油印)
1970a *A Guide to Tamang Tone (GTN 1)*. Kathmandu: SIL and TU. (油印)
1970b Thakali Tone and Higher Levels. *TSTBLN* I: 125-142.
1970c Thakali Segmental Synopsis. *TSTBLN* I: 158-178.
1971a *A Guide to Thakali Tone (GTN 2)*. Kathmandu: SIL and TU. (油印)
1971b *A Vocabulary of the Thakali Language (CVLN)*. Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
1972 *Preliminary Instructions for a Phonological Survey Report*. Kathmandu: SIL. (油印)
- HARI, A. M. and A. MAIBAM
1970 Thakali Texts. *TSTBLN* III: 165-306.
- HARI, A. M., D. TAYLOR and K. L. PIKE
1970 Tamang Tone and Higher Levels. *TSTBLN* I: 82-124.
- 橋本萬太郎
1978 『言語類型地理論』東京：弘文堂。
- HASHIMOTO, M.
1977 *The Newari Language: A Classified Lexicon of its Bhadgaon Dialect (Monumenta Serindica 2)*. Tokyo: ILCAA.
- HENDERSON, E. J. A.
1965 The Topography of Certain Phonetic and Morphological Characteristics of South East Asian Languages. *Lingua* 15: 400-434.
- HEPBURN, J.
1978 Linkage at High Levels of Tamang Discourse. *POD*, pp. 331-341.
- HITCHCOCK, J. T.
1966 *The Magars of Banyan Hill*. New York/Chicago/San Francisco/Toronto/London: Holt, Rinehart and Winston.
- HODGSON, B. H.
1847 On the Aborigines of the Sub-Himálayas. *JASB* 16: 1235-1244. 【Hodgson(1874) 第2部に再掲載】
1848 On the Chépáng and Kúsúnda Tribes of Népal. *JASB* 17(2): 650-58. 【Hodgson(1874) 第2部に再掲載】

- 1849 On the Aborigines of the Eastern Frontier. *JASB* 18: 967-975.
- 1853 On the Indo-Chinese Borderers and their Connexion with the Himálays and Tibetans. *JASB* 22(1): 1-25.【Hodgson(1874) 第2部に再掲載】
- 1956 Aborigines of the Nilgiris with Remarks on their Affinities. *JASB* 25 (6): 498-522.【Hodgson(1880) 第2巻に再掲載】
- 1857a Comparative Grammar of the Languages of the Broken Tribes of Népal. *JASB* 26 (5): 317-332.【Hodgson(1880) 第1巻に再掲載】
- 1857b Comparative Vocabulary of the Several Languages (dialects) of the Celebrated People Called Kirāntis, now occupying the eastern-most province of the kingdom of Népal, or the basin of the river Árun, which province is named after them Kirānt. *JASB* 26(5): 333-371.
- 1857c Váyu Vocabulary. *JASB* 26(5/6): 372-485.
- 1857d Báhing Vocabulary. *JASB* 26(6): 486-522.
- 1858a Báhing Vocabulary. *JASB* 27(5): 393-442.
- 1858b On the Vayu Tribe of the Central Himalaya. *JASB* 27(5): 443-446.
- 1858c On the Kiranti Tribe of the Central Himalaya. *JASB* 27(5): 446-456.
- 1874 *Essays on the Language, Literature, and Religion of Nepal and Tibet*. London: Trübner.【復刻版: Varanasi: Bharat, Bharati Publishers, 1971; (*Bibliotheca Himalayica*, ser. II, 7) New Delhi: Mañjuśrī Publishing House, 1972】
- 1880 *Miscellaneous Essays Relating to Indian Subjects*. (2 vols.) London: Trübner.
- HOENIGSWALD, H. M.
- 1960 *Language Change and Linguistic Reconstruction*. Chicago: Univ. of Chicago Press.
- 1966 Criteria for the Subgrouping of Languages. In H. Birnbaum and J. Puhvel (eds.), *Ancient Indo-European Dialects*, Berkeley: Univ. of California Press, pp. 1-12.
- HÖFER, A.
- 1981 *Tamang Ritual Texts: Preliminary Studies in the Folk-Religion of an Ethnic Minority in Nepal*(*Beiträge zur Südasien-Institut Universität Heiderlberg*). Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
- HOSHI, M.
- 1984 A Prakaa Vocabulary—Dialect of the Manang Language. In *Anthropological and Linguistic Studies of the Gandaki Area in Nepal II* (*Monumenta Serindica* 12), Tokyo: ILCAA, pp. 133-202.
- 1986 An Outline of the Prakaa Grammar—A Dialect of the Manang Language. In *Anthropological and Linguistic Studies of the Kathmandu Valley and the Gandaki Area in Nepal* (*Monumenta Serindica* 15), Tokyo: ILCAA, pp. 187-317.
- HOLZHAUSEN, Andreas
- 1973 *Phonological Survey Report of the Kulunge Language*. Kathmandu: SIL. (油印)
- HOLZHAUSEN, Anna
- 1973 Kulunge Rai Clause Types. *NSL* 1: 15-26.
- HUDSON, R. A.
- 1980 *Sociolinguistics* (*Cambridge Textbooks in Linguistics*). Cambridge/London/New York/New Rochelle/Melbourne/Sydney: Cambridge Univ. Press.
- HUFFMAN, F. E.
- 1986 *Bibliography and Index of Mainland and Southeast Asian Languages and Linguistics*. New Heaven/London: Yale Univ. Press.
- HUTT, M. J.
- 1986 Diversity and Change in the Languages of Highland Nepal. *CNS* 14(1): 1-24.
- 1988 *Nepal, A National Language and its Literature*. London: School of Oriental and African Studies; New Delhi: Sterling Publishers; Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- 石井 溥
- 1980 『ネワール村落の社会構造とその変化——カースト社会の変容』(アジア・アフリカ言語文化叢書 14) 東京: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。(草稿)
- 1987 「ネワール語」『言語学大辞典』第3巻(世界言語編(下)) 東京: 三省堂, 1991年刊

- 行予定。(草稿)
- 石井 溥 (編)
1986 『もっと知りたいネパール』 東京: 弘文堂。
- 飯島 茂
1982 『ヒマラヤの彼方から——ネパールの商業民族タカリー生活誌』 (NHK ブックス <カラー版>) 東京: 日本放送協会。
- JÄSCHKE, H. A.
1865 Note on the Pronunciation of the Tibetan Language. *JASB* 34: 91–100.
- JEFFERS, R. J. and I. LEHISTE
1979 *Principles and Methods for Historical linguistics*. Cambridge/London: The MIT Press.
- JOSHI, S. K.
1984 A Descriptive Study of the Bhaktapur Dialect of Newari. Ph. D. dissertation, Deccan College, University of Poona.
- JOSHI, T. R.
1909 A Grammar and Dictionary of Kanāwari. *JASB* (n.s.) 5, Extra No. 2.
- KANSKAR, T. R.
1972a A Linguistic Survey of Nepal: A Proposal. *Journal of the Tribhuvan Univ.* 7(1) (Kirtipur, TU): 735–748.
1972b Linguistics and the Study of Newari Language. *Journal of the Tribhuvan Univ.* 7(1): 49–56.
1977 Rhythm and Intonation in Colloquial Newari. *CNS* 1(1): 1–14.
1979 A Generative Phonology of Kathmandu Newari. Ph. D. dissertation, TU.
1980a A Note on the Phonological Representation of Newari Segments, a Working Paper Prepared for the Nepala Bhasa Dictionary Project Committee Meeting, Kathmandu.
1980b The Treatment of Glides in Newari Phonology. *NL* 1: 9–16.
1982 Morphophonemics of the Newari Verb. In T. Kansakar (ed.), *Occasional Papers in Nepalese Linguistics*, Kirtipur, TU: Linguistic Society of Nepal, pp. 12–29.
1983 Syllable Structure in Newari. *NL* 2: 63–75.
1984 *A Basic Course in Colloquial Newari*. Kathmandu: Campus of International languages. (単刊)
- KHALING, S. M., S. TOBA and I. TOBA
1972 *A Vocabulary of the Khaling Language*, Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
1973 Khaling Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- KÖLVER, U.
1976 *Satztypen und Verbsubkategorisierung der Newari* (Struktura, Schriftenreihe zur Linguistik, 10). München: Wilhelm Fink Verlag.
1977 *Nominalization and Lexicalization in Modern Newari*. Arbeiten des Kölner Universalien—Projekts no. 30.
1978 On Newari Noun Phrases. In H. Seiler (ed.), *Language Universals*, Tübingen: Gunter Narr Verlag, pp. 277–300.
- KÖLVER, U. and B. Kölver
1975 On Newārī Noun Inflection. *Zentralasiatische Studien* (Wiesbaden; Otto Harrassowitz) (Bonn) 9: 87–117.
1978 Classical Newari verbal morphology. *Zentralasiatische Studien* 12: 273–316.
- KUMAR, B. B., P. S. SUBBA and B. B. SUBBA
1980 *Hindi Limbu Dictionary*. Kohima: Nagaland Bhasa Parishad.
- LEWIS, T. T. and D. R. SHAKYA
1988 Contributions to the History of Nepal: Eastern Newar Diaspora Settlements. *CNS* 15(1): 25–65.
- LIENHARD, S.
1962 *Dal Sanscrito All'hindi. Il nevārī* (Le civiltà asiatiche Quaderno 5). Roma: Istituto per la collaborazione culturale.

- 1977 *Newari: the Ancient Language of Nepal*. Kathmandu: Cosā Pāsā.
 羅秉芬・安世興
 1981 「浅談歴史上藏文正字法修訂」『民族語文』(2):27-35。
 馬学良・戴慶厦
 1988 「漢藏語系」『中国大百科全书(語言文字)』北京, 上海: 中国大百科全书出版社, pp. 191b-195b。
 MACDONALD, A.
 1984 The Tamang as Seen by One of Themselves. In his *Essays on the Ethnology of Nepal and South Asia I*, Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar, pp. 129-167.
 MÄDEN, J.
 1983 *Easy Learning Book of Kirat Language*. Darjeeling: Kirātī Sāhitya Bikāś Samiti.
 MAGAR, K. B. T., G. SHEPHERD and B. SHEPHERD
 1973 Magar wordlist. CSDPSLN IV.
 MAINWARING, G. B.
 1976 *A grammar of the Rong(Lepcha) language as it exists in the Darjeling and Sikkim Hills*. Calcutta: B. B. Lewis, Baptist Mission Press.【復刻版: *A Grammar of the Lepcha Language(Bibliotheca Himalayica, ser. II, 5)*, New Delhi: Mañjuśūrī Publishing House, 1971】
 1898 *Dictionary of the Lepcha Language* (, rev. and completed by Albert Grünwedel). Berlin: Unger Bros.【復刻版: (*Bibliotheca Himalayica, ser. II, 6*), Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar, 1979】
 MALLA, K. P.
 1973a Language. In J. B. Rana Pashupati and K. P. Malla(eds.), *Nepal in Perspective*, Kathmandu: Centre for Economic Development and Administration, pp. 101-108.
 1973b A Preliminary Note on the Linguistic Archeology of the Nepal Valley. 6th STC.
 1978 *Sika:miya Swane*【ネワル語とネワル文学に関する論文集】, Kathmandu: Nepāla Bhāṣā Paṛiṣad.
 1979 *Dhwānā saphu:ya dhala: I*【*A bibliographical essay on books* (in print in Newari 1909-1977)】. Kantipur: Lāeta Dabu.
 1980 Amrita: Nanda's Grammar A.D. 1831. *NL* 1: 41-49.
 1981a Linguistic Archeology of the Nepal Valley: A Preliminary Report. *Kailash* 8(1/2): 5-23.
 1981b The Newari Language in the Medieval Epigraphy of Nepal [in Newari]. *Khluītā* 3: 5-16.
 1982a The Syntax and Semantics of Newari Verb Sequences. 2nd CLSN.
 1982b *Classical Newari Literature: A Sketch*. Kathmandu: Educational Enterprise.
 1983 Suppletive Causatives in Newari. 3rd CLSN.
 1984 *Dhwānā saphu:yā dhala: II*【*A bibliographical essay on books* (in print in Newari 1979-1984)】. Kantipur: Pāsā Munā.
 1985a *The Newari Language: A Working Outline*(*Monumenta Serindica 14*). Tokyo: ILCAA.
 1985b A Glossary of Newari Words Used in the *Gopālārājavamsāvalī*. In *Gopālārājavamsāvalī:a facsimile edition*(*Nepal Research Centre Publication 9*), Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
 1989a A Glossary of Newari Words Used in *Nāradasmr̥ti* NS 500/AD 1380. In *Nāradasmr̥ti: a facsimile edition*, Kathmandu: Nepal Text Society.
 1989b The Classical Newari Dictionary Project: Problems and Prospects.
 1989c Language and Society in Nepal. In K. P. Mella(ed.), *Nepal: Perspectives on Continuity and Change*, Kirtipur: CNAS, pp. 445-466.
 MANANDHAR, T., M. HALE and E. A. HALE
 1973 Newari Wordlist. CSDPSLN IV.
 MANZARDO, A., D. R. DAHAL and N. K. RAI
 1976 The Byanshi: An Ethnographic Note on a Trading Group in Far Western Nepal. *CNS*

3(2): 83-118.

MARRISON, G. E.

1967 The Classification of the Naga Languages of North-East India. Ph. D. dissertation, School of Oriental and African Studies, University of London.

MASICA, C. P.

1976 *Defining a Linguistic Area: South Asia*. Chicago and London: Univ. of Chicago Press.

MASPERO, H.

1952 Les Langues Tibéto-Birmanes. In A. Meillet and M. Cohen(eds.), *Les Langues du Monde*, nouv. ed., Paris: Centre National de la recherche scientifique.

MATISOFF, J. A.

1972 *The Loloish Tonal Split revisited (Research Monograph 7)*. Berkeley: University of California Center for South and Southeast Asian Studies.

1978 *Variational Semantics in Tibeto-Burman: the 'Organic' Approach to Linguistic Comparison (Occasional Papers of the Wolfenden Society on Tibeto-Burman Linguistics VI)*. Philadelphia: Institute for the Study of Human Issues.

1985a The Languages and Dialects of Tibeto-Burman: Alphabetic/Genetic Listing, with Some Prefatory Remarks on Ethnonymic and Glossonymic Complications. In J. McCoy and T. Light(eds.), *Contributions to Sino-Tibetan Studies*, Leiden: E. J. Brill.

1985b Out on a Limb: Arm, Hand, and Wing in Sino-Tibetan. *LSTA*, pp. 421-450.

MAZAUDON, M.

1973a Comparison of Six Himalayan Dialects of Tibeto-Burman. *Pàkha Sanjam (Patiala)* 4: 78-91.

1973b *Phonologie tamang (Étude phonologique du dialecte tamang de Risiangku, langue Tibéto-Birman du Népal) (Langues et civilisations à tradition orale 4)*. Paris: Société d'Études Linguistiques et Anthropologiques de France.

1974 Note on Tone in Tibeto-Burman. *LTBA* 1(1): 17-54.

1975 Tonal Developments in the Tamang Sub-family of Tibeto-Burman. 8th STC.

1976 Typological Sketch of Tamang(Sino-Tibetan, Nepal). (草稿)

1977 Tibeto-Burman Tonogenetics. *LTBA* 3(2). (单刊)

1978 Consonantal Mutation and Tonal Split in Tamang Subfamily. *Kailash* 6(3): 157-179.

1985 Proto-Tibeto-Burman as a Two-Tone Language? Some Evidence from Proto-Tamang and Proto-Karen. *LSTA*, pp. 201-229.

1988 The Influence of Tone and Affrication on Manner: Some Irregular Manner Correspondences in the Tamang Group. 21st STC.

MCDUGAL, Ch.

1979 *The Kulunge Rai, a Study in Kinship and Marriage Exchange*. Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.

MESSERSCHMIDT, D. A.

1976 *The Gurungs of Nepal: Conflict and Change in Village Society*. New Delhi/Bombay/Calcutta: Oxford and IBH Publishing Co.

MICHAILOVSKY, B.

1974 Hayu Typology and Verbal Morphology. *LTBA* 1(1): 1-26; Errata, *LTBA* 2(2): 215(1976).

1975a On Some Tibeto-Burman Sound Change. *PBLS* 1: 322-332.

1975b Notes on the Kiranti Verb(East Nepal). *LTBA* 2(2): 183-218.

1975c A Case of Rhinoglottophilia in Hayu. *LTBA* 2(2): 293.

1981 Grammaire de la langue hayu(Népal). Ph. D. dissertation, Univ. of California, Berkeley.

1985 Tibeto-Burman Dental Suffixes: Evidence from Limbu(Nepal). *LSTA*, pp. 363-375.

1988a Phonological Typology of Nepal Languages. *LTBA* 11(2): 25-50.

1988b Reconstruction of East Himalayish Evidence for *-l. 21st STC.

MICHAILOVSKY, B. and M. MAZAUDON

1973 Notes on the Hayu Language. *Kailash* 1(2): 135-152.

MILLER, R. A.

- 1969 The Tibeto-Burman Languages of South Asia. In T. A. Sebeok (ed.), *Current Trend in Linguistics 5*, the Hague and Paris: Mouton, pp. 431-449.

南真木人

- 1989 『中部ネパール・マガル族の生業複合の変容——水田稲作化に着目した生態人類学的研究』(修士論文, 筑波大学)。

MINISTRY OF DEFENCE

- 1965 *Nepal and the Gurkhas*. London: Her Majesty's Stationery Office.

MODI, B. V.

- 1967 The Phonemes of Newari. *Journal of the Maharaja Sayajirao Univ. of Baroda* 16(1): 103-134.

MÜLLER, M.

- 1861 *Lectures on the Science of Language, (delivered at the Royal Institution of Great Britain in April, May, and June, 1861)*. London: Longman, Green, Longman, and Roberts,

長野泰彦

- 1986 「チベット・ビルマ系諸語における能格現象をめぐる」『言語研究』90: 119-148。
1989 「レプチャ語」『言語学大辞典』第3巻(世界言語編(下))東京:三省堂, 1991年刊行予定。(草稿)

NAGANO, Y.

- 1984 A Manang Glossary. *Monumenta Serindica* 12: 203-234.
1986 A Checklist of Newari Ergativity. *Monumenta Serindica* 15: 167-185.
1990 A Classified Lexicon of the Syang Language. 崎山 理・他編『アジアの諸言語と一般言語学』東京:三省堂, pp. 78-102.

長野泰彦・立川武蔵(編)

- 1987 『チベットの言語と文化』東京:冬樹社。

NAKANE, C.

- 1978 A Plural Society in Sikkim, a Study of the Interrelations of Lepchas, Bhotias and Nepalais. In Ch. von Fürer-Haimendorf(ed.), *Caste and Kin in Nepal, India and Ceylon, Anthropological Studies in Hindu-Buddhist Contact Zones*, New Delhi: Sterling Publishers, pp. 213-263.

NATIONAL, PLANNING COMMISSION SECRETARIAT

- 1988 *Statistical Pocket Book: Nepal 1988*. Kathmandu: Central Bureau of Statistics.

NEETHIVANAN, J.

- 1976 *Survey of Kanauri in Himachal Pradesh (Language Monograph 3)* (Census of India 1971, 1961 ser. 1). India: Language division, Office of the Registrar General.

NEGI, K. L.

- 1982 *Kinnaur district* (District Census Handbook, Himachal Pradesh, ser. -7, Census 1981).

NEGI, T. J. S. B.

- 1987 *Himalayan Travels*. Delhi: Mittal Publications. 【復刻版; 初版 1920】

NIGAM, R. C.

- 1972 *Language Handbook on Mother Tongues in Census (Census Centenary Monograph 10)* (Census of India 1971). New Delhi: Office of the Registrar General, India, Ministry of Home Affairs. 【主要母語以外は1961年の国勢調査の人口を挙げる】

西 義郎

- 1977 「Tamang 祖語の再構をめぐるいくつかの問題について(第1部)」『鹿児島大学教養部史学科報告』26: 53-68。
1981 「GHALE語調査旅行報告」YAK(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 5: 1-55。
1987 「現代チベット語方言の分類」『国立民族学博物館研究報告』11(4): 837-900。
1989 「タマン語群」『言語学大辞典』第2巻(世界言語編(中))東京:三省堂, pp. 653-666。
1990 「ヒマラヤ諸語の分布と分類(上)」『国立民族学博物館研究報告』15(1): 265-337。

- NISHI, Y.
 1972 Remarks on Reconstructions of Some Proto-Tamang Rimes. 第18回日本西藏学会発表論文
 1973 Some Remarks on Tibeto-Burman */l-. 第21回日本西藏学会発表論文。
 1982 Five Swadesh 100-word Lists for the Ghale Language—A Report on the Trek in the Ghale Speaking Area in Nepal. *Monumenta Serindica* 10: 158-194.
 1983 A Brief Survey of the Linguistic Position of Ghale. 『愛媛大学法文学部論集 (文学科編)』16: 27-50.
 1990 Can Fowls Fly Hundreds of Miles over the Himalayas? 20th STC, 崎山 理・他編『アジアの諸言語と一般言語学』東京: 三省堂, pp. 55-77.
- 西田龍雄
 1970 『西番館譯語の研究: チベット言語学序説』(華夷譯語研究叢書I), 京都: 松香堂。
 1980 『保羅譯語の研究: ロロ語の構造と系統』(華夷譯語研究叢書IV), 京都: 松香堂。
 1982 『アジアの未解説文字』東京: 大修館書店。
 1987 「チベット語の変遷と文字」長野泰彦・立川武蔵編『チベットの言語と文化』東京: 冬樹社, pp. 108-169。
 1989a 「チベット・ビルマ語派」『言語学大辞典』第2巻(世界言語編(中))東京: 三省堂, pp. 791-822。
 1989b 「シナ・チベット語族」『言語学大辞典』第2巻(世界言語編(中))東京: 三省堂, pp. 166-187。
- NISHIDA, T.
 1987 Linguistic Position of the Kham Language. *Studia Phonologica* 21: 1-9.
- 西田龍雄・孫宏開
 1990 『白馬譯語の研究: 白馬語の構造と系統』(華夷譯語研究叢書IV) 京都: 松香堂。
- PIGNÈDE, Bernard
 1966 *Les Gurungs, une Population Himalayenne du Népal (École pratique des hautes études, Sorbonne, 6^e section: sciences économiques et sociales. Le monde d'outremer passé et présent, 3^e ser., Études XXI)*. Paris: Mouton.
- PITTMAN, R. S. and J. R. GLOVER
 1970 Proto-Tamang-Gurung-Thakali. *TSTBLM* II: 9-22.
- 瞿霭堂
 1988 「中国的民族与語言」『民族語文』(1): 23-36。
- RĀI, Agam Sīng Devasā
 1944 *Asalacchi Siksā, Thulung Rāi Bhāṣā*. Darjeeling.
- RAI, K. P., Anna HOLZHAUSEN, and Andreas HOLZHAUSEN
 1975 *Kulung-Nepali-English Glossary*. Kirtipur: SIL and INAS, TU.
- RAI, N. K.
 1984 Reduplication in Bantawa. *CNS* 12(1): 15-22.
 1985 A Descriptive Study of Bantawa. Ph. D. dissertation, Post-Graduate and Research Institute, Deccan College, Univer. of Poona.
- RANDHAWA, M. S.
 1970 *The Kumaon Himalayas*. New Delhi/Bombay/Calcutta: Oxford and IBH Publishing Co.
- READ, A. F. C.
 1934 *Balti Grammar (James G. Forlong Fund Vol. XV)*. London: The Royal Asiatic Society.
- REGMI, R. R.
 1985 *Cultural Patterns and Economic Change (Anthropological Study of Dhimals of Nepal)*. Delhi/Varanasi/Patna/Madras: Motilal Banarsidass.
- REINHARD, J. G.
 1974 The Raute: Notes on a Nomadic Hunting and Gathering Tribe of Nepal. *Kailash* 2(4): 233-271.
- 芮 逸夫

- 1948 「記栗栗語音兼論所謂栗栗文」『国立中央研究院歴史言語研究所集刊』17: 303-325.
- SCHULZE, M.
 1978 Rhetorical Questions in Sunwar. *POD*, pp. 349-361.
 1987 Intense Action Adverbials in Sunwar: A Verbal Intensifier System. *LTBA* 10(1): 63-85.
- SCHULZE, M. and D. BIERI
 1973 Chaining and Spotlighting: Two Types of Paragraph Boundaries in Sunwar. *CSDPSLN* I: 389-399.
- SEAWARD, L. L. and C. B. GHALE
 1974 A Preliminary Survey of Ghale Tone. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
- SENIOR, H. W. R.
 1908 *A Vocabulary of the Limbu Language of Eastern Nepal*. Simla: Government Monotype Press. 【復刻版: (*Bibliotheca Himalayica*, ser. II, 13) Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar, 1977】
- SHAFFER, R.
 1950 Classification of Some Languages of the Himalayas. *Journal of the Burma Research Society* 34: 192-214.
 1952 Newari and Sino-Tibetan. *Studia Linguistica* (Lund) 6: 92-109.
 1953 East Himalayish. *BSOAS* 15: 356-374.
 1955 Classification of the Sino-Tibetan Languages. *Word* 2: 94-111.
 1957 *Bibliography of Sino-Tibetan Languages*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
 1963 *Bibliography of Sino-Tibetan Languages*, Vol. 2. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
 1966 *Introduction to Sino-Tibetan*, Part I. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
 1967 *Introduction to Sino-Tibetan*, Part II. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- SHARMA, D. D.
 1982 *Studies in Tibeto-Himalayan Linguistics: A Descriptive Analysis of Paṭṭani (a Dialect of Lahaul)* (*Punjab Univ. Indological ser.* -28). Hoshiarpur: Vishuvashvaran and Vishva Bandhu Institute of Sanskrit and Indological Studies, Punjab Univ.
 1988a *A Descriptive Grammar of Kinnaur (Studies in Tibeto-Himalayan Languages-I)*. Delhi: Mittal Publications.
 1988b Kumauni Language and Dialects. In K. S. Valdiya (ed.), *Kumaun: Land and People*, Nainital: Gyanodaya Prakshan, pp. 119-136.
- SHARMA, S. R.
 1979 Phonological Structure of Spiti. *LTBA* 4(2): 83-110.
 1982 Loan Words in Paṭani—Problems and Mysteries. *BDC* 41: 160-163.
 1985 Yaks and Months in Paṭani. *BDC* 44: 169-172.
 1987 Non-Tibeto-Burman Features in Paṭani. *LTBA* 10(1): 126-129.
 1988 Tibeto-Burman Languages of North-Western India. (草稿)
 1989 Word Formation in Machad and Onge. *BDC* 49: 411-415.
- SHEPHERD, G.
 1982 *Life among the Magars*. Kathmandu: Sahayogi Press.
- SHEPHERD, G. and B. SHEPHERD
 1971 *Magar Phonemic Summary (TBPS VII)*. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
 1973 Magar Texts. *CSDPSLN* III: 301-434.
- SHERRING, C. A.
 1974 *Western Tibet and the Indian Borderland, the Sacred Country of Hindus and Buddhists*. Delhi: Cosmo Publications. 【復刻版; 初版: *Western Tibet and the British Borderland*, London: Arnold, 1906】
- SHRESTHA, R. L.
 1989 Verb Inflection in the Dolakha Dialect of Nepal Bhasa. *Rolamba* 19(2): 40-50.
- SNELGROVE, D. L.
 1961 *Himalayan Pilgrimage, a Study of Tibetan Religion by a Traveller through Western Nepal*. Oxford: Bruno Cassirer.

SPRIGG, R. K.

- 1959 Limbu Books in the Kiranti Script. In *Akten des XXIV Internationalen Orientalisten Kongresses, München, 1957*, Wiesbaden: Deutsche Morgenländische Gesellschaft, pp. 490-492.
- 1966a Phonological Formulae for the Verb in Limbu as a Contribution to Tibeto-Burman Comparison. In C. E. Bazell, et al. (eds.), *In memory of J. R. Firth*, London: Longmans Green and Co., pp. 431-453.
- 1966b The Glottal Stop and Glottal Constriction in Lepcha, and Borrowing from Tibetan. *Bulletin of Tibetology* (Gantok) 3(1): 5-14.
- 1966c Lepcha and Balti-Tibetan: Tonal or Non-Tonal Languages?. *Asia Major* (n.s.) 12(2): 185-201.
- 1982 The Lepcha Language, and Three Hundred Years of Tibetan Influence in Sikkim. *Journal of the Asiatic Society* (Calcutta) 24: 16-31.
- 1983a Hooker's Expenses in Sikkim: An Early Lepcha Text. *BSOAS* 46(2): 305-325.
- 1983b Newari as a Language without Vowel Systems: A Firthian Approach to the Bhaktapur and Kathmandu Newari Verb. *NL* 2: 1-21.
- 1984 The Limbu s-Final and t-Final Verb Roots, After Michailovsky 1979 and Weidert 1982. *NL* 3: 11-55. 【*LTBA* 8(2): 1-35(1985) に再掲載】
- 1985a Alphabet or Syllabary in South East Asia: 'New Wine into Old Bottles'. *LSTA*, pp. 105-115.
- 1985b Bantawa Rai s-, t- and z-Final Verb Roots: Transitive, Intransitive, Causative and Directive. 18th STC(to appear in proceedings of the 18th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics, Bangkok).
- 1986 The Syllable Finals of Tibetan Loan Words in Lepcha Orthography. *LTBA* 9(1): 27-46.
- 1987 "Rhinoglottophilia" Revisited: Observations on "the Mysterious Connection between Nasality and Glottality". *LTBA* 10(1): 44-62.
- 1989a The Root Finals of Bantawa Rai Verbs, and the Congruence of Phonology with Grammar and Lexis, *BSOAS* 52(1): 91-114.
- 1989b Oral vowels and Nasalized Vowels in Lepcha. In J. H. C. S. Davidson(ed.), *Contributions to South East Asian Linguistics: Essays in Honor of Eugénie J. A. Henderson*, London: School of Oriental and African Studies, pp. 219-235.
- 1989c The Review of G. L. van Driem, A. Grammar of Limbu. *BSOAS* 52(1): 163-165.
- 1989d The Nepali Language with Reference to its Relationship with the Rai, Limbu, and Lepcha Languages. *Indian Linguistics* 48: 87-100.

SRESTHACHARYA (= Shresthacharya), I.

- 1963 *Dhukū pikū, nepāl bhāsāyā, mukha kriyāyā dhukū* 【*An Inventory of the Root Verbs in Newari*】, Kathmandu: Ganesh Man Strestha, Himharati Press.
- 1964 *Mūlukhā, bahḍamgu vaijñānika bhāylacām* 【The Main Gate, a Treatise for the Promotion of Scientific Language Habits】. Bhaktapur: Janaki Lal Pradhan.
- 1967 *Calamca, cikicādhāmgu byālacām* 【A Small Path, a Miniature Grammar】. Kathmandu: Asian Printing Press.
- 1976 Some Types of Reduplication in the Newari Verb Phrase. *CNS* 3(1): 117-127.
- 1977 Newar Kinship Terms in the Light of Kinship Typology. *CNS* 4(2): 111-128.
- 1981 *Newari Root Verbs*(*Bibliotheca Himalayica, ser. II, 1*). Kathmandu: Ratna Pustak Bhandar.
- 1987 *Concise Dictionary(Newar-English)*. Kathmandu: KNP(Kaanibhāa Publication).

SRESTHACHARYA, I., J. N. MASKEY and E. A. HALE

- 1971 *Conversational Newari*. Kirtipur: SIL and TU. (油印) 【改訂版 (2 vols.): Vol. 1, Kathmandu: Kaanibhāa Publication, 1987 (テープ1巻付き)】

SRESTHACHARYA, I. and L. G. FRIEDMAN

- 1987 A Phonological Justification of Newār Child Vocabulary. *Kailash* 13(1/2): 101-125.

SRESTHACHARYA, I. and N. M. TULADHAR

- 1976 *Jyapu Vocabulary*(*preliminary report*). Kathmandu: INAS.
- SRIVASTAVA, R. P.
1967 Tribe-Caste Mobility in India and the Case of Kumaon Bhotiyas. In Ch. von Fürer-Haimendorf(ed.), *Caste and Kin in Nepal, India and Ceylon*, Bombay: Asia Publishing House, pp. 161-212.
- STHAPIT, S. K.
1978 English, Nepali and Newari: A Comparison and its Pedagogic Applications. Ph. D. dissertation, Univ. of Poona.
- SUBBA, B. B.
1979 *Yākthun-pēne-mikphulā-pochekwā* [*Limbu Nepali English Dictionary*]. Gantok: Directorate of Education, Government of Sikkim.
- SUBBA, S.
1972 Descriptive Analysis of Magar, a Tibeto-Burman Language. Ph. D. dissertation, Post-Graduate and Research Institute, Deccan College, Univ. of Poona.
1976 The Languages of Nepal. In P. R. Sharma and L. C. Friedman (eds.), *Seminar Papers in Linguistics*, pp. 139-152.
1984 Census and the Linguistic Survey of Nepal: Perspectives on Language Use. *NL* 3: 82-91.
- 孫宏開
1963 「六江流域の民族語言及其係属分類」『民族學報』(3): 99-273。
1988 「試論中国境内藏緬語の譜系分類」, *Languages and History in East Asia: Festschrift for Tatsuo Nishida on the Occasion of His 60th Birthday*, 京都: 松香堂, pp. 61-73。
- 孫宏開・陸紹尊・張濟川・歐陽覺亜
1980 『門巴, 珞巴, 僜人的語言』北京: 中国社会科学出版社。
- SUNWAR, G. S., D. BIERI and M. SCHULZE
1973 Sunwar Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- TAMANG, K. B., D. TAYLOR and F. EVERITT
1973 Tamang Wordlist. *CSDPSLN* IV.
- TAMOT, K.
1984 Changing Labial Glide into Palatal Glide in the Early Classical Newari. 5th CLSN.
1985 Notes on the History of Some Newari Verbs: Preliminary Evidence. 18th STC.
1987 Presence of Tibeto-Burman Prohibitive Prefix in Dolakha Newari. 8th CLSN.
1988 Notes on Proto-Newari Numeral. 9th CLSN.
- TAYLOR, D. M.
1969 *Tamang Phonemic Summary*(*TBPS VI*). Kathmandu: SIL and TU. (油印)
1970a Tamang Segmental Synopsis. *TSTBLN* I: 237-257.
1970b Tamang Texts. *TSTBLN* III: 132-164.
1973 Clause Patterns in Tamang. *CSDPSLN* II: 81-174.
1978 Topicalization in Tamang Narrative. *POD*, pp. 149-156.
- TAYLOR, D., F. EVERITT and K. B. TAMANG
1972 *A Vocabulary of the Tamang Language*(*CVLN*). Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
- THOMAS, P. W.
1926 Two Languages from Central Asia. *JRAS*: 505-507.
1933a The Žan-žuñ Language. *JRAS*: 405-410.
1933b The Žan-žuñ Language. In A. F. Thompson (ed.), *JRAS*: 211-217.
- THURGOOD, G.
1977 Lisu and Proto-Lolo-Burmese. *Acta Orientalia* (Copenhagen) 38: 147-207.
1982 A Comparative Note on the Indian Linguistic Area. *South Asian Review* 4(3): 23-29.
1985a Pronouns, Verb Agreement Systems, the Subgrouping of Tibeto-Burman. *LSTA*, pp. 376-400.
1985b The 'Rung' Language: Notes on their Photo-Morphosyntax and Subgrouping. *Acta Orientalia* 46: 79-99.
- TOBA, I.

- 1973 The Khaling Verbs. *NSL* II, pp. 1-14.
- 鳥羽季義
1972 「ネパールにおける諸言語の研究状況——とくに The Summer Institute of Linguistics の活動について」『東洋学報』55(1):01-012。
- TOBA, S.
1975 Plant Names in Khaling: A Study in Ethnobotany and Village Economy. *Kailash* 3(2): 145-169.
1978 Participant Focus in Khaling Narratives. *POD*, pp. 157-162.
1984 *Khaling (Asian and African Grammatical Manual 13d)*. Tokyo: ILCAA. (改訂版)
1989 The Pronominal Affixation System in Khaling. *PAAL*, pp. 191-194.
- TOBA, S. and I. TOBA
1972 *Khaling Phonemic Summary (TBPS XI)*. Kirtipur: SIL and TU. (油印)
1975 *A Khaling-English English-Khaling Glossary*. Kirtipur: SIL and TU.
- TOFFIN, G.
1976 The People of the Upper Ankhu Khola Valley. *CNS* 3(1): 34-46.
- TOMLIN, R. S.
1987 *Basic Word Order: Functional Principles*. London/Sydney/Wolfeboro (New Hampshire): Groom Helm.
- TRUDGILL, P.
1983 *Sociolinguistics: An Introduction to Language and Society*. Penguin Books! (改訂版)
1986 *Language in Contact*. Oxford and New York: Basil Blackwell.
- TURNER, R. L.
1980 *A Comparative and Etymological Dictionary of the Nepali Language with Indexes of All Words Quoted from Other Indo-Aryan Languages, Compiled by D. R. Turner*. New Delhi/Bombay/Calcutta/Madras/Bangalore/Hyderabad: Allied Publishers. 【インド版：初版：London: Routledge and Kegan Paul Ltd., 1931】.
- VALEIX, Pierre
1974 Marpha, aspects humains et économiques d'un village du Pâc Gâu. *Objets et Mondes* 14(4): 269-278.
1975 La terminologie de parenté newar: analyse descriptive et comparative. *L'homme* 15(3/4): 129-153.
- VINDING, M.
1979 A Preliminary Report on Kinship Terminologies of the Bodish Section of Sino-Tibetan Speaking People. *Kailash* 7(3): 191-225.
- VOEGELIN, C. F. and F. M. VOEGELIN
1977 *Classification and Index of the World's Languages*. New York: Elsevier.
- WARDHAUGH, R.
1986 *An Introduction to Sociolinguistics*. Oxford/New York: Basil Blackwell.
- WATERS, D. E.
1971a *Kham Phonemic Summary (TBPS X)*. Kathmandu: SIL and TU. (油印)
1971b *A Guide to Kham Tone (GTN III)*. Kathmandu: SIL and TU. (油印)
1973 Clause Patterns in Kham. *CSDPSLN* III: 39-202.
1975 The Evolution of a Tibeto-Burman Pronominal Verb Morphology: A Case-Study from Kham (Nepal). *LTBA* 2(1): 45-80.
1978 Speaker-Hearer Involvement in Kham. *POD*, pp. 1-18.
1985 Emergent Word Tone in Kham: A Tibeto-Burman Halfway House. *LTBA* 8(2): 36-54.
- WATERS, D. E. and N. WATERS
1972 *A Vocabulary of the Kham Language (CVLN)*. Kirtipur: SIL and INAS, TU. (油印)
1973 *An English-Kham and Kham-English Glossary*. Kirtipur: SIL and INAS, TU.
- WEIDERT, A.
1982 Verb Class Morphology of Limbu: Reconstructability Problems in Evolutionary Morphology. 3rd CLSN.

- 1983 Indeterminacy in Phonology (or Consonant Lengthening vs. Consonant Voicing in Limbu). 4th CLSN.
 - 1984 The Classifier Construction of Newari and Its Historical Southeast Asian Background. *Kailash* 11 (3/4): 185-210.
 - 1985 Paradigmatic Typology and its Application to Verb Agreement Analysis. In Pieper and Stickel (eds.), *Studia Linguistica Diachronica et Synchronica*, Berlin: Mouton de Gruyter, pp. 903-936.
- WEIDERT, A. and B. SUBBA
- 1985 *Concise Limbu Grammar and Dictionary* (Concise Limbu Grammar, Nominal Paradigms and Verbal Paradigms, Concise Limbu-English Dictionary, English-Limbu Vocabulary). Amsterdam: Lobster Publications.
- WINTER, W.
- 1987 Differentiation within Rai: Non-Lexical Isoglosses. In D. G. Laycock and W. Winter (eds.), *A World of Language: Papers Presented to Professor S. A. Wurm on His 65th Birthday*, PL. ser. C, 100, pp. 729-734.
- WYLIE, T.
- 1970 *A Tibetan Religious Geography of Nepal* (Serie Orientale Roma, XLII). Rome: Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.
- 徐琳・木玉璋・盖興之 (編著)
- 1986 『栗粟語簡誌』 (中国少数民族語言簡誌) 北京: 民族出版社。
- 徐悉艱・肖家成・岳相昆・戴慶厦 (編著)
- 1983 『景漢辞典』 昆明: 雲南民族出版社。
- 山口瑞鳳
- 1983 『吐蕃王国成立史研究』 東京: 岩波書店。
 - 1988 『チベット』 (下) 東京: 東京大学出版会。
- 岳相昆・戴慶厦・肖家成・徐悉艱 (編著)
- 1981 『漢景辞典』 昆明: 雲南民族出版社。
- ZOLLER C.
- 1983 *Die Sprache der Rang Pas von Garhwal (Raṅ Pə Bhāsa): Grammatik, Texte, Wörterbuch*. Wiesbaden: Otto Harrassowitz.
- 追記: 本論文で、調査の空白地帯と述べたウツタル・プラデシュ州のウツタルカシ、チャモリ、ピトラガルの3地方のチベット語諸方言とヒマラヤ語系言語について、D. D. Sharma によってかなり詳細な音韻、文法の記述が公刊された。本論文では、該当部分はこれらの著書を参照する以前に書き終えており、その成果を利用できなかったが、本論文の(下)でこれらの著作を参考にして、必要な訂正を行う予定である。なお、D. D. Sharma の資料は、極めて貴重なものではあるが、追調査が必要である。
- SHARMA, D. D.
- 1989a *Tribal Languages of Himachal Pradesh (Studies in Tibeto-Himalayan Languages-II) (Part-I)*. (New) Delhi: Mittal Publications.
「マンチャト語 (Manchadi) 【=パタン語 (Paṭṭani)】, ティナン語 (Tinani), ガル語 (Gahri) 【=ブナン語 (Bunan)】, トット語 (Tot) (チベット語方言) の音韻、文法の記述が含まれている。」
 - 1989 *Tibeto-Himalayan Languages of Uttarakhand (Studies in Tibeto-Himalayan Languages of Uttarakhand-III) [Part One]*. New Delhi: Mittal Publications.
[ダルマ語 (Darmiya), チャウダンス語-ビヤンス語 (Chaudangsi-Byangsi), ジョハール語 (Johari) 【=ランカス語 (Rangkas)】の音韻、文法の記述が含まれている。
 - 1990 *Tibeto-Himalayan Languages of Uttarakhand (Studies in Tibeto-Himalayan Languages -III) [Part Two]*. New Delhi: Mittal Publications.
[ジャド (Jad) 方言 (チベット語方言), マルチャ (Marchha) 方言 【=ランパ語 (Rangpa)】, ラジ (Raji) 方言 【=ラウト語 (Raut)】の音韻、文法の記述が含まれて

いる。なお、D. D. Sharma は、マルチャ語をチベット語方言が当該地域の共用語 (lingua franca) として発達した言語としているが、この言語に関する筆者の見解については、本論文の (4. 3. 2. 1.) を参照されたい。また、ラジ語は、ムンダ語群の言語としているが、彼の資料を検討すると、ランバ語と同じような論拠でこの言語がチベット・ビルマ語系言語であるといえる。]